

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
萬延元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
〔紙数五十八枚〕の記載あり〕

## 目録

是枝柳右衛門日記鈔〔竊中浮草〕

實歴史傳鈔

以上二条

二六八 是枝柳右衛門日記鈔竊中浮草

コトシハ安政七ツノ年庚申、世ニ逆臣蔓コリ、京師ノ御苦ミ云フハカリナシ、光格帝ノ御歌ニ、

我俛にしけらはしけれ八重津

とても道なき武蔵野の原

大名ニハ拳ヲ握リ、齒ヲカムモアレト、国家ノ危難トナ

ラム事ヲ憂テ敢テ動カス、友ノ新輔〔親輔、高橋祐次郎〕ハ谷山郷ノ人ナラシ人傑ナレハ、問フテ心ヲ決セント欲シ、一日彼雷西館

ヲ訪ヒ談之ニ及ヘハ、大人莞爾トシテ晒テ曰ハク、道可道非常道、名可名非常名、玄ノ玄〔又玄カ〕ヲ知ルニアラサレハ

能シ難シ、汝精忠ヲ存スル者ナラハ速ニ用意セヨ、兵書ニモ来觀功遲之久ト云ヘリ、相共ニ東行シテ汝カ志ヲ輔

クヘシ、余曰ク、斯ル小事僕カ行ニシテ大人ノ望ム所ニアラス、天心ニ叶ヒ謀計アラハ、其機ヲ計ラヒ給ヘトテ

一紙ヲ認メケル、其文ニ曰ク〔此浄書今は枝カ家ニ蔵ス、奉書ノ片切紙ニ立派ニ記シタルモノナリ〕

口上

生首 一級

但シ井伊掃部頭生首也、〔殿脱カ〕

右ハ井伊掃部頭殿拔群ノ家格ニテ、深く可被励忠之筋〔勤脱カ〕ニ有之候処、近日殊更為妄意張本、不顧幕府之恥辱、

類ヲ西洋ニ引キ、党ヲ北海ニ被結、主家ノ祭政我俛ニ被捌、海内ノ人心ヲ動シ、深奉惱 宸襟候始末、罪不

容死事世上所同見ニ候、近日梅先非首ヲ伸天下馬奴ニ  
托シ、奉謝竜顔人心一致落着ヲ被<sup>(折)</sup>行候トノ事ニ付キ、  
恐レ多クモ無位ノ匹夫持參上京致候、若途中不慮ノ病  
死モ致候ハ、有為ノ有志早々守護上京可解事ニ候、

為潤之庶幾車

臥牛山人駢角

是レヲ懷ニ蔵シ、山名半次郎(山名ハ鹿兒島士ナリ、好シテ  
刀工トナリシ人ナリ) 惟中ト云フ鍛冶ニ頼ミテ懷炮ヲ鍊ハ  
セケル、

よるひるとみかきあけたる玉柏<sup>(マ)</sup>

なほこゝろみん時は来にけり

家ニ帰り、常ニ往キ通ヒシ友トチモ絶テ逢ハス、

おほかたの道にそ見つれともい

はかりかたくて独りなりけり

太刀<sup>(ハ)</sup>豊後国紀新大夫行平力鍛タル二尺一寸、添差ハ相  
州ノ秋廣也、鞭差羽織裁揚ノ用意更ニ新ナリ、

此ころの心ひとつのねきにとを<sup>(カ)</sup>

しらすは神もうれしからめを<sup>(カ)</sup>

官兵ノ将タリシ谷山五郎左衛門尉カ籠リシ、本城ノ中壇  
ニ太神宮ノアリケルニ詣テ(後醍醐天皇第五ノ御子懷良親王

薩摩ニ御在アリシトキノ事実旧乘ニ記セリ、谷山郷福元村ノ内  
ニ御所ノ原ト唱フルアリ、親王御在ノ地ナリシト云フ)

帰らぬも誰か為ならぬ旅なれば

神もあはれとみそなはずらん

又喜入ノ界ニタ、シ給フ飯綱大明神ニ詣テ(谷山郷ト喜入

郷トノ界山上ニアリ、烏帽子岳ト唱フ)

かと出に拝み納めし烏帽子岳

ゑほし着たらはまたや拜まん

日ヲフルウチニヨミケル歌、

親も子も君もなき身の楽しきは

心の俛に死<sup>(な脱)</sup>なりけり

かくて又積らん年と思はねと

惜しくもあらねと嬉しくもなし

我身世に咲くへき花の春霞

心をひかぬ時なかりけり

斯テ弥生初旬モ過ヌトテ、十日テフ日ニ立チ出ル時、愚

妻ニ書残セルハ、

今日まではつゝかなくしてあなかしこ<sup>(折)</sup>

目出度かしこと人にかたるな

しはしとてうちまどろめは庭鳥も

啼て別をすゝめける哉

雷西館親輔上ノ大人ノ許ニテ、

ましてはし東ノ霞蹈みわけて

花の家つとうちかさしこむ

三月

十一日前ノ濱ヨリ船ニ乗り、福山ノ岸マテ渡リヌ、

馬立原雨はふり来ぬ古郷の

山の霞となりはてしより

十六日去川ノ関ニテ  
(日向國隴東郡高岡郷去川村ノ去川ヲ云)

往もあり還るもありて何所へ去る

河ともしらぬ此流かな

廿二日日州細島ニ着ヌ、内藤右近少輔殿界内騒動セシハ、

実兄井伊掃部頭殿、水戸浪人ノ手ニ横死セラレシトソキ

、ヌ、嗚呼天哉民ノ乗(舞敷カ)□(舞敷カ)教カ無道ヲ悪マサラン、暗ニ思

ヲ得タリト雖モ、丈夫一旦決心シ、友ニ別レテ此ニ来リ、

世ニ大功ヲ立テスンハアル可ラス、殊更同盟ノ人数ニ兄

弟ノ薩人アリシト云ヘリ、ヨク聞ケハ有村雄助弟ノ次左(兼)

衛門、嗚呼雄助兼武ノ士ハ、山川ニ別レシ時、弟次左衛

門兼清モ江戸ナリト云ハレシカ、此等ハ常ニ義ヲ重ンス

ルノ士、誰ニモセヨ其落着ヲ聞キ、且 国君ノ為ニ世ノ

風聞ヲモサクラン、亦国政ノ正シキモテ奏於 天朝、旁

ラ世ニ聞ル豪傑ノ士ヲ訪ヒ、心ヲ曳ミントテ船出ヲ待チ

ケリ(井伊氏ヲ討ンノ議ハ、安政五戊午ノ冬比ヨリ有志中ニ起

レリ、其連中数十名アリ、有村等ト俱ニ議シタル其中ノ人ナリ、

○井伊家ヲ討ンノ議起リ、百方計面シタル事実ハ、大久保利通・

榊山資之日記ニ記ス、或ハ吉井友実・岩下方平・海江田信義対

話記等ニ詳ナリ)

雲の上にいれんいれしは知らねとも

思ひたつつけふ嬉しかりけり

廿八日、周防ノ国徳山ノ天社丸テフ船ニ乗リテ発帆シヌ、

閏三月六日、讃州象頭山へ詣ケル人ノアリケレハ、奴モ

トテ歩ミヲハコフ、

梓弓おして春雨ふりにけり

引とめ給ふ神ならめやも

千早振神の恵の春雨は

やかに追風(ツヒカ)と成りぬへき哉

七日ニハ八島壇ノ浦・高松ノ城ヲ妻手ニ見テ過キヌ、

武士の矢繰八島の波の上

いまは行かふ舟のみにして

八日、兵庫ニ入りヌ、楠公ノ墓參、松王丸七百年忌ノ開

帳、九日渡海ノ船ニ便リケルニ、備前岡山ノ藩士村下某

曰、御主人ハ松崎テフ所ヨリ御引返シノヨシ聞キヌト、  
扱ハ様子モアラントテ、内心煎ラル、マ、追手ハケシク、  
大坂安治川ニ入ヌ (御引返ノ説)

武士のかふとの山を弓手に見て

射るかごとくに登る船かな

一夜河野彦一郎殿へ対面シテ (日州細島ノ士)

難波かた葦のかりねも浅からて

一夜二夜に成りにけるかな

南久寶寺町櫻靜ノ大人ヲ訪ケレハ、奥ノ山里ト云フ標名  
アリ、留主ナレハ羈中述懐テフ題ニテ残シ置キシ歌、

富士の雪吉野の花を分てしも

ふるきにかえる道や尋ねん

十日、淀川登リ、新番所ニテ姓名書留メケリ、

十一日、伏見ニ又新番所アリ、名乗リテ通りヌ、伊賀屋

ニ宿レハ、人相書ヲ役所ニ出シケリ (京撰ノ嚴戒此時ヨリ  
ス)

口上 (是枝カ人相)

中体瘦肉、面体瓜ノ形ニシテ赤シ、頭頰白天童甚明也、  
眉茂リ眼大ニシテ齒白、鼻筋通りテ鼻高く、唇厚クシ  
テ髭多く、言發達ニシテ聞訳サルナシ、併余国ノ口氣

毛頭無之、実以薩人ト覚候、

一振裂羽織淺黄ノ織出、

一太刀揚錦鈍子ニ龜甲ノ織出、

一上着ハ惣袖ノ綿入、紋ハ丸ニ扇、

一下着ハ黒羽二重、右同断、

一襦袢緋縮緬白襟、

一大小ノ袴ハ揃候、

一風呂敷ノ内並ニ金子何程持合モ相訳リ不申候、

一座ノ中央ニ居リテ、大小用ノ外敢テ不動、詩歌ヤウノ

風ヲ沈吟シ候、

右ハ任仰致見聞、御届申上候、以上、

申聞三月

伊賀屋  
次郎兵衛

大蔵谷ヲ尋レハ、カ、ル地名ハ都ニナシト云フ、且ツカ  
クレノ二人付テ、進退自由ナラサルアリサマ、斯クテ  
ハ叶ハシ、イサ大坂ニ立帰リ一計セントテ、十二日川舟  
ニ乗レハ、又一ツノ新番所アリ、役人イラツテ云フ、汝昨  
日ハ伊勢參宮トテ通りシカ、今日返ルハ何事ソ、答テ云フ  
夜前ノ宿ニテ人相書ヲ出シ、一人歩行ハナラヌトヤラ  
御所拜見ハ禁シトヤラ、手札ヲ持テハ通ラレズトヤラ、

東海道ノ番所ハ隙取ルトヤラ、斯カル六ヶ敷世ノ中ニ心苦万苦シテ往キタリトテ、我カ氣順ナラサレハ、天ノ氣モ又順ナラス、二百五十里ノ道ハ諸雜用モ入タレト、此俛引返シ太平ノ時ヲ待ント云ヘハ、役人怒リテ、我等此所ニツトメテ參宮ノ人ヲ止ムルニアラス、汝心ニ曇ナクハ番所アリトモ畏ル、事アラシ、国ニ返ルト云フコソ不審ナリ、所持ノ道具ヲ改ムヘシト云フ、足輕立掛ラムトスル故ニ、風呂敷包ヲ開ケハ其ノ書ハ何乎ト、答テ云フ、京都名所記道ノ案内、今一ツハ雲上明覽ナリト、役人云フ、雲上明覽ハ人ノ注文ナリヤ、又汝カ用ナリヤト、コレハ又可笑事ヲ申サル、者哉、吾正シク日本人、雲上ノ事ハ明ニ知タキハ平日ノ念ナリ、アメリカノ手先トモナレハ、雲上ノ事ハ知ラテモ可ナラン、御方達ハ如何御心得ニテ、斯カル事ヲ御尋ネアリシヤ、雲上明覽御用モアラハ、御方ヘ進スヘシト云ヘハ、猶タイラツテ云、色々ト聞悪シ、アメリカノ事ヲ問フニテモアラシ、其書物入用ト申ニモアラシ、先刻ヨリ遠国人ノ初上リモ聞悪キハアタリマヘナレト、御方達薩摩言葉ヲツカヒ給ハ、吾亦都言葉ヲ遣フヘシ、聞悪キハ御互ノ事ナリト、懷炮ヲタノミニ足輕ノカ、ルヲ待チケルカ、如何思ヒケンヤ、アリテ、ヨ

シヨシ通レト云フヨリ、ハヤ船頭ハ一竿ニ一町流シ、後ヨリ出シタル舟ハ、ハヤ山崎ニモ到リツヘシトテ、ブツメキケルニソ、吾一人ノ事ニテ船中御退屈ナラント、一礼申述ケルウチ、堤ヨリ足輕ハセ来リ、其舟待テヨト云フ、何事ナラント思ヒシニ、薩摩ノ士何ヲカ高声ニ云フヤト問フ、我國ハ礼義ヲ重ス、何トモシレヌ事ヲ隙取リシ故、船中ニ挨拶スル所也、汝等アメリカ夷人ノ手先ノ知ル事ニアラスト云ヘハ、船頭洪水ニ誘ハレテ夜半許リニ難波津ニ至リヌ、

十三日、阿波屋藤兵衛宅ニテ、三度笠ニ丸合羽長手拭ニ秩父ノハツチ、白足袋買フテ旅立ノ用意セリ、十四日、強力政七ヲ雇フテ、太刀鞭差羽織裁揚ナト抜捨テ出立トテ、

武士の太刀をも身をも振り捨て、

とらん信をあはれとも見よ

〔信丸、奈良県生駒郡〕  
住貴山ヲ越テ龍田川ニ出タリ、

千早振神はしりてゐる大君の

よをから人にくゝられんとは

十五日、手向山ニテ、

此度は神のまにくゝ手向山

身こそ手向のぬさにさりけれ

十六日、大和市ノ元ヨリ在原寺三輪ノ明神ニテ、

君か為めたてんいさほと三輪の山

杉によそへていのる旅哉

(奈良興隆井屯)  
多武ノ峰ニ宿リケリ、

十七日、初瀬寺へ詣ケリ、

ことあらはあれよ初瀬の山風  
(なカ)

はけしからすはいつか晴なん

十八日、新田ヨリ櫻峠青山越、

十九日暁、大社ノ中ニ射御ノ有ケル中ニ、高山ノ士多ク

有ケル、余ハ面馴ヌ人達也ケリ、亡父モ叔父モアラレケ

ル片端ニテ、甥ノ麻吉半弓ニテ襖ヲ射ケル故、先程八幡

ニテ、我本結ノ真ト共ニ頂戴セシ楊弓ヲ遣シケレハ、手コ

ロニ叶ヒシト見ヘタリ、社ノ外ヨリ父カ袖ヲ引テ、只今

大神宮へ参ヘリシ故、御供仕ラン、御叔父傳藏殿ニモ御

一所ニ御出被成カシト云ヘリ、列立テ人中ヲ分テ通り来

給フ様ナレ共、ヤ、シハシ来給ハス、待チアクミテ、嗚

呼父モ叔父モ此世ニアラセ給ハヌ者ヲト思付マ、ニ、涙

ト共ニ夢ハサメタリケリ、

ちきり捨て空しきから逢見しも

誠に神のちはひなるらん

廿日、大神宮四十末社・八十末社拜ミ了リヌ、

かくはかり民賑はしてさび給ふ

神の御心賢こからずや、

風神ノ社ニテ、

天津日をおほへる時の村雲を

はらはせ給へしなとへの神

廿一日、朝隈山ヨリ二見浦へメクルトテ、

玉くしけ二見の貝のからたにも

身をすてゝこそ銭ハなるらめ

(御炊ハ伊勢神職、薩・四・三州ニ大麻配賦ノ人ナリ)  
御炊大夫路陸奥守親彦ニ別ル、トテ、

玉きぬの袖のにほひに撫られて

帰りわつろふ宿にも有かな

廿六日、御鳥ニテ、  
(三カ)

おからすの浜浪をきてさわくなり

旭の出ましちかく成るらん

一ノ瀬村ニテ、

筆捨てし時もふりけむはるの雨

鈴鹿山杉の葉あらず朝雨に

まちかく駒の声すさむなり

〔滋賀県〕  
土山ノ駅ニ着テ、

吹しきる雨に鈴鹿は越たれと

宿の鬼らにはまれぬる哉

廿五日、水口ノ横田川ニテ關山<sup>〔金生〕</sup>君ニ行逢ヌ、伊牟田尚

平茂時兄ニ談合シ（関山江戸番頭職在勤ニ赴クノ途次ナリ、

蘭牟田ハ主人ニ従行セシナリ）、供ノ政七八大坂へ返シ、自

分ハ土山迄引返シヌ、宵ノ間ハ關山君ノ旅宿ニテ、森川

氏ト川上氏ト共ニ酒宴シテ、山形屋庄兵衛方へ帰り、真

風兄ト面談シテ、有村雄助切腹ノ由承リ、扱ハ親彦ノ真

計モ空シク成リシヤ、残念ナカラ詮方ナシ、イサ京師ニ

入ラム、就テハ江州坂本ノ駅ハ行程何ホトカアル、此ニ

宿リテ觀山ヲ越レハ、改ノ番所ナシト聞キ、念ヲ放チ給

ヘト別ル、

廿八日、暮方ニ坂本ニ着、麓屋ト云ヘルニ宿リヌ、

廿九日、案内者頼ミ觀山へ登レリ、岳ヨリ 御所ヲ遙ニ

拜シ、昔シ高山彦九郎正之、

ひゑの山登りて見れば哀れなり

手のひら程の大宮所

南久寶寺町奥ノ山里ノ主人、之レニ和シテ、

見をろして声たみにけんひゑの山

みあくるにさへ泪こぼるゝ

ナト打吟シテ、ヤ、汗ニ泪ヲ忍フ、麓ニ下レハ赤山権現、

是ヨリ案内ハ返シ、鴨ノ社ニ詣テ、三條大橋豊後屋友七

ニ宿リ、

卅日ニハ、東山見物トシテ出立、 御所ヲ拜シテ、

我國の大宮所かはかりに

さひ給ひぬと思ひかけきや

五摂家ヨリ吉田殿赤山へマハルトテ、丸田町通ヲ東ニ渡

リ、熊野権現ノ華表有ケルヲ心当ニ、田中河内介ヲ尋ケ

リ、大人云、当時ハ旅籠屋ニ滞フルコト叶ハシ、一計ヲ

メクラシ我宅ニ来給へ、今日ハ案内ノ人モアレハ、早々

ニ出給ヘト聞キ、東山ニメクリ、香川景恒ノ方ヲ訪ヒ、

敷島の都の東岡崎の

かたより明し道の長閑さ

歌道ノ指南ヲ聞キ、ヤ、時ヲウツシ立出、案内ノ者ニ云

フ、此先生歌ノ詠置アラハ出スヘキ由申サレシニ依テ、

今明日中大坂へ下リ、書留メ持越スヘシトテ、黒谷知恩

院・清水寺アラマシ急キメクリ、八ツ頃旅亭ニ帰り着ヌ、

着替其外道具預置キ、一先大坂へ下ルトテ出立、五條橋

ヲ越テ西ノ京ヲ通り、丸田町ヲ東へ渡リ、夕暮ニ臥龍窟

(二入り又脱カ)  
(臥竜窟ハ田中河内介ノ居室ヲ云フ)

四月朔日、用事不残申シヌ、

薩摩瀉遠き境にありとて

御先を人に譲るへしやは

昼ヨリ主人酒宴設ケ給ヒ、内義小柳玉琴イト妙ナリ、

玉琴のしらへのみして住む竜の

いこふ窟の奥のゆかしさ

時ニ主ジ高山彦九郎殿ヲ呼ントテ、正之ノ自筆ナル軸ヲ

掛ラレシ、楠公モ御出アレトテ、正成ノ画像ヲ掛ラレシ、

其興云フ計リナシ、

二日ヨリ二男某八歳ニナリシニ、大學・中庸ナト(復説ノ方)反古習

シケリ、新論ヲ貫ヒ之ヲ読ミ、藍水論ハ書写シケリ、

五日ニハ嵐山・北野天満宮、帰リヌレハ例ニカハラヌハ

ナシ、夜更ヌ、

白河の清き流れにまな白む

ひろひもあかて日数経にけり

六日ニハ……(中山殿ナリ)ノ許ヨリ参ルヘキ由ノ御使

ヲ給ハリ、女中二人ナレハ、肩衣袴ヲアツラヘ遣シヌ、

千早振神にめされて雲の上を

常に思ひし夢にやあるらん

冠衣束帯正座シ給フ拜シケレハ、……殿退座セヨトテ、(田中河内介カ)  
奥ノ方へ誘レタリ、仰セラレシハ、先ハ御所拜見ノ歌トテ

……(田中河内介)ヨリ見セタリ、誠ニ哀ナリシ事

共ナリ、カタヘヨリ……昔シニ返ス策ハアラマシキヤ(中山忠能カ)

ト、……殿仰ニ、昔ニ返ス事ハ扱置キ、当乱ヲ治ムル(田中河内介カ)

ノ策ハ如何……殿申サレシ、サン候……殿下ニハ其(大納言カ)

任ニテアラセラルレハ、随分其策モヲハシ候半、……(河内介カ)仰

ニ大ニカタキ所一ツアリ、豪傑ノ大名アラハ、此度ノ天下

ヲ治ル事掌ヲ返スヨリ易シ、年月ヲノハシナハ、内憂外患

実ニ神国ノ妨トナルナリ、今此ニ一國ノ大名ニ軍兵一万

ヲ上京サセシメハ、軍勢ヲ見馴レヌ民、必ス五六万トモ吹

聴スヘシ、其時 勅使ヲ関東ヘ下シ、幼君後見ナクンハ

有可ラス、一橋ヲ以テ之ニ任シ、且東照宮ノ良法亡滅シ

タレハ、本ニ返シテ、然ル後陪臣等ニ任セヨ、其内ハ徳

川家親類ノ者ヨリ相共ニ政ヲ輔ヨトノ 上意アリナハ、

此度違 勅セハ必ス乱ニ及ハン、京師ノ軍勢此ヲ待ケル

形勢ナリトテ、腰拔ノ老中直ニ領受ス可シ、……殿ニ(天)

向ヒ 勅使下シ遊シ候半ニ、違申事ヤ叶マシト云フ、……(總言カ)

……聞コシ召サレ直ニ日記帳ヲ御出シ、此辺ヲ見ヨ是程ノ

事ニタニ違 勅セシ者共ナリ、此度何様ノ事申送ルトモ、



其俛致シ置キ候ハ眼前ナリト仰ラレタリ、マタ……(河内介丸)殿

ヘ向テ申述シハ、此御策不容易御事也、若シ御策成ラサル時ハ、主上ハ遠キ塚シ給ヒ、大臣ハ死亡シ給ハン、此決断ナクンハ行ルマシト申上ケレハ、……(天納言丸)様聞コシ召

上ラレ、主上此前ヨリ其御決断アラセラレシ、臣等何ソ一命ヲ惜マンヤ、曰、サアラハ、勅命ヲ蒙リシ者ハ、

イツレカ、御意ニ違フ可キト申上ケリ、……(天納言丸)仰ニ、サ

ア其事ニテ候、汝カ国ニテハ如何アル可キヤト、答テ云、卑賤国君ノ事実ヲ知ラス、シカシ下ニテ平日評セシハ、

幕府天子ニ逆ヒ矛盾ニ及ヒ候節、若シ国君関東ヘ赴ムキ給フナレハ、供スル者ハヨモアラシト、若シ、勅下ラハ、

上ハ如何ナルトモ、兵一万ハ安ス、ト走上ルヘシ、況ヤ先君遺訓ヲ事トシ給フ、何ソ、勅ニ違フコトノアランヤ、(先君ハ高徳ヲ云フ)

此証ニハ此ニ一紙アリト懐中ヨリ出シ、……(田中河内介丸)ヘ渡シケリ、其文ニ曰ク、

方今世上ニ一統動揺不容易時節、万々一ノ節ハ、(資形公証)順聖院

様御深意ヲ貫キ、以國家奉守護、天朝ニ可抽忠勤心得ニ付、各有志ノ面々深く相心得、國家ノ柱石ニ相立テ、我等ノ不肖ヲ輔ケ、不汚国名誠忠ヲ尽シ呉候様、偏ニ

頼ミ存候、

安政六己未十一月五日

(忠義公旧名)  
源茂久判

誠忠士之面々ヘ

此書有志中へ密ニ与ヘラレタリ、大久保利通日記ニモ同文ヲ記

ス、

此書ヲ与ラレタル始末ハ石室秘稿ニ詳載ス、

サアラハ予必ス、奏聞セム、何レトモ御直談アラセラルヘシ、密々、候上京セシムルノ計策如何、曰ク、当時病氣ノヨシ、仮令全快セラル、トモ人知レス上京セシムルコトカタカルヘシ、何レ親類家老ノ者ナラテハ能フマシ、(天納言丸)

……(天納言丸)様イヤ人伝ニテハ果行カス、ニ云ク、イヤ……(国老島津左衛門)

ト名指ニテ御用アラハ、如何様共、勅答モ仕ル人ニテ候、此人上京トナラハ、此節ノ道案内ハ能知リタリ、從伴シテ参リ可申也ト云フ、ヤ、アリテ、汝早々ニ帰レ、身ヲ

大事ニシテ口外スルコト勿レト、御杯頂戴シテ……

殿へ酌カハシケレハ、御話ニ彼……(有村次左衛門)、同雄助ハ汝知リタル者ニテハナキ乎、成程ヨク知リタル者ニ候テ、其亡父……(亡父有村仁右衛門)ハ有志

ノ人ナリノ家兄……(楠田淡水)ト云、仁右衛門カ実兄ナリ、故アツテ他姓ヲ用ユハ我人成通ノ師ナリ、此度伊勢

(天木道丸)

ニテ……………(伊勢神職大路陸奥守)尋ニマカセ、委曲  
 ニ話シ候処、嗚呼惜ム可キ、忠孝両ナカラ欠ケタリ、彼  
 場ノ働ヲ聞クニ、先鋒ト云ヒ、敵將ノシルシ迄揚ケラレシ  
 ハ、文以テ心ヲ練リ、武以テ筋骨ヲキトフニアラサレハ、  
 イカテカ衆ニ出可キノ、他ノ為ニ施スハ如何ナル迷ニア  
 リケント聞テ感シ、無念骨髓ニ徹シ申セシト語リケレハ、  
 笑ヲフクマセ給ヒ、是ハ評者ノ不足也、……………モ正シ  
 ク豪傑ノ士ナレトモ、流石ハ伊勢ノ風ナリ、夫糸ヲ掛ル  
 ハチキリニシテ、石ニ掛ルハ斤定ナリ、我前日評論セシ  
 コトアリ、(此二三四字不明)ヨリアラマシ語ルヘシト仰ラ  
 レシカハ、申サル、ハ、古来ノ忠義ヲ觀スルニ、楠公ハ  
 攝河泉三州ノ太守、其忠当然、良雄ハ主君ノ志ヲ継キ恨  
 ヲ消ス、是又職分ノ事尽シタルハ感心ナレトモ、珍トス  
 ルニハアラス、是ナクンハ何ヲ以テ士ト云ハン、水戸ノ  
 浪士ハ前中納言殿未タ存命ナレハ、大石トハ併ヘ賞シ難  
 シ、(有村元第)彼ハ身ニ任セル怨モナク、為ニスルノ事ナシ、然ル  
 ニ慈母ノ可愛サヲ思ヒ切リ、兄弟心ヲ一ニセシハ何事ソ  
 ヤ、能ク思ヒ見ヨ、評者ノ浅深甲乙此ニアリ、高山正之  
 ナラネハ同日ノ論ニアラスト、仰コトアリシトテ……………  
(田中河内介)殿声濁ラレケレハ、玉衣ノ御袖モ屢々御顔ニカ、リケ

リ、末座ニ拜聞セシ難有サ身ニ余リ、

雲の上に名をさゝあけて時鳥

嬉しと計り啼やしつらん

暮カ、レハ、番所ノ往来面倒ナリトテ、御殿申シテ退出シ

又、……………(臥菴齋ヲ出ル乎)二帰レハ、……………(河内介)殿申サレシハ、……………(天納言)

斯ク迄心配シ給ヘトモ、……………(九条家其他ヲ云フ)ヲ始メ妄意ノ役人

計リナレハ、ヨモヤ計リ得サセ給ハス、シカル間帰國有

テモ、我方ニ在リシトノミハ云ヒ給フトモ、……………(天納言)殿

ヘ参見シ給フトハ云ヒ給フナ、假令同志ノ親友ナリトモ、

必ス禁シ給ヘト堅ク約シテケリ

雲を起し雨をくたすも時ありと

しはしやすろふ竜のかくれ家

ゑみしらかきたな心のねきことを

得さし給ひし御代のゆたけさ

五くさのゑみしとゝもに仰き見ん

この日の本の春の光を

……………(河内介カ)玉琴携来リテツマラヌ事カ、ツマツタ事カ、大息

小息ヲツカムヨリ一献傾ケテ、此玉琴ノウタヨミ給ヘト

ス、メラレシニ……………(河内介)

琴の音のあたりは雲の上なれば

天津乙女の調かと聞く

八日、強力ヲ案内トシテ出立ケリ(河内介允) (歌一首アレトモ下句不明ナレハ略ス) ……殿送別、

別れをは惜む涙を憚らて

なに時鳥帰れてふ鳴

別れても又の逢日はあるものを

誰れか名付けてなしと云ふらん

命故に赤き心の安らけき

こや丈夫の鏡なるらん

丸田町ヨリ三條大橋へ通り、豊後屋ヨリ着替・諸道具請取り、八幡ヲサシテ急キケリ、石清水八幡宮ニテ、

ますらをの心はいはし石清水

清くうつして神やくむらん

三十石舟ニ乗リテ、大坂長堀へ着ケリ、

九日、御堂ノ東(旅店橋邊) ……宅ニテ日州細島ノ(河野彦一郎カ) ……殿

ニ逢ケリ、近江・伊賀・伊勢三ヶ国ノ山千荷買円ノ一策

ヲ立ツ、

十日、天満天神ヨリ石山ノ城真田山天王寺ニテ、高橋父

子ノ始終ヲ聞キ、

梓弓弥生ひの年は過にしを

世の時鳥何を待つらん

住吉ニ詣テ、

遠くなは渚の浪に声かけて

長くけらしな岸のひめ松(仁允)

十一日、芝居見ニ物シケル帰ルサ、長堀ノ材木ノ間ニ、

二十ハカリノ女立テ有ケル、遊ンテオ呉レト袖ヲ引カヘ(夜裏ト唱フル醜業女ヲ云ナラシ)

ケリ、列ノ一人ハウナツイテ笑ヒ、一人ハ高声ニテイカ

ル、余黙シテ懐ヨリ大錢一枚取出シ遣シテ通りケリ、

のかれすはかけてや袖を濡すらん

灘の木の間の夕立の雨

十三日、江戸守衛トシテ谷山ノ郷士・加世田ノ三士登ラレ

タリトテ、越中橋へ見舞シケリ、(旅店橋邊)

君か為め立行人の旅衣

うら山敷も思ひけるかな

やき太刀に花も咲へき旅なるに

余所に心をちらすなよ君

よるひるとみかき給ひし御心を

試み給ふ此旅路かな

木津川ヨリ日州高鍋ノ御手船明神丸ニ乗リ、十四日朝出

帆、

万延元年 (1860)

廿二日、御手洗ニ入津、

御手洗や清き過てもいかゝせむ

人のけかれのうらやまれつゝ、

遠情

糸竹の絶へしちきりの一ふしは

なにとしらへて何諷ふらん

廿五日、島ノ浦へ上リ、

廿六日、細島へ着キヌ、

廿八日、高鍋ノ城下へ宿レリ、

廿九日、佐土原ニテ人馬継キ、夕方高岡宅ニ宿レリ、(姓名不詳可也)

五月朔日……殿へ見舞シ甥……殿ニモ逢ケリ、此二

人実ニ人傑厚情感服セリ、

二日、去河関ノ近所ニ宿リヌ、

帰らしと思ひ出にし去河の

流れにはちる今日にも有かな

三日、都之城、(曾於郡)

四日、志布志、(肝原郡)

五日、柏原、(肝原郡)

六日、高山へ参リ波見へ返リ、伯父……殿へ逢フ、(同上)

七日、雨滞在、

八日、古江下リ、(鹿屋市)

九日、……屋敷へ上リ候処……様(左衛門) (日置ハ薩摩国日置郡

日置郷ノ領主島津左衛門) 御……ノアトナレハ、帰館迄待

ち居ケリ、御……殿ヨリ饗応アリ、昼飯下サレケ

リ、御家老座書役殿ヲ御招キ相成リ、往キ還ノ事不残申

上置キヌ、翌十日……届物アツカリ来リシ書状一々相

届ケ……へ帰レハ、脇田ノ松原 (古郷ハ谷山郷ナリ、鹿

児島ヨリ凡ソ二里許リ、脇田ノ松原ハ谷山郷ノ一村、鹿児島ヨ

リ谷山郷へノ差口ナリ) 迄門弟迎ヒニ参リ居ケリ、其晩ヨ

リ昼夜ノ客来、祝儀ノ酒宴更ニ絶間ナシ、

十七日ヨリ不快ニテ、十八日ニハ頭ヨリ脚ノ先マテ惣痛

ミ、耳聞カス、口中叶ハス、医某々等相頼ミ療治ス、父

ノ画像孔丘ノ画像掛タリシニ題シテ、

親の下聖の下になかめたれ

死なば斯くてと思ひぬるとも

中元ニハ未タ斎戒沐浴スルコト能ハス、親ニ事フルハ犯

コトナフシテ、隠スハ有リトイヘト計ルヘキコトナク、

父母ノ靈憂ヒ給ハンコトヲ思ヒテ敢テ拜セス、

かくされぬいたつきなればたらちねの

御霊はいかにしてか拜まん

此度ハ神ニモ告ケヌ旅ナレハ、留守ノ内弟（実弟ナル者現存谷山町ニ住ス、書類所有セリ、明治二十年夏現書ヲ借りテ騰写ス）、妹ハ更ナリ、妻ヤ門人共神ニ歩ミヲハコヒ、無事ノ帰国ヲ祈リシヨシ、忝ケナキ身ニ入りヌ、今日ハ九月廿五日、日カラヨシトテ神社ニ礼參セリ、同ク十月十七日、長崎へ発足シヌ、

四方の海の夷の舟（品カ）や見て置ん

あすは直うちと思ふ計りに

川内岩屋ノ松女ニ題ス（川内ノ岩屋ノ松女云々、全郷向田町ノ商人岩屋松平カ女ナリ、現金銀座ニ在ル岩谷松平カ養母ヲ云フ、有名ナル女ナリキ）

常盤なる岩屋の松と詠めしも

落葉か上に霜降にけり

阿久根ヨリ舟出シケリ、天草ノ津ニテハ向フ風ナレハ、小川ノ中ニ漕キ入レテ泊レトモ、小舟ノ内舟子ノ軒ト寒サトニテ寐入ラス、岸ノ古社ノ燈明ヲナカメ明ス、

松風も川もしくれの音すなり

ふりにし神のともし守る夜は

夷人馬ニ乗テ跋扈スル形勢驕奢ト云フモ更ナリ、

敷島の牧の荒駒夷らか

あしともなれる御代のゆたけさ

丸山花月楼ニ遊ヒテ、

四方の海八つの夷も花に酔ひ

月に浮るゝ所なりけり

加籠町池崎吉次郎方へ遊ヒシニ、松尾長之助唐紙一束ヲ持チ来テ進セント云フ、サレハ揮毫申サント興酣ニ至レハ、吉留治兵衛清人チユン官・ニン官、外ニ一人ヲ列レ越シタリ、関羽呉ノ会ニ臨メルカタノ一軸ヲモテ来テ、ヤマトウタヲコフト云フニソ、

鋒と文はなたぬ見れば敷島の

大和男の子に似たる君かな

（諏訪神社ヲ云フ）  
鎮西大社焼ケタリケル、

千盤破神も御社焼はらひ

退き給ふ世の末ぞ怨しき

十一月八日ハ我氏神祭り日ナリケリ、

祭らさるか如しと云ひし古の

言葉身にしむ今日にも有かな

薩人ハモノコト疎ナリケリト人ノ云ヒケレハ、

我国は我日の本の本つ国

（枝葉カ）  
散葉になれぬ程そかしこき

末弘信敏兄此所ニ在シト聞テ、

梅の花咲ぬと聞し朝より

春めき渡る我心かな

訴人多キヲ畏ル、人へ対シテ、

我鯛のくさび（きそぎ）としらて猫犬に

恐れていなむ人の可笑き

女郎ノ金ヲ人ニ懸ラレシヲ、

欺て取った金なら欺て

とられぬことのいかてあらまし

十二日、川内迄帰り、

十五日、藤川天神ニテ、

八ひらてもうち忘れけり梅の花

かくとはかねて聞き渡れとも

同シ夜雪ハフリ月ハ照リケルニ、川舟ニテ向田ニ下ル、

白浪のたてる洩かと漕かけて

みれば高根の雪にさりけり

島津左衛門久徴公出府ノ由承リテ、阿久根迄付越タリ、

（阿久根郷ノ名聲茶業ノ名）深緑テフ粗葉ヲ進シケレハ、伊集院次左衛門（門説カ）ハ

当時藩庁ノ筆吏、後小松ノ膝下ニアリテ、堀小太郎ヲ幕府ニ讒

誣シテ、永井玄蕃頭久光公ニ告ケ罪ニ座シテ遠流セラル）ヲ以

テ、仰セ入ラレケルハ、長崎婦リトイヘハ、何カ申旨モ  
アラン、無隔心申入可シトノ由也、手扣ヲ差出ス、

一大坂へ御着ノ日、御池裏門播磨屋源七方へ、日州細島

ノ河野彦一郎滞宿シヌ、是ハ江州・伊賀・伊勢ノ山干

柏買円メノ一計アリ、同人ニ御面会有之度候、

一御滞坂中ニ京師ニ走セ上リ、田中河内介ヲ列下シ、御

直ニ形勢ヲ御聞ニ入レ申度御座候、

一江戸御屋敷へ滞留セシ浪人共ノ心底ヲ探ル事、（水戸浪士三十余人藩邸ニ在ルヲ云フ）

但シ此一計ハ御役人方ニテハ行カヌ事ナリ、余亦素浪

人狂倉（者カ）ト称シテ、守衛人ノ制スルヲモ聞入レス、毎日

行テ余赤心ヲ吐キ候ハ、自ラ彼等カ赤心モ吐キ可申

也（当時藩内ニ於テ、水戸浪士ヲ疑ヒタル説交々起レリ、

藩庁モ稍其説ニ傾キタリ、故ニ是枝カ建言如此）、察スル処

此者共ハ水戸当主ノ趣意古主ニ違フ（当時江戸其他ニ於

テ、烈公ト当公ト睦シカラヌト、其他種々ノ風説アリ）タリ

ト申触シ候、彦根ノ恨ヲ我国へ売り申ス手段ト覚候故

ニ、是ニ乗シテ一計アル可シト存申候事、

右ノ三ヶ条ヲ任シ給ヘカシ、御供申上度奉願候ト申上ケ

候ヘハ、其暁天金（マカ）ナト賜リ候テ、又長崎へ差越シ、ケ様

ト仰ラレシ故、十八日発帆シヌ（探偵ノ為メナリ）

春とゝもに帰らん家路ふみかへし

かへさん御世を願ふなりけり

(文久元年) (長崎市街ニ在リ)  
辛酉初春迎陽亭ニアソヒテ、

四方の夷クダラモロコシ高麗唐土舟さわに

庭の汀にきそふ宿かな

十一日、帰家シミレハ、江戸ヨリ伊牟田茂時・大脇為政・

神田橋義徳・樋渡清明・益満……………(伊牟田尚平、谷山郷

士大脇仲右衛門・神田橋某、頼娃郷士樋渡某・益満某)ノ書状

来リ、歌ニ

思ひきやきのふの水けさの霜

詠めせし間にうち解んとは

返翰ニヨメル歌

かへりこむ雲井の春を待人の

雪うち払ふ赤羽根の里

隼人の薩摩の子らか剣太刀

抜と見るより楯ぞ砕くる

夷人不残横濱へ引取り、本国へ注進ニモ及ヒ候由、サレ

トモ昨日ノ恥ハ顧ミス、明日ノ利ヲノミ思フノ禽獸、ヨ

モヤ争乱イタスマシ、故ニ長崎ヲ襲ヒ夷人不残討払ハ、

必定合戦ニモナルヘシ、何卒早く兵端ヲ開ク者ヲ、本朝(分カ)

第一ノ忠臣トス、イサヤウチ立ナムトテ催シケル人々ニ

(毛利新兵衛・坂本彦右衛門)  
ハ、毛利元真・坂本……………田代稻麿ヲハシメトシテ、或ハ

大山(大山ハ正円綱良カ旧名ナリ)・高橋(高橋ハ助次郎、

美玉三平カ旧名)・有馬(有馬新七)・獅子目(獅子目ハ志々

目鎌吉ナリ)等ノ族ニシテ、既ニ期ナラントス、余以爲

(奈良原善左衛門) (高崎佐太郎)  
奈良原混・高崎正風ハ多年ノ好シミ也、知ラサスシテ打

出ナハ、後ノ恨ヲイカ、セン、固ト義ヲ重ンシ決断早キ勇

士達ナレハ、隠ス可キニアラストテ洩シケリ、申サル様、

我等ハ大久保利濟ヲ將トセシヨリ、彼ニ告スシテ発起致

スマシトノ誓文アリ、兄之ヲ許セ、必ス外ニ洩サシト、

翌二月朔日ト云ヘルニ、有村兼俊・奈良原混迎トシテ、

森山永賀(有村兼俊海江田信義旧名、森山新蔵永賀)ノ方へ

列越サル、大久保利濟・堀貞逸(通カ)(伊地知貞鑿旧名)申サル

ハ、長崎ノ一条サル事ナカラ、先ツ大事ノ前ノ小事ナ

リ、彼枝葉ヲ捨テ、根本ノ上書相達シ呉レトノ事ナリ、(建言逸ス)

其文ヲ見レハ云々略ス、発足ノ時(実歴史伝參看)

大君の為にしあれば此旅路

守らぬ神はあらしとそ思ふ

八日、阿久根ヨリ発帆

十二日、肥後松橋薩摩屋忠次郎方着、同晩熊本細工町鶴

島屋善五郎、

十三日、南ノ關豆腐屋庄一郎、

十四日、筑後久留米水天宮神主真木和泉守方ニ投ス、

よるひるの業にこそあれあらためて

神にねきこといはすともよし

十六日、筑前太宰府詣、笹屋武右衛門へ宿リ、小野加賀

守へ逢ヒヌ、

此度のことし守れと此神に

いふはかへりて愚なれとも

十七日、飯塚ヨリ川舟ニテ、木屋ノ瀬角屋儀兵衛方ニ宿

リ、

十八日、黒崎薩摩屋次郎兵衛ニ着ク船ニ乗リ、

十九日、下關、

廿一日、田ノ浦北東風ノ雨頻リニフリケレハ、イサヤ旅

ノ憂サハラシセムトテ、乗合ノ者共ト酒宴ヲハシメケリ、

船客ノ名ヲ一字ツ、札ニシテ、遊女へ一枚ツ、持テ参レ

ト申遣シケレハ、我柳ノ字ハオカノト云フ女モテ来ル、

田の浦のかりねの妹か名をとへは

都の願ひかのふとそ乗る

廿三日、室津、

廿六日、(香川県)多度津浜屋半四郎ニ宿レハ、乗組ノ内肥前島原

藩長尾楠壽テフ医道修行ノ者アリシカ来テ、某爰許富山

由章ノ方へ在付申筈ニテ候、是迄御懇情ニ預リシ故、御

暇乞ニ参リシト云フ、答曰ク、我嘗テ聞ク工欲善其事必

先利其器ト、我レ由章ノ為人ヲ知ラス、何以之レニ事カ

ヘントシ給フヤ、楠壽曰、伯父某モ医ニテ、紹介ノ添書

ヲ遣セシ故ニ、暫ク此ニ在ラントスト、サアラハ門送り

シ申サントテ、富山氏へ列越シタリ、頓テ側ヨリ美服セ

シカ、汝楠壽其容ニテハ行カス、月代トモシテ立派ニ繕

ヒ申セヨトユフテ、共ニ座ヲ辞シケリ、我モトテ宿ニ帰

リケレハ、又翌朝楠壽来テ云フ様、富山先生ノ下知ニ随

ヒ、長崎ノ先生ノ方へ罷上候、昨日ノ御教示忘レ難ク候

俛、御邪魔ヲモ顧ミス参シ候、何卒惑ヲ弁シ給ハレカシ

ト云フ、折リシモ船子来テ、只今発帆仕ラン、イサ乗船

アレカシト云フ、サレハ楠壽来リ給へ、富山氏ニテ処置

付ケ申サントテ、打列テ飛出シケリ、扱由章先生此楠壽

事、長崎ノ人へ御託給リ候由、彼先生ノ徳業医術如何、

由章曰、其詳ヲ知ラス、然則何ソ楠壽ニ付ケ給フヤ、医

ハ仁ノ術、楠壽モ業成ラハ、國ニ帰リテ衆ヲ助ケントノ

コトナラン、且一言以為知一言以為不知、昨日始メノ教、



容貌ヲト、ノヘトノ一言、葉売リノ余情アリ、我國ノ医ニ  
異ナリ、斯ル人ニ託シ給フトハ、所謂賊夫人ノ子ニアラ  
スヤト云ヘハ、由章甚タ赤面シ閉口セラル、曰、先生過  
テハ則不憚改ト云ヘリ、只今御取返シ給ヘ、都ヘ列上リ  
可申ト云ヘハ、船頭又催促ニ来テ甚急ナリケリ、由章曰  
ク、後刻私宅ヘ引取可申間御安慮給ヘカシ、決シテ疎略  
ニ仕リ申マシトソ、楠壽ニ向テ立身道揚名於後世以顯  
父母孝之終トイヘリ、過リ給フナヨトイヒツ、立出テケ  
レハ、船端迄送リ来テ楠壽泪数行ニ及フ、

廿九日、牛窓、(岡山県)

晦日、室早崎、

三月二日、大坂へ着ヌ、阿波屋藤兵衛ニ立寄り、国へ書  
状出シケリ、

別れては泪も雨と故郷に

帰る鷹かね啼て伝へよ

同晩四ツ過、大仏屋舟ヨリ登ル、

田鶴とらん鷹の怒りにはあらねとも

拳にとまる淀の川舟

番所ニテハ去年ノ事共思出シ、偽テ曰、某ハ肥前長崎西  
古川町年行司青屋善助ト名乗ル、役人曰、然レハ町人ニ

テ有シヤ、大小ヲ帯セシハ何事ソ、答曰、此所ノ番所ハ  
何レ様ヨリ取建ラレシニテアリシソ、役人曰、是コソハ  
公義ヨリナリ、曰、公義ヨリナラハ長崎ノ町役帯刀セシ  
ハ、知り給ハンモノヲトイヘハ、ヨシヨシ御通被成ト云  
フ、伏見ノ番所ニテモ又然リ、京へ着シ何モカモサシ置  
キ、左近ノ桜拝見セントテ、案内ヲ雇テ御所へ入りヌ、

九重の花見ぬきのふ春の日を

長きものとも思ひけるかな

此内欠ク(約六十行省略カ)

六日ニハ、昨日余所ナカラ尋ネ置キシ、上嵯峨ヲ心当ニ  
立出ケリ、竹裏館(竹裏館ハ、村岡老女カ下加茂ノ陰樓ヲ云フ)

ヲ訪フテ、有村兼俊ヨリノ書状ヲ差出シケレハ、頓テ侍

女奥へ案内シケル、五十余ノ女白無垢ヲ着、赤キ帯ヲシ

メ(縁ノ袴業ノ打掛シテカ)(五枚脱カ)、実ニ近衛老女村岡トモイフベキ粧ナリ、扱

危急存亡ノ時来リテ、ハル／＼上京仕リシハ別儀ニアラ  
ス、此書付上達仕ル可キ御手タテハアラマシキヤトテ、

彼一書ヲ差出シケレハ、繰返シ／＼熟読セラレテ、涙押

拭ヒ、カ、ル忠義ノ人々モアラセラル、ニヤ、珍重ノ至

り感スルニ余リアリ、前日迄甥ナル何某(甥ノ名可糺、

中路延年話筆記参看)来リテ申スニハ、薩国今ハ頼ミニナ

ラス(今ハ頼ミニナラス云々ハ、奇彬没後俗論起リテ、前旨一旦  
 廢シタルニ依リ、如此)(主人ハ近衛公ヲ云フナラム)、故ニ主人大ニ憂ヒ給フトノ事ナリ  
 シニト、余曰、(寡君ハ当主茂久ヲ云フ)、寡君事先君ノ遺誡ヲ守リ、勤王ノ熱心甚  
 タ大也、去々冬既ニ申渡シタル一書(一書ハ前ニ記シタル  
 誠忠士ノ面々ノ書ヲ云フ)、此ニアリトテ、十一月五日ノ書  
 取ヲ読ミケレハ、扱々驚キ入リタル御事ナリ、直様參殿  
 シテ上書シ、御力ヲ付ケ參ラセ申サン、御聞及モ候半、  
 私関東ヘ下向(関東ヘ下向セシ云々、戊午ノ年捕ハレトナリ  
 テ、関東ヘ護送セラレシヨ云フ)セシ後ハ、此所ヘ蟄居シ侍  
 レハ、イツレ明日甥ヲ呼寄セ、(翠山公ハ忠顯公)翠山公迄ハ上書シ申スヘ  
 シ、サレト 皇帝ヘ上達セラル、事如何アルヘキカモ計  
 ラレス、殊ニ 和宮御縁辺ハ主家ニ於テ吉瑞ナリ、此一義  
 無滞調ハセラレナハ、御落飾(戊午ノ年御落飾御幽居ナリシ  
 ヲ云フ)モ晴レ申スヘシ、主人復位遊ハシナハ、オノツ  
 カラ是等ノ御処置モ埒明キ可申ナリト申サレケリ、扱此  
(武次ハ海江田武次、信義田名)  
 武二ト申スハ、如何ナル御人ニテ候ヤ、去年上巳ノ一挙  
 ニ加ハリシ雄助・次左衛門ナトノ家兄ナリ、サレハコソ  
 彼雄助カ次左衛門カ、先年在京セラレシ大ナラスヤ、否  
 ナ右ノ武二事先年在京セシカ、月照ヲ列レ下リシ者ナリ、  
 嗚呼左様ナル乎、月照ハ実ニ落命カ、サン候、(鹿尾島城南半  
 松原山南

里許ニアル禪寺松原山南林寺

林寺ノ檀下ニ葬リケリ、西郷氏ハ如何ニ曰、共ニ入水シ  
 テ息モ絶居タリシカ、平日ノ強氣ナルヨリカ蘇生シテケ  
 リ、併シ遠流セラレテ、今ハ大島ヘ居ラレシト云ヘハ、  
 倍々今マテ噂ハ聞タレト、半疑半証ナリシカ、今日コソ  
 安心セリ、(任レリカ)命タケアレハ唐土ニアツテモ、精神ハ透ルナ  
 リ、況ヤ彼大島ニ於テヲヤトテ、種々ノ菓子共給リテ、  
 終日ノ馳走ナリ、我レ短冊ヲ乞フテ、

大丈夫の髪さかたちてあふけふは

ひんのみたれをいはずともしれ

昨日、嵐山ノ落花ヲ詠セシトテ書キシ歌ハ、

桜花はやくみたれてちらさらは

あらしの山と誰あふかまし

村岡殿打吟シラレテ、御氣象思ヒヤラレ候、然シテ大事  
 ヲ懷フモノハ自愛コソ肝要ナレ、且ツ物ハ内ヨリ破ルゾ  
 カシ、仮令同志ノ人タリトモ、明日ノ事ハ議シ給ヒ、昨  
 日ノ事ハ語り給フナ、此人ハト思ハヌ人ニ大事ヲ明ス人  
 ハナシ、然ルニ其人マタ此人ハト思フ人ニ話シ、段  
 タシテ世ニハビコリ、終ニ事成ラスシテ自滅ヲ取ル、恐  
 ルヘキハ我好ミタル人ナト、思ヒ給ヘト、(中山殿)反覆丁寧筆紙  
 ニ尽シ難シ、七日河内介殿申サル、ニハ、若殿中殿忠愛  
(将カ)

卿ノ方ヘ手ヲ付申候テ、如何有可キ、先日大納言様へ御  
伺候処、悴ノ事ナカラ下知スヘキ事ナラス、是レハ柳右  
衛門カ心次第ナリト仰セラレタレハ、トウヤラ決断シ難  
キ処ナリト、我曰、何様ニモ手ノ届ク限りハ、御心配成  
シ下サレカシ、若シ仕損ニナルトモ、決シテ人ヲ恨ミ可  
申ニアラスト云ヘハ、サラハ先一旦御目通ヲ願申シ見  
トテ、参殿セラレケリ、頓テ帰リテ、今日明日ハ閑暇ナ  
リ、参リテモヨロシ、又其方宅へ越ス可キカトノ御意ナ  
リト、然則今日ニシ給へ、都合ニヨリテハ、明日ハ上書  
ノ願モ可申出トテ、聖堂ニ在ラレシ子息左馬介殿ヲ呼返  
シ、御供ヘトテ遣ハサレケリ、料理人ヲ頼ミ、長キ日モ  
申刻過ントセシニ、スマテフ侍女御召ノ器トモ持越サレ  
タリ、頓テ御人アリ（八九カ）、規式スミテ酒酣ニ至リ、御不例ノ  
模様ニテ、一間ナル所ニテ侍女ニ腰叩カシテ在ラセラレ  
ケリ、御容体ヲ窺ヒケレハ、サシタル事ニテハナシト仰  
セラレケル故ニ、人ナキカ幸ヒ心セキケル尽ニ、懐ヨリ  
彼上書ヲ取出シ、此節上京セシ一義外ナラス、此書付上  
達被成下候様トノ願ニテ候、何卒御憐ヲ垂レ給ヒ、ヨキ  
ニ御処置下サレカシトテ奉リケル、口書少々御覽遊ハシ  
テ受取候、得ト見テ後ニイナヤニ及ヘシトテ、御懷中ニ

納メ給ヒケル、其事衆ニサトラレシト、本ノ座へ出テ酒  
ヲ勸メテ、自モ大杯ヲカタムケ、興シツ、初更過レハ御  
帰館アリケリ、

八日ハ庭ノ桜ノ下ニ風呂ヲ沸シ、其中ニテ酒ヲ吞ミ、酔  
ノ廻リシコロ起キ上リテ飯ヲ食ヒケルウチ、唐橋大納言  
殿ノ雑掌水島監物殿モ参ラレテ、若王子ノ花見ヨリ何ト  
カ云ヘル豆腐ノ田楽屋ニテ酒宴シ、三人列ニテ祇園町へ  
ソ伴ハレ遊ヒテ帰リケリ、

九日、終日臥龍窟ニテ書画琴酒ニ日ヲ暮シ、

十日、御室御所桜ニ暮シ、平野ノ夜桜ニ更シタリ、（ケカ）

十一日、八瀬大原へ廻リ、田舎ノ木桜ヲ味ヒ申サント議  
シケル中ニ、中将様ヨリ玉章下リケル其文ニ、我力勤王（勤王殿ハ中山殿ヲ云乙）

殿ノ日本桜盛り候間、明日ハ長崎ノ善助同道ニテ昼ヨリ  
御出ヨ云々、之ヲ拝見シテ遊散ヲ止メ、斎戒沐浴正座シ  
テ放心ヲ納メ、書思対命而転観シ、夜半寐、夙ニ起テ期  
ノ至ルヲ待チケリ、

十二日、河内介殿申サル、ハ、長崎ノ善助ト仰セ越サレ  
ケレハ、中帯扇子ニテ参ラレヨ、丹波但馬ノ書生ト共ニ、  
四人列ニテ石薬師通ノ番所ニ入り、名乗リテ通りケル、  
入殿スレハ御茶ナト下サレ、善助ハ此方へ来レトテ、御

庭ノ池ヲ廻リテ小高キ所ヘ列越シ給ヒ、此社ハ先祖愛親朝臣、関東ヘ懐中セシ大神ノ像ヲ安置シケルナリト、仰セ聞カサル、神拝終ハレハ、華表ノ前ニ一間方ノ涼ミ台ヲシキ物アリ、毛氈ヲ敷ヒテ硯箱・紙短冊アリ、此所ヨリ桜ヲ見テ、歌トモ読ムベシト仰セラレシ、頓テ河内介殿モ此所ニ參ラレケリ、振題ヲ下サレケルニ、夜見神前花ナリケリ、扱テ仰セラレケルハ、先日ノ上書篤ト披見セシメ候処、能々我カ心ニ適ヘリ、依テ(此間文字欠ク)  
(皇帝ヘカ)  
披露致ス可キナリ、乍併宮中ニモ姦アリ、急速ニナリ難シ、都合ヲ見合セ局慶子ハ我カ妹ナレハ、此ノ道ヨリ上達イタシ度トコソ思ヒケルナリ、依ツテ一首ノ和歌認メ置キ、且ツ(一字不明)ルト床ノ上ニ備ヘ置キタレト、今日ハ見ル通り医者モ書生モ来リ居ケレハ、渡シ難ク候、依テ明日此方ヨリ持セ遣スヘク候間、領掌スヘシトノ有リ難キ旨、奉拝謝テケリ、  
(掃リ脱カ)

うれしさを御まへの桜知り頭に

笑みほころひて匂ふ今日かな

二題ノ歌ハ四首共ニ思ハシカラス、忠愛卿ノ御題ハ朝花・池辺花、綴猷ノ題ハ翫花・花未遍ナレトモ、皆オカシキフシモナカリケリ、夕暮ニナリケレハ座敷ニ帰り、花ノ

宴ヲ賜リケル、酔ノ盛ニハ河内介殿ノ鼓ニテ、忠愛卿ノ舞五座シ遊ハシケリ、海苔巻ノ鮓ヲ終リノ御馳走ニテ、御暇申上ケリ、  
(皇太子脱カ)  
十三日、御持古シノ御扇子・御碗・御皿三ツ・猪口・御餅ナリ、御詠歌短冊十葉下シ賜ヒケリ、外ニ奉書下シ賜シハ、羽林中將藤原忠愛

奉る書を見るにも大丈夫の

その赤心そ実にしたのみなる

又一枚ハ、

内密ノ書取主家へ上書ノ処、勤王ノ誠意御感不勘候、不容易ノ大事深ク御勤弁之上、追々可被入御内奏候、和宮御事関東御下向、暫ク御延引被 仰出候、右等ニ付被為在御内存候間、柳右衛門来七月中ニ再度上京可有之旨御示ニ候、依テ執達如件、

文久元年三月

田中河内助綴猷判

(此書河内助ノ偽筆ナラムト、当時モ怪ヲ入レタリト云フ)

扱モ大兄ノ御執持ニヨツテ、大幸ヲ得テ珍重ニ奉存候、  
(田中)  
(達カ)

付テハ一日モ早ク帰国致シ、同志ノ者共ニ眉ヲ開カセ申度コソ思ヒ侍レ、今日ハ御暇申上ント云ヘハ、河内介殿日ク、昨日若殿御物語ノ内ニ、陽明殿ヨリ裳束御渡シニ

ナル可キトノ御沙汰アリケリ、夫迄ハ御滞在ナクテ叶フマシト、余答曰、去年ヨリ近衛殿ノ近辺ニウロツクコトナカレ、此御方様ニハ国許ノ凡士出入スル処ナレハ、如何ナル憂目ニ逢ハンモ計リ難シ、必ス過ツナリ(下カ)全志ノ者共返ス〜モ申侍リヌ、成程先日ハ嵯峨ニモ參リ候得共、此ハ止ヲ得サルニ出テシ処置ナリケリ、斯カル上都合到來致セシニ、今又彼殿上ニ徘徊スル事心ナラス思ヘハ、一刻モ早く退出シ申度トイヘハ、サレハ候、前日ヨリ御尋申度事有ケレトモ、貴殿ノ顔色愁眉ノ形勢ヲ見テ、御氣ノ毒ノ事トモ尋ネ懸ケ申スニ忍ヒス、今日コソハ疑惑ヲ弁シ給ヘ、彼有村ハ何トテ切腹仕シヤ、此度上書致セシ義士達ノ在リケル国トモ覺ヘサルハ、疑ノ一ナリ、答曰、雄助・兼武帰宅候処、慈母ノ曰、下民ヲ殺害シテモ士ハ切腹シテ、天ニ詫ルハ我国ノ旧制ナリ、況ヤ極職人(極職人トハ井伊直物ヲ云フ)ヲ殺スルヲヤ、一日ヲ延レハ一日ノ不仁タリ、国ノ面目ヲ失スルハ汝力所業ナラスヤ、乍併余婦女ノ身大事ニ処スル事能ハス、兄弟朋友ニ謀リテ弁スヘシ(事実ヲ述ヘサルハ、藩内ノ俗論盛ナルヲ包ミタルナリ)、論定テ後ニ再会致スヘシ、夫マテハ閨ニ籠リテ、吉左右ヲ待ツ可キ間、定省ノ奉公御断申置也ト仰ラレテ、戸ヲ閉テ見給ハサリケリ、

兄弟朋友モ申シ謝スルニ言葉ナク、終ニ落命トハ成リニケリ、彼檢使トカ云ヘル者ハ肥後川尻迄來レトモ、領國ノ内ニハ得モ入ラサリケリ、畏レテ斯クノ次第ニハアラスト云ヘハ(檢使カ國境ニ入ラサリシハ事実ナリ、川尻ニ非ラス、國境關外切リ通シト唱フル所ニ於テ、戸ノ檢視ヲ乞ヒタルモ、幕吏ハ檢セスシテ去レリ、其事実旧邦秘録・石室秘稿等ニ詳記ス、是枝カ話ハ其事実ヲ誤リ伝ヘタリ)、河内之介殿低首シテ涕淚數行ニ及ハレ、ヤ、シバシアリテ扱々感心仕候、斯ル母アリテコソ、斯カル子ハ産レ侍リヌラン、青史ニ識シテ后ニ伝ヘ申スヘシ、先々酒一献酌ミ給ヘ、又シテ問フヘキアリ、有村ノ同道タリシ金子孫(次ノ孫)四郎ナトヲ、貴國ノ汾陽彦次郎ト申ス官吏召捕給ヒテ、幕府ヘ御引渡之由、是ハ如何様ノ儀ニテ候哉、サレハ候、去年承り帰國ノ砌、同志ノ者共ヘ尋掛候ヘトモ、彼役人ハ固ト唐胤(汾陽家胤人ノ末ナリト云)ナレハ、斯カル処置ヲモナシヌラント計リニテ、委クハ申聞カシ申サスト云ヘハ、サナ利口ニ云ヒ給ヒソ、伏見ノ館司有川モ又タ唐胤ニテハ有可カラス、此御答ハ承知致シ難シ、古語ニ狩人モ懷ニ入りタル雀ハ放ツト申サスヤ、水戸三十六人ノ浪士ヲモ、志ヲ輔ケテ立シムル事能ハス、本國ヘ引渡シ、日本國中ノ勇士ノ心ヲ防遏シ、且

又其后一人ノ浪士 (三十余人ノ外、三四日後ニ来リ、入邸ヲ請ヒタルヲ允サ、リシ故、屠腹セリ) 来リシトテ、百万石ノ大名トシテ大門ヲ閉テ入レス、御劍ヲアツラレ給ヒテ (御劍云々齊興公指揮シテ煉ハシメ献シタリ、其御内勅アリ、是ヲ以テ証スヘシ、有馬新七建言参看) 国意ヲ観給ヘハ、俗情ヲ吐テ奉惱 宸襟各国ニ笑ハレ、 宣旨ヲ賜テモ君主ニ届ケス、一々申分アラハ承ハラン、強国ト云フ可キカ、弱国ト云フヘキカ、義弟イカニト詰リ給フニソ (田中カ詰問、是枝カ答弁ニ困シタル見ルカ如シ、是枝ハ藩内俗論ノ盛ナルヲ吐露シ得サル、又愛スヘシ、田中カ問今シテモ答フルニ道ナシ、齊彬公没後ノ藩情ハ旧邦秘録ニ詳記ス、誑ンテ知ル可シ)

世の中にちりやあくたのなかりせば

たまを玉とて誰愛らまし

斯クテ午刻ニモ成ラントシケル時、人來テ曰、此ニ長崎ノ善助ト云フ者アリシ由、某ハ村岡ノ甥何某ナリ、近衛家ノ屋敷ヨリ列レ参レト、主人ノ上意ナリケリト云フ、脇差取りテ付キ越シケレハ、陽明殿ノ隠殿也、玄関ニ扣ヘヤ、暫クアリテ (此間数字欠失) 一間ナル所へ退出シケル、又御呼出シ有リテ御杯下サレ候テ、去年ノ旅行ヨリ今度ノ上京迄、趣意一々聞届候、就テハ先日北小路へ奉

公ノ一条実ニ符合セリ、此上ハ河内介へ合力シテ、我等カ誠心ヲ助ケ 主上ノ亡道ニ赴キ給フヲ救ヒ申セトソ (仰セラレタリカ) 仰セケリ、答曰、北小路殿へ仕官ノ事ハ上書達シ兼テ、止事ヲ得サル一策ニテコソ有ケルニ、暗ニ大義ヲ含ミタリシヤナ、則領受仕申度ケレ、乍併能々思ヒメクラシ候ヘハ、却テ御不忠ニモ当リ申サンカト存シ奉レリ、其故ハ仮令代リ応シタリシ時、河内介アレハ中山卿ハ勿論、雲上ノ俊傑モ残ラス遠国 (他ノ誤) 一人奸吏ノ中ニ憂ヲトメ給フラン事無疑、然ル間此一挙暫ク僕ニ預ケ給ヘ、一策アリト申上ケレハ、其大略ヲ可申トノ上意ナリ、扱和宮下向ノ事ハ八月ナリ、一先帰国シテ勇士ヲ引テ走上リ、淀・伏見ノ番ヨリ一々誅伐致シ、即刻二條ノ城へ踏込ミ、酒井若狭守カ首ヲ揚テ、後十月 (圓白、九条尚忠) 輪殿へ迫リ其罪ヲ責メテ説話シ、御直ニ御断ノ御書ヲ主上ニ奉ラレ、関東ヘモ下シ賜候様ニ計リ申ス可ク、仮令無道タリトモ、雲上人ヲ害スルハ武士ノ恥ル処ナリ、其時ニ至テ有栖川公 (忠能) 中山卿 (実力) 三條卿ナトノ歴々、能キ御処置アラマ欲シキ事ナリト申上ケレハ、我落飾ハ主上ヨリノ御咎ニアラス、其時ニ至リテハ我一番ニ参殿シ、主上ヘノ執成、関東ヘノ 勅命、薩国ヘノ挨拶、万端ノ

処置相働クヘシ、同盟ノ衆中ニモ我ヨリ申入可キ間、必  
ス違変スル勿レ、皇国ノ大事、今ハ汝カ一身ニアルソ  
ヨト仰ラレケルニソ、

薩摩瀉遠き塚にありとて

御先を人にゆつるへしやは

声たて、呼とも空し父母に

錦の袖を見せぬ悲しさ

御短冊ニソ書テ奉リケル、黄昏カ、レハ下殿申サント、  
暇ヲ乞ヒケレハ、此所へ宿シテモト仰ケレト、河内介殿  
へ談ノ事モ御座候トテ、罷リ出ヌ(海江田信義カ実歴史伝  
参看)、

臥龍窟へ歸テ、此度ノ一条小子申預リ候儀、細々申含ケ  
リ、

翌十四日朝、妾ニテ侍ラレケル小柳(河内介妾ノ名)トノ申サレケルハ、

今日ハ此家暇申ス筈ナリ、大坂へ罷越候テモ、家ハ養子  
ノ事ニテ身ノ切レ一人モ無シ、故ニ親々(類カ)共へ相談シテ、  
何卒京師ニ止リ琴ノ弟子共取リ、一人暮シ居候テ、折々

ハ河内介殿ニモ御出被下候様ニ致シ度思ヒ居候ト承リ候  
ニ付、其ハ何様ノ訳アルヲ以テノ御談合アリシヤ、サレ  
ハ候、世帯困窮ナレハ、近日主家ヲ辞シテ他国へ行ク考

ニ付、先ツ此際暇遣シ候間、納得可致トノ仰ナリト、小  
子曰、其ハ私心得不申候、主人(宗親)へ説話致サント座ヲ立ケ  
レハ、否々スカル事ヲ貴様へアカシ候テハ、トフモ主人  
ノ手前恥カシキヨシ申サレケレトモ、何ノ差支ユル儀ハ  
有之間敷トテ、河内介殿へ対シテ曰、小柳サマ何ノ事ニ  
テ、今日ハ御暇ノ筈ナリヤト問フ、申サル、ハ、貴殿御聞  
キナサル、通り、昨日ノ一条ニ付キ、二男ハ下嵯峨ノ叔  
母方へ遣シ、左馬介ハ昨年御相談申置候通、薩州ノ聖堂  
へ(左馬介鹿兒島造士館入塾ハ、柴山・橋口・有馬カ尽力ナリシ  
ト云フ)へ入レ置ン連、此正月筑前ニテ始テ打明シテ相  
談致シ候処、当年十五歳ニ成リタレハ、死生ヲ共ニセン  
トノ事ナレハ、今ヤ小柳ヲ親類ノ者共へ引渡シ申ス筈ナ  
リ、既ニ今日迎ヒニ参申ス筈ニテ候ト承候間、夫レハ近  
頃御失策カト奉存候、前広離別成サレ候テハ、却テ事ノ失  
アラン、期日ニ至リテ暇状遣候テ宜敷可有之候、殊ニ夜  
前申上候通、暫ハ小子申受ル事ナレハ、今日離別ニ相成  
候テハ、彼是念遣ハシク相成申スヘシトテ申ナタメ、小  
柳殿ノ方へ参リ、下男善助ヲ呼ヒ、先日参リシ小柳殿ノ  
御親類衆方へ参リ候テ、少シ見合セ候儀有之候間、今日  
御迎ニ御越ノ儀ハ、御取止メ給ハルヘク、又御引取下サ

レ候儀ニ相成候ハ、此方ヨリ案内可申候ト申述ヘ成サ

ルヘシト申含メ候テ、早々使ヲ差立ケル、小柳トノ不斜(ハレテ)喜ンテケリ、河内介殿申サル、ハ、御婦リニハ豊後国岡

ヘ御立寄成サレ候テ、小河彌右衛門ヘ御調シ合セ給ハル

ヘク、肥後ノ轟武兵衛ヘハ拙夫取逢ヒ不申候間、是ヘモ御立寄成サレ氣合ヲ見合セ居ルカ如クナラハ、御催促可

被成トテ、小河並阿蘇肥後ノ津田・川上・大野杯ヘノ書

状御認被成候(義挙録ニ照シ見ルヘシ)

十六日、唐橋大納言様ノ雑掌水島監物殿參ラレ候、  
おとりても舞ひてもけふは堪かねつ

世にうれしさの何はあれとも

下文腐朽

(野史台維新史料叢書八・是梓柳右衛門翁之伝記にて補誌)

策(脱所教子)  
一 禁裏ヘアツコヲ奉公セシムルコト、

一 京留守ニ八田知紀ヲ遣ス事、

一 陽明殿原田カ替リニ来鳳ヲイル、事、  
(牙魁)

一 諸国ヘ合従連衡トシテ差置親舖ク致ス事、

一 江州彦根ヘ山立荷買円トシテ、日州細島ヘ河野屋彦一  
(肥料牛馬骨ノ通鳴)

郎ヲ以本文不詳ト御国ヨリ入ル、事、

一 江州土山ノ宿山形屋庄右衛門方ヘ、養子トシテ大脇一

齊ヲ遣ス事、

一 主君ノ決挙本文不詳候ハ、長崎ノ一条取行本文不詳タ  
リシヲアラハス事、

一 領國中浦町在家皆々、鎧一領・乗馬一疋相求候者ハ、  
名字帯刀御免シトノ御触アラハ、三百人計ノ用意ハア  
ルヘシ、若事アラハ貧者はヲカルナリ、

一 火輪舟買入ノ儀ハ策ヲ献置候、

美玉三平  
(高橋親輔)

川畑宗之進

大山格之助  
(彌良)

田代清右衛門

神田橋治右衛門

奈良原喜左衛門  
(善)

右者 隼人介見(不詳)

豊後国ノ家老家老トハ誤聞 小河彌右衛門  
(二敏)

筑後水天宮神主 真木和泉守  
(保臣)

肥後清正公近所無念流劍師 轟武兵衛

太宰府神主 小野加賀守綴獻

京丸田町東熊野山鳥井近辺 田中河内介綴獻

右者銀主寺町 鍵屋庄兵衛



二六九 實歴史傳鈔

清川 八(正明)郎  
厚見 五郎

海江田子爵親話 平陽学人西河稱 編述

安政六年十二月十七日、幕府ハ安藤對馬守名ハ信豐、磐城平ノ藩主當時老中タリ(老年密)ヲ、小石川ノ水戸邸ニ遣ハシテ、去年八月八日ノ別勅ヲ幕府ヲ経テ、朝廷ニ返還センコトヲ伝達セシム、是ヨリ先キ水戸ニ在テハ、會澤恒藏等返勅ノ議ヲ唱フル者アリシカ、藩士ノ多数ハ之ニ反シテ、其議ヲ非トシ、物議囂々タルノ際、会々幕府ノ伝達ニ遇ヒ、其返勅ヲ拒ムノ徒ハ倍々憤慨シテ、幕命ノ非義ナルヲ唱フルニ至リ、両議相諍フテ止マス、老公之ヲ憂ヘ返勅ヲ可トスルノ旨ヲ諭スニ及ヒ、物議稍々定マレリト雖モ、亦未タ之ニ服セスシテ、藩ヲ脱シテ奔ル者アルニ至レリ、而シテ未タ返勅ノ事ヲ実行スルニ至ラサルニ、井伊大老ノ命運ハ殆ント風前ノ燈火トナリヌ(事茲ニ迫レル事実ハ、大久保利通日記及ヒ岩下方平談話記ニ詳ナリ)、越テ七年是歲閏二月朔日万延ト改元ス三月三日、黎明ヨリ寒風吹起リ、飛雪續紛トシテ咫尺タモ弁セス、那ゾ怪シマン、久来天下ノ積怨ヲ一身ニ負フ

ノ人ニシテ、斯ノ余寒ニ先タチテ、消亡スルノ迅速ナルヲ、是日井伊大老将ニ登宮シテ、上巳ノ佳辰ヲ祝セントシテ、従者五十人許ヲ従カヘ、外櫻田今參謀本部ノ在所ノ自邸ヲ出テ、輿ニ駕シテ櫻田門ニ近ツカントスルヤ、浪士ノ一党俄カニ路ノ左右前後ヨリ起リテ、井伊氏ノ従士ヲ乱撃シ、遂ニ大老ヲ斫レリ、其浪士ノ姓名左ノ如シ、

佐野竹之助(念) 黒澤忠三郎 蓮田市五郎 齋藤監物

稲田重藏 廣岡子之次郎 山口辰之助(念) 鯉淵要人

大關和七郎 杉山彌一郎 森 五六郎 森山繁之助(念)

廣木松之助(念) 増子金八郎 岡部三十郎 關 鐵之助(念)

海後崎之助以上水戸○崎之助又ハ鐵藏之助トアリ何レカ是ナルヲ審ニセス(鐵藏之助ヲ正トス)

有村次左衛門薩州

是ヨリ先キ浪士等相議シテ曰ク、計画既ニ定マルト雖モ、奸ヲ除ヒテ其事由ヲ 朝廷ニ奏セスンバ、未ダ事務局ヲ了セサル者アリ、夫レ金子孫次郎(敏孝)水戸ハ我党ノ年長者タルヲ以テ、佐藤鐵三郎水戸ヲ伴フテ、宜ク上京 奏聞ノ勞ヲ執ルヘシ、而シテ之カ 奏聞ヲ為サンニハ、必ス近衛公ノ斡旋ヲ煩ハサスンハ不可ナリ、然ルニ公ハ元ヨリ島津家ノ縁故浅カラサルヲ以テ、幸ニ有村兄弟雄助、次左衛門ノ内一人、金子ト共ニ是勞ニ当ルニ於テハ、百事頗ル便宜ナ

リト、有村兄弟曰ク、余輩固ヨリ兄弟分離スルヲ好マサルノミナラス、斬奸ノ現場ニ会セサルカ如キハ、最モ余輩ノ素望ニ違フ所ナリ、衆皆曰ク、計画既ニ決シテ今日ニ至レリ、斬奸甚タ難カラス、只奏聞ノ一事ニ至リテハ、恐クハ無難ヲ期シ難ク、責任却テ輕カラサルナリ、是ヲ以テ衆皆之ヲ足下兄弟ノ内ニ倚囑ス、冀クハ復タ拒ム勿レト、乃チ雄助ヲ指選ス、蓋シ兄ノ故ヲ以テナリ、雄助モ亦其拒ムヘカラサルヲ了シ、終ニ之ヲ許諾セリ、然シテ三月三日事ヲ挙ルニ及ンテヤ、雄助ハ金子・佐藤ノ二人ト品川駅ニ相会シ、黎明ヨリ密カニ斥候ヲ派シテ、事ノ成否ヲ伺ハシメ、其全ク成レルヲ認メ、即時ニ西上ノ途ニ就ケリ、是時途上常ニ佐藤ヲシテ槍ヲ担ハシム、蓋シ當時ノ俗タル、槍ヲ持スルノ士ハ、箱根・新井等ノ関門ニ抵ル毎ニ、容易ニ通過スルヲ得ルニ由ルナル、三士ハ昼夜兼行シテ石部(四日市ノ誤ナリ)駅江州ニ達セシカ、金子太ハダ疲労ノ状アリテ、進行頗ル困シメリ、乃チ雄助ニ謂テ曰ク、京師ニ入りテ志ヲ遂クルハ、正ニ明日ニ在リ、庶幾クハ是駅ニ一宿シテ、疲労ヲ養フモ亦可ナラン歎ト、雄助モ亦金子ノ情ヲ憐レミテ之ヲ許セリ、而シテ三士共ニ熟睡ニ落ルヤ、何ソ料ラン、忽チ薩邸ノ追捕ニ罹ラントハ、

是時三士各切齒シ、且ツ呼テ曰ク、我レ京師ニ抵リテ事ヲ遂クルハ、僅カニ明日ニ在リ、明日果シテ事ヲ遂ケナハ、死シテ悔ナキヲ決セシナリ、今僅カニ一タニシテ、事皆徒設ニ属シヌ、豈遺憾ニ勝フヘケンヤト、而シテ雄助ハ直チニ藩地鹿兒ニ護送セラレ、着藩ノ即夜庁命ニ依リテ自屠シ、金子及ヒ佐藤ハ幕吏ノ手ニ交付セラレキ、是ヨリ先キ、雄助品川ヲ発スルノ時、一价ニ賃シテ書ヲ薩邸ニ投ス、其意ニ曰ク、這回意志ヲ陳セスシテ邸ヲ辞去スル所以ノ者、一ニ止ムヲ得サルノ事情ニ遭遇セシニ由ルナリ、然レトモ敢テ主君ニ背クノ意ニ非ス、唯是レ邦家ノ為メニ為サント欲スル者アレハナリ、他日必ス僕カ微意ノ在ル所ヲ知ルヘキ者アラン、庶幾クハ寛暇セヨ云々ト、願フニ薩邸ヨリ追捕ヲ發セシモノ、蓋シ是書ニ依リテ、始メテ雄助モ亦一挙ニ同盟シアルヲ察知セシニ由ルトゾ、又是ヨリ先、高橋多一郎(愛語)及其男(庄左衛門)徳水戸ハ、初ヨリ是挙ニ同盟シアリシカ、期日ニ先タチテ大坂ニ抵ル、蓋シ當時島津公勤王ノ兵ヲ發シテ、業既ニ坂地ニ在リト聞キ、將ニ公ニ頼リテ事ヲ京師ニ挙ケント欲スルナリ、然ルニ薩兵坂地ニ在ラスシテ、又如何トモスヘカラサルヲ憾ムルノ際、幕府ノ追捕太甚タ父子ノ身ニ逼レ

リ、父子其逃ルヘカラサルヲ知り、共ニ天王寺ニ入り耦刺シテ死セリトソ(大久保利通日記ヲ読ンテ事実ヲ弁スヘシ)茲ニ薩州谷山鹿兒島ヲ距ルコト西南三里ニ在ル小市街ニ是枝龍右衛門ナル者アリ、商估ノ身ヲ以テ密ニ時事ヲ慨シ、四方ノ志士ニ交ハル、井伊大老幕政ヲ擅マニシ、弥專横ヲ極ムルコト聞クヤ、一日憤然蹶起シテ、单身独歩短銃ヲ提サケテ江戸ニ向発ス、蓋シ龍右衛門ノ志タルヤ、井伊大老ヲ路上ニ要シテ之ヲ狙撃セント欲スルナリ、其京師ニ抵ルノ時、会々大老既ニ浪士ノ為メニ殺サレタリト聞キ、私カニ歎シテ曰ク、意ハサリキ、今日既ニ我ニ先ンシテ事ヲ挙ルノ勇者アラントハ、乃チ直ニ返リシカ、(藩ニ脱カ)又人ニ語リテ曰ク、余カ企図セシ所ノ者、他人既ニ先ンジタリ、復他ノ勇捷ナルニ驚クノミ、蓋シ邦家ノ為ニハ固ヨリ之ヲ賀スヘシト雖モ、余ニ於テハ頗ル失望ニ耐ヘスシテ、且ツ自カラ時機ニ後レタルヲ憾ムナリト(是枝日記參看)、

ヲ理メシム、是時俊齋龍右衛門ニ謂テ曰ク、汝近衛公ニ謁セント欲セハ、先ツ村岡老女ニ面晤シ、老女ノ周旋ニ倚リテ拜謁ヲ願ハ、事恐クハ遂ケナント、乃チ老女ニ斥シテ一書ヲ添附セリ、既ニシテ龍右衛門京師ニ抵リ、数十日ヲ闕シテ帰来ス、諸士之ヲ迎ヘテ皆森山ノ居ニ会同セシカ、龍右衛門意氣得々トシテ、京師ノ事情ヲ報道スラク、僕初メ俊齋足下ノ指教ニ遵カヒ、先ツ村岡老女ヲ嵯峨ノ庵室ニ訪ヒシニ、老女則チ彼ノ添書ヲ收受セリト雖モ、老女ハ戊午安政五年ヨリ以来、全ク世事ヲ抛却セシノミナラス、今ヤ婦人ノ身ヲ以テ国事ニ関スヘキノ日ニ非ストシテ、終ニ面接ヲ許サス、是ニ於テ僕一旦ノ失望復言フヘカラス、然レトモ百万攀縁、カヲ致セシ甲斐アリテ、遂ニ僥倖ニモ、近衛公ニ拜謁スルノ栄ヲ辱ナフスルニ至レリト、而シテ龍右衛門更ニ咳一咳シテ曰ク、僕ハ是ヨリ謁見ノ実況ヲ語ルヘシ、冀クハ諸君盍嗽シテ、且ツ座ヲ正シフセヨト、一座奇異ノ想ヲ為セシモ、皆其言フ所ニ從ヘリ、是ニ於テ龍右衛門自ら衣服ヲ更メテ、烏帽(烏垂衣)子・垂衣ヲ装ヒ、又自カラ上席ニ進ミ、語ヲ繼テ曰ク、却説僕一日近衛公ニ謁見スヘキヲ許サレシカ、公先ツ侍者ニ命シテ、這般ノ衣冠ヲ僕ニ授与シ、且ツ謂ハシメテ

万延元年 (1860)

曰ク、汝商估ノ服装甚タ卑賤ナリ、謁見ヲ許スヘカラス、故ニ茲ニ衣冠ヲ賜フヘシ、但極メテ内密ノ事ナリ、宜ク謹シテ之ヲ服用シ、乃公ノ座前ニ出テヨト、是レ即チ僕カ這般ノ衣冠ヲ賜ハリシ所以ナリ、僕実ニ感佩措ク能ハス、乃チ之ヲ装フテ進謁ス、是時公先ツ問フニ薩藩ノ現況如何ヲ以テス、僕乃チ上言スラク、今ヤ薩藩ノ志士相謀リテ藩主ニ説キ、將ニ入京シテ王室ヲ護衛セントス云々、公之ヲ聞キ頗ル喜色アリ、且ツ曰ク、今ヤ朝廷倍々疲弊殆ント為ス所ヲ知ラス、然レトモ一旦幸ニ勤王ノ兵力ヲ得ルニ及ンテハ、乃公モ亦大ニ為ス所アルヘキナリ、請フ速カニ出兵ヲ囑レト、僕モ亦種々上言スル所アリテ近衛邸ヲ辞セシカ、爾后幾モナクシテ、又中山公ニ謁スルノ機ヲ得タリ、蓋シ意外ノ幸榮ナリ、夫レ中山公ノ人ト為リヤ勇壯活潑ニシテ、善ク志士ヲ遇ス、僕一日密ニ公ヲ某地ノ旗亭ニ聘シ、天下ノ時事ヲ説キ、薩藩出兵ノ談ニ及ヒシニ、公頗ル之ヲ悦ヒ、且ツ曰ク、薩兵果シテ到ルニ及ハ、乃公身ヲ挺テ非常ノ運動ヲ試ムヘシト、公ハ年齒尚ホ壯ニ氣力モ亦盛ニシテ、彼ノ近衛公ニ比スレハ一層惜ムニ足ル者アリ、而シテ当日僕ニ賜与スルニ、這般ノ手書ヲ以テセラレタリト、是時龍右衛門

一書ヲ懷中ニ執テ諸士ニ交付シ、及ヒ公ノ親筆ニ係レル國詩ヲ觀メス、大久保等倍々奇想ニ耐ヘス、直チニ其書ヲ拝展スルニ、文意専ラ王家ノ為メニ出兵ヲ囑レトイフニ在リ、諸士皆感激シ、且ツ龍右衛門カ周旋ノ勞ヲ謝ス、独リ俊齋初メヨリ深ク龍右衛門ノ言行ヲ怪シム者アリテ、沈黙良久シウセシカ、忽チ龍右衛門ヲ呼ヒ、嚴乎トシテ詰リテ曰ク、余汝カ説話ノ始終ヲ以テ之ヲ察スルニ、汝カ所謂中山公ナル者ハ、恐クハ中山忠光ヲイフナルヘシ、余嘗テ之ヲ故月照和尚ニ聞ク、彼レ資性慥慥ニシテ行為正良ナラス、因テ官位ヲ褫ハレ、親戚既ニ誼ヲ絶テリト、夫レ汝カ所謂中山公ニシテ、果シテ余カ所謂中山忠光タランニハ、決シテ敬信スルニ足ラス、且ツ夫レ汝近衛公ニ謁セリト称スト雖モ、恐クハ是レ虚妄ナラン、而シテ其衣冠ヲ下賜セラレシト云フカ如キニ至リテハ、咄々怪事ノ太甚シキ者ニシテ、汝恐クハ塵頭ノ故物ヲ採購シ来レルニ非サルナキ乎ト、龍右衛門忽チ顔色ヲ赧クシテ、荐リニ弁解ヲ務ムト雖モ、信ヲ措クニ足ルモノナク、漸ク諸士ノ疑怪スル所ト為レリ、其後久シウシテ大久保近衛公ニ使シテ帰ルニ及ヒ、龍右衛門ノ虚構、果シテ俊齋ノ疑察ニ違ハサリシヲ知レリ、願フニ龍右衛門カ如キ

ハ、敢テ奸佞邪惡ノ徒ニ非スト雖モ、淺智薄識ノ致ス所、  
叨リニ虚妄ヲ構ヘテ諸士ヲ欺カントスルニ至レリ、蓋シ  
其底意ヲ察スルニ、一ニ出兵ヲ速クノ手段ニ出タル所ニ  
シテ、拙ハ則拙ナリト雖モ、其勤王ノ熱心ヨリ出タルカ  
如キハ、彼カ普門<sup>ノカ</sup><sub>出タリ</sub>第一卷ニカ、嘗テ近衛公ヲ欺ムキシ者ト、  
殆ント其揆ヲ同フスル者アリ、復深ク尤ムルニ足ラス、  
且ツ夫レ眇々タル一商估ノ身ヲ以テ、奮然蹶起シテ、大  
老ヲ銃撃センコトヲ図リシカ如キハ、以テ其氣概アルヲ  
觀ルニ足ルナリ、亦當時ノ一壯夫ナル哉（是枝日記參看）

〔表紙〕

忠義公史料

萬延元年

〔扉に、表紙と同じ文字の外に「市来四郎編」の記載あり〕

二七〇 軍制改革申暢

一先達<sup>二七〇ノ一</sup>にて鑄造被仰付候式百目輕砲式挺、惣成就為仕、去

月廿五日鑄製方より一挺は砲台取離、浜馬巷疋ニ駄負仕差廻、一挺は砲台不取離附属之俛、四人にて別て輕く調練場まで担ひ届け、内実は三人にて担ひ宜候得共、釣合不宜、無致方四人にて為担申候、只管輕便向ニは無申分至極之良砲ニ可有御座奉存候、以來数里ニ運送候共、右之手当を以差廻候へは、聊も無遲滞相調可申奉存候、若砲手押越事ニおひても、三人にて安く運転

可相成事ニ御座候、尤平地にて候ハ、卷人片手押自在ニ出来申候、只今迄西目・東目繰出御備組ニ相賦御座候五七目筒之儀ハ、彈勢は成程強事候へ共、運送方殊之外手間取、五六人にて自在引廻方難相成、剩山坂嶮道平地柔滑之処、且砂地ニおひては力不及、無致方押夫外ニ五六人も相重め不申は、廻転も不仕、左候へハ右様之処にて、急戰變隊之場合ニは、迎も放發相整兼、別て難事ニ御座候、其証拠ニは吉野原調練等<sup>〔鹿兒島市〕</sup>之節も、先ツ在夫手当より仕、砲一挺ニ拾三四人賦付運送仕候、中く接戰之場所江打手之人数而已ニては六ヶ敷奉存候、右等之場合ニは此節式百目輕砲は少人数にて自在ニ運送可相成、勿論<sup>放九</sup>數発におひても手早ニ相成、接戰ニ急務之要砲ニ御座候、

一右式百目輕砲、去月廿六日調練御見分相濟候上、砲術練達之人数相掛、射場江の相建、百六拾間之距離より鉄実彈五發<sup>〔發玉脱之〕</sup>・式發宛打方為致、装薬は重砲式百目江賦与仕候分量を以て、四拾目より三拾五匁迄ニて、打試仕処、一挺は式發的中仕、三發つゝの近きニ彈着し、一挺は三發的近ニ彈着し、式發ハ跳躍仕、的下ニ彈着仕候、數玉之儀は、式挺ともに宜同様ニ有之、然処右

藥量ニテは放發之折、砲頭沈低して、砲後身少く跳起仕候、此訳合は全重砲之藥量ヲガツを以、輕砲ニ裝用仕候ヲガツ理合御座候、依之再ひ四拾目・三拾五匁或は三拾目・式拾匁匁・拾八匁迄相試候得共、不相替右同様ニ有之、夫より拾五匁にて打試候処、聊も砲頭沈低不仕、彈送彈力正敷彈勢も、夫程相替不申候へ共、射場手前より跳躍し、然共実要向ニは無疑宜御座候、以来ハ右之考を以放發仕候得は、差支之廉有御座間敷奉存候、西洋各国も当今野戰ニは、輕六封度重量二百リ云加慶を携用仕、重六封度砲よりも格別藥量相減、其上来侵之敵遠近ニ從ひ、裝藥袋を四品ニ區別仕、一は百八拾七匁、一は五拾七匁、一は式拾式匁、一は拾八匁六分と相究御座候、然は輕重砲之藥量増減の例も御座候得は、杜撰之訳筋ニも無之、折角精密ニ取しらへ打試仕、其成行巨細奉申上候事、

一御先代様於江戸鑄造被仰付置候〔卷〕船用ボート忽砲も此節打試方仕候処、無申分御座候、玉藥は此節榴霰彈三發相試、

共ニ能出来、此業合は敵群集之中江打込候得は、放發并逆發ニ傷害し、彈中の小丸又人数余多を害し申候、製作之訳合は空鉄彈之内江四匁玉百計を納れ、溶解硫黃

を添入仕候得は凝結いたし、其上中心ニ空隙を取り、發藥拾匁余を填入仕、火門ニ鉄螺を廻施し、其上ニ錫鉛合和之物にて、右鉄螺同様之仕掛を設け、是ニ火門を通し鉄螺之上に箝螺可仕者ニ御座候事、

一右之通式百目輕砲ボート忽砲打試方仕候処、宜御座候間、此内奉伺候向にて、式百目輕砲四挺・ボート忽砲式挺、都合六挺にて大砲隊一組ニ被仰付可然奉存候、ボート忽砲は五百目野戰筒よりも玉藥宜御座候、

一劍筒之儀も当分は筒惣長三尺三寸ニ取究御座候付、此打前按排向不便利ニ有之、台は只今通にて、筒之長三尺ニ切縮候へは、別て按排向宜、殊ニ手輕相成可然奉伺、先達て一挺三尺二切縮、於調練場ニ打試為仕申候処、三尺六寸筒、三尺三寸筒と共に、町数之彈劣聊も無之、成田彦十郎江も右之通三尺二切縮め否可有之哉申聞候処、格別是社と申難事は無之段申出候、然ハ台ハ当分通、筒は三尺ニ御切縮有之候へは、別て手輕ニ相成、打前ニも宜御座候、

一劍筒之儀は以前より磨きニ仕、兼て少々鑄入等御座候へは、磨方ニ手間取、年分ニは相應人手ニも相及可申奉存候間、此節筒三尺切縮方被仰付候ハ、無残色付

ニ被仰付、可然哉ニ勸考仕候、左候得は第一箇之保ち  
に宜、且は銃も薄く不相成、其上欠量不仕、打前ニも  
掛念無御座候、

一於鑄製方出来相成候劍銃之劍之儀、形状ハ舶来通候へ  
は、都て頂之方迄金鑰仕、惣体之金焼ハ込も鍛冶共難  
相成との事候て、無致方右通御出来相成候、実場之所  
ニは此ニ被向兼候付、此以来ハ劍は不相用様如何奉存  
候、譬へ銃頂江すけ込置候とも要用薄御座候、西洋軍  
船図ニも、劍は取去り候向も相見得申候へは、於此方  
は殊更無相用方宜御座候半、其場合ニは携刀相用ひ可  
然事ニ奉存候、

一胴乱之儀もかれ緒を肩ニ不負、急火管入同様之仕掛ニ  
相拵へ、皮緒を以腰間ニ巻付、真鍮金物を以動揺不仕  
様締付候へハ可然、左候へは何も掛念無御座候、尤胴  
乱は、式拾四発入ニ相拵可然哉ニ奉存候事、

二七〇二  
御軍役御手当之儀付、当春分て

御沙汰之趣被為 在候付、

御旗本備現事御繰出相成候様、屹と取調可申旨掛り被  
仰付、折角調方仕居候処、又々承知仕候趣、是迄之

御備立大粧之儀にて、現事其通ニは御城下諸郷共出張  
可難調、尤御三役以上も右御賦通御出張相成候ては、  
御跡御差支之廉も有之、且亦 御留主堅メ之儀、猶以  
御手厚無之候て不叶儀、旁付先格ニ不拘今一往人数減  
少等ヲ以別段致吟味、大頭龜絵図仕立、内々差上候様  
被仰渡恐入次第、礼式共別段之取調進は何分調兼候得  
は、承知仕候通現出立相調候人数は、彼是之差支にて、  
殊之外減少仕事御座候間、次郎四郎初存付之廉々、一  
隊之組合等品々、別紙<sup>御</sup>図面並左之通凡之成行奉候候間、  
何れ共御差図之上右隊製ニ<sup>御</sup>應し、万端之諸賦仕度奉存  
候事、

一御城下小番・新番・御小姓与式拾歳以上四拾四五歳迄、  
他国旅・鳴渡海・蔵役人其外地方檢者等之類勤場難迦人  
数并極々之<sup>宛</sup>窮士迄を相除、大体式千八百人余も御座候、  
右之内より御役人并横目・蔵方目付・諸座書役・小役  
人等勤場不差支様引残し、且又御当地台場御手当人数  
差分、其余病人又は一通窮士之内も難差加者段々可有  
御座哉、左候得は頓て右之半方位罷成可申哉、未取し  
らべ中故駈と難申上候、右差引残現人数之内を以、  
御旗本備六組大砲備、



御馬廻陸小姓百人并

御手廻人数賦方仕候事故、残り人数存分は有御座間敷哉と奉存候事、

但

奉行・横目・蔵方目付・諸座書役・小役人等勤場不差支様致見賦候人数、老人込千人以上ニも相及可申哉ニ御座候、

一右之通ニ御座候処、是迄之御備組一組、戦兵九拾六人一手四拾八人、都合二手、其外諸役者込百貳拾人程ニ相及、御出馬備ニは右を六組、大砲備一組此節二陸小姓百人、は二組ニ相及、

其外御馬廻人数彼是千人近罷成、右を差引 御跡相応御備之御手当被成置候筋御座候得は、何れ是迄之御賦より人数減少之方被仰付外有御座間敷、就ては御備組之儀、一組は矢張是迄之一組ニ被立置、右之内半方一手ツ、都合六手并大砲備二組被召連候筋敷、又は一組之戦兵被相減、凶面通七拾貳人ニ被相定、物主式人之場を壱人ニ被仰付、外ニ相談役又は兼等之名目を以、六人賦以上御直触御役人迄之内、人柄を以壱人被召付、何篇被申談、時宜ニ寄分隊ニも相成候節は、右之人より相分致差引候様被仰付候ては、何様可有御座哉、又

は別紙凶面之通、五籍之法ニ全体之組合より可被相替哉、何れ共御吟味次第被仰付度奉存候事、

但

別紙凶面五籍之法を以組立候得は、夫々等級相立、役名等相替不申候ては、現事相当不仕故、其処を以凶面仕立御座候間、右通於被仰付は諸郷・私領迄も相拘り、散兵・遊兵等認有之候方は、何方も汲受兼、勿論教練も不仕事御座候間、此涯御軍賦役并砲術取馴候者共、一同廻勤被仰付度奉存候、乍併右等之儀、此節柄他邦御響合、且は一隊人数組之儀は、八辺御届ニも為被及置事御座候付、何敷事立騒々敷相聞得候筋等之儀、如何可有御座哉、此等之処は御吟味次第奉存候、

一諸郷之儀是迄每郷幾組幾手と御賦付相成居候得共、是亦

御城下同前御賦通ニは、中々出張相調候丈無御座候間、前条隊製御治定之上は、都て現立之処は減少可仕候、就ては前条是迄之振合ニて、戦兵迄御減少之方御座候得は、表通仰渡替ニ不及、当分通ニて現立何程之賦立置可然哉、全体之組立より被相替候方ニ被仰付事候得

は、何れ諸郷、私領共都て画面賦書引替渡被仰付、  
前文廻勤等之手数被仰付度奉存候事、

一旗之儀是迄之処は一隊ニ苞本ツ、右預屯人被召付筋  
之御賦御座候得共、別紙画面ニは相除申候間、其通可  
被仰付哉、又は是迄通可被召置哉、尤諸郷備之儀惣頭  
馬廻江老本之賦御座候間、郷之目印無之分兼候ニ付、  
行軍又は備立付之節は是迄通ニて、決戦之場ニは不相  
用様ニも可被仰付哉、

一貝・太鼓役之儀是迄之処、与力より相勤候筋御座候得  
共、以来諸士ニ可被仰付哉、成行は次郎四郎より可被  
申上事、

一御旗本備御城下諸郷惣組合セ之儀、以前之御賦は七隊  
七軍ニ取分ケ、御旗本

御馬廻迄人数相替り、其余は都て同賦御座候、先般助  
左衛門取調ニて、当時被定置候処、隊数は矢張以前通  
ニて、大中小組合相替、都合九軍隊数多小を以賦立  
置、画面は凡戦列之形ニ仕立、先達て入御覧候通御座  
候、此節別紙繪図之儀は以前七軍之方、何れも同賦  
易簡之方ニ御座候間、一先右ニ基キ認申候、乍併右は  
何れ之方ニても御差図次第可仕、尤

御出馬ニ付ては遠近之差別、其節之依時宜多少可被仰  
出事ニ御座候得共、前条七軍と歟九軍と歟、又は五軍  
三軍ニも大頭之定規は被居置、其内より時々之模様次  
第増減を以、

御出馬被為、在度御事ニ奉存候、左候て  
御出張先御備立配、多少分数之義は、其場其時之時宜  
ニ依り可申奉存候事、

一別紙繪画面

御手廻人数之儀は戰場江罷出候向迄を凡相認、此余之  
役々為御持道具等、小荷駄方又は御陣屋等迄之類は都  
て相除申候て、御賦帳江相記候様可仕候、

一御一門方初一所持諸大身分備惣頭等被相勤候向、高百  
石ニ付式人軍役之割を以、出馬人数賦被渡置候処、現  
事出張ニ付ては、御賦付通之人数被召連候儀、難調向  
モ可有御座哉、就中小身之寄合并諸地頭御役柄等ニ付、  
無抛高前ニ不拘、其向相当之人数召連候様御賦付も有  
之、殊更平士より当時御役柄被仰付置候向は、内実夫  
程之<sup>入カ</sup>手人無之向も決て可有御座、就ては此涯右高前御  
役柄等ニ不拘、現事相調候丈之人数其外諸要具共、銘  
々ニおひて致賦方、夫々差出を以被申出候様ニも可被

仰渡哉之事、

但

古来之御賦は高百石三人軍役以上被仰付候筋相見  
得申候、

一御一門方之儀當時は

御名代被仰付候迄にて、諸手惣頭等被仰付候御定無御  
座候、古来之御賦ニは御先手等之大将等被仰付候筋相  
見得申候ニ付、其通可被仰付哉、又は

御名代迄之処ニ可被仰付哉、此節取調ニ付ては、一軍  
之惣頭賦ニ相拘り申候間奉伺候、

右之通存付之廉々一先大頭之処奉伺候、尤一統江も  
未得と吟味不相涉、就ては

御国中一統江相拘り、不容易儀御座候間、猶又深評  
議被仰付、御吟味之上御治定相成度奉存候、此外方  
端賦方ニ差当り増減斟酌可仕儀、多々可有御座候得  
共、前条人数組治定不仕候ては、何篇運ひ兼候間、  
一先此段奉伺候事、

申五月

〔朱〕  
〔御軍賦役〕  
〔軍賦調書（東京大学所蔵）にて補註〕

二七一 兵士調査数

二七二  
御出馬御備

御城下七組・諸郷三拾四組・私領七組惣人数

一上下壹万四千五百式人

内

士以上七千五百式拾壹人

内

御城下士千式百六拾七人

諸郷士五千百八拾四人

私領士千拾六人

測量役絵師等式拾人

御小人頭壹人

与力三拾四人

足輕式百式拾式人

御小人五人

従卒式千七百拾人

私領足輕式拾八人

大工・鍛冶・石切式拾式人

御口之者以下御膳所働仕坊主・水夫五拾九人

夫四千五拾九人

乘馬五百壹疋

内

御城下乗馬貳百九拾三疋

内

五拾貳疋 騎兵方〔卷〕〔洋式騎兵、斉彬公史参看〕

大砲四拾貳挺

内

貳拾卷挺 五百目

右同 七百目

西目・東目・長崎御手当

御城下備二組・諸郷二組ツ、之惣人数

一上下千九百三拾貳人

内

士以上千三百五拾貳人

内

御城下士五百八拾貳人

諸郷士七百七拾貳人

与力拾五人

足輕七拾貳人

鍛冶 六人

従卒五百六拾九人

夫三百九拾三人

乗馬三拾九疋

内

御城下乗馬拾五疋

大砲拾八挺

内

九挺 五百目

右同 七百目

二口合

上下老万六千四百三拾四人

内

士以上八千八百七拾三人

内

御城下士千八百四拾九人

諸郷士五千九百五拾六人

与力四拾九人

足輕貳百九拾四人

従卒貳千貳百九拾貳人

夫四千四百五拾貳人

二口合

乘馬五百四拾疋

内

御城下乘馬三百三疋

二口合

大砲六拾挺

内

五百目 三拾挺

七百日 三拾挺

右之外訓練場・大門口・新波戸・辨天波戸・祇園洲五

ヶ所之御台場は勿論、其外御城下諸所々之固有之賦御

座候、

二七二ノ一

張紙

一物主六人大目附以上

一大砲物主卷人大番頭

一小物主并騎兵小頭拾六人

(組頭脱力)

一御使番拾式人

壹万四千五百式人

一日六合賦ニシテ三拾日分

中白米式千六百拾石三斗八升

納米ニシテ三千五石三斗五升四合

惣旗數

百式拾七本

内

三拾八本 御旗本

六拾八本 諸郷

式拾壹本 私領

一物主九人 大目附以上

一大砲物主 大番頭四人

一小物主并小頭式拾式人組頭

一御使番 拾九人

壹万六千四百三拾四人

一日六合賦ニシテ三拾日分

中白米式千九百五拾九石壹斗四升

納米ニシテ三千四百式石九斗九升壹合余

(軍賦調書にて補苴)

二七二 藩庫收入穀數

二七二ノ一

御藏之納本(米)「(貢租米)」

米拾万三千八百七拾八石

内

一米七千石

右江戸御統米、

一米九千八百三拾九石

右大坂御仕登、

一米貳千石

右御軍役方御囲ニテ新米詰替之上嶋統等扱、

一米六百五拾石

外二

貳百五拾石古米

右

近衛様御合力米并京・大坂諸人御扶持米、

一米拾壹万貳千七百六拾壹石

右嶋統其外御当地御扶持米等諸扱、

合米拾三万貳千貳百五拾石

差引

米八千三百七拾貳石不足

右ハ去秋御領國中諸御蔵々免本并諸出米諸引付入迄

惣納高ヲ以、凡御扱差引右之通御座候事、

二七二ノ一  
張紙

本文拾貳万三千八百七拾八石之内

真米壹万六千六百六拾九石八斗六升六合

内

真米四千八百八拾八石壹斗六升

内

貳千石此節江戸江被差統候、

右当所出物蔵内常平倉御囲、

真米壹万貳千四百八拾壹石七斗六合

右諸郷御蔵之常平倉御囲、

当年他国米御買入

五千石之賦

内

千石 日州福嶋ニテ御買入、

貳百六拾石余 佐土原廻米御買入、

内書之外未相濟候由、

当年壹万石以上之不足之賦、

二七三 和漢兵卒之年齡旗貝太鼓役等之事

二七三ノ一

一本朝大寶令二十以上為丁、六十以上為老云々、又年滿

六十免軍役、又天平寶字年簡之詔ニ、二十二以上為成

丁、

一漢土三代農兵ノ時分ハ、夫役・軍役共二十歳より六十歳迄、漢之時分ハ二十三歳より五十六歳迄を成丁、司馬晋ハ十六歳より六十歳迄、拓拔魏ハ十八以上（六脱カ）十五以下成丁、北齊ハ二十ニて兵となり六十ニて免ス、唐之初ハ二十一以上六十以下、玄宗太平之末ハ二十五以上五十五迄、（宋脱カ）明之賦役も格別之相違無之、

一西洋ハ二十歳より三十九歳迄、國中十一分之二より十二分之二之半ハを軍兵ニ定、又百分ノ一を取ルニ不過、雖然十六歳より軍事之館ニ入れて、訓練する法なり、又夫卒ハ四十歳を為極、

一西洋レジメントウ隊（Resiment 連隊）ニ千人ノに旗一本也、即國王之徵号（本「公團式」）あり、隊列之中ニ四百人之隊長是を捧て、外ニ五人之守旗兵を撰ひ旗隊を作シ、即旗を請取ニ趣かしむるに、老練之長官（百人）、戦兵二百人に太鼓等之案者を伴ひ、旗を請取、旗手ニ授ケ、隊列之中真ニ置、太鼓ラツパを鳴シ、整列之所ニ至れハ、馬上之者ハ都て下馬、歩兵は手銃ヲ卸シ、屹ト礼敬する法也、又々戦終て旗を収むるも前法ニ同し、万一戦ニ旗を敵に奪取られたる事あれハ、旗手ハ勿論守旗兵共格別官を落とし、其部伍ニ入

事を禁す、又格別之勲功もありて其官ニ復する事あり、

一レジメントウ隊之鼓長ハ旗手同官なり、太鼓等之役者ハ銃兵同格之者ニて、功ニより一等・二等之階級有り、

一義家之旗指秩父十郎武綱、

一頼朝之旗指畠山次郎重忠、

一家康之目之役大久保彦左衛門、

一忠久公御旗之役本田御旗指左衛門尉、

一氏久公御旗之役北原彦七郎、

一氏久公今川了俊ニ旗之故実を被遊御尋候、御答ニ御旗之事は其陣に一流之外ニ無用事候云々、

一義久公御旗之役梶原新兵衛、御旗指瀬戸口藤兵衛、又御旗之役三原右京亮、御旗指色紙金右衛門、

右は太底之取調ニ御座候得共、旗を尊ひ數本不相用事は勿論、太鼓役等ニ至迄、西洋さへ能々其輕重取分申候、尤多之旗を用候事ハ天正此かたの戦、専甲越流之事ニ候、旗指は勿論目・太鼓役も余程格別之ものと相見得候、併天正以前之戦ニ太鼓用たるもの候哉、太鼓役之儀未相分候得共、家康之目之役より致推考候へハ、定て士分以上ニは相違有御座間敷候、（本「二云云」）

（軍風圖書にて補註）

二七三ノ一  
一御出馬御備組七備一軍之事、

内

一御旗本一備御城下

一外六備諸郷・私領

但

遠中近之依

御出馬二備・三備・五備又は七備ニても、備數之多少、其節之可為時宜次第、

一諸備小銃隊五組・大砲隊一組ツ、組合せ一備之事、

但

五人ニ伍人頭を付て一隊、拾人ニ什人頭を付て半手、式拾人ニ小頭を付て卷手、四拾人之二手を合て物主を置き、散兵半手・遊兵卷手を加へて一組、又大砲三挺ニ小頭を付て卷手、六挺之二手を合て物主を置き、散兵半手・銃兵卷手を加へて大砲一組、右之如く組上ケ、小銃隊五組・大砲隊一組都合六組ニ惣大將を置て一備、諸郷より大砲隊一組・小銃隊四組、私領より小銃隊一組宛組合せ一備之賦、  
一軍は備ことに御先備・御左備・御右備・御旗本備・御後備・遊兵備・小荷駄備と都合七備ニ定置、一備之

中ニモ組之先左右旗本遊後小荷駄組相究、自然一軍之体相備へ候事、

但

一備こと之兵糧奉行・玉粟奉行、御普請奉行十人賦、以下御役人より、一軍之兵糧奉行・御趣法方御用人又は御勘定奉行より、玉粟奉行・御鉄砲奉行より、御普請奉行・御作事奉行より、惣小荷駄奉行・御勝手方御家老より、即小荷駄備惣隊將之賦、

一小頭・什人頭・伍人頭等之諸頭役は式拾五歳以上之事、

但

一小頭御役人等士正敷軍事ニ心得有之者、  
一什人頭誠真深く世上之人望も有之者、  
一伍人頭随分一郷之人望も有之者、  
一員・太鼓頭諸隊之進退不相乱、軍事ニ心得有之者、  
一貝鼓士壯健雄略之者、  
一談合役、物主之相談役ニて、士操正敷別て軍事ニ心得有之者、  
一御旗指英士強勇之者、  
一御旗預御役人等軍事ニ心得有之、雄略強勇之者、  
一兵糧奉行他所向は勿論、万端取馴軍事ニ心得有之



者、

一 兵糧方頭取他所向は勿論、万端取馴随分軍事ニ心得も有之、就中筆算調達之者、

一 玉粟奉行・御役人等砲術取馴、軍事ニ心得有之者、

一 玉粟方頭取砲術取馴、随分軍事ニ心得有之、筆算調達之者、

一 御普請奉行・御役人等万事取馴、随分軍事ニ心得有之者、

一 御普請方頭取万事取馴候者、

一 諸戦兵壯健之者四拾五歳以下式拾歳以上之賦、尤御国中之守兵は別段之事ニ候、

張紙 平日之調練は五拾歳以下拾五歳以上、

但

一 遊兵、依願得道具之者、万一鉄砲而已ニて、弓・

鎗・長刀等之者無之節は、銃兵同与之事、尤遊兵之名目ニは候得共、殺手隊ニ候、併全殺手ニ究置候ては是非得道具ニ限り候様御座候、且又惣鉄砲之御賦ニて得道具之人も、是非鉄砲用意之筋ニ被仰渡置、其上三人間ニ夫吉人之御定ニては、鉄砲外ニ弓・鎗・長刀等別段持越候人も無覚束、其上銃

砲盛之時勢ニ候得は、猶更之事故全殺手隊相除可

然候得共、自然武術及廢業ニ人氣ニも拘候様成立候ては、別て如何之至候間、矢張殺手ニて銃兵兼

帶之趣意ニ御座候、

一 散兵小銃取馴規打之達者、尤散兵之名目は隊を離、全く敵之頭立候者を規打之趣意ニ御座候、

一 陸小姓三拾八歳以下式拾五歳以上之事、

但

士操正敷小銃取馴、武術之達者至極壯健之者、

一 物主は自分纏を以て一組之為印事、

一 惣隊將は御旗を以て一備之為印事、

但

御旗之儀は一備之目印ニて格別之もの候、尤

御直ニ惣隊將被 仰付、御旗

御手つから被遊御渡候様有之、別て重き方被仰付度、尤惣隊將は家名方并大目附以上之賦、

一 目鼓士ハ大将之令を通し格別之役職ニ候間、与力・足輕等ニては名実致相違候間、士以上之事、

一 旗は軍中第一之もの候間、旗指与力・足輕ニては、是又名実甚相違いたし候故、格別之士人撰第一之事情、

一伍法之次第平日相定置候儀、本意ニ候得共、迎も相調儀ニ無御座候、併已前之戦ニ替り銃砲盛ニ相成、手強く大砲等打立候ハ、中々煙中之混雑差見得候、殊更治世久敷打続、実地ニ望候ハ、如何様之制法も有之間敷候間、先伍人頭・什人頭・小頭迄究置、其外戦兵は夫々物主江取調被仰付、伍人頭銘々臨時之闖取ニて伍人之隊相究、伍人ニ伍人頭、什人ニ什人頭、式拾人ニ小頭、一組ニ物主と申様、能々占綱相調不申候ては、迎も其場之混雑如何制可申哉、万事充分相調居候ても、現事之混雑差見得候、何れ隊制相調、法令規律嚴重ニ相備り可申外有御座間敷候、右は先度御沙汰之趣承知仕候間、專現事ニ基き、先是迄之御規格も差置取調申候、尤

但

御備絵図并人数調帳相添差上申候、

申五月

二七三ノ三

張紙

御出馬御備組西目東目

御出馬は御領国中二ツ分ケ、二軍ニ定置、御城下は六ヶ月、諸郷・私領は一ヶ年交代ニ御手当被仰付置、東西二軍之外は都て御領国中之守兵ニ相究、西目・東目海岸御手当、諸郷、私領共東西二軍之内より式組ツ、壹番・式番駆付相究可被置哉、又長崎其外他国江援兵等被差出儀も候ハ、跡々不足は残り之守兵を以補候様、左候て

御城下は至極之少人数ニて

御旗本御備さへ充分無之、御備組外ニ西目・東目・長崎御手当等被仰付候ては

御旗本人数別て御手薄相成候間、御城下人数は屹と

御旗本備ニ被究置度御座候、

但

海岸江異国船到来之儀も候ハ、先其郷之地頭・

物主早速被差出候、其上御手当人数繰出相成候儀、

当然之事ニ御座候、

(軍威調書にて補註)

二七四 申七月外国奉行之門へ張申候落シ文

但シ横浜ニテ

奉申上候、私祖父義ハ生国越前之モノニテ、江戸表へ罷出居候内、裏店住居ニテ渡世罷在候、親共代ヨリ相

応ニ取続、江戸市中表店住居仕、其後私ニ至リ相続仕来リ、御当地繁昌仕候ニ付テハ、御蔭ヲ以身分相応売買仕居候処、今般神奈川横濱ニオキテ、外国人交易御差許ニ相成、就テハ私義同所へ引越、渡世仕候程之余力モ無之御座候得共、渡世之品持参仕候テ横濱表へ罷越、相応利潤ニ御座候間、毎度往来仕候内、次第外国人共ニ懇意出来、弥以渡世之品売捌都合ニ相成大慶仕候処、夷人懇意モ深相成候ニ付、格別之利潤ヲ得サセ共、別テ難有事ニ思ヒ、夷人共之意ニ随ヒ、不計モ彼宗旨等之咄シ等承リ候処、難有宗旨ト風ト存込、弥以夷人ニ随従仕候、然ニ私同様之向モ凡式拾四五人モ御座候へ共、且ハ名前住居等モ不承候得共、江戸表住居候者兩三人ト御座候、其余ハ近郷之モノト奉存候、然ル処此度江戸御城御焼失ニ付心付候ハ、是迄日本国之御高恩ヲ請罷在ナカラ、夷人ニ随ヒ候儀恐入候次第ト改心仕、是迄彼国之内存承リ候テハ、身之毛モ弥立勿体ナク、私身之科御免被成下候様、神々様へ御詫申上候ニ付、夷国存込候処承知仕候義申上候、

一 異国人存込ニ、イギリス国之女主人之存意ヲ継候由ニテ、夷人ハ初發アメリカ国之役人ヲ日本へ渡シ、日本国

強弱等試候処、兼々承リ候ト違ヒ、思之外弱キ国ニテ候ヨシ、

一 兼々承知通日本国ハ金銀大方掘尽シ、当時之国之者扨底ニ相成、其上日本奢侈増長致シ、政府・大名トモ困窮ニ及ヒ居候間、此時日本ヲ奪ヒ機定ト存込、種々謀ヲ以七八歩ハ仕寄候由、

一 日本役人ハ大方力之程モ相分リ、政府之内証共見積、金銀ハ政府并大名ヨリ町人之手ニ渡リ居候間、売買ニテ引上ケ、其上政府・大名其疲弊為致候之積之ヨシ、(其力)

一 町人之深山金銀ヲ所持候者有之候得共、欲深キ町人共故、異国ヨリ利潤ヲ得サセ候得ハ、手附候事ハイト安ク候、其上ニテ日本之金銀ヲ外国へ不残奪取候得ハ、

日本ハ骨ト皮ト計リニ可致事之由、

一 五七年之内ニハ日本十分衰へ候処ニテ、難題申立候へハ、大方ハ異国之申込ニ可相成、夫ヲ不承知申候得ハ、

軍艦ヲ以、日本中之海岸へ差向、戦争ニオヨヒ候ハ、三四年ニハ日本中飢渴ニ及ヒ候間、弥以軍艦数百艘差向候得ハ、日本ハミジンニ相成、政府ハ素ヨリ京都迄押潰、夷国ヨリ政府ヲ立、我分国ニ可致存込之ヨシ、

一 私共同存込ニテ、外国宗旨難有存込候者有之、此度御

本丸之焼失モ有之、余約之仕業トモ可有御座奉存候、夷人存寄モ 御城焼払次第二大名方モ焼払候得ハ、万端之入用金銀政府・大名ヨリ出シテ、金銀大方ハ町人之手渡シ候間、町人サヘ手附候ハ、日本之金銀ハ皆外国之者ト存居候事、

一 日本之品々夷人之用品ハ、金銀五コク金物類迄ニテ、其外之品ハ夷人ヨリ、又候外ヘ遣シ候計之入用ニテ、今之心ニテハ何之品ヲモ、悪敷トル銀ニテ交易致シ、日本之品払底ニ為致、日本内ニ金銀ヲ町人之手ニ為渡候積之ヨシ、

一 イマタ日本半分ハ存込之通り随ヒ不申候、戦争ニ及候テハ外国丸勝ト申訳ニモ不參、乍去今ニモ日本ヨリ戦争ニ及ヒ候上ハ、日本ヲ奪ヒ取候テモ異国ニテ雜費夥敷故、次第ニ謀ヲ以押付候様手段候ヨシ、

一 日本ハ欲深キ国故致シ易ク、支那ハ日本程ニ欲深無之候、夫ヲサヘ廿年程ニテ大方手付候間、夫ヨリ日本ハ謀安有之候ヨシ、

一 日本ハ神国・武国ナト、イヘトモ、当時ハ上下奪修奪カニ及ヒ、或ハ武ハ薄ク、戦争ハ殊之外嫌ヒ居候間、尚以謀安ク、其上火術之業未熟故致安国ナリ、

一 日本之西方海ニテ候ヘハ、我同国所候国々ヨリ、四方之海面ヘ軍艦ヲ居置候得ハ、日本之軍艦無之故、海面通路ヲ不致、諸方之軍送陸地計リ有之候処、人力次第ニ疲申候間、戦争ニ及候得ハ猶以早く奪取候事致易候、

一 第一日本人ヲ勸メ見込候様子ハ、神国トイヘトモ何程神々祈候テモ、金銀出来ト申事ハ無之、外国之宗旨ハ神々ヨリ尊ク、金銀ハ居ナカラ自由ニ手ニ入、思フ事不叶ト言事ナシ、是異国之宗旨ハ尊キ処、夫レヲ日本人ハ役ニモ立ヌモノヲ、神様々々ト難有カリ、知恵ノナキ日本人ナト、申居候次第、日本人ヲ異国ヘ引込可申候様トノ事、

右之通申候、此外様々之事為申聞候得共、何分難有左右之次第ハ漸聞取、又ハ手マネニテハ請取兼候事多ク御座候得共、右之条々得ト相考候ヘ共、誠ニ恐敷心底右ニ随候モノ 御国恩ヲ忘却仕候義ト、深勿体ナク存付改心仕心底有之俣申上候間、私罪科御免被成下候様奉願上候、以上、

萬延元年申七月

右之書付外国御奉行之御門前ニ張置候ニ付、早速御取ニ相成申候事、

二七五 (水戸浪士入邸届書)

二七五ノ一

今晩八ツ時頃、松平修理大夫芝屋敷南通り堀ノ門(通門ヨリ)へ、

奥平大膳大夫使者之由申断候二付指通候処、三拾七人

入込候故、様子相尋候処、実ハ天下之浪人ニテ無余儀

筋申立儀趣有之、罷越候旨申出候段門番届ケ出候二付、

屋敷内長屋へ指通、留守居添役之者出會、本身分并ニ

子細相尋候処、身分之儀ハ無抛誤有之、何レニモ明白

ニ難申分、且子細之儀モ重役面會之儀ハ容易ニ不致当

方仕成ニ付、何ケ様之儀成共可申聞候様、重役之者ト

モ申付取相違候処、左候得ハ書附ヲ以可申出モノ儀ニ

テ、折格書面認メ罷在、手間取候様子ニ付、追テ委細

御届可申上候得共、其内落重誓固之者附置候、先此段

早々御届申上候、

松平修理大夫内

申八月廿七日

汾陽治郎左衛門  
〔書号一八五ノ三に同じ記載あり〕

松平修理大夫家来へ可達

松平修理大夫屋敷へ相越候浪人三拾七人ハ、追テ及沙  
汰二候、修理大夫家来へ当分預ケ置候間、卒尔之儀無

之様可取計候、

松平修理大夫へ入込候浪人之名前

〔采名小河吉郎〕 大川東之助  
〔采名山田能善〕 松村七三郎  
〔同大幸清衛門〕 竹林虎之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名沢義助〕 川村直右衛門  
〔同鈴木持重〕 鈴木富太郎  
〔同鈴木富太郎〕 鈴木富太郎  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

〔采名小河西三郎〕 大川東之助  
〔同菊池右仲〕 七持八之助  
〔采名生南省太〕 菊田新太郎  
〔同服部傳三郎〕 鈴木與助  
〔同岩谷敏一郎〕 岩谷壯之助  
〔同大森清藏〕 大森清藏  
〔同中野知彦〕 中村政之助  
〔同島屋幾之介〕 松藤助吉  
〔同吉成一徳〕 鈴木鐵之助  
〔同小沼四十郎〕 曾山半六  
〔同石島四十郎〕 石島四十郎  
〔同横山辰之介〕 大和新太郎  
〔同市老久五郎〕 市老久五郎

右之者共同之上不殘芝田町屋敷へ指送ニ相成候、駕籠  
曳挺ニ足輕十人ツ、相固参り候、

申八月廿九日

同浪人 松延積之助  
〔采名繪谷新五郎〕

二七五ノ三

万延元年 (1860)

下野清助

右兩人之儀ハ途中ニテ何方ヘカ相後レ候間、追テ罷出  
候筈候間、参リ候ハ、同様ニ御取計願度段、人相書ヲ  
以申上候由、

下座見

御足輕

申八月廿九日

勇次

二七六 〔諷刺書〕

大	諸国の城下	いそ	別当	からた	宿場の馬
繁	はたごや	か	武芸	つゞか	上下ノ供
昌	道中居酒	しい	人入	かん	めしもり
当時	芸者	そう	鉄砲鍛冶	流	馬乗袴
おわ	よせ	は	竹具足		たちつけ
いだ	稽古所	なし	面こて	行	姉さん島田
つか	くもすけ	大	屋敷商内	いく	乗もの
み	車力	ち	花見場所	きても	わらんじ
どり	かこかき	が	五月職市	たり	つゞら
		ひ		ない	

あき	下屋敷長や	当分	国行奥方	おこ	質屋
が	場すへの明店	ごふ	近在へ仮宅	と	急のあつかひ
ない	近在の座敷	じう	田舎の入湯わり		藪医者
思ひ	積出の船	去年	東海道	おわ	三座芝居
がけ	場すへのそば	から	難波路	かれ	夜旅客
ない	旅商人	け	木曾路	に	おごり
きが	金かし	いそ	武器	用がい	米
も	家作	いで	馬具	に	まき
める	芸人	きた	立のき	買込	梅干
迷惑	駕の乗合	当分	仕入もの	買って	売店
な	海岸の人	見	普請		道具
もの	残った主人	合	婚礼	ない	夜鷹
やり	ひんほう人の	さし	産月女	難義	夜商人
所に	からくた道具	当て	病人	な	その日くらし
こま	猫犬鳥	こま	物もらひ	もの	ゑやうもの

十二月十二日

不 弓失 此度 船ゆさん こんど 御 寺

肩衣 御 むぎゆ ハはづ こしや

用 奉公人 休み 御祭り れた おんぼう

やくニ江戸の親類 無人 髪 結 うれ 行列の絵図

たゝ子供の道中 ニなっ 湯屋 て み の

ぬ かひ造作 こまる こいところ こまる とも糸だて

うそ 横濱騒動 今と 早く立退た人

ないで 角力取出陣 なって 横濱の新居

ほん 赤門先陣 こうくわい 普請の仕掛ケ

二七七 〔吉中宅〕転移書状

大久保正助様 〔利通〕 要用上置 本田彌右衛門 〔親雄〕

今朝御詰席へ一封差上置申候、御覧被下候半、扱昨夕

御話合之通吉中宅へ弥転移之筋相談一決致シ、明日ヨ

リ諸道具等相運候様相極候旨承申候間、形行乍略紙以

書中得貴意候、

今日ハ喜八子御殿へ被参候由ニテ、右之趣小生ヨリモ

貴兄へ申上置呉候様、喜老州ヨリ承、一書如此御座候、

尚拜眉縷々可申上候、頓首敬白、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編  
萬延元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料  
(紙数六十七枚)」の記載あり〕

目録

- 水戸脱藩士入邸始末〔第一報〕
- 水戸浪士入邸御届書
- 従幕府薩州邸へ達書
- 無名氏建言
- 水戸浪士差出候書付〔第一〕
- 水戸藩士入邸〔第二報〕
- 水戸家編輯委員服部敏氏寄送書

- 薩藩之内議及三十八名ノ請願書
- 参考 邸外ニ散シタル書
- 〔八月廿八日〕松平修理大夫家来へ可達書付
- 入邸人姓名書
- 当時外方風説
- 〔九月三日〕水戸殿家老衆へ達書
- 〔駕籠屋平吉申立書〕
- 参考 安政紀事鈔〔八月廿七日〕
- 〔在邸国老其外人名〕
- 鈴木大日記鈔
- 京都ニ於テ所司代手付書信
- 参考 安田助左衛門日記鈔
- 〔久光公〕山田壮右衛門へ与フル書
- 水戸浪士帰藩ノ事実
- 三十八名帰郷ノ請願及薩藩ヨリ幕府へ伺書〔安久元年六月〕
- 公迎へ届書
- 水戸侯病氣藩中往来鑑札引合達書
- 一橋附家老へ達書
- 尾張殿家老へ達書
- 鷹司殿へ達書



近衛殿へ達書

三條殿へ達書

東叡山宿坊惠忍院歎願書

以上二十九條

二七八 水戸脱藩士入邸始末第一報

庚申八月廿六日夜丑ノ刻、江戸芝銅御門へ〔久松勝成、伊予松山藩主〕使者ト申テ参候ニ付、御門相開キ呼入候処、跡ヨリ同勢都合三十七人押入り、我々共何ソ異変ノ者ニテモ無之御重役ニ御取合、其上言上仕度候間、御取次可被下旨申出、大小拔捨、地ニ両手ヲ付ケ至極敬服イタシ、其夜ノ上番〔中小姓役ノ内ヨリ輪番宿衛スルヲ御門上番ト唱フ、又中番ト唱フルハ足輕ノ内肝煎役、下番トハ足輕ナリ〕日高彦兵衛トイフ人ニテ、国所姓名等承候ヘトモ不相名乗、御重役ニ御合セ被下度申出候由、御軍賦役坂元彦五郎出合、糺合方へ引合面談イタシ、夫々御都合モ有之、同夜ハ田町御ヤシキへ被差置、中途都テ固メ敵重ニテ、駕籠ニテ被差越候由、至極念ヲ入レ御取扱ニ候由、姓名等相糺候ヘトモ御推察可被下迎、実名不相名乗候由、水府浪人ニテ可有之ト申事ニ候、

九月十八日方町飛脚ヨリ申遣サレ候ヨシ、

吉野 三平 〔采名林 以德〕

竹林虎太郎 同 〔大宰清衛門〕

相林七三郎 同 〔山田 能義〕

大津 休藏 同 〔大越 伊予〕

鈴木富太郎 同 〔鈴木 持重〕

東山虎之助 同 〔横山亮之介〕

原山 新六 同 〔菅谷八次郎〕

田中 彦吉

原 藏之助 同 〔栗田 好明〕

井坂 三平 同 〔井坂三次郎〕

宇留野 〔清吉〕 同 〔本名大森丑之介〕

蓬見冬太郎 同 〔鯉沼 伊繼〕

魚島三四郎 同 〔宮田 重孝〕

鈴木鐵之助 同 〔吉成 一徳〕

土岐八兵衛 同 〔菊池 右仲〕

川村右兵衛 同 〔芹沢 義幹〕

亀浦 新太 同 〔小野 信久〕

鈴木 貞助 同 〔服部悌三郎〕

大川 藤藏 同 〔小河吉三郎〕

柳川

和倉三十郎 (本名和知、総次郎)

掛川 勇助 (同、掛札勇之助)

市毛久五郎 (同)

淺井 才助 (同、竹内、延秀)

中村政之進

松本 (竹吉力) 吉 (同、鳥居幾之介)

岸 (菊池力) 新藏 (同、根本、義信)

小太郎 (同、生駒、省次)

石川東之助 (同、鯉淵、右丞)

大森 清吉

中村 正藏 (本名桑屋、重聰)

酒匂 信三 (同、宮本主馬之介)

中林 左内

大山傳太郎 (同、横山、政達)

但跡ヨリ□<sup>文</sup>ヲ持下人差越候由、

右ニ付八月廿九日飛脚、九月廿五日ニ着イタシ候、國所姓名不相名乗、願望相達ノ上実名可相名乗旨申候ヨシ、此内拾四五人ハ弥水戸浪人モ居候由、其時ハ全ク不相分或ハ九州者モ居候ヨシ、吉野三平ハ人柄等モヨ

ロシキ至極相見ヘ候ヨシ、

十月四日相記候、廿九日左公ヨリ其後ハ注進無之ヨシ、

シ、

二七九 水戸浪士入邸御届書

今晩八ツ半時、(島津茂久、薩州藩主)修理大夫芝屋敷南通用門ヨリ、奥平大膳 (中津藩主)大夫使ノ者ト申断候ニ付差通候処、三十七人入込申

候故様子相尋候処、実ハ天下ノ浪人ニテ、無余儀筋申

立度趣有之、罷越候旨申出候段、門番ヘ申聞候ニ付、

身分トモ相尋候処、無拠訳有之、何レモ明白ニ難申出、

且又子細ノ義モ重役共ニ面会ノ上、穩便ニ申出候様申

聞候ニ付、当方ノ仕来リ何様ノ事被申聞候共、重役ノ

者ヘ可申達旨申聞候処、左候ハ、書付ヲ以可申出ト、

折角書面認有之候様子ニテ差出申候、委細ノ義ハ尚御

届可申上候ヘトモ嚴重ニ警固ノ者附置、先此段早々御

届申上候、以上、

松平修理大夫内

八月廿七日

半田嘉藤次

二八〇 從幕府薩州邸ヘ達書

松平修理大夫屋敷へ相越候浪人三十七人ハ、追テ可沙汰ニ及候迄、修理大夫家来へ当分預置候間、卒忍之儀共無之様可被取計旨、可被達候事、

申八月廿七日

二八一 無名氏建言

謹テ以書付奉言上候、方今神州之形勢実ニ累卵ヨリモ危ク相見候、根元外夷之勢ニ恐怖シ、一時偷安ノ為メ横濱開港致候ヨリ以來、人心不居合世騒敷、追々黠夷賊吏ヲ嫌ヒ、奸商愚民ヲ欺キ、珍説ヲ以テ耳目ノ欲心ニ奪候由、日用之品々掠上、漸々彼カ術中ニ陥リ、万民之飢渴ニ苦候ニ及、随テ国家ノ疲弊ニ相成候時ニ至リ、利ヲ以テ此民ヲ呑噬シ、手引ノ為メ不測ノ大害ヲ醸出シ候ハ、賢明之先見果シテ毫モ不可疑候、是ヲ以被為悩宸襟、一度ナラス論言被為在候処、要路之奸計飽迄奉<sup>本ノ</sup>嚴寒、恐多クモ万一

御讓位之御儀ニモ至リ候ハ、千歳不磨之遺恨可相成恐縮仕候、水戸前中納言様御盛徳之御砌、我々之赤心ニ出候儀如何之愚存致候義御座候得共、此節風伝ニ承知仕候ニハ、右之御方様御大病之由、左候ハ、当今天

下之御模範ニ被相備候御英明ハ、乍恐御屋形様ト奉承知候、依之我々トモ漂流之身ト乍申、上ハ奉安

叡慮、下ハ万民徳ヲ奉仰、遂ニ推參仕候義ニ御座候、仰願クハ深大御明断ヲ以テ不日ニ御人数御差向被遊、

外夷共御打払ニ相成候ハ、我々共乍不及先鋒可仕必死ニ存詰候、何卒我々ノ凝意御憐察被下置、右之一筋能々御勇決被成下度、此段伏テ奉願候、頓首謹言、

八月二十八日

〔番号二八一の原註により補註を加せず〕

二八二 水戸浪士差出候書付第一

二八二〇<sup>〔文〕</sup> 謹以書□奉

同書数多アリ、何レモ誤謬アリ、何レカ正シキヤ、参考ノ為メ数通ヲ記ス

方今 神州ノ形勢実ニ累卵ヨリモ危相見へ、根本外夷ノ勢威ニ恐怖イタシ、一時<sup>備カ</sup>安ノ為横濱村ニ開港シ、姦商愚民ヲ欺キ、利ヲ以テ耳目ノ慾ニ奔ラセ、日用ノ品ヲ掠ハ、彼ノ謀策ノ術中ニ落入、万民飢渴ノ患ニ及ヒ、随テ国家疲弊ニ相成候時ニ至リ、利ヲ以テ此民ヲ呑噬ノ手引ニ被致、不測ノ大害ヲ醸出、上賢明ノ先君果シテ慮御座候モ不採用、是ヲ以テ被為悩<sup>備カ</sup>宸襟一度ナラス、□言被為在処ヲ、要路ノ姦司飽迄<sup>〔文〕</sup>弊害ヲ、恐多モ万上之

御讓位ノ御儀トモ至リ候テ、千載不磨ノ遺憾ニ可相成、奉恐縮ケルニ、是迄彼ヲ跋扈為致置、水戸前中納言様御盛降ノ御勤柄ニト、我々ノ赤心ニ出候儀、如何ニ愚存イタシ候儀ニ御座候、御節風ニテ伝承仕候ニ、<sup>本ノ</sup>御方様御大病ノ由、左候ヘハ当今天下ノ模範ニ被為在候御英明ハ、乍恐 御<sup>屋カ</sup>形様ト奉承知候、仍テハ我々共漂流ノ身トハ乍申、上奉安

勲慮、下ハ万民塗炭ノ苦ニ陥候儀ヲ救シカ為メ、御屋形様ノ御式法ヲ奉仰慕推察仕候処ニ可仕候、仰願クハ深<sup>ク</sup>御明断ヲ以テ不日ニ御人数御差向被為遊、外夷共御打払ニ相成候ハ、我々共乍不及先鋒可仕、必死ニ存詰罷在候、我々微言ヲ御憐察被下置有之、一筋直ニ御<sup>ク</sup>へ此段、頓首再拜謹言、

八月廿七日

前記ノ人名連署

二八二ノ二 <sup>道島</sup> 正亮評ニ曰、後ノ君子ノ議ヲ待ツ、

君父ヲ捨テ生国ヲ去リ、<sup>ク</sup>ニ倚テ忠義ヲ尽シ、己カ正義ヲ立ントス、其志偉ナリトイフト雖モ、義ノ感スル所ニ非ス、又実ニ難捨事アリテ他ニ停ムル時ハ、其実ヲ不明ノ理ナシ、言事不能時ハ不義ノ徒ト

シルヘシ、差出処ノ文面ハ天下ノ病根ヲ言尽シタリ、水府ハ<sup>ク</sup>ス已来学校大ニ行ハレ、吟味ヲ尽シタルニヨリ誰カ是ヲ<sup>ク</sup>セン、然レトモ浪々ノ士トシテ繪言ヲ唱言シ、將軍ノ命令ヲ跋扈スル事、是上ヲ凌候トイフヘシ、兎角大義ノ立タル時ハ、天下國家ノ<sup>ク</sup>立スル事不能ナリ、<sup>ク</sup>異ヲ打ツテ先鋒タラ

ントイフ、憎ムヘキノ甚シキナリ、我隊ヲ出シテ戰功ヲ励サントイフ時ハ可ナリ、誰人カ先鋒タラシメシ可笑、即其言行ヲ以テ推察スルニ、水戸老公天下ノ形勢ヲ窺シカ為メ、士ヲ放チ浪人ナラシメ、老公ノ威ニヨリ<sup>ク</sup>ノ市井拒ム事不能トモ、老公俄ニ卒去ニヨリ浪士虎ノ威ヲカル事不能、市井ニ居候事ヲ不許ニヨリ、無合儀書ヲ認テ、身ヲ委ネタルナラン、<sup>余カ</sup>庚申十一月四日方、久保七兵衛着ニテ、十一月九日嘶ヲ承レリ、

水戸浪人先御ヤシキヘ差越候者共、余程飢渴<sup>マ、</sup>向<sup>ク</sup>タへ候儀余程目立居候由、九月廿四日七兵衛出立迄ハ、何モ不相分、<sup>ク</sup>中水戸差引差越管ノ由モ承及候、

記スル所ノ道島カ説、素ヨリ取ルニ足ラスト雖モ、謄写ノ仮記

シ置ヌ、

二八三 水戸藩士入邸第二報

庚申九月十九日朝飛脚到来、浪人ハ三十七人銅御門へ差越候ニ付、其夜当番人日高彦兵衛ニテ取合候、則其役人へ可達トノ事ニテ、御軍賦役坂元彦五郎出会応対イタシ、同所へ被召置候ヨシ、未タ細事不相分水府浪人ニテ候由、水戸前原助之丞逝去、變死ノ由走出マキレ入候トモ、(欠)打付トノ(欠)ニテ候由、越前侯ハ御国許隠居、其外市橋(欠)御赦免有之候由、此節ノ飛脚ニ相知候由、

但水戸侯ハ八月十五日御逝去候由、十六日当主御暇ニテ乗切ニテ水戸へ差越候由、十八日ニ重キ上使相下リ、慎御赦免被成候由、

二八四 水戸家編輯委員服部敏氏寄送書上小瀬村大越 真之介殿

萬延元申八月廿六日、薩州侯へ外夷之義ニ付推参イタシ、翌廿七日朝差出候書付之写

方今 神州之形勢実ニ累卵ヨリモ危ク相見候、根元ハ外夷勢焰ニ恐怖シ、一時偷安之為横濱村へ開港イタシ

候ヨリ、以来人心不居合世上騒敷、追々黠夷賊吏ヲ瞞シ、奸商愚民ヲ欺キ、珍玩ヲ以テ耳目ノ慾ニ奔ラセ、日用之品ヲ掠上ケ、漸々彼カ術中ニ陥リ、万民ハ飢渴ノ患ニ及ヒ、随テ国家モ罷弊ニ相成候時ニ至リ、利ヲ以テ斯民ヲ吞噬之手引ニ為致、不測之大害ヲ醸シ出候ハ、賢明之先見果シテ毫釐モ疑フヘカラス、是ヲ以被為惱

宸襟、一度ナラス

綸言被為在候処ヲ、要路之茲司飽迄奉蔽塞、恐多クモ万々一御讓位之御義ニモ至候ハ、千載不磨之遺憾ニ可相成奉恐縮候、然ニ是迄彼ニ跋扈為致置候モ、水戸前中納言様御盛隆之御砌柄ニハ、我々共之苦心ニ出候モ如何ト愚存致シ候義ニ御座候、此節風ト伝承仕候ニ、右之御方様御大病之由、左候テハ当今天下之御模範ニ被為備候御英明ハ、恐ナカラ 御屋形様ト奉承知候、依テハ我々共漂浪之身ト乍申、上ハ奉安

叡慮、下ハ万民塗炭ニ陥リ候ヲ救ハンシガタメ、御屋形様之御武徳ヲ奉仰慕候義ニ御座候、仰願ハ深大之御明断ヲ以テ、不日ニ御人数御指向被為遊、外夷共御打払ニ相成候ハ、我々共乍不及先鋒可仕、必至存詰罷在

候、何卒我々共之微衷御憐察被下置、右之一筋克々御  
勇決、此段、頓首再拜謹上、

萬延元年八月廿七日

三十七名連署

〔書字二八二の原註により補註を加えず〕

二八五 薩藩之内議及三十八名ノ請願書上小瀬村大越  
真之介蔵

二月廿八日池田氏ヨリ被見候書付之写

二八五ノ一

各方被申立候趣ハ、不容易事柄ニ付、於国元モ別テ入  
念手広為致評議候処、役筋之評議モ一般ニハ揃兼、殊  
ニ城下数千之人数ニ至候テハ、猶又異議多ク、其内年  
若之者共、僻論ヲ主張イタシ、手強ク申張候輩モ不少、  
重役共ニモ却テ其処置込入候趣ニ相聞候、追々申入置  
候通り、評議治定ノ上ハ、オノツカラ役筋出府ノツモ  
リニ候ヘトモ、畢竟右体之事情ニ付、其義モカク長延  
候筋ト相聞候、就テハ未評決之場合ニ至兼候、凡ノ評  
議柄ナリトモ承知被致度トノ趣、其段重役共へ申聞置  
候処、過日申聞置候趣ハ、前書之通り彼是衆議モ区々  
之次第、未タ是ソト申評議一体、各方被申立候ハ、第  
一  
皇国之御為万民ノ苦ミヲ救ヒ申度之主意ニ有之、其段  
ハ尤之事ナカラ、未タ 公迎之御処置其場ニ不至内、

卒爾ニ事ヲ破リ候テハ、数々ノ大難目前差見候ニ付、  
此儀ハイツレトモ、永世万全之策ヲ治定イタシ候上ニ  
無之テハ、其意ニ応兼候次第、兎角御互ニ時節ノ至ル  
ヲ相待候外有之間敷候、一先御主家へ御引戻シ無子細  
安住相成候様、御当地詰合之者共精々周旋可致趣申立、  
役筋ハ勿論城下年長之議論モ、半ハ右之通之趣ニ相聞  
候ヘトモ、其外種々評議之品モ有之趣ニ候ヘトモ、委  
クハ拙者共ニモ相心得不申、前書申述候通りノ次第ニ  
テ、重役共右建議之取扱ハ、別テ困入候趣ニ御座候、  
凡之評議模様ニテモ承知被致度、訳テ承リ候事故、未  
定之事ナカラ御断申候事、

二月廿八日

二八五ノ二

右書付一同披見イタシ、翌廿九日差出シ候書付之写  
去ル秋中奉申上候儀ニ付、御詰合方へ度々御催促申上  
候所、不容易儀故、急速之挨拶ニハ及兼候旨御申聞有  
之、猶十月下旬之御咄ニハ、近々国元列席ニテ、出府ト  
ノ御事故、一同早ニ雨ト御待申上候所、御延引ニ相成  
候義如何之御模様歎ト痛心罷在候得共、如仰国家之一  
大事ニ御座候間、無御抛ト奉遠察候、越之ニテ当月之

御咄ニ御連枝島津様御出府之由承之、一同欣抔之恩ニ不堪、定テ万全非常之御良策可被為在ト楽罷在候所、然ルニ外御用ニテ御到着之由、御申聞有之候得共、

御家御柱石之御立場柄ニ御座候ヘハ、此事ニ付譬 君公之御命令御受無之候トモ、御一言之御高論御立貫キ被遊候ハ、上下共御異議ハ有之間敷哉ニ奉愚存候、況御元御評議中御発駕ニ御座候ヘハ、右逐一御承知被為在候ハ勿論ノ御義ト、一同御噂申上候、乍憚御直ニ御目通り相願、志願之趣具ニ奉申上度存候ヘトモ、前御申聞モ御座候通り、御家風ニテ御重役方他所人ヘ御面会ハ難相成旨ニテ、不得止事謹慎罷在候、依之過日御決議ハ兎毛角、御懐合見込之程被仰聞候様、右之御方様ヘ宜敷御申立被下度相願候処、昨日御申聞ニハ、御国元之御情実細ニ相伺候ニ、御老成之御評議ハ勿論、御壮年之御義氣ト申御大藩之御威風、誠ニ奉感服候、且外夷之義ニ付末タ公辺之御処置其場ニ不至、内ニハ勞シテ功ナキノミナラス、禍難ヲ醸出候様ニモ承知仕候、此義ハ前呈書ニ 公辺ヘ御建白之上御一挙被下度、可相認ハ愚慮仕候ヘトモ、御大藩ヘ奉対余リ指越候不敬之罪ヲ恐レ、唯眼目而已奉申上義ニ御座候、依之嗚

呼ケ間敷義ニ御座候ヘトモ、存分被申立不苦トノ御申聞モ御座候間、当否ヲ不顧肺肝ニ銘シ罷在候趣意荒々奉申上候、

一盛代ニハ上一人法令相伝候ヘハ、下万民水ノ流ル、如ク、不随シテハ不叶理ニ候ヘトモ、カク非常之世ニ至候テハ、勇士ハ諸侯方ノ爪牙トナリ、諸侯方ハ 公辺之股肱トナリ不申候テハ、

勅意ニ奉報候事ニハ難相成、且何ケ年相過候テモ非常之御明断ニ至リ不申哉ニ付、是迄明君仁者ハ社稷ヲ忘レ、勇將志士ハ刑戮ヲ不恐、

天朝 公辺之御為周旋奔走致候者数多有之、実ニ

皇国之大道未地ニ墮不申ハ、和魂ノ尊キヲ存スルニ依処ニテ、丑年以来天変地妖打続キ有之候ハ、全ク神明之震怒ニテ、人君ヲ戒ルノ兆ナルヲ、有司ハ露モ是ヲ不悟、一日之苟安ニ千載之汚ヲ流シ候仕義、終ニハ自分噬臍候テモ難及、大禍ニ係リ候ニ相成可恐之甚敷ニ有之間敷ヤ、

一当今之形勢一日相送り候ヘハ、一日之罷弊ニ相成ヘク、之ヲ病者ニ譬候ヘハ、外邪ノ熱氣甚敷ニテ、種々ノ痼疾ヲ引出シ、心神煩懣ノ姿ニテ、親族是ヲ傍觀スルニ

不忍、名医ヲ招良薬ヲ用ント欲シ候テモ、当人ハ我体ニ病アル事ヲシラス、却テ親族ヲ遠ケ名医ヲ罵シル如ク不得止事捨置候ヘハ、熱氣寛ルニ随テ顔衰ヘ形枯レ、死瀕ニ至ルハ必然之事也、是ヲ以昔弘安年中鎌倉之執権北条時宗、蓋世之勇ヲ奮ヒ、卒爾ニ蒙古之使者ヲ斬、遂ニ其大軍ヲ撃ニシテ、

皇国ノ武威ヲ四夷八蛮ニ耀候タメシ、識者之ヲ称シテ、九世ノ罪惡ハ此一功ニ償ニ足レリト被申候由、或説ニ右ノ使ヲ斬候ハ、却テ大害ヲ速ニ招候様ト申サレ候ヘトモ、又称シテ後世ノ法トスヘシト相見候、近代ノ征夷府ハ右ニ事替リ、諸大名方御旗本衆御膝元ヘ御居置被遊、四海一家ノ如キ御威勢ハ勿論、東照宮大猷公ノ御明鑑ヲ以、夷舶之捷嚴重ニ前定有之トノ事、当今無御拋御義ニモ可有之候ヘトモ、余リノ御愛シ方ニハ有之間敷哉、手飼ノ犬猫スラ狎過候ヘハ、噬付候テモ之ヲ殺スニ不忍ハ人情ノ常ナリ、今ノ五州ノ醜虜共犬猫同様ノモノニテ、噬付候ノミナラス、後ニハ我国家ヲ吞滅セント欲スルハ、必然ノ勢ニ候、諸蕃ノ覆轍ヲ見候テモ瞭然ニ候、

一先年ノ建議ニ、武備不調ニテハ外寇ニハ難当故、一ト

先表面和親ノ体ニイタシ、交易取結、其利ヲ以出来候様ノ趣ニ承及候ヘトモ、当年ニテ最早九ヶ年相立候テモ、未タ不調ト申ハ如何ノモノニ有之候哉、矢張家ヲオシミ、戦ヲオソレ候一時ノ遁辭ニテ、從今何十年相過候テモ、是迄ノ通りニテハ全備イタヌ杯ハ存モ不寄事ニ奉愚存候、扱武門之武備ハ農民之耕具ト同事ニテ、耕具一向無之筈ハ決テアル間敷事、若損候ハ、衣服ニ換候テモ速ニ出来、農事相助不申ハ畢竟飢饉ニ及候ハ差見候事、是時ヲ不失ヲ良農ト申候、将又蝗虫ハ五穀ノ災ニテ、愚民トイヘトモ是ヲ除クノ法ヲ尽シ候、外寇ハ万民之災是ヨリ大ナルハナシ、人君タル者はヲ私ノ術ナカルヘケンヤ、農ノ時ヲ怠リ候ハ一年ノ不作、武門之此機会ヲ失ヒ候ハ千載ノ不明ニ可相成、乍併二百余年ノ太平ニ沐浴イタシ候ハ、早是ヲ忘レ、武器ヲ以華衣美食ニ換候人情止メカタク、右様ノ小祿ノ者ハ是非モ無之、拾万石以上ニ相成候テハ万一ノ時ハ、一方之防口御持被成候御身分ニハ有之間敷哉、マシテ御家ニ至候テハ、

神州無二ノ御大藩ハ勿論、今公ニハ春秋御少シトハ奉申上ナカラ、文武ノ御英名世上ニ無隠御称譽、殊更



先公ニハ

王室ヲ尊　公辺ヲ重シ、夷狄ヲ惡セラレ候御遺志未達、  
且　公辺へ御近縁モ被為在候へハ、和親ノ可否交易ノ  
損益打扨ヒノ遲速ト、行末　徳川家ノ安危ニ拘リ候義、  
委御建白被為遊候ハ、當今義胆禦カタク夷情難養、  
御廟算躊躇之折柄ト申、御家ノ手ニ出候ハ、御用ニ  
相成候ハ鏡ニカケテ奉恐察候、外夷犬羊ノ願スラ御打  
捨ニモ相成兼候勢ニ御座候へハ、御家之御建議御許  
容無之咎ハ有之間敷奉存候、返ス〜モ猷芹曝脊之微  
衷ヲ以是ヲ見候へハ、武備ヨリ第一上之人恩威ヲ以テ  
士氣ヲ鼓舞シ、人々ニ向フ所ヲシラシメ、海岸御防禦被  
為遊候ハ、五州ノ地界ハ覆大ノミ醜類ハ兒點ノミ、  
譬何百ノ軍艦寄來候共、数千里外ノ遠海ヲ渡リ、兵糧  
硝藥相統候モノニハ決テ無之候故ニ、金穀兵器ヲ乞候  
ニテ致洞察候、古語ニモ有之通り、之ヲ彼ニ与候ハ、  
盜ニ糧ヲ齎シ、寇ニ兵ヲ藉ノ理可畏ノ甚敷ニテ、茲ヲ  
以幾重ニモ　公辺へ御申立被下置、永世万全之神策一  
同奉渴望候、右不文ト申即夜ニ相認候へハ、不語冗長  
数々御耳ニ障リ候廉モ可有之候へトモ、言之忌諱ハ御  
咎無之、唯々我々共精神一致之心底而已、御汲分被下

置度此段奉申上候、以上、

二月廿九日

三十七名連署

以上同書重複スト雖モ、藩邸ニ伝フルモノ、及ヒ各藩ニ伝播シ  
タルモノ、或ハ水戸ニ於テ各家所藏ノモノ、何レモ大同小異ア  
ルカ故、何レカ是ナリヤ判定シ難シ、故ニ重複ヲ厭ハス記載シ  
テ、他日ノ参考ニ供ス、

二八六　参考　邸外ニ散シタル書

水戸浪士薩州屋敷へ差出候書付

謹テ以書付言上候、

方今　神州ノ形勢実ニ累卵ヨリモ危ク相見へ候、根基  
ハ外夷ノ勢ヒニ陥リ恐怖致シ、一時偷安ノ為ニ横濱村  
ニ開港致シ候ヨリ以來、人心不居合世上騒ケ敷、彼ハ  
益我國ノ姦商愚民ヲ欺キ、当利ノ欲心ニ為走、要用ノ  
品ヲ掠メ取候上、漸彼カ術中ニ陥入り、不測ノ大害毫  
釐不可疑候、是ヲ以被為恠  
宸襟、不一方

論言被為在候処、要路ノ有司飽迄奉蔽塞、恐多クモ  
今上御讓位ノ趣可相成之処、独水戸前中納言殿御盛徳  
ノ御勤柄、我々愚存ニ如何計敷辱奉存候儀ニ御座候、

然ル処此節風ト承リ候ヘハ、右御方様御大病ノ由、当  
今左候ハ、天下ノ御模範ト可唱候御英明ノ御館様  
(我藩ヲ云)ト奉承知候、仍テ我々漂流ノ身ト乍申、只  
々奉安 叡慮、天下万民ノ塗炭ニ陥候儀救申度為メ、  
御館様ノ御武徳ヲ奉仰推參仕候事ニ御座候、願クハ深  
大ノ御明断ヲ以テ、不日御人数御差向、外夷御打払ニ  
相成候節、我々共乍不及先鋒ニ御加ヘ置被下候ハ、  
必死ノ働仕度存居罷在候、何卒我々聊忠義御憐察被下  
置候、右ノ一筋能々御明断被下度、此段御頼奉申上候、  
頓首再拜謹上、

萬延元年八月廿七日 (番号二八の原註により補註を加えず)

元水戸中納言家来

鯉淵右京事

石川孝之介

芹澤又衛門事

松村卯右衛門

菊地右仲事

土岐初之助

岩谷敬一郎事

岩谷壮之介

太宰清衛門事

竹林虎太郎

鯉沼伊織事

蓮見東太郎

栗田源左衛門事

原 藏之介

林忠左衛門事

吉野 三平

掛札勇之介事

(助)

掛川 勇助

吉成恒次郎事

鈴木鐵之助

山田熊之介事

松林七三郎

鈴木酉次郎事

鈴木富次郎

鳥居幾之介事

松本 竹吉

小野鍋吉事

葛浦 新吉

服部悌三郎事

鈴木 貞介

大串忠之進事

中田 庄介

横山亮之介事

東山 亮助

小河吉三郎事

大川 東藏

竹内春雨事

淺井 才助

根本新平事

岸 信歳(感)

大森丑之助事

宇留野清吉

中野方之介事

中根佐衛門

横山辰之介事

大山新太郎

宮本主馬之介事

酒匂 信三

榊 幾次郎事

榊 幾

桑屋昇三事

中村 庄藏

和知総次郎事

和倉 七郎

富田謙次事

金易三次郎

中村多三郎事

中村 庄吉

井坂三次郎事

井坂 三平(次)

菅谷八次郎事

平山 半六

小沼源七事

不破四十郎

鯉淵直衛門事

市毛久五郎

下野清助事

下野 三平

糟谷新五郎事

松延積衛門

生駒省太事

菊地新太郎イ新太

大越伊豫事

大野 健蔵

以上姓名誤唱謬字アリシ故、水戸家人名の水戸藩史料下編全にて補註編輯委員服部敏氏・塚達氏ニ訂正シタルモノナリ (廿六年七月)

二八七 八月廿八日松平修理大夫家来へ可達書付

修理大夫屋敷へ罷越候浪人三十七人、逐テ及沙汰候迄

修理大夫家来へ当分預置候間、卒爾ノ義無之様可取計旨可達事、

昨廿七日曉、修理大夫芝居屋敷へ罷越候浪人共ヨリ、別紙兩人儀一味之者ニテ、軍用金為持置候処、如何様途中道筋踏迷候哉致離散候ニ付、自然尋来候義モ可有之、左候ハ、無子細一所ニ差通兵候様申出、乍併昨曉ノ人数ハ最早当分御預人之者ニ候へハ、尋参候共彼等申立通一所ニ差通候儀ハ勿論、屋敷内へハ不相入様申断候儀当然之事ニ候得共、同様必死ノモノトモ、且ハ態

ト残置計略等申含置候哉モ難計御座候ニ付、兩人共若

哉差越候ハ、子細承届候上別屋敷へ差通、嚴重警固為致置、最早速其段御届可仕候、此段申上置候、以上、

松平修理大夫家来

八月廿八日

半田嘉藤次

二八七ノ一 別紙

一背高キ方、

一月代ハゲ候方、

芝邸ニテ割腹ノ由 松延積之衛門

一背並体、

一面痘痕在、

一色黒キ方、

下野 清介

右イツレモ四十四五歳

此二人ハ三十七人ニ後レ藩邸門前ニ来リ、入邸ヲ請ヒタルモ入ラシメサリシ故、屠腹シテ程ナク死シタリ、

二八八 入邸人姓名書

大川東之助

松邑七三郎  
吉野三平  
出持八之助  
竹林虎之助  
淺井才助  
川村宗右衛門  
菊地新太郎  
大野忠藏  
鈴木富太郎  
鈴木與助  
岸清藏  
東山虎助  
石川藤藏  
岩谷壯助  
宇留野平治  
立山半助  
大森清藏  
蓮見東太郎  
和倉七郎  
中村政之進

中根左内  
金易三治郎  
松元助吉  
鈴木鐵之助  
酒匂清藏  
生駒小九太  
曾山半六  
坂木實  
中邑庄吉  
石島四十郎  
原龍之助  
掛川勇助  
大和新太郎  
中村正藏  
井坂三平  
市飛久五郎

三十七人

二八九 當時外方風説

松平修理大夫様へ罷越候浪人ヨリ申立候趣意ハ、第一

外人所々へ罷越候ニ付、日本国民難渋ニ付、此節水戸前中納言様御大病ノ由承候ニ付、右御同人様御逝去被成候ハ、外ニ外国人へ被成御向候御方ハ、此方様ヨリ外ニ無御座候ニ付、私共三十七人先陣仕候間、右之願御聞届被成下候様偏ニ奉願候、御聞濟之上ハ生国名乗可申上旨申出候由、風聞仕候、

二九〇 九月三日水戸殿家老衆へ達書

二九〇ノ一  
去月廿七日曉、〔島津茂久、薩州藩主〕松平修理大夫芝口居屋敷へ、浪人体ノモノ三十七人罷越候ニ付、手当致差置候旨修理大夫家來相届候、右之者共ハ、水戸殿元御家來ニモ有之ヘク哉ニ相聞候間、御家來之内可然人体修理大夫屋敷へ差遣、篤卜見届之上、名前等委細取調申聞候様可被致候事、

二九〇ノ二 松平修理大夫家來へ

同文言、右之通水戸殿家老へ相達候間、得其意相談候様可仕候事、

二九一 駕籠屋平吉申立書

乍恐以書付奉願上候、

芝口式丁目、政吉店駕籠屋渡世平吉寄子文八・鐵五郎兩人奉申上候、当廿六日夜侍薩州様御屋敷御門迄致道案内候義在之哉之旨御尋御座候、此段廿六日夜曉七時頃、品川宿迄送駕、帰之節本芝式丁目焼耐屋ニテ休居候処、侍式人罷越、薩州様御屋敷迄案内致具候様申候ニ付、何心ナク右兩人同御屋敷銅御門前迄案内仕候、途中ヨリ式人三人宛凡四十人程相見候ニ付、驚右御門迄案内仕候処、為賃錢天保錢壹枚貰受立帰申候、何卒以御慈悲右之段御聞濟之程奉願上候、右御尋ニ付此段奉申上候、

芝口式丁目政吉店

平吉

家主 政吉

二九二 参考 安政紀事鈔八月廿七日

此節芝薩州屋敷詰合左之通、

家老 川上 〔久美〕 式部  
同 川上 龍衛  
用人 島津 壬生

同 關山 (金生) 糺

九月五日 (六乙)

湯淺喜兵衛

去月二十六日夜、薩邸ノ門ニ参リ、京極ヨリ使ニ参リ

諏訪昌次

候趣申聞候故、門番開門致シ内ニ入り候処、京極ヨリ

警衛総頭 田中久蔵

使ニ参リ候ハ虚ナリ、我等志願ノ筋有之相越候<sub>(マヤ)</sub>迎モ、

河畑為右衛門

取次ノ者ヘ一封差出シ候由、生国等ハ何等不申聞、薩

坂本彦五郎

摩ニテモ直ニ幕ヘ伺ヲ立候由ノ処、先ツ預リ候様御沙

外ニ中小姓三十人・御軍役足輕八十人・同以上ノ者

汰ニ相成候ト申説モ有之候、又薩ニテ書付ヲ開キ申聞

三十人(邸外ニ於テ唱フル処如此姓名職モ誤リ伝ヘタリ、

敷ト申候、姓名ハ左ノ通三十六人、

況ンヤ浪士ノ待遇或ハ藩吏<sub>(マヤ)</sub>應接上、種々ノ巷説アリタリ)

當時在邸国老其外人名實際左ノ如シ、

吉野三平

国老 喜入攝津久高

土岐八之介

大目附守衛方 川上龍衛久齡

竹村小三郎

番頭 島津主殿久備

淺井才助

仝 島津壬生久徹

松林七三郎

留守居 西 筑右衛門

河村宇兵衛

仝 半田嘉藤次

石川東之介

側役格軍役奉行 安田助左衛門

大野健蔵

軍賦役 坂元彦五郎

鈴木貞介

菊浦新吉

岸 信蔵

鈴木留三郎

東山小介

石川勝蔵

平山半六

生熊小九郎

中田庄吉

榊 幾

原 蔵之介

不數四十郎

大山新太郎

掛川平介

井坂三平

中村正蔵

岩谷蔵之介

市毛久五郎

宇留野平次

立川半之允

蓮見東太郎

大森清六

中村政之進

和倉七郎

金易三次郎

中根左内

鈴木鐵之介

(松本中言脱之)

九月七日

去月老公御慎解ノ義奸説一寸入候趣ニ候処、能々承リ

候得ハ、却テ有志ノ者ニテ、老公御策略ニテ、公ヲ御

国ニ御引付ケニハ無之カト申候事、閣老耳ニ入り、夫

ヨリ少々腰ヲカケ候姿之由、(也脱之)奸物手一杯ニテノ事ニハ

無之トノ事、

九月八日(七月十七日也)

黒田・島津ヲ幕ヨリ召出候風説有之候由、然ル処江戸

屋敷ノ者指文ハ有之間敷候間、ヤハリ出候方可然ト申

候力事、(義九)

右実説ニ候ハ、朔日ノ義西州諸侯携リ候義無疑存

候事、(番号一九四ノ一五にも同文あり)

黒田ノ召ハ無相違トノ事、薩州引込故親類ノ廉ヲ以テ、

何トカ為御扱ノ事ナルヘシト推考、(之脱カ)

九月九日(番号一九四ノ一六にも同文あり)

去ル二十六日夜、薩摩侯屋敷へ国ヨリノ早飛脚ト称シ

門ヲ扣キ候、門番急キ門ヲ明ケ候処、一同二三十七人



押込候ニ付、邸中大騒キ、扱テ能々承リ候へハ天下ノ

浪人ニテ、願ノ筋有之罷出申候、尤モ生国ノ義(御脱カ)ハ重役

へ御目ニ掛リ可申上トノ事ニテ、更ニ名乗リ不申候ニ

付、多分水戸モノニ可有之トテ、竹下清右衛門幸ニ邸(前年本戸へ罷ハレタル者ナリ)

中ニ居候間、蔭ヨリノゾカセ候処、吉成恒次郎杯ニ似(一徳)

寄候者モ有之由、早速幕へ届候由ニ候、

九月九日(五九)

右ハ二十六日新宿ニテ薩へ出候ト申者、此ハ老公御逝(烈公)

去ニ付テ外夷ヲ攘候手段尽果候間、薩侯ニテ御引受御

同意ニテ御尽力被下候様トノ事ノ由ニテ、公ノ御供

致候ト申者、此ハ君ヲ捨候ハ不本意トノ事ノ由ニテ、互

ニ議論ツノリ、此時ニテ死別致シ可申トテ、既ニ刃傷

ニモ可及程ノ様子ノ由ニ御座候(豊田若狭ハ足ラ被切候ヨシナリ)

九月十一日(廿九)

今日承ルニ当公御下国ノ義、実ハ尽ク六ヶ敷候処、此(関宿)

節薩州始メ国へ引込候時節故、長ク御在国ハ、公辺御

都合不(二脱カ)宜ヨシニテ、万一御長引被遊候ハ關宿モ尽ク不

都合ニ相成候由ニテ、表向数度御參府御催促モ有之、

無致方十月七日方、御発途ニモ可相成カノ由、

九月十二日(十月五日カ)

御国ヨリ登候郡吏等、昨二日薩州邸へ為見届出張ニ相

成候趣ニ御座候得共、如何トモ不承候、

九月十五日(十月十七日カ)

薩邸へ出候者之儀、幕ニテハ大ニ処置ニ懲リ候気味

有之ト相見、幕へ引上候モ張込不申候様子ナレハ、

共ニ亦此方へ引取候様トモ無之、此方ニテモ幕へ対

シ引取候事ニモ不相成、薩ニテハ家老等其外上之方ハ

何レカ方也、早く渡シ度様子、尤モ下ノ方ニハ国へ遣シ

候外無之トテ、周旋イタシ候者モ有之候由、(番号一九四

ノ一八にも同文あり)

〔鈴木大日記(国立公文書館所蔵)にて補註〕

## 二九四 京都ニ於テ所司代手付書信

一 九月廿八日頃、水戸表ヨリ三拾人程松戸辺へ罷越候所、

行先相知不申由ニ御座候、

一 松平修理大夫様へ罷越候浪人者ノ儀ニ付、水戸様ヨリ

度々薩州様へ内々為見届罷越候由御座候、

右浪人モノハ侍分五六人、其外ハ神主又ハ郷士之者ノ

由、内々水戸様ヨリ罷越候者ヨリ被申候由御座候、

右浪人ハ近日ノ内、水戸家へ御引渡ニ相成可申由風聞

仕候、薩州様ニテ日々食物老人ニ付三匁ツ、或百人

前ノ仕出之由ニ御座候、薩州様ヨリ日々朝夕之様ニ御

懸リ、久世様御勝手へ御留守居罷越候由ニ御座候、

去月廿七日、薩州屋敷へ願之筋有之旨被申越候浪人三

拾七人ノ者、封書ヲ以家老中へ申立候趣意ハ、兼々水

戸前公異国人征伐之思召立被為在、面々御随氣申上時

之急ヲ相伝へ罷在候処、不量御逝去ニ相成、一同志空

敷残念ニ有之、此上可頼方無之、薩州家之義ハ兼テ剛

氣之御家風頼母敷存罷在候間、何卒老公之御趣意ヲ継

申度、一同挙テ申立候、右之通申立候由、屋敷ヨリ右

之趣申立、及進達御下知相伝罷在候由、逐テ水府へ引

渡候様御差図可有之由ニ候得共、今以其俟ニ相成居、

右ハ屋敷内風説ニ御座候、

但右浪人右様ニ申立候へトモ、実ハ身分立行方ニ込

リ、右様申来入込候哉ニモ可有之由ニ御座候、

二九五 参考 安田助左衛門日記鈔

二九五ノ一 萬延元年庚申正月十一日

御側役格御役料高九拾石、御軍役奉行動右ノ通御役替

被下置候、承知、

代々小番

安田助左衛門

右御側役格へ御役替ニ付、右ノ通被仰付候、

右御格ノ通可申渡候、

正月

筑後川上

二九五ノ二

安田助左衛門

右江戸へ御内用ノ儀有之、出府被仰付候条、仕廻次第

立日限申出候様可申渡候、

閏三月

但馬川上

右之通閏三月十五日被仰付候、

安田ナル者ハ城北城ヶ谷ニ居住セリ、幼年ヨリ甲州新流ノ軍字

ヲ修メ、嘉永ノ初軍賦改正ノ時、軍賦役ニ揚ケラレ、尋テ給地

高改正ニ就テ高奉行ヲ兼務シ、其功ヲ揚ケ、後軍役奉行ニ進ミ、

而シテ前記ノ如ク昇転シタリ、

二九五ノ三 萬延元年三月

上様御機嫌能被遊 御筈候処 於途中水戸殿家来拾七

人、其内御小姓与有村次左衛門相交、掃部頭様ヲ殺害

イタシ候段、三月廿四日相達

上様御病氣ニテ、筑後松崎駅ヨリ御引返相成候段申来、  
右ニ付テハ段々御手当向等吟味被仰付候、

一萬延元年閏三月廿八日

東野休兵其外家来下人召列出立、五月六日江戸へ致着  
候、

一於御国許周防殿ヨリ御直ニ被仰付候極御内用勤、江戸

着ノ上攝津殿・式部殿・龍衛殿へ申出、篤ト勤考ノ上、

左ノ通手扣書ヲ以テ申上候、

萬々一江戸中擾乱ニ及候ハ、(井伊家ニ対ス) 暁姫様御始御姫様方御

迦ノ処、別テ御掛念被思召候間御無難ニ御立退ノ処、

出府ノ上御家老衆へ申出、極内彼是手ヲ付候様可致、

是ハ早クテハ御後難可有之、又遅クテハ猶更御大事ニ

可及候間、能々其機会ヲ察シ入念候様承知仕、右ニ付

愚案ノ趣左ノ通御座候、

一当將軍家ノ御作法、列国諸侯ノ妻子ヲ江戸ニ引付置、

人質ニ取り二心ヲ不起様ニシメ付置候御取扱、御国初

以来格別成御治法ノ御規定ト奉存候、然ハ万一乱世ト

被見請候ハ、諸侯ノ妻子御郭内ニ御取寄置被成儀モ可

有之奉存候、自然右様ノ時宜相成候上ハ、到其節被成

様モ有之間敷、勿論 將軍家御勢ヒ今通慥ニ有之、

此御方様御屋敷モ今通相立居候内ハ、御沙汰ニ背キ無  
理ニ御立退有之候テハ、 將軍家トハ御手切ノ御取扱

ニテ御後難不容易、 御家ノ御安危ニモ相掛可申御事

ニ御座候間、其節ノ機会能々御察無御座候テハ、御取  
計モ出来兼可申哉ト奉存候、

一天下擾乱江戸中放火乱妨等ニテ、妻子人質等ノ沙汰モ

無之、 公刃御手モ届兼候時節ハ、何方へモ御立退被

成度御事奉存候、右様ノ時節其外 御大名様ニモ、同

様ノ御方可有之候間、御立退ノ御都合出来可申候ヘト

モ、右通争乱ノ世上ト相成候ハ、東海道筋ニテモ城内

御通行ノ場所五六ヶ所モ有之、其外御通路ノ国々関所

ヲ構、自由ニ罷通候儀相調申間敷、其上女中ト見受候

ハ盜賊ノ患モ有之事ニテ、陸路ノ方ハ旁以テ御難題ノ

御通行ニ御座候、就テハ蒸氣船二艘位御取寄被置、船

路ニ被遊候ハ至極ノ御上策ト奉存候ヘトモ、蒸氣船ノ

儀御注文ノ上ナラテハ、御取計モ出来兼可申候ニ付、

往昔ノ振合ヲ以テ、以来ハ大廻船繰越ニ被遣候テ、二

艘位ツ、ハ品川沖へ不断罷居候様、御取計有御座度奉

存候、

但大廻船直重候付テハ、夫丈御入費相重可申候ヘト

モ、外ニ取計ノ道無之、至テ大切ノ御事柄ニ御座

候間、御趣法掛御船奉行等へ吟味被仰付、官売ノ

御品ハ勿論、私商ノ儀モ不苦事ハ御差免、左候テ

官売ノ儀ハ(寄形公御制敷ノ産物全同公史參看)愛許築地御屋敷ニテ、御取企如何可有

御座哉、成丈失費相補候様被仰付度、左候テ是迄

被遣候御用物ノ内、不苦品ハ大廻ヨリ被遣候類ノ

儀共、旁向々へ吟味被仰付度奉存候、

一兼々外女中ノ筋ニテ、箱根・新居ノ御閑所通御申請置

争乱ト見受候ハ、直ニ御出立有之候ハ、御通出来可申

奉存候ヘトモ、是以御後難不容易儀ト奉存候、

一御供人数並女中人数、兼テ極内御吟味被成置度奉存候、

一御乗物並為御持品同様御吟味有御座度奉存候、

一江戸四五里ノ処へ宜場所御見立被置、差当リハ右ノ場

所杯へ御忍ヒ、時節御見合御立退ノ方、然ルヘキヤト

奉存候、

一東海道木曾路川越筋且御閑所等ノ儀共、心得有之面々

へ被仰合、兼テ御通シ御手被付度奉存候、

右之通乍恐愚存之趣手扣書ヲ以テ申上候間、猶又宜

御下知被成下候様奉願候、以上、  
申五月

安田助左衛門

一大廻船ノ儀御治定相成候上ハ、船頭・水手人柄吟味御

船奉行へ急度被仰渡度奉存候、上モナキ大切ノ御方

々様、風波ノ嶮ヲ御渡被遊候様トノ御手当ハ、誠ニ無

勿体次第御座候ヘトモ、外ニ御通被遊道無之処ヨリ出

候事ニ御座候間、深御合可給候、

一築地御屋敷ニテ商法御取企ノ儀、平常ノ御吟味ニ候へ

ハ、無キニハシカシノ事ハ差知候ヘトモ、失費御補ノ

事ハ勿論、右之通商法御取企ノ故ニ、大廻船不断参居

ト申所ニテ、疑念ヲ御サケ被成場ニ相成、彼是可宜奉

存候、

一右大廻船ノ儀ハ、蒸氣船罷居不申処ヨリ、無抛出候策

ニテ御座候間、追々ハ是非蒸氣船御手当相成度奉存候、  
(此時ヨリ汽船講求説起ル)

一御広敷向人数等御吟味ノ事ハ、中々平日ノ了簡ニテ吟

味ノ出来候丈ニテ無之、万々一女中共へ相響候テハ、

大変ニ候間、其時ニ当リ御決断御下知有之度、御乗物

ノ儀ハ御家老衆方、御忍ヒ御入用ノ筋ニテ御出来有之

度候、

一異変到来ニテモ、成丈上御屋敷ニテ守護シ奉リ候儀、詰

人数モ多旁宜敷候ヘトモ、諸所出火ニテ防火ノ術手ニ  
(通乙)  
及不申候ハ、澁谷へ御迎被遊度、乍其上危急ノ時宜

相成申候ハ、江戸近辺宜場所へ御迦可相成、其内大井御屋敷等モ可然御場所ト奉存候、仮令御船へ被召候共天氣合モ有之、勿論夜中ノ方可宜奉存候間、右様暫時ノ御隠レ場所ハ、何レ御見立置被成度御事御座候、右場所ノ儀ハ追々密々探索可申上候、

申五月

右前書ノ手扣書、此節御家老座奥掛書役勤豎山郷之丞急キニテ御国元へ被差立候付、式部殿ヨリ被相渡、(川上)周光(伯名)御様へ細々申上候様被仰付越候付、別紙ニ相付候心得書御吟味ノ為、郷之丞へ相渡置候、

一 萬延元年八月廿六日

夜九ツ半時分、奥平様御使ノ筋申達浪人共三十七人銅御門ヨリ入込候付、相札候処、願ノ趣有之罷出候段申

出、糺合方へ呼入生国本主人相糾候へトモ、此儀ハ推察ヲ以不聞異様申出、左候テ願ノ趣書付ヲ以申出候、右

趣意ハ近来異賊別テ致跋扈、今形ニテハ皇国難立行、就テハ水戸前中納言様分テ御世話被為在候処、同人様

御卒去ノ段承り、当時ノ御英主様ト奉存候間、夷賊(我公ヲ云)御征討ノ先鋒相勤度トノ趣ニテ、中々決心ノ者共故深

被及御吟味、田町御屋敷へ被召置候、右ニ付テハ警衛

ノ人数早速ヨリ被召附、皆共御賄被下、其上 公辺へ形行被仰上候儀ハ勿論、全体水戸浪人共故水戸屋敷へ引取り相成候様、旁ノ手数千緒万端ノ次第二候事、(石室秘稿安田助左衛門日記(国立国会図書館所蔵)にて補註)此時邸中雅俗ノ論喧囂甚シ、未曾有ノコトナリシ故一時混雑極マレリ、

二九六 久光公山田壮右衛門へ与フル書

一 筆申入候、向寒ノ節候得共弥無障致大慶候、於爰許

太守様ニモ御機嫌能、当分指宿御湯治中ニ御座候、然

ハ別封南部様へ差出候書状ニ候間、宜敷頼入候、(遠江守信明)

一 先度ハ南部様ヨリ御品々拝領被仰付難有奉存候、右御

札書状ヲ以申上候得共、貴殿ヨリモ猶又ヨロシク御取

成頼入申候、

一 南部様へ被進物、御家来へ被下物等委曲被申越得其意

候、

一 御参府一条筑前様御不快ニ付テハ、旁御故障可相成哉、(福岡侯)

乍併南部様折角被遊御世話候思召ノ由、被下候ニ付、

太守様ハ勿論拙者ヨリ猶又奉願候ニ付、参上候折御取

成頼入申候、

一 筑前様御参府御延引ノ一条ニ付、委曲被申越得其意申

候、何分無御抛御事トハ乍申、公辺御都合向懸念ニ奉

存候事ニ候、猶追々承知ノ事モ有之候ハ、可被申越候、

一右ニ付伊集院周八被差出候以來ノ義、御家老座ヨリ申

越相成候ニ付、最早承知ノ筈ト致省略候、

一(中村ハ幕吏カ乱ス可シ)中村氏へ被遣物ノ義、ヨロシキ都合ノ由、委曲得其意

候、

一(水戸脱藩士三千余人ヲ云フ)浪人一条イマダ決着不相成候由、是以 公辺御都合向

如何可有之哉、且世評等ハ何様ノ次第ニ候哉、懸念ノ

至ニ候、

一貴殿来春迄被召留度段、南部様ヨリ被仰下候ニ付、日(鳥津左衛門)

置ヘモ申談、爰許御用モ有之候ニ付、先当年中ト申処

ニテ、御側役ヨリ問合相成申候、此上太義ノ至ニ存申

候、

一(天璋院殿御付老女)老女ノ義ハ、御側役方ヨリ委細返答申越筈ニ候、

十月廿七日 周 防久光公

山田壮右衛門殿(為正)

御内用

二九七 水戸浪士帰藩ノ事実文久元年ノ記事ナリト雖モ同伴ナル故茲ニ蒐ム、

萬延二年辛酉六月十二日二月廿八日改元 文久元年

水戸浪人共儀矢張是迄町御屋敷へ被召置候処、水府

表ノ混雜弥不相止、武田修理ナトモ建白後引込罷居、

其上四月廿八日夜、東禅寺夷人旅館へ伐入り乱妨イタ

シ、当分ノ勢ヒニテハ引戻シ方ハ勿論、水戸家ヨリ申

諭シ人ニテモ被遣時宜ニハ迎モ至兼、公辺へノ御内

意書附久世候御請取ハ有之候ヘトモ、其俣被扣置為何

御沙汰モ無之、水戸ノ居合サヘ付候ヘハ、彼御方ヨリ

自ラ引戻方等ノ儀御達可有之候間、夫迄ノ内御内意等

申出間敷被仰達、何モ道筋相塞リ居、浪人共ニハ追々

限日ヲ立御返答致承知度申出、既ニ来ル十五日限御国

元ヨリ否ヤノ儀不申来候ハ、御重役方へ懸御目、御屋

敷致退散度頻リニ申出候処ヨリ、種々評議ニ及ハレ、

御役々心底モ銘々御聞届ノ上、西筑右衛門・安田助左

衛門・汾陽次郎右衛門・岩山八郎太面会被仰付、被方

ヨリ頭立候者五人罷出候ニ付、此方ヨリ申聞候ハ、各

方兩度ノ御紙面ハ勿論、御志願ノ次第モ時々困元へ申

遣、是其内重役ノ者外、公用ニテ出府モ致候付細々

申談、修理大夫并役人中ニモ各方一命ヲ抛、皇国ノ為忠誠ヲ被尽度トノ御心底殆感心ノ次第ニテ、

(安田等方變言)

就テハ一ト先国許へ致御同道罷下り候様、左候ハ、供々事ヲ謀度、尤最初被仰立候趣意于今不相變候哉、此段モ承届候上弥其通りノ事候ハ、被罷下候様可取計旨申来候段相達候処、申出候ハ是迄別テ御丁寧ノ御取扱ニテ、御恩ヲ奉蒙居候上、御国元迄可被召寄トノ御沙汰重畳難有奉存候、乍然私共儀夷人跋扈ノ次第、於政府ノ御取扱延引ニ及ヒ、一日モ難忍御家へ罷出御願申出候ハ、夫々御健白被為在、我々本望モ可相達所存ニテ罷出候ヘトモ、イマダニ御英断ノ処承知不仕、就テハ御国許へ罷越候ヘハ、早速志願通御取扱可被下トノ御事ニ候ヘハ、則御請仕度候ヘトモ、是迄テノ通り御吟味中ニテ、時月ヲ移儀ニ付テハ、私共儀主人ニ後ヲ向ケ、父兄ヲ捨、国元ヲ出去リ、其罪難遁ハ眼前ニ候ヘ共、夷人跋扈ノ挙動

皇国衰態難忍、右等ノ大義ニモ難引替処ヨリ、勅命ニ基ツキ古主ノ遺志ヲ継、是非本意ヲ達度所存ニテ、是迄ハ無抛時日ヲ移シ御待申上候ヘトモ、何分御決着ノ儀承知不仕候テ、御国元へ罷越年月ヲ移候テハ、元主人ハ勿論父兄同盟ノ者ヨリ、苟生偷安ノ疑ヲ受、名義相立不申事御座候間、御志ノ程ハ難有奉存候ヘト

モ、御請仕難ク、乍然猶同列中申談御返答可申上旨申出、勿論御門外奉願候付、御免ノ上ハ本主人方へ立帰り、是迄ノ罪ヲ謝シ候考ニテ、一人モ猥リニ退散等致候者ハ曾テ無御座、夷人其外へ乱妨等致候心得、是又聊モ無御座候間、右等ハ少モ御掛念有之間敷、就テハ中途御府内ハ、御見送御付ケ被下候ハ、是迄御恩ヲ受候方々へ御迷惑相掛、申訳無之旨申出候付、各方御存慮ノ程御尤之儀ニ存候、乍然此儀ハ国元評議ノ次第故、直様御志願通相連ヒ候モ、又時節ヲ待チ候心得モ、其段ハ可申来事候付、此方ニテ推量ヲ以テ御返答ハ出来兼申候間、猶又御一統へ御相談ノ上否可致承知、尤今日ノ形行ハ家老エ申聞候様可致、左候テ右ノ趣ハイツレ国元へ巨細申越候様致度候間、書付ヲ以テ申出候様相達引取候、

(右室稱安田助左衛門日記にて補註)

二九八 三十八名帰郷ノ請願及薩藩ヨリ幕府へ伺

書文久元  
年六月

六月十三日指出候書付

昨日被仰聞候ハ、我々共奉願候義ニ付、挨拶モ追々延

引ニ相成候得共、此度各一同国元へ罷越候様申来候間、  
 違反之者モ無之候ハ、其趣キ急飛ヲ以相運可申トノ  
 御事ニ承知仕候、随テ我々共願之筋、御国元ニテ弥御  
 尽力被下、御評決ニ可相成哉相伺候処、其義ハ何レ国  
 元へ被相越、面会之上否挨拶ニ及申ベク哉トノ御申聞  
 ニ付、愚慮仕候所、御当地御重役方ニテ御指支之所、  
 縱令御国元へ罷越候共、急速之御挨拶ハ如何歟、且又  
 当時 公辺ノ御模様ニテハ建白イタシ候共、迎モ御取  
 用ニハ不相成候間、推テ被遊カタキトノ御義ニ付、残  
 念至極ニ存候ヘトモ不得止事、御門外相願度申上候処、  
 我々共身分之義旁御心配被下候義、誠ニ難有奉存候ヘ  
 トモ、身之上丈ケノ義ハ一時ノ事ニテ、後世名分之相  
 立候様御憐察被下度奉申上候、此義一同勘考談論モ仕  
 候処、当今浪人トハ奉申上ナカラ、全ク天下危急之形  
 勢故、一旦父母之國ヲ立出候義ニ御座候カラハ、  
 勅意ニモトツキ先主之遺志ヲ継キ、万分ケ一モ奉報候  
 効シ相見候ハ、是ヲ以テ前路之罪ヲ贖候積リニテ、旁  
 苦心罷在候処、当時迎モ正氣相振不申時節ニ、長々御厄  
 介ニ相成居候テハ、遠クハ天下之誹モ如何、近クハ元  
 主君へ対シ、何等之疑心相受候テモ無余儀次第、実以

一同之進退、此ニ相窮候義ニ御座候、依テハ申上候通  
 リ、元主家へ是迄存詰罷在候次第逐一申演、前路之  
 罪ヲ相謝候心得ニ御座候へハ、御門外致候テモ激発等  
 ノ義ハ相忍、御屋形(我藩ヲ云)へ御迷惑ニ相成候様ノ義ハ決テ不  
 仕、速ニ相引取可申候間、一日モ早ク御聞濟被下度、  
 尤モ 公辺御差図延引ニ罷成儀モ御座候ハ、私共直  
 ニ罷出心底具ニ申上候様仕度、此段奉願候、以上、  
 六月十三日 三十七名連署  
 二白、我々共兼々奉願候儀ハ、  
 勅意ニ本キ尊攘之大義相貫、公辺之御為筋深ク存  
 詰罷在候儀ニ候へハ、毛頭我意押張候訳ニハ決テ無  
 之、後日御明断之上ニテ右志願之処、御取用被下候  
 様返々モ奉願候、假令引取候テモ御精誠乍蔭奉仰望  
 候間、幾重ニモ御尽力被下候様一同奉申上置候、  
 二九九 公辺へ届書  
(庚申年)  
 去年八月、当家へ推參致候浪人共之儀ニ付テハ、追々  
 御尋之品モ有之、其時(々々)ニ御答申上置候通りニテ、基当家  
 へ志願之趣有之、其筋之役人共談判之上ニ無之候テハ、  
 評決ニモ及兼候事故、一往国許へ引越候様有之度、左



候へハ先般於長崎買入候蒸氣船取寄、急々国許へ差越候様イタシ度趣申聞候処、願意之義当節早速ニ御取用ニ相成候テ、御国元へ差越候様ニトノ義ニ候へハ、則御受モ可申上候得共、未タ御評決ニモ不相成未定之所ニテ、罷越時節ヲ相待候様ニトノ御事共ニテハ、元來生国ヲ出候節、堅ク申談置候趣モ有之候ニ付、同盟之者共へ対シ名義モ不相立、只々偷安ノ為ニ御当家へ奉綯候様ニ相響、何分空シク移時日候義難仕、無是非次第ニ付、一同退散仕度旨申出候間、兼テ申聞置候通り、當時修理大夫家來へ御預ケ被仰付、卒爾之義無之様取計可仕旨被仰渡置、猶国許ヨリモ厚ク被申付趣モ有之、万一モ卒爾ニ門出差許、各之身ノ上ニ相掛リ候様ノ義モ候テハ、主人へ対シ役々共一分之申訳モ無之、旁以孰レ、公辺へ奉伺候上ナラテハ、進退為致兼候、勿論右之儀ニ付テハ、於公辺ニ深御案思御評議之品モ可被為在奉恐察候旨申聞候処、私共義素横濱又ハ御府内外国人宿寺等へ乱妨等イタシ候義ニ候へハ、奉慕御当家ヲ候ニモ不及、疾ニ乱入モ可致候へトモ、元來ノ志願全ク左様之訳ニ無之、外夷跋扈之義

皇国ノ御為ニ暫時モ其俣ニ難捨置、御大家之義故相絶、

是非 公辺へ被仰立候上ニテ、御打扱被為在度、左候ハ御先鋒可相勤旨、申上置候義ニ御座候間、私ニ横濱其外へ致乱妨候杯之心底ハ聊モ無之候間、其所ハ御安心可被下候、尤ケ様數ケ月蒙御厚恩候テ、其上御当家へ奉掛御迷惑様之心得ニハ無之、右通り御建白之上之義ヲ奉願次第ニ有之、右之願御取用無之上ハ、徒ニ時日ヲ送り候テハ、元主人且同盟之者共へ対シ候テモ名義不相立、父母妻子等有之者モ御座候へハ、彼是思案居可申、旁以此上ハ一日モ早々生国ニ立戻リ申度、決テ御門外へ出候テ、銘々散乱致候様之義ハ不仕、本国へ立戻候テ、一旦主人へ後ヲ向ケ出去候処ヲ深く相謝シ、何様トモ所刑ヲ相待候心底ニ御座候間、御掛念モ候ハ、御府内出離レ候迄ハ、御見送り御付添被下候テモ宜敷、然上ハ一日モ早ク公辺へ被仰立、御暇仕候様取計呉候様ニト、一同ヨリ願出、若ヤ公辺御差図延引ニモ罷成候ハ、私共直ニ罷出候上、心底具ニ可申上旨ヲモ申立候、就テハ此上於当方門出相否ミ候筋モ無之、尤右様申立候上ハ、何ソ御懸念之筋モ無之事ト奉存候間、前文願之趣ニ応シ中途警衛相付、生国へ差返シ候様可仕候間、得ト速ニ御差図被成下度奉存候、

尤御主家へ御引取之上ハ、兼テ修理大夫申上置候通り、  
寛大之御処置御座候様仕度、此段早々申上候、以上、

六月十九日文久元年酉 松平修理大夫内

(古賀守店)  
西 筑右衛門

浪士掃蕩ノ事実、樺山資之日記ヲ参看シテ、彼我ノ事情及有志  
連中所論ノ喧シカリシヲ知ルヘシ、

三〇〇 水戸侯病氣藩中往来鑑札引合達書

三〇〇ノ一  
水戸殿

前中納言殿於国許、此節重病ニ付テハ家中ノモノトモ  
用向被申付、時々為致往来候所、其期度々及御達候テ  
ハ、公刃御手数数ニモ相成、且用向ニ寄差急候節差支  
之品モ有之候間、当分之内水戸道中駅々へ、目付方印  
鑑差出置、合印持参往来為致度被存候、依テハ印鑑引  
合之上、無滞旅行相成候様、其向へ御達ニ相成候様被  
致度、此段御達ニ及候様被申付候、

申八月

右挨拶

被仰達之趣ハ無御抛筋ニ付、当分之内期度々御伺ニ不  
及、印鑑持参御家来旅行之儀不苦候、尤水戸道中之内

千住宿・取手宿ハ問屋場、土浦宿之義ハ出役罷在候土  
屋采女(貞直)正家来へ、道中奉行ヨリ右印鑑相渡置可申候間、  
右へ引合通行可有之候、依之印鑑之儀ハ、山口丹波守  
方へ御差出被成候様可被申上候事、

右八月廿日即日日出、即日持帰、

(池田茂政旧名)  
一松平九郎齋事、為看病差下候義ハ、御見合被成候様ニ  
トノ御沙汰、

水戸殿明廿三日出立可致之処、俄ニ腹痛ニ付先被見合  
候、此段申上候様被申付候、以上、

御用番大和守宅へ  
夜九時半罷越候、

八月廿二日

楠 錠之助

三〇〇ノ二  
前中納言殿病氣ニ付、為看病水戸殿国元へ御暇之儀願  
之通被仰出、去ル廿三日御当地発足可被致之処、腹痛  
氣ニ付延引被致候処、快候ニ付、明廿六日御当地被致  
発途候筈ニ御座候、此段尚又申達候様被申付候、

夕刻御用番大和  
守宅へ罷越候、

八月廿五日

水戸殿御使

楠 錠之助

同 御使

興津藏人 (良能)

九月四日

三〇〇ノ三

今朝御当地被致免途候、此表へ中山備前守、宇都宮彌(信実、松岡藩主)

綱水戸藩家老(良能)三郎・興津藏人・同所左衛門差置被申候、

公方様御機嫌好被成御座候段、逐々御申聞類入被存候、以使者被仰聞之、

八月廿六日

同 御使

楠 錠之助

三〇〇ノ四

前中納言殿所勞逐々不出来被在之、昨廿五日差重被及

大切候旨、水戸表ヨリ来候、依之被申達候、

八月廿六日

松平 大学頭 (頼誠、守山藩主)

前中納言殿於国元永蟄居被成御免候、於私儀難有奉存候、右御礼、

三〇一 一橋附家老へ達書

(慶吉)刑部卿殿御事御慎御免被 仰出候へトモ、御親族方其

外他へ御面会、又ハ御文書御往復等ノ儀、都テ御遠慮被在之候様ニトノ御内沙汰ニ候、尤無余儀事ハ兼テ被仰聞様可被成候、

三〇二 尾張殿家老へ達書

尾張前中納言殿御事、御慎御免被 仰出候得共、御在

国等被成御願候儀ハ不宜、且又中納言殿ニモ、度々御

対面等被成候儀ハ御斟酌被在之、御親族方其他へ御面会、又ハ御文書御往復等ノ儀、都テ遠慮被在之候様ニトノ御内沙汰ニ候、尤無余儀事ハ、兼テ被仰聞候様可被成候、此段可被申上候、

九月四日

右御慎御免之儀御連書ヲ以京都御所司代へ被仰遣、伝奏衆へモ御達在之候事、

三〇二ノ一

前中納言殿ヨリ表向書通ノ分、使者口上ニテ被申越候方ニ、相心得可然哉奉伺候、

但京都所司代衆、大坂御城代ヲ初勤向モ属候、書通之儀ハ苦間敷哉、是又奉伺候、

同断附女中ヨリ奉文ヲ以、取遣之義モ先見合置、無拠儀ハ本殿附之女中ヨリ奉文ニテ、申越候方ニ相心得可申哉、此段モ奉伺候、

九月八日

竹腰(正實)兵部少輔尾張藩附家老

三〇二ノ三  
右挨拶

書面表向御書通ノ義ハ、年始暑寒其外臨時吉凶等ニ付、書札等御取遣ノ儀、並御附女中ヨリ差立候文使之儀ハ不苦候、尤御直書並御側祐筆御内状ノ儀ハ、御遠慮被成候様可被取計候事、

尾張前中納言殿慎御免被 仰付候、就テハ遠慮之儀此程御書付ヲ以、御達之趣ハ御座候得共、貞慎院殿簾中等対面之儀ハ、尾張殿ニ被准候積ニ相心得可然哉、其余松平中務大輔儀ハ、外親族共違親子之間柄、逐々老年ニモ及候間、何卒対面被致度内存ニ被在之候、右不苦儀ニ御座候哉、右之趣及御内談候様尾張殿被申候、

九月十四日

竹腰兵部少輔

三〇二ノ四  
右挨拶

書面之趣無御余儀筋ニ付、御対面被成不苦候、尤度々御対面之儀ハ、御斟酌被在之候様可被申上候事、右封候テ竹腰兵部少輔へ可差出旨相達、尾州殿御城附江達之、

三〇三 鷹司殿へ達書

鷹司(政通)太閤殿

右水府ト御統柄之儀、殊ニ老公ハ別テ御親敷、先年来外夷之事情等折々被申越候儀モ有之由、将又小林民部(貞典)ヲ以水府家来ヨリ申出候事件ハ、尋常之内願筋トモ違天下ノ重キ事在之、被対

閑東江候テハ、急度御教示御取合被成間敷候処、御慮事寄右府殿被取持候テ、夫是被差働候次第ハ勿論、三公方諸藩浮浪人ハ説ニ惑溺之訳柄、於太閤殿不被存訳ハ在之間敷、多年御在職之所詮モ頓着不被致段、等閑之御所為ニ在之、其外高榑兵庫ヨリ差出、閑東珍説書之内ニハ、人心狂惑ニモ拘り候トモ難申所、猥ニ被入

叡聞候御心中、イツレ共相分兼候儀ニテ、此度之一条關係被致候モノ世説難遁、都テ御老年御健忘之御所為ナリトハ、更ニ不相聞、彼是以御不行届之事共二相聞候事、

鷹司(輔照)内大臣殿

右水府家来ヨリ小林民部ヲ以テ内願申出候事情ハ、予

老公ヨリ申付在之、周旋致候儀ニテ、右御統柄トハ乍申、自余ノ内願トハ違、

天下ノ重事ニ候得ハ、被對

関東候テモ、急度御教示被為在候旨、

勅諭尊奉御催促ノ儀、兼テ御議論ニハ全

叙慮ニ事寄、内願筋御取持ニ相当リ、第一

公武御合体之御趣意ニ相悖リ、加之

朝議ノ趣等民部ヲ以テ、水府家来へ被相違候段、隠謀

ニ関係不被致トノ御処置ニハ無之、其上彼是志説被信

儀、実ニ心得違ノ事共ニ相聞、一体右府殿ニハ反覆ノ

御生質ニテ、御油断難相成御人体ト心得候段、民部吟

味之節申立居候事、

〔安政四年の文書カ〕

### 三〇四 近衛殿へ達書

〔東應〕  
近衛左大臣殿

右外夷御処置之儀〔御黨中御姫君〕薩州御統柄モ有之、同藩及歌道之御

門人杯之水府家来相伴窮ニ罷出、

天下之人心居合方ニ事寄、関東御処置如何之旨品々入

願入説致候、右ハイツレモ不容易次第ニ候へハ、急度

御教示御取合被成間敷所、内願之趣御思案可被成置、

御答被成候儀共

公武御合体之御趣意ニ相悖リ、乍暫内説御委任、三公

方御先立之所詮モ無之、一体御処置之儀ニ付テハ、始

終三條内大臣殿〔東應〕ト御因縁ノ儀ハ、鷹司殿家来小林民

部・近衛殿老女邑岡儀モ申立罷在候間、御引合御賢察

可有御座事、

〔安政四年の文書カ〕

### 三〇五 三條殿へ達書

三條内大臣殿

右外夷一条評議筋專ニモ取扱、東武之形勢御心得置配

慮可在之見込ト乍申、水府家来其外浮浪之モノ杯殿ニ

面謁致度、

天下ノ人心居合方ニ事実、内願筋又ハ

関東御処置如何ノ旨品々入説致候事件、イツレモ不容

易儀ニ有之、就中

勅諭御差向ノ義ハ、実以重大之儀候処、都テ尤ト被聞

請、仮令其儀相整不申候共、去年八月

勅諭御文言之内ニ葺頭入説等モ氣味差合、書綴候ト相

見候草稿、當中へ被差出儀実以不輕儀、既ニ御決定上

水府家来へ御渡ニ相成候儀共、夫是

公武御合体之御趣意ヲ壊り、殊ニハ前官任中ヨリ重立引受、疎密會得ノ上ハ尚更ニ候儀、水府家来等へ隠謀筋荷胆被致哉ニ相聞、彼是忘説ヲ被信候ヨリ、今度之次第ニ及候儀共、重々御心得違之事共ニ相聞候事、  
〔安政四年の文書九〕

三〇六 東叡山宿坊惠忍院歎願書

奉歎願候口上之覚

一 水戸家

勅諭返納候儀ニ付、一国ノ騷御家ノ浮沈ハ不及申、終ニハ不容易一大事ニモ可相成ト、水戸前中納言殿並家老始役々之者、殊之外被致痛心、何卒返納之儀暫ノ間御猶予被成下候様、只管歎願被仕候、旧冬ヨリ是迄ノ模様左ニ申上候、

一去未十一月十七日、安藤〔信馳〕對馬守殿ヲ以、今般京都ヨリ被仰越候ハ、昨年八月中御差下ニ相成候

勅諭返納候様申上候間、早々返納可有之趣ニ付、御領掌被成、早速国許へ側用人横山〔信照〕甚左衛門被差下、前中納言殿へモ申上、則御承知ニテ持參之手続ニ相成候処、国許一藩不伏ニテ蜂起、甚左衛門義登城居候俣退出被成候、門々相固メ擒同様之仕合ニ御座候ニ付、前中納

言殿種々申諭有之候得共、聊聞入不申、右次第江戸屋敷へ申来候処、其間對馬守殿ヨリ度々催促有之候故、当六月十六日〔公也〕家老白井織部・目付中山庄司左衛門・徒目付國友忠之助等差添被差下、此度ハ如何様ニモ申諭、是非共持參候様被申付候処、水戸城下ヨリ二里程手前長岡宿ト申所へ多人數出張、弓鉄砲迄モ相携罷在、往還中ニ大抗ヲ建、大日本国主城主忠楠公標ト申事大文字ニ認有之、縱令公命ニモセヨ、丈夫ニモ大義ヲ打破候モノ相通候事不叶ト、多勢取囲ミ乱妨手込、召連候供之者打擲ニ及、言語同断之仕合、既ニ勤弁難相成覚悟モ相定候得共、一大事之御丈故、目付等様々申有メ、且彼ノ者共へモ申諭、就中徒目付國友忠之助、生年廿二歳氣力英壯之者ニテ、多勢相手一夜一弁論多端間、織部等相返候得共、一国土民蜂起如何共致方無之、一先帰府右模様申上、如何共可仕ト覚悟、帰府之節モ長岡宿ニテ手込相改、帰府不為致杯申候ニ付、人質同様目付相殘織部計相返、二月九日松戸宿迄罷越候処、中納言殿被仰兼、同宿迄迎ノモノ出シ被置候処、御一品持參不仕ニ付、殊外御立腹ニテ、国元土民共主命相拒候段不届、且織部等執政ヲモ相務不行届之段、職掌モ

不相立候間、屋敷へ罷歸候義不相叶、早々国元へ相戻り、是非持參候様、イツレモ 公迎へ対シ不相濟ト御覺悟之御気色、織部義モ尚更不相濟、是以覺悟之体ニテ、万々一之義モ有之候テハ、尚又天下之御大事ト、同役其外老練之者双方へ利害取扱、御託等申上、右等国許之動揺等對馬守殿へ逐一申入、日延被相願候処、五日限トノ御含ニ相成候へトモ、日限ニテ行届候模様ニ無之候間、尚又翌日家老ヲ以テ日延相願候処、漸日限無之御含ニ相成、然共返上之儀ハ無油断、イツレトモ速ニ相整候様被申聞ニ付、江戸詰役人罷下り候テハ、迎モ不行届事情ニ付、国許役人ニ精々取計候様被申遣、殊ニ前中納言ニモ別テ御辛勞被成、蜂起者へ心得違無之様、御直書ヲ以御諭候得共、結句奉誹誘候程ニ至り申候、二月十二日国元家老折浦美次郎登城之節何トモ不致、鳥銃ニテ相打候処当り不申、翌十四日側用人久木直次郎城門ニテ、双方ヨリ鎌ヲ以テ闔打ニ出會、三ヶ所重手蒙り候得共、無双ノ強者故、抜刀ニテ槍打切り逐懸候得共、イツカタヘカ逃去候ニ付、帰宅養生生活命仕候、右イツレモ前中納言殿ヨリ御諭之命ヲ請テ周旋仕候事候由ニ候、其外白昼杯廿三拾人ツ、鉄砲切火

繩ニテ横行、或ハ前中納言殿御名目ヲ偽、若輩之者ヲ調略仕候者モ有之由、御聽ニ達候ニ付、最早其侶尋常ノ御諭シ而已ニテハ難相濟、同十八日家老鳥井瀬兵衛（忠順）・側用人岡田新治郎・用人中邑新八・目付留田三保（寛）之助（寛）・中山庄司兵衛・徒目付國友忠之助其外戰隊五組為取押被差向候処、同日雨雪寒氣甚敷、手筈違ノ事有之、戰隊着到不致、城下ヨリ一里程途中臺町ト申所ニテ、役方休息待合候内、日暮敵方右出張ヲ伺候哉、百五十人程逆寄ニ押寄、評定所ヲ目掛馳通候ニ付、大ニ驚キ備相固メ、闇夜取合言葉ヲ定メ、問道ヨリ敵ノ前道口へ出テ相進、趣意相尋候へトモ、悪口等申既ニ打懸候ニ付、不得止事國友忠之助第壹番ニ下町壺丁目木戸口ヨリ鉄砲一発三人打倒シ、早込ノ間敵槍刀ニテ來り、間合迫り不及抜刀、鉄砲ニテ散々ニ打合、其後抜刀戰鬪之処、家老瀬兵衛馬上之所へ敵七八人槍ニテ取囲、既ニ危ク候処、前後ニ三人程組付ルヲ壺人握ミ、田ノ中へ打込ミ怖レ逃去、中山庄司左衛門式人ニ亘り合、誤テ川中へ落入難儀之処、敵砲丸打懸候へトモ、暗夜故不当、辛クシテ引取、其外瀬兵衛与力高橋何某格別相働キ、其外イツレモ分外之働ノ由、敵方ハ着込

錢入頭巾ニ身ヲ固メ、此者素肌ノ上簀相用候故、暗夜白ク相見目印ニ相成、殊外難儀仕候由、併一同働ニテ水門見付ト申所ニテ喰留、城内ニ入不申、夜明戦地見分之所、敵方死骸ハ不殘取片付、何方ヘカ持去候様子ニ御座候、右様大變ニ相至リ戒嚴申計、門々固人数配在町同夜巡見等ニテ、以ノ外ニ騒動ニ及、廿三日又々被命精兵相撰、五百人計為取押差向候処、此度ハ相敵シカタク一同長岡宿迄退散、領中敵敷掠<sup>ア</sup>索致候得共、他境ヘ洩候様子ニ付、右等之趣具ニ御届申上候、畢竟根本ハ御書物返上ノ事ヨリ、右騒動一國ノ者イツレヲ敵、何ヲ味方ト見定兼、浮説区々ニテ、同僚同役ニテモ油断不仕様相成、逆モ返納被成兼候間、其時御猶予之義歎願被致候ヘトモ、難行届模様無之処、当三月三日之變事出来、両公並家老役向々ハ内外大敵ヲ引受、又公辺ヘ対シ恐縮ニ不堪、日々落涙歎敷被存機、偽トモ御直ニ見聞御真裏御誠潔之所、右様御難儀被成候義、何共恐入供ニ悲泣候外無御座候、只々御書物返納<sup>ア</sup>存暫之内御猶予之義、御歎願ノ通り御寛宥之御沙汰被 仰出候ヘハ、只今ニテモ無事ニ人氣相鎮候ニ相違無御座候、鎮靜被成候上ハ、何時ニテモ返納之儀相違無御座

候段ハ、両中納言殿並家老始心中ニ御座候、何分騒立多輩落命等モ仕候最中、如何様 御威光相<sup>ア</sup>相<sup>乙</sup>候テモ行届不申、弥激變候様相成候間、何卒御寛宥被 仰出候様仕度、御当家之御義ハ知ナカラ、文武御盛隆国家第一、御藩屏ニモ被為存、尚更御賢明ノ御仁勇之趣奉敬承候間、何卒御言葉被為濟候ハ、御寛宥被 仰出候ニ、御相違不被為在ト奉恐察候間、イツレニモ御慈計ノ程於野院偏奉願候、左候ヘハ水戸家国土民一体、平安ハ申迄モ無御座、天下之御大幸ト奉存候、抑此度之騒動ハ一國ノ禍ノミナラス、終ニハ天下ノ御一大事ニモ相亘リ、実以不容易御時節、水戸家一儀ヨリ御一大事ニモ及ヒ候テハ、誠以恐入候義ト両中納言殿ハ勿論、役々深く心ヲ悩シ、寢食相安ンジ不申義ニ御座候、何卒右等不容易次第御賢察被下置、御慈計之程幾重ニモ奉歎願候、以上、

水戸宿坊 (東叡山支寺)

惠 忍 院



〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
文久元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙數七十八枚)の記載あり〕

## 目録

御事蹟総覽

各郷地頭へ訓令

山吹ノ間詰(門葉ノ詰所)ノ人々ヲ二ノ丸御茶屋へ召出

サレ示サレタル御親書

国老島津左衛門久ニ出府ヲ命セラレ発程前日附与セラレ

タル御親書

茂久公家老中へ御附与御親書

武芸師範ノ輩へ教育ノ方針御訓示書

久光公国政介助達書

当時ノ形勢概括

輕罪者及府内無宿者箱館寄場へ送致達書

府下近在浪人及ヒ無宿者取締達書

非常ノ時勢質素訓令

柴山愛次郎実兄良助へ与フル書

改正軍隊操練概況(前記柴山カ書翰ニ添付)

島津久明家記鈔

有村武次(海江田信義旧名)轟武兵衛ニ与ル書

当時幕府老若政務分担人名

養蚕奨励布令

安田轍三柳葉製綿許可達書

島津周防(久光公旧名)山田壮右衛門ニ与ル書

藩内農作形況(石室秘稿鈔)

茂久公御親書ヲ以テ島津周防久光ヲ因父ト唱フヘキ旨ヲ

令シ玉フ

彗星顯ル(天文館上申)

参考 松方正之進柴山良助ニ与ル書柴山氏所藏

柴山愛次郎実兄良助へ与ル書

参考 白石正一郎日記鈔

学風匡正ノ御親書

国家危急ノ概要 (無名氏)

参考 水戸浪士対話日記摘要 安田助左衛門日記鈔

茂久公外国人取扱御親書

水戸藩暴徒処分布達

清国長毛賊ノ形勢琉人上申第一

琉球吏清国ノ形勢具申第二

魯艦処分宗家へ達書

清国騷擾宗家居書

久光公御改名御届

島津周防山田壮右衛門へ与ル書

百姓町人外国船買入及ヒ広ク航海ヲ許ス

洋風ノ被服及ヒ冠帽禁令

御曲輪内銃隊操練ヲ許ス

武田山川両士招喚ノ報

幕府並墨利加合衆国へ軍艦製造御頼書簡

大關和七郎蓮田市五郎所刑

水戸藩士細江某藩邸西門ニ於テ屠腹

参考 義學録抄 是校筆  
夷鈔

桂久武ニ大島警衛ヲ命ス

参考 桂久武日記鈔

城下窮士救助調査員 桂久武日記鈔

参考 寺島宗則自記鈔

浪人駕籠訴及ヒ乱妨ノ私報

以上四十九条

万延二年辛酉二月十九日改元  
文久元年酉二月廿八日布告

紀元二千五百二十一年 清曆咸豐十一年  
西曆一千八百六十一年

孝明天皇 百二十  
代統仁 御即位 弘化四年丁未  
十月十三日 十五年

將軍家茂公 世十四  
襲職 安政五年戊午三月

忠久公 世第一  
受封 八十二代後鳥羽天皇 文治二年丙午十二月  
十月十五日 六百七十五年 (マ)

忠義公 世二十  
知政 安政五年戊午四月 (マ)

### 三〇七 総覽

正月元旦

年首之御式先規ノ如シ、

五社其他寺院御家老御代拝先規ノ如シ、

同日、御一門四家大身分及ヒ諸士登城、御家老ニ謁

シ、御両殿様へ年首奉賀先規ノ如シ、

同三日、諸郷及社寺登城、年賀先規ノ如シ、  
同六日、砲術館開場式先規ノ如シ、

同十一日、先例之如ク諸役人昇級転遷左ノ如シ、人名  
詳ナラス、他日考証記載スヘシ、

### 三〇八 各郷地頭へ訓令

#### 諸地頭へ

地頭職被仰付候儀ハ不軽事ニテ、兼テ其郷被預置、何  
篇自身ノ裁断ヲ以致指揮、非常ノ節(二隊ノ長、以下全シ)ハ物主ヲモ被相勤  
重職ノ事候ヘハ、兼テ其嗜可有之筈候得共、平日其所  
之人氣盛衰ヲ致熟察、風俗ヲ正シ、何篇疎意無之親睦  
愛憐ヲ加ヘ、人心致帰服居候様無之候テハ、急変ノ節  
御国家ノ大事ニ相拘不容易職務ニ付、深被致考慮、万  
一異変到来ノ節ハ、急場ノ御用無滞被相勤候様申渡、  
大番頭ヘモ可申渡候、

正月十五日

筑後川上久封

伯耆島津久福

攝津喜入久高

地頭職ノ由来ハ、島津家軍法ノ巻其他天文・慶長比ノ軍賦令条  
ニ詳記ス、参照スベシ、

### 三〇九 山吹ノ間詰(門葉ノ詰所)ノ人々ヲ二ノ丸

御茶屋へ召出サレシサレタル御親書

寄合以上ノ儀ハ、往々重役ヲモ申付候身柄ニ候得ハ、

学問第一ノ儀ト、近頃

(斎興公・斉彬公)

御面殿様ニモ毎々被仰出置、各承知ノ通候処、兎角旧(森)

平ノ懸弊清金等

弊改リ兼、別テ不可然事候条、以来尚又当職ノ儀ハ勿

論、文武ノ道相励、平日ノ言行省察ヲ加ヘ、互ニ礼讓

ヲ以一和致シ、聊タリトモ放逸ノ情態ニ至ラス、此涯

弊風一洗致シ、先祖勲功ノ家名不致失墜、国家ノ用ニ

相立候様心得專要ノ事ニ候、

正月廿五日

(年期異ナルカ)

### 三〇 国老島津左衛門久二出府ヲ命セラレ発程

前日附与セラレタル御親書

今度參勤御猶子ノ儀、於、公辺御例格モ有之、不容易

事候得共、格別ノ訳ヲ以願通被仰出難有存候、右ニ付、

(安永年ヲ云フ)  
来々々年參府迄ハ暫時間モ有之候間、江戸屋敷中取締向

猶又嚴重ニ無之候テハ不相濟事候ニ付、第一、公辺ノ

御法令ヲ相守リ、一統精勤致シ、諸役人末々ニ至迄古

代ノ国風ヲ不失、質素節儉ヲ用ヒ、奢侈放肆ヲ正シ、文武ノ道相励候儀肝要ニ候、就中改革向ノ儀聊不致廢弛、諸事行届候様、出府之上式部等在郷国老川上式部久美申談、屹度向々へ可申渡候事、

正月 日日詳ナラス日後ナラス

### 三二一 茂久公家老中へ御附与御親書

家老中へ

文武修行・質素節儉礼義廉恥ヲ相嗜ミ、殊門閥ノ繪嚙ニ大身ノ面々ハ猶更風俗正敷、各初末々ノ役人ニ至迄職掌相励、

万事公平ニ致沙汰賄賂一切受用不致、無益ノ酒会・遊興等企間敷トノ趣共、御而殿様ニモ分テ被仰出置、

近頃ニモ申渡置タル事ニ候得共、兎角旧来ノ惡弊改リ兼候儀、我等不肖ノ故ト別テ歎息ノ至ニ候、近代内外ノ憂患追々致増長、此末如何様ノ時勢ニ可立至モ難計

候ニ付、以来屹ト古代ノ正風文祿・慶長頃ヲ云フノ繪嚙ニ不復候テハ、国家ノ安危ニ相拘リ不可然事ト存候、

一 去年三月、参府途中ヨリ不快ニテ引返シ候処(井伊直弼横死ノ報ニ接シ、筑後松崎駅ヨリ御病氣ノ旨ヲ以テ御引返シヲ云フ)、別段ノ訳ヲ以参府御猶予被 仰出、難有

次第二候、就テ来春ハ、不致参府候テハ不相濟事候処、(文久二年)

色々異説申立、且供不申付候得ハ、押テ可致隨從相考候者モ有之哉ニ相聞得候(大久保利通日記及ヒ兒玉貞一家記參看)、不容易時節ト存シ詰メ、国家ノ為ヲ謀リ候

儀ハ尤ノ事候得共、却テ 公刃ハ勿論諸藩ノ嫌疑ヲ受ケ、終ニハ国難ヲ醸シ出シ候ハ案中ニテ別テ致心配候、

実ニ忠節ノ志有之候者、万々一異致致到来候共聊不致動揺、命令ニ從ヒ精力ヲ尽シ候様有之度事ト存候、

右ノ趣各中厚相心得、諸事不致緩怠様可取計、若此上不守之者於有之テハ無遠慮可及沙汰候事、

正月 廿八日

当時壯年ノ曹從駕冀望者多ク、御家老等ノ宅ニ詣リ請願スルモノ続々タリ、其謂フ処志願採用セラレサルニ於テハ、脱走為スコトアラムトノ意旨ヲ以テス、当路者頗ル困却答弁ニ苦シミタリト、其事情大久保利通日記ニ細述セリ、参照スベシ、

### 三二二 武芸師範ノ輩へ教育ノ方針御訓示書

武芸ヲ励ミ筋骨ヲナラシ候事ハ、当世ノ急務士ノ当然ニ候得共、又君臣父子ノ倫理ニ暗ク礼義廉恥ノ道ニ疎ク、義ノ大小輕重道ノ正邪曲直モ弁セスシテハ、却テ

忠孝ノ大義ヲ過リ、不思モ禽獸ノ域ニ陥リ候事、古今其例不少、別テ遺憾ノ至ニ候、自ら諸師範ノ者共ハ文武偏廢不致様、子弟ヲ致教育管ニハ候得共、猶又此旨相守、其身ノ省察ハ勿論、精々子弟ヘ教導致シ、文武ノ本体ヲ不失、士道ヲ不汚様可心掛候、諸流ヲ立候ニ付テハ秘伝秘術銘々有之、軽々敷難洩儀ハ当然ノ事候得共、甚敷ハ流派ニナツミ己ヲ進メ他ヲ退ケ、寇讐ノ如ク心得違候事、近古以來ノ弊風ニテ不可然事候條、國中ノ士民ハ互ニ兄弟骨肉ノ情義ヲ存シ、礼讓ヲ以テ交リ、私ヲ捨講習練磨致シ、国家ノ実用ニ相立候様有之度存候事、

二月六日

二月六日ヲ以テ、二ノ丸内御茶屋ニ於テ御親ヲ道ノ御親書ヲ授ケラレタリト云フ、

### 三三三 久光公国政介助達書

文久元酉年二月十八日、(久世)大和守宅へ松

平修理大夫家来島津左衛門呼可渡書付

松平修理大夫へ

松平修理大夫忠義公

(久光公自名)島津周防儀、其方家督之節ヨリ、国政向万端心添致精勤候趣相聞候ニ付、(文久二年)来年其方参府之上ハ、(政事カ)国許国政向猶厚ク、(相心得脱カ)万事行届候様可取計旨可被申聞置、此段内々可達トノ

御沙汰ニ候、

(日記雜録追録卷百六十六東京大学所蔵にて補註)

如斯達セラレタルニ依リ、公然国政ニ参与セラル、ニ至レリ、（政事カ）斉彬公薨去ノ後ハ、家老中ノ顧問トモ云フベキ地位ナリシガ、是ヨリシテ政務ニ名義ヲ載セラル事トハナリニキ（久久保利通日記・児玉貞一建言書参看）

### 三三四 当時ノ形勢概括

文久元年辛酉正月、幕府大錢・鉄錢ヲ鑄ル、文ヲ寛永通宝ト曰、錢背波紋ヲ凸起ス、世ニ四文錢ト称セシ是レナリ、二月 天皇内帑ヲ発シ山城ノ窮民ニ賑シ、將軍家茂ニ勅シテ賛成シ、海内ニ普及セシメントス、水戸浪士檄ヲ伝へ、横濱ノ外人ヲ攘斥セントス、諸藩ノ浪士競起リ各所ニ集合ス、(Cobden's etc.)家茂水戸藩ニ令シテ鎮撫セシメ、且外國館ヲ敵警ス、露艦對馬ニ来リ物ヲ奪ヒ吏ヲ殺ス、宗義和之ヲ論セトモ止マズ、幕府之ヲ按問ス、露艦即去ル、五月有賀重信・岡見留次郎等十余人品川

東禪寺ヲ襲ヒ、英國人二人ヲ傷ク、英公使怒リ佛國・(A. Lord)  
 和蘭國公使ト相謀リ、横濱ニ退キ、兵ヲ率ヒ江戸ニ逼  
 ラントス、老中安藤信正諭解シテ事<sup>(權力)</sup>宥ク止ム、七月英  
 人ニ内海ヲ測量スルコトヲ聴ス、十一月和宮東下ス、  
 長澤蒼翠上書シテ上洛ノ礼ヲ復シ、陰カニ亡命人ノ京  
 師ニ輻湊スルヲ防キ、正議ノ人ヲ登庸シ、一橋慶喜ヲ  
 シテ幕府ヲ補佐シ、松平慶永ヲシテ大老タラシムヘキ  
 ヲ条陳ス、是年大橋順藏等輪王寺宮ヲ奉シ、日光ニ拠  
 リ兵ヲ挙ケンコトヲ謀ル、事露レ獄ニ下ル、二年<sup>(壬正)</sup>  
 月、河野通桓・河本<sup>(顯三)</sup>一等安藤信正<sup>(前)</sup>坂下門外ニ要撃シ  
 テ之ヲ傷ク、通桓等六人闕死ス、各書ヲ懷ロニス、題  
 シテ斬姦趣意書ト曰フ、略ニ曰、信正強テ皇妹ヲ請ヒ、  
 將軍ニ配シ以テ通市ノ勅許ヲ得ント欲シ、若シ聽カレ  
 スンハ逼ルニ讓位ヲ以テセントス、因テ古学者ヲシテ  
 廢帝ノ典故ヲ索メシム、幕府恭順ノ旨亦地ニ委セント  
 ス、実ニ朝廷幕府ノ罪人ナリ、之カ為メ某等躬ヲ捐テ  
 姦ヲ誅セムトセリ、二月毛利慶親幕府ニ建議スルニ、  
 天朝ヲ尊ヒ人心ヲ一ニシ、國本ヲ立テ、而ル後ニ外國  
 和戰ヲ決スヘキノ事ヲ以テス、報セス、因テ登宮、老  
 中久世廣周二面シ、時弊ヲ論シ而テ其臣永井雅楽ヲ薦<sup>(長井時廉)</sup>

ム、廣周雅楽ヲ召シ共ニ謀リ、密旨ヲ授ケ京師ニ説カ  
 シム、三月雅楽京師ニ入り、書ヲ議奏ニ呈シ攘夷ノ非  
 ヲ陳ス、時論喧然、遂ニ志ヲ得スシテ帰ル、四月島津  
 久光ヲ召シ、闕下ニ駐マリ浪士ヲ鎮撫セシム、是ヨリ  
 先キ平野國臣攝・播ノ間ニ在リ頻リニ尊攘說ヲ唱フ、  
 其徒凡二百人、偶々久光ノ過クルヲ見テ、之レニ厲セ  
 ンコトヲ請フ、久光聴サス、京師ニ入り之ヲ奏ス、薩  
 州浪士大坂ニ在ルモノ伏見ニ抵リ、久光ニ逼リ事ヲ挙  
 ケント欲ス、久光人ヲ遣ハシテ之ヲ慰諭スレトモ從ハ  
 ス、遂ニ奮闘シ互ニ死傷アリ、所司代酒井忠義變ヲ聞  
 キ、二條城ニ入り自守ル、之カ為メ二人皆所司代ヲ輕  
 ンス、朝廷嚮キニ毛利慶親ヲ召ス、未タ至ラス、其子  
 定廣將二國ニ就カントシ、途京師ニ出ツ、故ニ此命ア  
 リ、鷹司入道政通・輔熙、近衛忠熙ニ詔シテ朝參セシ  
 メ、法親王尊融ヲ青蓮院宮ト称ス、將軍家茂命シテ松平<sup>(前尾)</sup>  
 慶喜<sup>(張喜)</sup>・一橋慶喜<sup>(前橋井禮)</sup>・松平慶永<sup>(前土州禮)</sup>・山内豊信<sup>(前宇和島禮)</sup>・伊達宗城等ノ  
 諱ヲ積ク、五月松平慶永ヲシテ政務ニ干預セシム、伊  
 藤軍兵衛等東禪寺ヲ襲ヒ英人二人ヲ殺ス、六月勅使左  
 衛門督大原重徳江戸ニ到ル、島津久光之ニ副フ、重徳  
 勅ヲ家茂ニ伝フ、略ニ曰、卿宜ク諸侯ヲ率ヒ入朝シ、

事宜ヲ議決スヘシ、又豊臣ノ故典ニ依リ、五大藩ニ選  
ヒ五大老ヲ置キ、国政ヲ諮問シ、且一橋慶喜ヲ後見ト  
シ、松平慶永ヲ執政トシ、而シテ内政ヲ理シ、外事ヲ  
処スヘシ、七月家茂大ニ黜陟ヲ行ヒ、慶喜ヲ以テ後見  
トシ、慶永ヲ以テ政事総裁職トス、慶永新政ヲ布キ諸  
侯会同ノ期ヲ寛フシ、其妻孥ノ国ニ就クヲ許ス、毛利  
慶親父子學習院ニ建議シテ、朝廷幕府相協和センコト  
ヲ論ス、浪士等島田正辰ヲ斬リ、首ヲ四條河原ニ梟シ、  
榜シテ曰、正辰逆賊長野主膳ト共ニ不軌ヲ謀ル、故ニ天  
之ヲ誅ス、関白九條尚忠ヲ罷メ、左大臣近衛忠熙ヲ以  
テ関白ト為ス、久我建通・千種有文・岩倉具視・富小  
路敬直ヲ洛外ニ放ツ、皆髮ヲ削ル、八月山内豊範入京  
ス、詔シテ慶親・久光ト共ニ闕下ヲ鎮撫セシム、勅使  
毛利定廣東下シ、戊午以來譴累セル者ハ之ヲ釈シ、其  
非命ニ死セシ者ハ之ヲ礼葬シ、故水戸中納言齊昭ニ大  
納言ヲ贈ル、勅使大原重徳西帰ス、島津久光先發生麥  
ニ至ル、英人四騎前驅ヲ衝ク、従士之ヲ斬リ其一人ヲ  
殺ス、閏八月、幕府京都守護職ヲ置キ、保科容保ヲ以  
テ之ニ充ツ、井伊直憲(參謀)ニ命シ其臣長野主膳ヲ嚴刑ニ処  
セシム、戊午以來国事ニ死スル者ノ罪名ヲ削リ墓碑ヲ

建ツルコトヲ許ス、故井伊直弼ノ罪ヲ數ヘ其封十万石、  
安藤信正ノ封二万石、久世廣周ノ封一万石ヲ削ル、其  
余各差アリ、勅使中納言三條實美・少将姉小路公知東  
下ス、山内豊範之ニ從フ、勅略ニ曰、攘夷ノ宸衷終始  
渝ラス、宜ク速ニ策ヲ決シ其期ヲ奏スヘシ、且諸藩兵  
ヲ召親兵ト為シ、京師ヲ守ラシメン、中川久昭入京ス、  
此時在京諸侯八十餘藩ナリ、十二月勅使實美・公知西  
上ス、毛利定廣之ニ從フ、徳川慶篤教ヲ承テ、前ニ賜  
ハル所ノ勅ヲ施行ス、英公使館ヲ殿山ニ造ル、之ヲ火  
クモノアリ、人アリ(次郎、幕臣)ヲ殺シ、榜シテ曰、安藤信  
正ノ密托ヲ受ケ廢帝ノ例ヲ檢按ス(是ヨリ先安政五年ノ  
夏頃ヨリ御讓位ヲ促シ奉リ、或ハ何レヘカ選行ナシ奉ラント  
云々ノ説起レリ)、故ニ天之ヲ誅スルナリ、家茂軍艦製  
造ヲ荷蘭ニ托シ、且ツ榎本武揚等ヲ遣ハシ、海軍ヲ講  
習セシム、又歩兵・砲兵・騎兵ヲ設ク、之ヲ幕府ノ三  
兵隊ト称ス云々、是ヲ當時ノ概況トス、

三二五 輕罪者及府内無宿者箱館寄場へ送致達書

三月廿七日(安藤)對馬守殿御渡

大目付へ

御目付

覚

箱館表へ寄場取建、輕罪之者并女犯之僧等御仕置赦免申付、且人足寄場之者共之内差加へ、当地徘徊之無宿共捕押、彼地へ差遣シ、蝦夷地之御用筋人足等ニ召遣可申候、尤婦人タリトモ、当地人足寄場へ入候者并端々其外市中ニテ、如何之渡世致シ候婦人共ハ、是又同所へ差遣可申候間、早々取調可被申聞候事、

右之趣三奉行・火附盜賊改へ相達候間、可被得其意候事、

三月

別紙通從 公儀被 仰渡候条、不洩様可致通達候、

三月

御家老座印

三二六 府下近在浪人及ヒ無宿者取締達書

大目付へ

此頃近在所々へ、浪人又ハ無宿体ノ者共徘徊致シ、無心ケ間敷事共申懸ケ、及不法候者モ有之哉ニ相聞、不届之事ニ候、(向後脱力)右体ノ者共立廻リ候ハ、聊無用捨捕押置、早々可被申聞候、尤手ニ余リ候儀モ候ハ、打捨

候共不苦候、時宜ニ寄鉄砲等相用候テモ不苦候間、隣領ノ面々へモ申合置、其次第二寄候テハ、相互ニ加勢差出候様可被致候、

一小身之面々知行所ノ儀ハ、捕押方等不行届儀モ可有之候間、最寄万石以上諸家陣屋等へ注進致シ、右注進次第、面々居城・陣屋等ヨリ召捕人数差出、前同様取計候様、兼テ手筈可被申付置候、

一御料所并寺社領手当方ノ儀ハ、最寄領主之面々心(傳)附候様可被致候、

右之趣、関八州御料・私領・寺社領共不洩様早々可被相触候、

二月

右之通可被相触候、

(幕府沙汰書にて補註)

藩内布達同前

此布達目的トスル処ハ、専ラ水戸・薩摩ノ二藩士ニ在リ、當時尊攘ヲ唱へ、京摂ノ間ニ出沒奔走スルハ、二藩之外指シテ名ニスル程ノ藩ハナカリキ、適々アリタルモ首鼠兩端時勢ヲ傍觀シ、或ハ藩論定マラサルカ故、事ヲ窃カニスルノミナリキ、本藩ニ於テモ、僅々数十名ノ壮年輩ニシテ、藩庁ハ俗論ノミノ如シ、然レトモ壯士輩ハ齊彬公ノ遺旨ナルヲ唱へタルカ故、此ヲ押圧抑



制スル事能ハス、百方術ヲ尽シテ論解ニ過キス、其事情ハ大久保利通日記ヲ読ンテ弁知スベシ、

### 三二七 非常ノ時勢質素訓令

大目付へ

是迄度々御儉約之儀被

仰出候処、近年ハ別テ御事多相成、非常御備筋

御本丸御造宮其外難被捨置、御入用莫大ニ相嵩、迺モ此俣ニテハ御經濟難相立、自然御武備之儀モ御十分御行

届之訳ニハ至兼候ニ付、猶又当酉年ヨリ来ル<sup>(慶応元年)</sup>丑年迄五

ケ年之間、嚴敷御儉約可被遊旨被

仰出候、御改革之儀毎々被

仰出有之候テモ、兎角旧弊ニ因循イタシ、事実之御省

略難相立、只々一旦之事而已ニ相成、被 仰出候

御主意モ不致永統(民間ノ諺ニ天下法度三日ト唱ヘタリ)、

誠以恐入候事ニ有之候間、此度之儀ハ銘々格別ニ心掛、

仮令先例仕来ニ候共、無益ニ手数相掛候儀ハ相改、都

テ冗費ヲ省キ、御入用筋格別ニ相減シ、御勝手向追々

御取直シ相成候様、各無隔意心力ヲ尽シ可被申候、畢

竟御儉約被

仰出候モ、御勝手向御差支ニテハ、御武備ハ勿論、御救筋等之儀迄

思召之通難被為届、無御扱被 仰出候儀ニ付、右之御主意ニ不違様專一ニ可被心掛候、且又銘々一己之儀

モ嚴敷質素節儉ヲ相守候様可被致候、累年困窮之族モ有之ベク候得共、中ニハ外見虚飾奢侈等ニ流レ、勝手

不如意之輩モ有之哉ニ相聞候、勝手向不如意ニテハ、勤向并武備之心掛モ、ヲノヅカラ心底ニ不任様可相成

事ニ付、常ニ無益之費ヲ省キ、大切之御奉公武備等無差支様ニ可被心掛候、別テ御役人之儀ハ、世上風儀之

手本ニモ候間、猶更厚ク相慎、聊奢ケ間敷儀等無之様可被致候、畢竟銘々正路潔白(賄路苞首ヲ貪ルコト甚シ

キヲ云フ)ニ心掛ケ、

御為第一ニ存込相動候儀、專要之事ニ候筈、心得違之

モノ有之候テハ、

御主意之妨ニモ相成候ニ付、無御扱急度可被及

御沙汰候間、兼テ其旨可被相心得候、

右之通諸番頭・諸物頭・諸役人へ可被相触候、

三月

藩内布達全前

三二八 柴山愛次郎実兄良助へ与フル書

前文腐朽 総御引取ノ説申候取沙汰決候テ、御下国不遠ニ甚以テ御欣然ノ処、<sup>(良助ヲ云)</sup>尊公杯ニハ御引残ニテ御案内、尚追テ御引取被仰成義有之度、是ハ御渴望ニ候、併姑息ヲ以テ御志ヲ挫モ如何被為思召候半、是非御下国可然被仰越程ノ儀ニハ無御座候、左候得ハ御下国ノ処ハ、私ノ素願ノ意ニテハ無御座候付、幾重モ宜敷御汲受被下度奉存候、<sup>(新兵衛)</sup>楮亦毛利子昨日帰着ニテ余程壮健、直ニ御直左右共承、一同御安心御座候、此節有村氏上邸御国ノ事体ハ、逐一御聞取被下度、態ト其折ハ省置候、先ハ用事迄アラマシ如斯御座候、恐惶謹言、

正月十三日

柴山愛次郎

<sup>(通書)</sup>柴山良助様

玉几下

三二九 改正軍隊操練概況(前記柴山カ書翰ニ添付)

中央五発打暫見合、左右五発打仕舞候付、中央ヨリ進出、左右一列ニ成ルベシ、  
 二下通<sup>(一列)</sup>ニ惣勢ニ惣勢ニ五発目 二四発目

仕舞<sup>(ニ)</sup>ニテ<sup>(一)</sup>ニ列<sup>(二)</sup>ニ成<sup>(三)</sup>ニ下<sup>(四)</sup>同<sup>(五)</sup>

二ナカ<sup>(二)</sup>ニ進<sup>(三)</sup>ニ間<sup>(四)</sup>ニ三<sup>(五)</sup>間<sup>(六)</sup>ニ五<sup>(七)</sup>発目<sup>(八)</sup>ニ四<sup>(九)</sup>発目<sup>(一〇)</sup>

二切込<sup>(二)</sup>ニ出<sup>(三)</sup>隊<sup>(四)</sup>ニ出<sup>(五)</sup>中<sup>(六)</sup>ニ計<sup>(七)</sup>進<sup>(八)</sup>ニ出<sup>(九)</sup>立<sup>(一〇)</sup>ニ下<sup>(一一)</sup>同<sup>(一二)</sup>ニ下<sup>(一三)</sup>同<sup>(一四)</sup>

二計ノ<sup>(二)</sup>ニ發<sup>(三)</sup>ニ連<sup>(四)</sup>ニテ<sup>(五)</sup>ニ打<sup>(六)</sup>ニ一<sup>(七)</sup>ニ五<sup>(八)</sup>發<sup>(九)</sup>ニ四<sup>(一〇)</sup>發目<sup>(一一)</sup>

二折敷<sup>(二)</sup>ニ打放<sup>(三)</sup>ニ打<sup>(四)</sup>ニ聲<sup>(五)</sup>ニニ下<sup>(六)</sup>同<sup>(七)</sup>ニ下<sup>(八)</sup>同<sup>(九)</sup>

二三發目<sup>(二)</sup>ニ六<sup>(三)</sup>間計<sup>(四)</sup>ニ二<sup>(五)</sup>發目<sup>(六)</sup>ニ六<sup>(七)</sup>間計<sup>(八)</sup>ニ初<sup>(九)</sup>發目<sup>(一〇)</sup>ニ六<sup>(一一)</sup>間計<sup>(一二)</sup>ニ三<sup>(一三)</sup>間計<sup>(一四)</sup>ニ立<sup>(一五)</sup>付<sup>(一六)</sup>

二進出<sup>(二)</sup>ニ進出<sup>(三)</sup>ニ進出<sup>(四)</sup>ニ進出<sup>(五)</sup>ニ進出<sup>(六)</sup>ニ進出<sup>(七)</sup>ニ進出<sup>(八)</sup>ニ進出<sup>(九)</sup>ニ進出<sup>(一〇)</sup>ニ進出<sup>(一一)</sup>ニ進出<sup>(一二)</sup>ニ進出<sup>(一三)</sup>ニ進出<sup>(一四)</sup>ニ進出<sup>(一五)</sup>ニ進出<sup>(一六)</sup>

二三發目<sup>(二)</sup>ニ二<sup>(三)</sup>發目<sup>(四)</sup>ニ二<sup>(五)</sup>發目<sup>(六)</sup>ニ初<sup>(七)</sup>發<sup>(八)</sup>ニ初<sup>(九)</sup>發<sup>(一〇)</sup>ニ初<sup>(一一)</sup>發<sup>(一二)</sup>ニ初<sup>(一三)</sup>發<sup>(一四)</sup>ニ初<sup>(一五)</sup>發<sup>(一六)</sup>

二右<sup>(二)</sup>同<sup>(三)</sup>ニ右<sup>(四)</sup>同<sup>(五)</sup>ニ右<sup>(六)</sup>同<sup>(七)</sup>ニ右<sup>(八)</sup>同<sup>(九)</sup>ニ右<sup>(一〇)</sup>同<sup>(一一)</sup>ニ右<sup>(一二)</sup>同<sup>(一三)</sup>ニ右<sup>(一四)</sup>同<sup>(一五)</sup>ニ右<sup>(一六)</sup>同<sup>(一七)</sup>

一隊調練手續

一一番員ニテ銃調之事、<sup>(折之)</sup><sup>(隊長)</sup>

一二番員ニテ各陣前ニ打敷、物主打立ヲ令スル時、太鼓役

徐調鼓打テ昇ヲ押出ニ付、跡ヨリ順々繰出シ、行軍ニ

テ然ルヘキ町間ニテ物主見切、押太鼓打止、サスル時

昇預昇ヲ右ニ振動シ、右ノ方ヘ立タルヲ限リニ仕長踏

止リ、其跡順ノ間節ヲ配リ、備ヲ一文字ニ行ニ立、昇

ハ物主ノ傍ニ持来地ニ伏ス、此時間ノ声ヲ揚ケ、三間

ハ物主ノ傍ニ持来地ニ伏ス、此時間ノ声ヲ揚ケ、三間

位寄折敷、中央ヨリ二十人ヲ仕長二人ニテ引列、三間計進出テ打、夫ヨリ左二十人仕長二人ニテ引達、右モ同様引列、右右四十人<sup>左方</sup>与々一度ニ進出打、中央二十人左右四十人繰出ニテ五発打、夫ヨリ惣勢一列成ル時三間計進出、一勢ニ打発、六足計進出、中立ト成打放、亦六足位中立ナカラ進出、此度ヨリ膝台ニテ放ヲ令ス、此時伏込ヲモ試ミテ発シ、終テ銃ヲ肩ニ掛、十足進出折敷、是手詰腰刀ニテ働ク姿ナリ、其時物主<sup>敵意</sup>下知シテ、昇ヲ立テ貝ヲ吹カセニ付、戦兵踏ヲ見逐リ、昇ヲ見当ニ引揚レハ、太鼓ノ役破調ニ打、足並ヲ揃テ昇場ニ集リ、何レモ関ヲ揚ケ折敷、是ヨリ行軍ノ調子ニテ陣屋場迄引取、陣前ニテ折敷、談合役ヨリ銘々姓名呼合可繰入候事、

右何レモ立打・中放・膝台仕長身ヲ以令シ、打発ハ手様式ハヨシトノ一声ニテ令ス、

軍制及ヒ操練式及ヒ隊伍編制改革ハ、専ラ伊地知正治・新納刑部等担当シタリ、当時斉彬公ノ遺制ヲ措ヒテ新ニ制定シタルハ、伊地知等カ島津家旧軍制ニ復スル云々ノ言ヲ以テセリ、然ルニ斉彬公ノ多年心力ヲ尽サレ、御親ヲ努メ給ヒシ洋式実地経験ノ法ヲ廢シ、數百年前ノ旧ヲ一向ニ用ヒタル事実ハ、当時攘夷論

熾ナルニ職由セリ、其時情軍制改革ノ部ニ詳記ス、

### 三二〇 島津久明家記鈔

<sup>(齊興公)</sup>宰相様へ  
<sup>(家定公)</sup>將軍

宣下被為濟候付、<sup>(安政六年十二月)</sup>旧臘廿五日從

公方様

上使、從

<sup>(家定夫人)</sup>天璋院様御使ヲ以被遊御拝領物候、御祝詞申上候、

正月廿八日

使者

谷山與右衛門<sup>久明</sup>家人

### 三二二 有村武次 (海江田信義旧名) 轟武兵衛ニ与

ル書

上封書

肥藩川尻御隠居

薩藩

轟武兵衛様<sup>(寛政)</sup>

有村武次

要詞御直披

尚々外御同志様へ御伝声被下度奉願候、<sup>(山三郎)</sup>津田君杯ハアマリ面白カラス候由ニ承リ、我々共些見ソコナヒ

候歟旁相疑ヒ居、宮島君モ御無事之筈ト奉存候、宮崎君ハ当分申<sup>〔区〕</sup>ツ方ヘ滞在歟ト奉存候、

久々不拝尊顔候得共、弥以御安康可被成御座大慶奉存候、小子事モ無恙罷居申候間、乍憚御休意思召可被下候、然ハ此内ハ宮崎君入来ニテ、貴君方之事共承知イタシ申候、天下ノ形勢モ日々差迫リ、イツレ大破ニ相成不申候テハ相濟不申時ニ御座候、乍恐

雲上益々御英明被為渡、難有恐入候次第ニ御座候、此節同志之者(誰人乎知ルニ由ナシ実歴史伝參看)長崎迄サシ越申候間、罷出候賦ニ付、御面会ナシ被下、何篇御咄被下度、此者至テ精実勤 王ノ士ニ御座候間、無御疑御儀論可被成下候、細々書認奉得御意度候得共、態ト差扣ヘ候間、此者ヨリ御聞取可被下候、以上敬白、  
(海江田信義旧名) 俊齋事

西二月四日

有村武次

轟武兵衛様

三三三 當時幕府老若政務分担人名

三三三ノ一

正月御用番

外国掛

閩老

安藤對馬守(信懸)

御勝手掛

閩老

内藤紀伊守(信懸)

外国掛

全(若年寄也)

久世大和守(信懸)

御勝手

若年寄

遠藤但馬守(信懸)

外国(マニラ)

全(側用人カ)

酒井右京亮(信懸)

公事方

全(講武所奉行)

堀出雲守(信懸)

御勝手方

全(稱清町奉行)

松平伊豆守(信懸)

外国方

全(元邦、勘定奉行)

池田甲斐守(信懸)

外務

全(元邦、勘定奉行)

石谷(因幡守)

外務

全(元邦、勘定奉行)

酒井(因幡守)

外務

全(元邦、勘定奉行)

塚越大藏少輔(元邦、勘定奉行)

外務

全(元邦、勘定奉行)

小栗(豊後守)

外務

全(元邦、勘定奉行)

淺野(氏經、目付)

外務

全(元邦、勘定奉行)

安部(信懸、目付)

三三三ノ二 (内懸) 二月五日紀伊守殿御渡、即日触

大目付

御目付

万石以下、屋敷内長屋其外貸置候者并由緒不知浪人、又ハ睨トイタシ候請人モ無之中間・小者等、一切差置申間敷候、何レモ組支配之者へ急度申渡、銘々厚世話

イタシ、此節ヨリ嚴重相改候様可被致候、若胡乱之者

差置候段、外ヨリ相頭レ候ニヨイテハ、急度可被及御

沙汰候、可被存其趣候、

右之通諸番頭・諸物頭・諸役人へ相達候間、此外之面

々へ早々可被相達候、

二月

藩内布達同上

二月廿日

三三三  
二月六日紀伊守殿御渡、即日触

大目付

御目付

覚

水戸殿御領内へ相集リ候浪人共、不法之所業等有之、

難捨置候ニ付被召捕候旨、水戸殿ヨリ被仰立候ニ付、其

通リ被取計候様相達候間、為心得向々へ可被達置候事、

二月

藩内布達全上

三三三  
同日遠藤但馬守殿御渡

御目付へ

覚

御勘定奉行

御作事奉行

小普請奉行

御腰物奉行

御納戸頭

御賄頭

御細工頭

奥御膳所御台所頭

御膳所御台所頭

表御台所頭

御同朋頭

御数寄屋頭

此節柄之儀、御門々御取締筋肝要之儀ニ付、差支ハ可

有之候得共、支配御用達并人足共、夜中御門々出入当

分之内不相成候間、其段可被申渡候、尤差向急御用等

之節ハ、右之者共其御門通行之儀、御目付へ断差出、

不紛様可被取計候事、

右之通向々へ相達候間、可被得其意候事、

藩内布達全前

三三三 養蚕奨励布令

二月十二日大和守殿御渡、来ル<sup>(公世)</sup>□日触<sup>(夜)</sup>

大目付

御目付

武蔵・相摸・上野国村々、養蚕之場所ニテ、桑之葉摘取、枝ハ焚物等ニ致シ候由之処、今度江戸赤坂表傳馬町一丁目市兵衛地借市兵衛ト申モノ、右枝皮ヲ以テ綿ニ製シ候工風致シ、村々へ罷越枝皮買集候筈ニ付、以来ハ桑枝其俣焚物等ニイタサス、農間ニ枝皮ヲムキ取置、又ハ其俣ニテモ、相對次第相当之価ヲ以テ、右市兵衛代之者へ売渡候様可致候、尤買集方之儀ニ付、我察ケ間敷儀モ有之候ハ、早々其筋へ可訴出候、右之趣、武蔵・相摸・上野国村々、御料・私領・寺社領共、不洩様可被相触候、右之通可被相触候、

二月

下文安田轍三同業者ナリシト云フ、

三三四 安田轍三柳葉製綿許可達書

大目付へ

松平修理大夫家来

医師

安田轍三

右ノ者儀、柳葉又ハ木樅等ヲ以綿ニ製作之儀御免相成、全人代ノモノ村々へ罷越、柳葉又ハ木樅等ノ枝皮買集候筈ニ付、相對次第相当ノ価ヲ以売渡候様可致候、尤買集方ニ付、若我察ケ間敷儀モ有之候ハ、早々其筋へ可訴出候、且不毛ノ地或ハ人家廻り空閑ノ場所等へ、右之三種ノ分可成丈植増シ、尤川柳ハ堤川除御普請遣方差支不相成様心掛、其余綿製作ニ用候トモ不苦候間、年々梅雨以前又ハ八月上旬頃枝刈取置、売渡候様可致候、

但桑枝買取方ノ儀、武蔵・上野・相摸三ヶ国、先達テ赤坂表傳馬町市兵衛店市兵衛へ申渡候ノ間、右国々桑枝ノ分ハ最前相触候通可相心得候、

右之趣諸国村々御領・私領・寺社領共、不洩候様可被相触候、

右之趣可被相触候、

十一月

藩内布達全前

以上二件ノ布令ハ、未幾ノ業ヲ開キタルモノニテ、将来ノ鴻益ナラント經濟ニ志アルモノハ大ニ賞賛セリ、安田ナルモノハ元來大坂ノ産ニシテ、本藩邸定府田原某ガ弟ニシテ、眼科ノ医業ヲ学ヒ、江戸ニ出テ、其業ヲ開キ、安政六年比島津豊後ガ紹介ヲ以テ、本藩ニ抱ヘトハナレリ、文久二年ニ至リテ、本藩鑄錢ノ許可ヲ得タルハ、専ラ此モノガ尽力ニ依レリ(文久二年鑄錢局ノ部ニ其來歴ヲ記セリ、茲ニ略ス)

三三五 島津周防(久光公旧名) 山田壮右衛門ニ与

ル書

去ル五日ノ細書篤ト致披見候、先以無異義御勤務ノ由

大慶ノ事ニ候、爰許何モ無相変候、可被御心安候、

一 浪人者一条于今埒明兼候由(水戸浪士三十七人ヲ云)  
(旧藩返附ヲ云)、筑前・八

戸御両公種々御配慮ニテ、久世候へ御談合被為在候得

共、何分水府不穩ノ事ニテ御引取出来兼、永々

此御方様へ御預ケノ御模様ニテ、舟路ヨリ差下シ、島

へ成共召置候様ニト、久世侯被仰候由、誠ニ以ノ外ナ

ル事ニ候、其後南部様御出ニテ敵敷被仰上、先両三年

ノ間、此俣召置候様トノ筋ニ相成候由、是以御請不相

整、何事モ日置着ノ上、何分申出相成候賦ノ由、細々

被申越、何共存外ノ次第、一日成共早目ニ御引取相成

候様致度事ニ候、シカシ当分ノ模様ニテハ、長引候儀

ト被察、誠ニ苦々敷事ニ候、水府等ノ人氣モ今以不穩

由、此末如何相成候哉ト懸念イタシ居候(宋付書)(下略)

一 美濃守様ニハ、来月始ニハ御立ノ御治定ノ由、(福留候)(黒田齊運)  
(八戸候) 遠江

守様ニハ、四月前浪人一条片付候得ハ、定式通御暇可

被仰出、若埒明兼候得ハ、御差留可相成段、久世侯御

内話ニテ、無御抛御滞府被仰出候御模様ノ由、何共御氣

ノ毒ノ御事ニ御座候、右ニ付テハ、イツレ其掛リノ者

出立ノ義モイカゞト式部モ被申候由、成程其通ノ事ト

存候、シカシ精々被相働、右様ノ御手数數ニ不相成様有

之度事ニ候、日置ニモ右通 南部様御滞府被仰出候テ

ハ、早速ノ出立モ出来兼候様ニハ無之哉、致懸念候、

一 日置出府ニ付、

公方様

天璋院様へ御内献上物、且 疇姫様 寧姫様へ被進物

等談合候趣、尤ノ事ニ候、

一 左衛門殿ヨリ別段書状不被遣候間、貴殿ヨリ其段宜被

申越度トノ事、委細致承知候、猶又ヨロシク申入給度

候、

一別紙ヲ以被申越候、

美濃守様大廊下御心願ノ一条、

此御方様ニモ大廊下被仰出度トノ義共、細々被申越得

其意申候、先ハ恐悦ノ御事ニ候、シカシ是ハ是非来年

御参府相成候様トノ計策カトモ愚察イタシ候、

右ハ御内用答迄以乱毫申越候、以上、

二月廿八日

島津周防

山田壮右衛門

御内用答

尚々最早江戸出立カトモ相考候得共、先々便ヨリ直答モ不  
致候ニ付、此段申越候、以上、

三二六 藩内農作形況 (石室秘稿鈔)

当年ハ田畠共ニ実ノリ宜、雨風モ無之余程ノ豊年ニテ

候得共、当分(米斗共并四合入りヲ云フ)二斗入ニテ、十八貫四五百文ニテ買入、

廿貫文或ハ廿一貫文ニテ、珍敷直成ニ有之、米ハ沢山

有之候得共、当時ノ時宜治乱ノ境、畢竟米ヲ相困ヒ売

買致間シク、夫故高料ナラン、大坂表ハ至極直成相下

り候由云々、以下略ス、

文久元年辛酉ノ夏季頃、鹿兒島物価及ヒ江戸・大

坂等ノ物価

真米壹石 代拾八貫五百文

赤米壹石 代拾七貫文

大豆壹石 代拾九貫文

小豆壹石 代貳拾四貫八百文 江戸貳百貳拾四文

上白米壹升 代百八拾八文 江戸百文ニ四合五夕

中白米壹升 代百八拾八文 大坂同上内外

下白米壹升 代百七拾八文

味噌壹斤 代七拾貳文 江戸中百文ニ貳百廿五

醬油壹盃 代八拾文 江戸壹升貳百四拾八文

焼酎壹盃並ニテ代五拾文 大坂升貳カ壹貳百四十五拾文

油壹盃 代三百四拾文 江戸二合ニテ百貳拾四文

但油ハ目今大高直ニテ私底ナリ、一人ニ壹盃トハ売申サス、

一同大困ナリ、

百田紙壹束方言 代壹貫文

皮紙壹束 代貳百貳拾四文 江戸上百五拾六文

茶壹斤 代五百文又ハ八百文 中百文、下八拾文

江戸山本山六百六拾四文百六拾五

右通ニテ、鹿兒島ハ日々高直ニ赴キ、一統ノ苦言語ニ

尽シ難シ、此末如何ノ形況トナルヘキヤ、○錢ハ從



前ノ如ク九十六文ヲ以テ百文トス、寛永通宝又ハ鉄錢ノ二品ノミナリ、○唐芋壺升代四拾文ツ、煙草壺斤並ノ品ニテ、凡ソ五百文内外ナリ云々、

三三七 茂久公御親書ヲ以テ島津周防<sup>久光</sup>ヲ国父ト

唱フヘキ旨ヲ令シ玉フ

当時内外難題ノ事情別テ令心配、旁致愚案候処、兎角国家ノ基本ハ追々申聞候通、何レ礼義廉恥ヲ以風俗ヲ正シ、上下心ヲ一ニシテ君臣和平、古代ノ国風ヲ振起イタシ候事、今日ノ急務ト存候、然ルニ基本ヲ勘考イタシ候ニ、仲尼ノ所謂名正言順ノ所、第一政事ノ綱起治道風化ノ本ハ、乍汗顔拙者ノ一身ト存、朝夕相励候得共、本来不肖ノ身甚致心痛候、左候テ重富家ノ実子ニテ<sup>(舎形公鑑号)</sup>順聖公ノ御眷顧ヲ蒙リ、家督相続被仰付候処、当時ヨリ武鑑ニモ、実ハ島津周防嫡子ト有之、天下ニ押出シテ顯然ノ事ニ候、然ルニ只今ニテハ所謂名不正言不順ト可申哉、親子ノ情於孝義難默止次第ニ候間、拙者之内存ニハ、当家督ハ又次郎<sup>(形名)</sup>ヘ申付、重富家ヲ出テ国父ト云処ヲ以、朝夕自ら定省イタシ、為子ノ礼ヲ取テ孝道ヲ尽シ、臣子ニ先シ度候、左候ハ名義モ相立候事ト

存候、

右一条以前ヨリ之宿意ニ候処、未

順聖院様御三年忌不被為立内ハ、於孝義可奉憚筋モ可有之ト存候得共、当時ニ至リ候テハ、一日モ難默止至情ニ候事、

右之通御筆ヲ以被仰出、尚又筑後・攝津被召出、尚

深思召ノ情実御直ニ承知仕候、御趣意ノ程乍恐御尤ノ御事ニ候、一先思召ノ程同役中御内々申上候処、

難有思召ニテ、御請モ被仰上候得共、篤ト被成御勘考候処、段々難被默止御内情ノ御訳合有之、御内願ノ趣逐一被聞召通、是以無御抛御座候御情実ニテ、

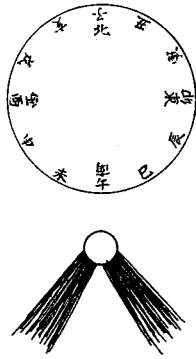
御願被詮立候付、御孝道ノ御事ニテ、尚更深被為及

御思慮候処、イツレニモ当分通ニテ候、名義不当ノ御事被

思召上候テ、御双方ノ御志情御取捨被為在、以

来御同人様御事、御実形ノ御身柄被為<sup>(令子)</sup>復、重富家ハ島津又次郎殿へ相続被仰付、左候テ

是迄ノ通重富家御住居ニ被仰付儀共被仰出、其趣御同人様へ申上候処、御請被仰上、夫々



仰渡相成、近々実以従

御自身様御孝養被為尽、臣子ニ御志シ被為成候御趣  
意ノ程、一統謹テ奉承知、専ラ忠孝ヲ相励、学文武  
道致研究、急度御用立候様心掛、可奉安

尊慮候、

四月二十

筑後川上

攝津書入

但馬久上

登島津久高

如斯文久元年四月二十二日ヲ以テ布告セラレ、是ヨリシテ公子  
ノ称ヲ用ルコト、ナレリ、而シテ御住居ハ依然重富邸ナリシカ  
トモ、後々城中ニ引移ラル、ノ内定ナリ (文久二年ノ春、二ノ  
丸御引移ノ条ニ詳記ス)

三二八 彗星頭ル (天文館上申)

酉五月廿四日ヨリ彗星出現、廿五日ヨリ我々共見候処  
ハ、戌亥ノ間ヨリ辰巳ノ間ニ流れ、其長サ幾丈トイフ

ヲ不知、夜半ニナリ漸ク亥子ノ間ニ没シ、午未ノ間ニ  
尾先終ル、

当時一般ノ説ニ、彗星出頭ハ乱兆ヲ示スモノナリトテ、種々ノ  
異説ヲ唱へ、和漢古今ノ例ヲ引ヒテ、光線ノ向フ処ヲ発乱地ト  
唱へ、或ハ一二年前ヨリ風説ニ附合シ、御讓位・遷行等ノ惡説  
甚シキニ至リ (安政五年閑老間部下総守上京、宮・堂上及各藩侯  
其他有志ノ齷齪ヲ起シタル前後ニアリ)、有志ノ曹モ變ク流説  
ヲ信セムトスルモアリ、或ハ北西ノ地ヨリ事端起ラントモ唱へ  
タリ (北ハ越前藩、西ハ本藩ヲ指ス)、今ニシテハ婦女子ノ説  
ニ等シト雖モ、和漢洋共ニ古昔ハ同様唱へタルヲ以テ稽フレハ、  
当時ノ説強ニ笑フヘキコトニアラス、

三二九 参考 松方正之進柴山良助ニ与ル書 柴山氏所藏

一筆啓上仕候、時分柄暑氣ノ砌罷成候得共、御揃弥御  
賢勝被成御座、珍重ノ御儀奉存候、於爰元ニ小子ニモ  
無異罷在申候間、左様思召可被下候、扱先比ハ、爰元  
ヨリ源太郎・甚四郎・小子両三人ノ連名ニテ、書状一  
封差上置申候処、相届申候哉、於其元ニ何処ニ御旅宿  
被為居候処、始終承リ不申候、今暫時ハ御詰ニテ御座  
候哉、近々御下リカモ難計、私共事モイマタ交代ノ儀何

分相分不申候、御城下一組ハ此三月交代ニ相成申候、

(江戸御守衛隊ヲ云)

一所ニ上京仕候得共、諸卿計ノコサレ不思議ト奉存候得共、何レ命ニシタガヒ奉対居申候、イツソヤ再会ノ程山々奉待上候、当分ハ爰許ノ義モ無事ニテ候、是ヨリ變事無御座候、此秋ノ砌ハ下リニ相成カモ難計、左候ハ、貴兄様方モ此ノ秋時節ニハ、御下リニ相成事ニテハ有之間敷哉ト奉存候、左候ハ、其時分御緩々御咄可申上候得共、先其内一左右荒々如斯御座候、謹言、

五月七日

正之進松方

(道巻)  
良助様

尚々此節ハ一寸便儀有之、谷山ノ松田東園(巻)寺田屋事(巻)件参看)ト申ス医者、爰元ヨリ医道稽古トシテ差越

二付、只急敷一筆認差上申候、左様思召可被下候、右乱筆ノ儀ハ真平御有免可被下候、

松田東園ガ医術修業ノ為メ出府シタルハ、修業ノ名ヲ藉リ、其實各藩有志ノ徒ト連衡シテ、為スコトアラントスルニアリ、是(真至)枝柳右衛門カ日記ニ就テ其事実ヲ知ルベシ、

### 三三〇 柴山愛次郎実良助へ与ル書

一筆啓上仕候、追日炎暑ノ節罷成候得共、弥以御勇健

御勉学被成御座、無此上珍重ノ御義奉恐悦候、於爰許

(父母及兄ヲ云)

テ御三所様奉始、私其外何レモ相替儀無御座、尤モ

母上様モ其後弥御快方、今程ハ朝夕ノ營事等平生ノ通

御座候、彼是御休意可被思召候、然ハ御登モ日ニ近迫

(茂久公)

可ナリノ仕廻方モ、急々トセキ立申候、一ツ心配成者

ハ、出府ノ上同席突合ニテ承及、色食ノ徒ト同邸ニ詰

合候テハ、甚々迷惑致申候、可成ハ同志ニモ相成人柄

ト詰合候様有之度、右之賦方ハ直八様ナト職掌ノ由候

間、私心底被仰入可然御配賦相成候様御頼置被下度、

此節同御供中小姓新納八郎太殿ハ、此前ヨリ同役ニテ、

人柄モ慥ニ候間、詰合相成候様有之度、尤モ爰許ニテ

致内談置候、大抵一邸ニ三四人ノ詰合ニ候由、依テ前

兩人ヲ去ル人物御聞合ノ上、樺山氏へ御都合御頼被下

度奉願候、扱此方事情ハ、三圓殿ヨリ一通ハ相知レ可

(樺山、後資之)

申、今程ハ太平無事ノ江戸モ少ハ相騒候半カト被察申

候、時勢ニ関係候義ハ細大御洩シ被下度、尚巨細ハ後

便ヨリ可申上、先ハ御起居御伺申上度、且右御願トシ

テアラマシ如斯御座候、恐々頓首、

五月十日

(道巻)  
柴山愛次郎

柴山良助様

玉机下

追テ爰許ヨリ承合候処、当在詰之森岡某ナトハ、所謂同志ニモ可致候人之由、又ハ伊地知龍氏ナト、詰合相成候得ハ、別テ仕合御座候、其他ハ御聞合ノ上能キ様御取計奉願候、

三三一 参考 白石正一郎日記鈔

萬延二年辛酉後文久ト改元

正月十五日 筑前盜賊方池野永太平野事件ニ付テ来ル、(次郎)

去年八月十一日 薩州御用達被申付候、

二月四日 薩州町田直五郎君(町田ハ城下土橋口等ト親交

有志ノ人ナリ、川上ハ高崎ナト同僚ナリ) 来訪、同五

日同藩橋口傳藏君入来、同十四日笠船新役川上作(下関等へ出張ノ警備)

右衛門殿来ル、同二十六日肥後堤松右衛門宮崎ノ

書翰持来ル、

六月十二日 高崎猪太郎君ヨリ来書、兼テ懇願一条(五六伯名)

(懇願ニ云々、資本借用セシコトアリシト聞ケリ、若ク

ハ此事ナラム乎) 何トモ可被仰付趣内意申来リ、

七月五日 廉作筑前ヨリ来書、薩ノ堀君ト高崎猪太郎(白石實藏、正一郎實風ノ弟)  
(仲左衛門)  
(正一郎弟)

君ノ書状入組有之吉事也、同十日廉作筑前ヨリ帰

ル、

八月十一日 薩摩ノ馬關出役告船川上氏ヨリ御用達被

申付候、同二十八日廉作出立薩摩行、

九月十三日 高崎翁ヨリ来書、早々下薩候様申来ル、(五六翁共名)

十月十日 薩州井上彌八郎君・井上右近君上下五人入(井上右近、矢八郎力変名也)

来止宿、同十二日上坂、同二十日夜二入、堀仲左

衛門君(堀ハ江戸留守居役ニ転シ、江戸在勤ヲ命セラ

レ、或ハ主人參勤猶予、或ハ義挙事件ノ密用ニ依リテ至

急出府セリ) 入来、次郎ト改名、急御用ニテ出府ノ

由、薩摩ノ事何角御咄シ承ル、今夜止宿、

十一月七日 薩棋山三日君来駕、江戸下リノ由、京都(棋山ハ雅カノ変名ナラン、考フヘシ)

ニテ井上彌八郎君ヘ逢、廉作薩摩行ノ事モ御存ニ

テ、當時ノ時勢何角ト御咄シ承リ、萩前田君ヘ一(前田ハ必ス孫右衛門ナラシ)

書托セラレ候間、新地会所ヨリ送り出ス、同二十(仁牟田ハ伊牟田ノ誤)

七日仁牟田尚平外二人来ル、翌日出立、金彦両ト(仁牟田實藏者、眞能眞柱)

玉ノ真柱二冊カス、

十二月一日 夜ニ入薩摩ヨリ僕良吉帰ル、御客有之段

知ラセ、一步先キニ帰ル、同二日昼前大里船三艘

ニテ廉作帰リ来ル、森山新藏殿及波江野休右衛門

(波江野ハ鹿兒島下町ノ商人ナリ、廉直ノ者ニテ、森山

ハ素ヨリ大久保等カ仕役スルモノナリ、當時町年寄役ニ

テ産物局ノモノナリ、營業酒店又ハ古着商ヲナセリ)同

道、二万四千五百兩持帰ル、右ノ内三千金兩家へ

拜借被仰付、二万金ハ米買入ノ御手当、千五百兩

ハ早船十艘御造立ノ御手当ナリ(大久保利通日記參  
看)、同五日森山新藏君婦薩、波江野ハ滞在、追

々帰薩ス、

### 三三三 学風匡正ノ御親書

五月七日講堂師員ヲ二ノ丸御茶屋へ御呼出、左ノ

御親書ヲ下サレタリ

學術之次第ハ (重要公) 大信院様以来、近頃 (資形公) 順聖院様ニモ以

御深慮被 仰出置候得共、聊取違ハ無之筈ニ候得共、

第一天人倫ヲ明ニシ、孝弟忠信ノ徳ヲ行ヒ、正道ヲ

守リ候ハ孝者ノ急務ニ候処、古来ヨリ太平久敷キ時ハ、

自ラ詞藻ニ耽リ、文武ノ本体ヲ汚シ、安佚ニ日ヲ過シ、

終ニハ人道ヲ失ヒ風俗ヲ乱リ、或ハ高遠ニ志シ、放肆

ニ流レ、國憲ヲ犯シ候類不少候間、各平日士タルノ業

ヲ練磨シ、謙讓ヲ以テ己ヲ持シ、国家有名ノ士ト相成

候様講習有之度存候事、

五月

### 三三三 国家危急ノ概要(無名氏)

井伊カ藩中上巳ノ一挙ニ付、仇ヲ報スル杯ト党ヲ樹ル

其憂ナキニモアラス、然トモ此一挙何ソ私ノ怨ニアラ

ス、其根本井伊夷蛮ニ阿諛シ、日本侮辱ヲ蒙リシ奸悪

ニヨリ、天其罪ヲ糾シ玉ヘハナリ、井伊カ藩中モ主人

掃部頭カ夷人ニ阿諛シ、將軍家ヲ蔑如セシヲ顧ミ、実

ニ天真ニ愧テ夷國ヲ仇トシ、是ヲ討テ主人ノ奸惡ヲ雪

ク事至当ニ非スヤ、故ニ説客ヲ以テ名聞ヲ正シ、相共

ニ親ミ、夷蛮ヲ討ム事ヲ盟約セハ、井伊カ藩中モ何ソ

違背スルノ理アラン、猶其任ニ絶スンハ、潜ニ近衛公

ニ願ヒ京都守護ノ任ヲ蒙リ、五六千ノ兵ヲ京・伏見・

大坂ノ間ニ出シ、井伊カ藩中自然ト意縮恐懼ノ心ヲ生

シ、自然ト屈服スルノ意アラム、又近衛公ノ高示ヲ以

朝廷へ奏シ、徳川家へ 勅命アリ、井伊カ党手出事

ナラサル様、道中守護ナサシムル時ハ、井伊カ憂ナカ

ルベシ、

是等ノ計略猶ナラサル時ハ、金銀ヲ時散ラシ、宿々ノ

人心ヲ結ヒ、我カ腹心ノ如クナサシムル時ハ、数十年

来ノ恩義深キニヨリ、大方ハ其機ニ応スヘシ、又重職ノ人潜ニ上京シ、近衛公ニ願ヒ上巳ノ一挙薩士是ニ党セリ、実ニ恐懼ヲ懷ケリ、故ニ彦根藩中仇ヲ報スルノ

憂、国家ノ大事ニ迫レリ、主人甚心ヲ苦メリ、然レトモ朝廷ノ為參勤セスンハ、將軍ノ不予ヲ蒙ル患ヒアリ、既ニ參勤ノ期ニ臨メリ、万一事アル時ハ、薩國ノ士庶人一人トシテ難ニ趣カサルモノハアラシ、大丈夫義ニ於テ止事ヲ得サルカ故ナリ、然ル時ハ日本國中多勢ノ端トナリ、誠ニ一大事ノ機命、朝廷ニ対シ別テ奉恐入候ヘトモ、今更是ヲ如何トモスルコト不能、故ニ井伊カ藩中主人掃部頭カ奸悪ヲ顧ミ、日本一致一和ノ機ヲ計ハ幸ナルコトナレトモ、万一怨ヲ含ムノ氣アルモ知ルヘカラス、故ニ不虞ノ備ナクンハ大事ヲ誤ルヘシ、將軍ノ令ヲ受スシテ此機会ニ迫ル時ハ、又朝敵ノ名ヲ蒙ル事モ知ルヘカラス、朝敵ノ名ヲ蒙ラハ朝家ニ立事不能、故ニ窃ニ

勅命ノ御綸旨ヲ受ケ、其難ヲ慰ムヘキ事、

右ノ計略ハ一大事ノ機命ニヨリ、一兩人ノ方寸ニアルヘシ云々、

斯書何人ノ手ニ成レルヤ知ルニ由ナキモ、當時有志中ニモ持テ

囉シタル書ナリキ、稍事実ヲ穿チタリ、一説ニ有馬新七カ記シタリト、果シテ然ラン、

三三四 参考 水戸浪士對話日記摘要 安田助左衛門日記鈔

六月十三日

浪人共前文ノ趣意書(付説カ) (下ニ記ス) 差出候付、四人共致面會候処、申出候ハ昨日ノ次第一統へ申談候処、一人モ違存ノ者無之、此上ハ一日モ早く故國へ立帰り、情意ヲ述、罪ヲ相待申度、左候テ我々志願最早手切相成候上ハ、義理ニ於テ可致滯留訳無之候付、一日モ早く罷歸候様致度、就テハ御国元へ被仰越、御返答ノ上御門外御免ノ儀、相当ノ儀ニモ可有之候へ共、左様候テハ日延ニモ罷成儀候付、御家老様御決断ヲ以、何卒一日モ早く御門外奉願候旨申出候ニ付、御談合之趣且被仰聞趣委細致承知候間、篤ト家老へ申聞候上、何分御返答可致申達引取候事、

六月十五日

前条人数亦々面会被仰聞候通、家老へ申聞候処、因元へ申越候テ返答ノ上取計候儀、当然ノ事候へ共、其通ニテハ被申聞候通日数モ相延事候間、其内 公辺へ申

出候テ、成丈早目ニ相運候様道ヲ付可申旨申聞候処、  
一統別テ難有奉存候旨申出候、左候テ故国へ立歸候儀、  
若哉故障付候ハ、我々直ニ公辺へ罷出候テ、心事  
申上度御座候間、其筋ニ被仰付候様、是又願申出候付  
相応返答申述候事、

六月十九日

右浪人へ警衛相付、水府へ送届候様致度趣、無和理御  
申立ノ御願書御差出被成候、右ニ付テハ所々へ御内意  
筋等被仰込候(事脱)久光公山田壮右衛門へ与ル御書翰参照、当  
時ノ藩情知ルニ足ル

六月廿五日

水戸へ引取候様御達相成候処、彼方居り合不相付、段々  
難渋申立候へ共、此節ノ儀切迫相成居候付、其通り  
ニハ御差図被成兼候間、薩摩屋敷へ引合取計候様被仰  
渡、此御方へモ其段被仰渡候付、折角引合相待居候へ  
共、水戸屋敷ヨリ不差越何ノ引合モ無之候事、  
右之通水府ハ勿論、公辺へモ度々御申立相成、乍然  
水府中別テ混雜追々六ケシク相成候へ共、居合相付候  
期無之筋相聞得、乍然切迫ノ事故、弥水戸ノ方へ御請  
取有之候様御達相成、右ニ付テ水府人数田町(田町部)へ差越、

請取渡ノ筈候処、其通りニテハ刀大小別段取上ケ見苦  
敷目ニ逢候儀ハ差見候付、此御方人数ヲ以テ御送被下  
度、彼等共主命ヲ以相逢候へハ、違背ハ不相成候へ共、  
当御屋敷内ニテ左様ノ見苦敷目ニ逢候儀、甚残念ニ有  
之候間、タトへ迎ニ参候テモ面会難出来、水戸屋敷へ  
参着候上ハ、何様共国法通可致承服候ニ付、此御方ヨ  
リ御送被下候様申立候処ヨリ其通相決シ、彼御方へ及  
掛合、御留守居付役被遣候処、御方ニテハ刀大小別段  
取上ケ列越相請取筋ニ心得居候テ、色々申立候由ニ候  
へトモ、此御方ニヨヒテハ、是迄士ノ会積イタシ置候  
ニ付、今更ニ相成帯刀取上候儀、義理ニ於テ出来兼候  
趣ヲ以申取候テ、弥七月五日小梅ノ屋敷迄此方ヨリ警  
衛相付、送越筋ニ両方引合相済罷歸候、

一右通引合相済居候付、物頭初警衛惣人数人足迄四百五  
拾人御手当被成、七月五日朝六ツ半時揃ニテ、浪人共  
へハ銘々々、当節ノ自分役付衣服・肌着・帯・野羽織・  
立上ケ・下帯迄被成下、当朝盃相立、御料理被下、銘  
々台輪駕籠へ乗付、出立ノ賦ニテ、然処当朝六ツ半時  
分、久世様ヨリ浪人共儀水府ヨリ御願ノ趣有之、切迫  
ノ儀ニハ候へ共、引渡方猶予致候様被仰渡、今更ニ相

成、別テ当惑ノ次第候へ共、最早田町御屋敷出立後御書付相達候ニ付、無致方候間、此上ハ水戸屋敷へ無相違相請取候様被仰渡度旨遮テ申上、浪人共ハ警固相付御差送相成候、其内ノ掛念無申計、然処久世様ニモ申立通能御聞取相成候付、於小梅屋敷モ無相違相請取、別テ都合ヨク引渡相濟候テ一統引取罷歸候、去ル申八月(万延元年)月ヨリ是迄、御厄害、公辺井水府ノ方モ、イツレニ御手ノ被付様モ無之、就テハ意外ノ変事可致到来カト始終掛念ノ事候処、御国難一時ニ相消シ、誠ニ恐悦ノ事ニ候、

文久元年西七月五日

(石巻秘藏安田助左衛門日記 園立国会図書館所蔵にて補誌)

以上記スルカ如ク、水戸脱藩士ハ万延元年八月(マ)日本藩邸ニ入り、専ラ攘夷ノ先鋒タラムコトヲ懇請シタルモ、素ヨリ行ハルヘキニ非ラサレハ、藩庁ハ幕府ニ稟請シ帰藩セシメムト謀リ、漸クニシテ帰藩セシムルニ臻レリ、其間百方謀ル旨アリタリ、当时ノ藩情、久世公御書翰及ヒ安田助左衛門日記、又ハ樺山資之方日記ニ記ス処証左トスベシ、

三三五 茂久公外国人取扱御親書

異国人御取扱向ノ儀ニ付テハ、從

公辺御手厚御会釈有之儀ハ、各承知ノ前ノ事候処、近比暎咭利国等ノ船長州下ノ關等(マ)へ渡来ノ由候得ハ、当国へモ不日可致渡来モ難計候付、其ノ節ニ至リ諸士未々迄モ年若ノ面々、其語不通候異人共ニ対シ、無礼不法ノ振舞等有之、聊ノ儀ヨリ事起リ、

皇国ノ大事ヲ当国ヨリ引出候時宜成立候テハ、我等ノ命令不行届、第一

京都・関東ニ対シ奉恐入事候付、此節ノ儀別テ令心配候、就テハ測量且上陸等、依時宜差免候儀モ難計候付、(安政五年)去々年

順聖院様被 仰出候趣モ有之候間、其節之

御趣意ニ基キ、専ラ礼讓ヲ相守、只管国ノ道ヲ存シ、(マ)難題ノ事共不致到来様可相心得旨、父兄等ヨリ屹ト申聞置候様支配組下へ早々可申達候事、

西六月十四日

藩内布告御家老中添書略ス

当时藩内壮年ノ輩、攘夷鎖港ノ論熾ニシテ、種々計画奔走スルモノ尠カラサルカ故、若シ夷船来港セハ、如何ンノ挙動ニ及ハシモ知ルヘカラサルヲ以テ、如斯戒諭セラレタルモノナリ、



### 三三六 水戸藩暴徒処分布達

御領内賊党ノ者共ノ儀ニ付、是迄寛大之御処置ニ相成居候処、今以兎角居合兼候得ハ、今般嚴重ニ御支配且コトコトク御召捕相成候様被

仰出候、就テハ此迄注意ケ間敷儀相企候者於有之ハ、御人数御差向、御領内ニテ御取鎮、若不法ノ働於有之ハ、速ニ御討取可成候、若及御遲滯候節ハ、御沙汰ノ儀モ可有之候間、其段申上ベク候事、

右之通水戸殿家老へ相達、為心得相達可承向々へ可被達候、

六月

西七月廿九日江戸ヨリ相達候、

別紙通徒 公儀為心得御達相成候条、不洩様可致通達候、

七月

御家老座印

### 三三七 清国長毛賊ノ形勢琉人上申第一

申状走進貢船役者共唐御用ノ儀、唐着早速商人共召寄、御調文品調達方頼入候処、当時柄天下十八省ノ内一省

迎モ安静ノ所無之、〔中國、江蘇省〕蘇州表ハ長毛賊多勢攻入、城内悉

被燒尽、死人數万人ニ相及、長毛賊城内へ相住居嚴重

相守、且福建省ノ内ニモ所々賊乱相起、蘇州・杭州・〔浙江省〕

北京往来モ不相成由ニテ、商人共蘇州御買物ハ不相成

段申出有之、可致様無之、御買物福州ニテ精々才覚相

働候得共、過分ノ売買不足相成、残御銀持帰何共可申

上様モ無之、深重奉恐入候、御別紙ノ通御断申出有之

候、然モ唐御用物ノ儀ニ付テハ、毎度奥書略ス、

西六月琉球館聞役新納太郎左衛門・在番安村親方ヨリ申出

候、

### 三三八 琉球吏清国ノ形勢具申第二

一番方並ニ二番方売上

〔茂久公、久光公〕御両殿様御用御調文〔布帛ノ類及ヒ書籍・菜品等ノ類〕早

調達方ノ儀、段々別テ被仰渡趣承知仕居候、随分御調文

通位能売渡上納仕度念願奉存、唐着早速商人共召寄、

御注文調達方頼入候処、蘇州ハ去年長毛賊ニ被討取候

テ、差越方不相成段有之、大切成御買物出来兼、右様

相成候ニ付テハ、此節ノ御奉公如何相調可申哉ハ確ト

驚入、口柄承候迄カト何分吟味モ難成候ニ付、蘇州兵

乱始終ノ形行商人共ヘ書出サセ候処、当時所々兵乱相起、天下拾八省ノ中一省進モ安静ノ所無之、殊ニ藩州(蘇力)表ハ去年四月ヨリ長毛賊多数攻入、城ノ内悉焼尽死人数万、壯年ノ者ハ西門ヨリ遁去、助命又ハ西湖ニ致溺死候者モ余多有之、到六月ハ長毛賊城内ヘ相住居嚴相守、到当分ハ外城数百里築席暴虎ノ挙動共有之由ニ候得ハ、以前御買物相調候商人共、存亡ノ程モ不相知、且大分ノ御銀被奪取及失命候モ難計事ニテ、蘇州ヘ差越候儀、断ノ段相見得候ニ付、河口通事其外唐人共ヘ細密相尋候処、右申分無相違段有之、且福建省ノ内延年ノ趣・建寧ノ趣、湖江西省ノ内□州趣、蘭溪縣・江山縣等ノ所々、蘇州・杭州ヘノ道筋ニ候処、賊乱相起道徑相定候、毎月北京往来ノ千里馬モ進モ通行不相成、其已下最初買入一件ニ付テハ、西五月琉人ヨリ申出候事、

三三九 魯艦処分宗家へ達書

其方領分ニ魯西亜船渡来ニ付、追々被申聞候趣モ有之候間、先般小栗豊後守・溝口八十五郎被差遣候、且ツ

宗 對馬守(義和)  
宗 對馬守(元脫)

箱館奉行ヨリカ(Goshu)ロシヤ領事箱館在番魯國コンシユルヘモ、右船為引弘方箱館奉行ヨリ為相達候趣モ有之、長崎奉行ヨリモ支配役差遣候趣ニ付、最早役人共到着ニモ可有之、彼方ヘ遂談判事情相分候ハ、以後不法ノ挙動等モ有之間敷、畢竟彼我言語モ不相通候ヨリ、自然行違ノ儀等有之、双方ノ行違ヨリ不容易儀等引出候テハ、以テノ外ノ儀ニ付、家来末々迄能ク致諭旨、諸事豊後守等承合取計候様可被致候事、

右之通西五月十三日御老中安藤ヨリ相達候、  
(補註) 縁通信全覽魯艦對馬島ニ停泊一件(外務省外交史料館所蔵)にて補註

三四〇 清国騷擾宗家届書

此程於朝鮮国、訳官ノ内ヨリ直辞役ノ者共、内談ニ及候ハ、近年中国筋騷動甚敷、尤一昨年比ヨリ事ニハ、最初ハ盜賊一揆ノ様ニ相聞得候処、段々長大ニ相成、其余元明代ノ余類、所々ノ民間ニ相潜居候処、此度先代ノ恢復ヲ名トシ、兵州・衢州辺ヘ起立候由ニ御座候、彼国昨今巷説ハ、右ノ騷動重謀ハ洪姓ニテ、徒党皆中国人ノ由、清朝々此成シ稚髮ヲ禁シ、明朝ノ旧制ニ復シ候由、一揆ノ至処貨財婦女ヲ不犯、依テ向処ノ諸民安堵、悉服從致シ候、泉州・道州・兵州次第ニ被奪、

〔湖北省〕〔江西省〕〔安徽省〕〔州カ〕  
武昌ニ九江・安慶ノ諸侯引統陥落シ、清朝ノ軍兵難儀  
ノ由、且於北京モ初発ヨリ、〔無カ〕其油斷遠東ノ官兵ヲ発シ  
其余諸方軍催足ノ使者其〔虫喰〕〔絶間ナクカ〕諸民困窮財用〔虫喰〕〔乏敷カ〕兵  
糧難渋、富民ノ銀錢ヲ無利ニ奪取候由、

説ニハ蘇州モ陥候由、是等ハ全ク竹竿ノ争鬪ヨリ起リ  
候処、即今ノ様子ニハ、次第ニ滋蔓ノ様子ニ相成、騒  
動不一方事由、噂壯ノ由ニ御座候、

右ノ趣朝鮮国へ差置候役人共、伝聞仕申越候間、実  
否難計奉存候得共、彼筋異変ノ訳ニ付、風聞ノ俛奉  
入御内聴候、行違ノ義モ可有御座候得共、其段ハ幾  
重ニモ御宥免被為垂被下候様奉願上候、以上、

〔幕永六年カ〕  
六月

宗 對馬守内

古川 将監

佐川 伊織

本紙ハ例ノ如ク、对州藩長崎聞役ヲ以、本藩聞役ニ就テ通知セ  
ラレタルモノナリ、  
〔大日本古文書幕末外國關係文書之一にて補註〕

### 三四一 久光公御改名御届

酉七月廿九日大和守へ

島津周防事、国政向万端心添致精勤候付、猶厚心得  
万事行届候様、御内々

御沙汰之趣有之、殊美父之儀ニモ御座候間、当分通

ニテハ成合不宜候付、此節ヨリ会釈向格別重致取扱、

猶又国中之者共一統為致心服、政事向万端致相談、  
〔文久二年〕

来年私参府之上ハ、留守中厚相心得、諸事行届候様  
為取計度御座候、且周防儀和泉ト為致改名候、此段

御聞置可被下候、以上、

七月朔日

〔島津茂久〕  
松平修理大夫

公ハ嘉永三年八月、齊興公ノ特旨ヲ以テ御家老座ニ御出席、政  
務御相談ニ預リ玉フヘキ旨ヲ命セラレ、齊彬公御知政ニ至リテ  
モ同様ナリシモ、公然幕府ニ届出ラレタルハ之ヲ初メトス、其  
事実ハ後編ニ詳記ス、

### 三四二 島津周防山田壮右衛門へ与ル書

三四二ノ一

先月廿八日大坂ヨリノ書状、今月十七日相届、篤ト致  
披見候、道中筋所々洪水等ニテ遅滞被致候得共、廿七

日無事着坂ノ由致大慶候、筑前候へモ又々御目通被致  
候処、何モ御同意被思召候由難有致承知候、〔忠寛〕佐土原君

へハ於大坂被致御目通、爰許ノ情実篤ト被申上候処、

御汲受ヨロシク、脇坂候へ御封書御差出ニ相成候趣共、細々被申越、別テ宜敷御都合ニ向、先ハ致安堵候、此上ハ其許ノ御都合第一ノ義ニ御座候、最早何分相分り候義ト相考申候、吉左右待入申候、日置初御側役(島津左衛門領地ノ名)へモ相咄置申候、去ル廿二日ノ便ニ返事差出筈ノ処、繁雜取紛致延引候、御海容可給候、爰許先ツ平穩ノ事ニ候、シカシ去ル二日英国船渡来イタシ候得共、翌日ハ出帆ニ相成、先ハ仕合ノ義ニ御座候、最早御承知ノ筈ト存申候ニ付、細事不申演候、心配ノ程御推察可給候、先右旁御報申述度以乱筆申入候、宜見分可給候、以上、

六月廿七日認

尚々於大坂御銀主共へ被下物ノ儀、且春山御琵琶ノ一条御側役方へ被申越、委細承届申候、以上、

周防

山田為正壮右衛門殿

御用筋返書

三四二ノ二  
去ル二日・四日両度ノ細書、廿三日相届篤ト致披見候、

先以長途無異出府ノ由致大慶候、

一御參府一条、筑前表以来ノ趣共細々被申越、殊ニ

(信明、八戸藩主)  
南部様被遊御參府候由、無此上御都合ノ事ニ候、御意味合ノ義モ能ク御承知相成、御引受御世話被成進、久世(長岡)侯へ毎々御出ニテ種々御申込ノ処、能キ御都合ノ由、琉球ノ御申立ニテ、御願事御内々被差出候趣共逐一致承知候、(茂久)太守様ハ勿論、拙者初一統、先ハ安心ノ事ニ候、此上ハ多分御願達ノ義ハ後便待入申候、偏ニ南部様被遊御骨折候故ノ義ト難有奉存候、御礼書差上候得共、貴殿ヨリモ猶又御礼ヨロシク申上給度候、太守様ヨリモ御願達ノ上ハ、自ラ御礼被仰上候得共、此節ノ処モ御礼書被進候ニ付、是又取繕ヨロシク可被申上候、

一久世侯へ御使、且被進御品等ノ義委曲被申越致承知候、其外細々被申越候趣得其意申候、一々返答不申越候、(御家老書被義田云云)  
一義田ヨリ京地辺聞合ノ義申出候由、爰許へモ申參り誠ニ懸念候義不少候、此節便ニモ京地ヨリ申參り候、内々彦根ヨリ女中江戸ニ奉公ニ出候趣有之、何方へトモ何ノ訳トモ不相知候得共、當時節ノ義念遣シキ事ト相考申候、其許大輿杯へ入込候テハ以ノ外ノ事ト存候間、右ノ処貴殿深ク被致勤考、取締向ヨロシク被致所置度義ト相考申候(邸中女中ハ外方ノ者多ク召仕ハレタル力故

如此)

一御參府一条个様ニ能キ御都合ト相成候義、

南部様御世話ハ勿論ノ事ニテ、貴殿ニモ別テ骨折ノ義

ニ候、幾重ニモ御願達ノ吉左右待入申候、先ハ右御答

迄乱筆ヲ以テ申入候、御推覽可給候、以上、

七月廿八日

二白、御用濟ニハ帰着ノ筈ト存申候、細事其節可承  
候、以上、

周防

山田壮右衛門殿  
(為正)

御内用答

三四三 百姓町人外国船買入及ヒ広ク航海ヲ許ス

六月十九日(安藤唐陸)對馬守殿御渡、来ルル廿二日触

大目付

御目付

百姓町人共大船所持致シ候儀、御差許相成候間、勝手

次第製造イタシ不苦候、且又外国商船等買受度望之者

ハ、最寄開港場奉行へ可申出候、右船所持イタシ候上

ハ、御国内手広ニ運送御差許シ可相成、尤航海不事馴

差支候者共、願次第按針之者并ニ水夫等御貸渡可相成

候、猶航海手続等委細之儀ハ、追テ可及沙汰候、扱又右

船製造且買受候者ハ、其節々船形絵圖面ヲ以、当人又

ハ御代官・領主・地頭ヨリ御軍艦操練所へ可申出候、

右之趣、御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭ヨリ可被相

触候、

六月

右之通可被相触候、

別紙通從 公義被 仰渡候条、不洩様早々可致通達候、

七月

御家老座印

三四四 洋風ノ被服及ヒ冠帽禁令

六月廿七日(公世法周)大和守殿御渡、来月朔日触

大目付へ

(洋服ヲ用ル者アリ)異風ノ筒袖、異様之冠物ハ着用不相成趣、兼テ相触置

候処、近頃密々着用致シ候族モ有之哉之由、如何之事

ニ候、以後心得違無之様可致候、尤御軍艦方其外大船

乗組之者、且武芸修行之者筒袖ニ無之テハ差支候分、

船中又ハ稽古場ヲ限り、外国人ノ服ニ紛敷無之様、仕

立相用候儀ハ不苦候、且又皮履之儀モ、御軍艦方等船

中ヲ限り相用候儀ハ不苦、百姓・町人共之儀モ、職業筋商壳体ニヨリ筒袖着用、雪中皮履相用候儀、是迄在来之品ハ苦シカラストイヘトモ、外国之製ニ紛敷相仕立候儀ハ不相成条、心得違無之様其筋ニヨリ堅可申付候、

右之通可被相触候、

六月

別紙通從 公儀被 仰渡候条、不洩様早々可致通達候、

七月

御家老座印

三四五 御曲輪内銃隊操練ヲ許ス

大目付へ

砲術稽古・銃隊操練之義ニ付テハ、追々被 仰出候趣モ有之候処、居屋敷場所柄ニ寄り、足並操練之砌、空砲打放シ候儀モ差支有之、不便ノ趣ニ付、以来二ノ御曲輪内外屋敷々々筒場無之向ニテモ、場所ニ寄地所ノ模様次第、玉目八匁小筒ヲ限り空放打放シ、御差許可相成候、尤場所并地所ノ広狭、隣家地界ノ模様モ有之儀ニ付、相願候向々へハ為見分、御目付支配向之者可被差遣候条、可被得其意候、

右之趣向々へ可被相触候、

八月

〔幕府沙汰書にて補註〕

三四六 武田山川両士招喚ノ報

酉六月十一日夕方御用召ニテ参 殿、入夜御達

武田相摸守

右御調之義有之候間、取調中禁足籠居被 仰付段、  
〔九条尚忠〕 関白様御命之趣、御世話今日被 仰渡候事、

右之通御達ニ付、先御内玄関へ罷出ラレ、夫ヨリ於臺子之間控ト申達、子過刻頃於籬之間、鳥居小路法印・大谷法眼・岡本出雲等列座被申渡候由也、

山川九郎左衛門

右御調之義有之候ニ付、取調中禁足籠居申付候事、

全 文 吉

前同断

右之通夫々御達ニ付、夕七時比駒井大隅ヨリ口達ニテ、仲ケ間一同参 殿有之候様被申達、其外地方郷士等迄皆々出仕被申渡候事、  
一武田相摸守御役御免、家宅諸道具附ケ立ニ付、駒井綴喜・松井等入夜五時頃ヨリ罷越、深更引取、右宅番ト

シテ松井・青木耕之丞へ被 仰付、

一 木屋町御用所へハ望月大賀其外罷越候ヨシ、

一 山川へハ地方郷士等罷越候ヨシ、

一 十二日西成・猪飼兩人宅番トシテ罷越候ヨシ、

一 相州御殿ヨリ引取未明ノヨシ、

一 右ニ付御用掛大谷法印進加州等へ被 仰付渡、因州モ

出勤被罷上候事、

### 三四七 幕府亞墨利加合衆国へ軍艦製造御頼書簡

文久元酉年七月、亞人へ之書翰

亞墨利加合衆国全権

(Minister 公使)

ハニストル

(Crestler 閣下)

エキセルレンシー

(Coward Harris)

トンセント・ハルリスへ

以書翰申入候、兼テ会話之節相談ニ及ヒ置シ如ク、

別紙注文之通、軍艦二隻ソノ政府工場ニ於テ打立頼

入度、就テハ今般此方役人差出シ、為立会候事可然

ト忠告之趣アレトモ、右ハ即今治定之答ニ及ヒ難ク、

猶後日商ニ譲リ、兎ニ角右二隻之軍艦製造之儀ハ、

其政府之懇親ヲ頼ミ、万事周旋ヲ望所也、尤委細之

儀ハ、猶外国奉行ヨリ引合ニ可及候間、其段心得居  
候事ニイタシ度、拜具謹言、

文久元年

西七月

久世大和守花押  
安藤對馬守花押

是ヨリ先、和蘭人ニモ註文セラレタリ、勝義邦力著シタル海軍  
歴史ニ詳記ス(参照)

### 三四八 大關和七郎蓮田市五郎所刑

七月廿六日申渡

水戸殿家来ニテ

出奔致シ候

大關和七郎

蓮田市五郎

森山繁之助

杉山彌一郎

森 五六郎

右之者共、外夷へ被為対候御処置振等品々申唱、銘々

申合国許出奔イタシ、剩へ多人数徒党ヲ結ヒ、重キ御

役人登 城之節御場所柄ヲモ不憚及乱妨候始末、不恐

公儀仕方不届ニ付、死罪、

水戸殿家来

岡部藤助伯父ニテ

先達テ出奔イタシ候

岡部(忠吉)三十九郎

右之者儀、先達テ出奔イタシ候身分、外夷へ被為対候御処置振等品々申唱、同藩關新兵衛其外ノモノ共、俱ニ重キ御役人登 城之節、御場所柄ヲモ不憚及乱妨、新兵衛一同其場ヲ逃去、猶水戸殿領内へ立戻潜居罷在候段、仮令其節刀ヲ拔騒立候儀等ハ無之候共、右始末不恐 公儀仕方不届ニ付、死罪、

水戸殿御家来ニテ

出奔イタシ候

金子孫次郎(教孝)

右之者外夷へ被為対候御処置振等品々申唱、重キ御役人へ可及乱妨手筈等同志ノモノ共及嘯置、其身ハ存シ(ミカ)含シ候筋有之候由、同藩清釵四男佐藤鐵三郎ヲ召連、(兼光)松平修理大夫家来有村雄助俱ニ其身ヲ偽リ、上京可致ト仕成候段、不恐 公儀仕方不届ニ付、死罪、右之通申渡之由、

當時都鄙一般ノ説ニ、義人ナリ忠臣ナリト唱へ悼惜セリ、如斯ノ人心ナルモ、幕府ノ專横ヲ憤慨シタルニ依ラスンハアラス、所刑ノ後、屍ハ小塚原ノ傍地ニ埋ミタルニ、香花ヲ捧ルモノ続々タリトナム、

三九 水戸藩士細江某藩邸西門ニ於テ屠腹

辛酉七月廿九日相達候書狀ノ内ニ、去六月十五日朝四ツ時比、水戸浪人細江六兵衛(細江六兵衛門之)ト名乗、御屋敷へ奉訴候由ニテ、此御取次再三ニ及ヒ相断候へ共、番人ヨリ个様ノ事ハ何ノカノ色々御留主居候間、彼ハ可被取次ト返答イタシ、西御門へ相廻候テ取合不致、無抛西御門へ参リ切腹イタシ候由、一説ニハ切腹イタシ候付、辻番人刀打落取押候テ、奉行所へ御届相成候由、彼方へ御引取ニテ、夫ヨリ死失候哉不相分トノ事ニ候云々、細江某カ藩邸西門外鋪石ニ於テ屠腹シタルハ事実ナリ、曩キニ入邸ノ三十七名同列ノモノナリト雖モ、故アリテ後レタリト云、情由知ルニ由ナシ、

三五〇 参考 義舉録抄是枝事 実抄

文久元年辛酉春万延二年二月十九日 元文久ト改ム是ヨリ先キ薩摩谷山ノ市



人ニ是枝柳右衛門貞至貞至ノ家ハ市端ニ在リナル者アリ、人ト為リ慷慨氣節アリ、是年偶眼ヲ病ヒ、暇ヲ乞テ筑前ニ治療ス前記柴山愛次郎書翰参照、時ニ伊勢ノ神官ニ御炊新撰姓氏録ニ云御炊ノ姓ハ、武内宿禰六世ノ孫、宗我馬背ノ宿禰ヨリ出ツト太夫ト云ヘル人アリ、貞至適々太宰府ニ於テ親善ス、一日太夫貞至ニ語ケテ曰ク、方今我国ノ形勢タル外夷陸梁内事日ニ非ナリ、宜ク先ツ力ヲ国ニ致シ、幕政ヲ匡正シテ王室ヲ擁護セサルヘカラス、子若シ国ニ尽スノ志アラハ、我聊力子ノ為メニ謀ル所アラン、當時 朝廷ニ中山大納言忠能アリ、頗ル心ヲ 王事ニ尽ス、子若シ就テ国事ノ如何ヲ知ラント欲セハ、其諸大夫中ニ田中河内介綏猷ナル者アリ綏猷本氏ハ千葉但馬出石ノ医師、曾テ儒字ヲ好テ京師ニ遊ヒ、後終ニ中山家ノ一族田中氏ニ入籍ス、故ニ其氏田中ヲ冒稱ス、從六位ニ叙シ河内介ニ任ス、胆略アリ王事ニ、予ト相識ル、予為メニ一書ヲ添フヘシト、貞至大ニ悦ヒ書ヲ乞テ之ニ赴キ、終ニ河内介ニ就テ大納言ニ謁スルヲ得、談則国事ニ及フ、納言曰ク、王室微弱幕吏專横、而シテ外夷外ニ窺ヒ忠臣内ニ斃ル、誠ニ危急存亡ノ秋ナリ、今ノ計ヲ成ス宜ク諸大藩中ニ就テ賢臣ヲ撰ミ、之ヲ京ニ召シテ京ニ召スノコトハ安政五年五月既ニ齋彬公密勅ヲ奉セラル以テ濟世ノ策ヲ建サルヘカラス、然ラスンハ恐クハ噬臍ノ悔ヲ生セン、貞

至問テ曰ク、薩藩ニ在テハ誰レカ其任ニ當ル者ゾ、納言曰ク、薩州ニ島津左衛門久徳アリ、之ヲシテ当路ニ當ラセシメハ事必ス成ラン、貞至曰ク、然ルカ、然ラハ則臣急ニ薩摩ニ赴キ、告ルニ此事ヲ以テセント、発スルニ及テ綏猷之レニ一書ヲ与ヒ、小河一敏ヲ訪ハシム、一敏ハ豊後岡藩ノ士ニシテ、亦頗ル勳 王ノ志アリ、綏猷ト交ヲナス者、四月二日貞至豊後ニ至リ一敏ヲ訪ヒ、時事ヲ談シ密ニ実ヲ語ク、一敏其志ヲ嘉ミス、而シテ未タ断然之ニ応セス、貞至辞スルニ臨テ二首ノ歌ヲ留別シテ曰ク、  
毛々止勢速、奈加婆多能之久、久良之計理、乃許理婆美与仁、伊佐武久比勢牟  
耶迦天麻太、玖茂乃字辺爾毛、那濃良南無、之農咄祿仁奈久、耶麻保止止喜寸  
ト乃去ル、亦以テ忠君愛國ノ志ヲ見ヘシ、  
義舉録ニ曰、此時一敏貞至ヲ迎ヘテ其由ヲ聞ニ、予年来薩州ニテ有志ノ士ナル大久保一蔵利通当稱福仲簡ト稱・伊地知有村俊高ト稱・海江田武次兼・奈良原喜左衛門清・同幸五郎混忠・吉井幸助友實・税所喜三左衛門篤満・森山棠園永賀等ト互ニ時事ヲ談論毎ニ謂ラク、今ノ時ニ

当リテハ、 朝廷特命ヲ以テ、一橋刑部卿ト越前前〔慶喜〕 中将トヲ拳玉ハ、尊攘ノ端緒即チ以テ開クヘシト、

是ニ於テ、貞至手筋ヲ求メ其事ヲ密奏セント謀リ、

会ハセテ京ニ入り、其昔河内介ト交アレバ、此人ヲ

タヨリテ頼ミケルニ、中山大納言忠能卿ハ、此頃議

奏タリシカ密ニ其一通ヲ御覽セラル、然レトモ強チ

ニ取次キ玉ハス、御子前中将忠愛朝臣御覽セラレ、

此ノ朝臣幽居シ玉ヘトモ、其御妹ハ

〔明治天皇〕 睦仁親王ノ御腹ナレバ、時有テ其筋ヨリ運ヒ玉ハン

ト聞ヘ、ヒソカニ柳右衛門ニモ拜顔被仰付、賜モノ

杯モ有タルトゾ、猶柳右衛門都ニ在テ見聞スルニ、

九條関白殿下ト所司代酒井若狭守忠義トノ姦悪ハ、〔尚忠〕

見ニ忍ヒサル事ノミ多ケレバ、如何ニモ此俟ニハ過

シ難ク覚ヘテ、河内介ヲ語ラヒケルニ、帰途小河氏

ヲ訪ヘト河内介ノ申ケルニ任セテ、訪ハレシトナリ、

然ハ有レトモ必斯クセント云フ程ノ策略モ立タス、

帰国ノ後同士ニ謀リ、重ネテ音信レナントテ別レタ

リ、此時柳右衛門ノ歌二首ヲ残セリト云フ、歌ハ載

セテ本文ニ在リ、貞至乃兼程薩摩ニ還リ、左衛門ヲ

訪テ面語セント請フ、其弟桂小吉郎〔後右衛門ト改メ、家老ヲ勤ム〕 十年ノ後西郷

ニ与ミシ、九月二十代テ其事ヲ聴ク、貞至告ルニ大納言ノ四日屢腹シテ死ス

言ヲ以テス、小吉郎曰ク、宜ク谷山ニ帰リテ以テ後

命ヲ待ツヘシト、貞至乃帰ル、翌日米良助右衛門〔許裁〕

事ノ類カ、貞至ノ家ニ至リ誠シメテ曰、是ハ一大事ナ

リ、決シテ他言スヘカラスト〔東郷実政直話、○実政当時鹿見島裁判所ノ權目官ノ職ニ居リ、今ノ〕

警察官、親ク貞至ヲ礼讃セシモノ今高輪警察署ニ長タリ

以上記ス処、大久保利通日記及ヒ樺山資之日記・是枝日記等参看、事実ヲ弁スヘシ、

### 三五 桂久武ニ大島警衛ヲ命ス

萬延二年辛酉十二月廿三日大島有警衛之命、附属但廿

名、此時嘉永癸丑以來墨夷渡来、以降外寇屢吾近海ニ

横行ス、幕府威令衰ヘ、失三所置、彼跋扈輕蔑、因テ有ニ

此命、且使レ掌ニ銅鉞山事〔久慈〕、川上但馬伝命、

桂 右衛門

右ハ當時外寇ノ折柄ニ付、此節大島ヘ為守衛方被差

越候、左候テ彼表銅山方ヘモ被掛置候条可申渡候、

十二月 但馬川上久運

當時藩内党派分立、稍軋轢ノ形ヲ顯シタリ、其源因ハ義孝云々

ノ寬急論ニ外ナシト雖モ、其レカ為ニ種々ノ物議ヲ醸為セリ、

党派ハ則チ誠忠派・日置派ト唱へ（島津左衛門・桂久武等ノ一派ヲ云フ、誠忠派ナル者ハ小松・中山・大久保ノ一派ヲ云フ）、誠忠派ナル者ハ、君側ニアル儀ニテ勢力アリ、桂ナルモノハ日置派中ノ巨魁トモ云フヘキモノナル故、誠忠派ノ悪ムトコロトナリ、遠島ノ警衛或ハ銅山発掘等ノ名ヲ以テ、揚テ遠ケタルモノナリ、事情ノ詳細ハ石室秘稿ニ参照スヘシ、

### 三三二 参考 桂久武日記鈔

同正月十九日、（久徳）老川上但馬殿ヨリ同役新納次郎四郎同伴罷出候様致承知、御家老座三ノ間ニ罷出候処、（勇）究士御救助ノ儀被仰付候間、兩人ニテ取調差上候様被相達、（側力）則ヨリ取付調方イタシ、酉二月廿六日但馬殿宅へ兩人致持參、入御内見候処、清書ノ上差出可申承、同晦日表通ニ差出候事、

酉七月廿八日、右取調趣法ヲ以テ、給地御蔵入高三千石金貳万兩究士救助ニ被成候間、手続ノ次第尚又取調候様被相達掛被仰候事、（付脱之）

### 三三三 城下窮士救助調査員 桂久武日記鈔

島津 仲久徴  
新納次郎四郎久脩

桂 右衛門久武

右ハ窮士御救ノ儀ニ付被仰出趣有之、御高五千石・御金貳万兩被差分候段ハ、別段申渡通ニ候、然処余多ノ窮士、勤方ハ勿論、金子被成下候儀共、親疎無之様取調第一ノ事候間、手続ノ儀共篤ト致吟味、往々不致混雜様無之候テハ不相濟候付、右三人へ治定迄ノ間掛被仰付候条、手続ノ儀共致吟味、被申出候様被仰付候、左候テ外御小姓与番頭モ銘々受持ノ人体無親疎様、兼テ綿密取調置候儀共肝要ノ事候間、同席一統何扁申談、被致取扱候様被仰付候、尤大番頭へモ申談ノ上、何分可被申出候、此旨可申渡候、

七月 但馬川上久運

當時城下士ノ中ニ貧困急迫ノモノ凡千六百人ニ余レリ、夫等ノ輩救助ノ方法ヲ設ラレタリ、

### 三五四 参考 寺島宗則自記鈔

文久元年辛酉

蕃書調所ヲ開成所ト改称ス、（安考旧名）勝麟太郎其長トナル、古賀謹一郎ト二名ノ長官ナリ、初ハ宗則等生徒ニ教授シタレトモ、新任ノ教員多ク、仍テ同僚等ト皆翻譯ヲ為

セリ、教育ノ方法杜撰ニシテ、猶漢書ヲ讀ムカ如シ、故ニ進学甚タ少シ、是レ西洋学校ノ教授法ヲ知ラス、且教授未タ其任ニ堪ヘサルヲ以テナリ、又翻譯成ルモノ多シト雖モ、之ヲ觀テ其要ヲ得ルモノ甚タ少シ、開成所創立以來八年ニシテ、未タ学功ノ挙ルヲ見ス、是ヨリ二年後、榎本釜次郎・津田眞一郎(真通)・西周助等數十人和蘭ニ至リタルヲ以テ、帰朝ノ後、此諸先生ヲシテ教授法ヲ伝ヘシメハ、成ル所アルヘシト雖モ、東西政党多端ノ時ニ会シタルカ為メニ、之ヲ政務ニ用ヒタレハ教育ノ功ナシ、此年ヨリ三年前ニ幕府ハ外国ト条約ヲ結ヒ、二年前ニ横濱開港ス、以來交際事務ニ関シ、各国公使ヨリ閣老ニ書翰ヲ送ル時ハ、蘭文ヲ以テ其訳トス、之ヲ和文ニ訳スルハ開成所教授ノ任ナリ、前日登城スヘシトノ命下レハ、教授數人俗官ヲ從ヘ、城中掃除人ノ休室ニ入り、茶・煙草ヲ一喫スレハ、外国奉行又ハ監察等其書翰ヲ持來リ、殿上ノ間又ハ大広間・柳間等其日妨ケナキ所ニ誘引シテ筆紙ヲ授ケ、隣室ニハ徒目付・小人目付等一二名(外國ニ関スル機密)警察ス、訳成レハ俗吏ヲ以テ之ヲ付托シテ本官ニ出セリ、故ニ一書翰ヲ訳スルニモ、少クモ二日ニシテ十餘人ヲ用ヒタリ、其鄭重想

フヘシ、當時外國交際ニ関シテ要路ニ在ルハ、阿部伊勢守(忠憲)・岩瀬肥後守(利照)・堀織部正(忠徳)・水野筑後守・大久保右近将監(謙官)・大久保等ナリ、吾輩洋学者中万国公法ヲ讀ミシ者一人モナシ、況ンヤ其他ノ諸官ヲヤ、諸条約及ヒ交際ノ式皆彼ノ云フカ俛ニ任スルノ外ナシ、今ヨリ之レヲ回顧スレハ汗背ニ堪ヘス、十月十二日開成所官宅ヨリ、本郷三丁目横町天神前幕士山本主計ノ屋舎ヲ買ヒ、修繕ヲ加ヘテ転居ス、十一月一日、薩藩医足立梅景ノ勅ヲ以テ、川本幸民(裕)ヲ媒介トシ、藩士曾昌啓ノ長女ヲ娶ル、茂登ト称ス、十二月、竹内下野守使節トシテ欧州ニ発セントス、岡崎藤左衛門其属官タルヲ聞キ、同人ニ請フテ欧行ニ從ハハトス、岡崎之ヲ竹内ニ通ス、竹内宗則ヲ見ントス、即チ至リ始テ竹内ニ面ス、後訳官・医官兼勤ヲ以テ隨行スヘキノ命アリ、一行二十七名十二月下旬江戸ヲ発セントス、妻ハ高輪薩邸ノ住曾昌啓ニ託シ、家及家財ハ手塚律蔵ニ託シタリ、余発セル後、隣家ナル地主山本主計ヨリ家ヲ移スヘシトノ談アリ、為ニ少許ノ金ヲ得テ家ヲ与ヘタリト、帰朝ノ後之ヲ聞ケリ、歐行ハ別ニ日記アリ、其略ヲ掲クレハ、十二月二十二日、品川

湾ニテ英艦ニ投シ、(アラブ連合共和国) シュエスニ至リ鉄道ヨリカイロヲ(同上)

過ク、他ノ英艦日本使節ヲ迎ヘンカ為メアレキサンド(同上)

ルニ達スルノ間、四五日カイロニ留リ、船ノ達スルト

ノ報ヲ得テ「アレキサンドル」ニ至リ、同港ヨリ復タ

英艦ニ乘リ佛ノマルセルニ着シ、(パリ) 龍動ヲ経テ(ロンドン)

和蘭・比義ニ至リ、(オランダ) 伯林及比特堡ニ行キ、佛ニ帰リホ(ベルリン)

ルドウヨリ(ポルトガル) 葡萄牙ノリスボンニ航シ、佛艦ニテシユエ

スヲ経テ、翌年十二月十一日帰朝ス、凡ソ一週年ナリ、

歐行中ハ皆羽織・袴ヲ着シ、水口笠ヲ冠リ草履ヲ用ユ、

後草履尽キテ洋製ノ草履ヲ用ヒタリ、医官四名皆落髮、

他ハ皆結髮ナリ、道路ヲ歩スレハ到处国人群集シ、同

行ヲ観テ笑ハサルハナシ、帝王ニ謁スルハ使節及三四

名ノ官員ノミ、吾輩隨行セシコトナシ、然レトモ宮殿

ヲ観、其他所々ニ至ルコト休日ナシ、余ト箕作秋坪ト

ハ病院・学校等ニ治療・教育及組織ノ方法ヲ探究セリ、

其他各分任アリ、帰宿スレハ之ヲ筆記シ、終ニ集テ大

冊ヲ成セリ、然レトモ帰朝後之ヲ読ムノ暇ナカリシナ

リ(或云フ、福沢ノ著セル西洋事情多クハ此間見録ニ基ケル  
モノナリ)

### 三五五 浪人駕籠訴及ヒ乱妨ノ私報

西六月廿九日、御老中本多美濃守登城、引続キ松平豊(信濃)

後守登城ノ所、辰ノ口ニテ何者カ不相知比肩表ノ者、

本多様ヘ致駕籠訴、右混雑央士体ノ者四人、何方ヨリ

参候モ不相知、右ノ内一人豊前守駕籠目当ニテ切込候

処、駕籠廻リノ面々相働、双方無疵ニテ則一人召捕候

処、残三人其場ヨリ直ニ逃去行衛不相知、無拠即座ニ

テ及糺方、何様ノ訳合ニテ切込候ヤ、一通リ被相糾候

処、自分事ハ水戸藩中ニテ、只今小石川屋シキヨリ罷

越候ト申出迄ニテ、其後ハ何タル儀モ一言モ不申出、

只々無言ニテ罷居候処、直ニ町奉行ヘ御引渡ニ相成候

由、始終水府ノ家中亦ハ浪人共、無絶間江戸ヲ騒セ申

事ニテ、御役方油断ナラン事ニ御座候、此一条実正ト

申事ニテ候、

辛酉七月廿九日到達

此書巨真偽如何ンヲ知ラス、恐ラク虚記ナラン、他日考証スベ  
シ、

文久元年 (1861)

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編

文久元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料  
〔紙数八十七枚〕」の記載あり

## 目録

非蔵人日記鈔

〔当局者人名等〕

年号勘文奏聞

年号改元文久元年

和宮関東御下向御延期

和宮内親王宣下

壽萬宮逝去

日蝕参賀被停

和宮関東御下向御治定

和宮関東御下向御首途

皇女御降誕及参賀

和宮関東御発輿

新嘗祭

三條實萬公落飾ヲ請フ九條尚忠ニ勅書

三條實萬公落飾願ニ就テ間部答奏

松平大膳大夫家臣益田弾正へ与ル書

所司代酒井若狭守エ被仰出候御書取

久世大和守合衆国公使へ与ル書

孝明天皇御製

麾下士へ貸与金達書

和宮御東下御道替達書

氏名不詳ノ書

和宮関東御下向御延期

文武教育訓示

大橋順蔵妻奈嘉子カ詠

和宮関東御下向御発輿ニ條城へ御立寄協議

和宮内親王宣下御待遇向照会

和宮関東御下向御道筋変換

朝廷窮民救助之令旨

將軍家紅葉山靈屋参詣達書

東禪寺暴徒懷中書

堀織部正建言

清国攘乱ノ概略(長崎報)

魯国軍艦ノ事実宗對馬守具申

魯国軍艦処分伺書

魯人對州占拠ノ形勢具申

東ナル小梅ノ里ニ住ムモノ、言葉ノ花

以上三十六条

非藏人日記鈔〔番号三五六から三六七は非藏人日記鈔〕

三五六 (当局者人名等)

三五六ノ一  
萬延二年辛酉 文久元年ト改ム

朝廷当局者人名

伝奏

廣橋 一位光成卿

坊城中納言俊克卿

議奏

久我右大将建通卿

中山大納言忠能卿

正親町三條大納言實愛卿

飛鳥井侍從宰相雅典卿

久世三位通熙卿

奉行

三條西中納言季知卿

野宮宰相中将定功卿

幕役〔文久二・三年頃のものか  
幕役以下一〇行非藏人日記鈔(宮内庁所蔵には記載なし)〕

閣老 井上河内守正直

全 水野和泉守忠精

全 松平豊前守信義

全 安藤對馬守信正

全 板倉周防守勝静

若年寄有馬遠江守道純

全 稻葉兵部少輔正巳

全 諏訪因幡守忠誠

全 田沼玄蕃頭意尊

全 平岡丹波守道弘

三五六ノ二  
萬延二年文久元年ト改ム

正月二日

一諸司代若狭少将忠義朝臣参 〔酒井〕 内也、午剋昇車寄子参着于鶴間、而役人衆出会、其後更伝奏衆誘引于候処如例、

四日

一関白殿 〔九条尚忠〕〔有栖川宮熾仁親王〕〔有栖川宮熾仁親王〕 中務卿官 帥官等 御参、

七日

一内大臣殿御参、

九日

一右大臣殿御参、 〔花山院家厚〕

十一日

一神宮御法楽也、奉行日野中納言資宗卿、講師萬里小路弁博房、

一入道宮御参、

十三日

一関白殿御参、

十五日

一中務卿官 御参、

十六日

一右大臣殿 〔美良〕 一條大納言殿御参、

一岩倉少将具視朝臣奏慶也、

十七日

一議奏当番右大将殿宿退出、番加勢石野三位殿其余惣参、伝奏衆参侍、

一帥官・長吏官等御参、

十八日

一座主官御参、

十九日

一右大臣殿 兵部卿官 帥官 内大臣殿 一條大納言殿

中納言中将殿等御参、

二十日

一議奏柳原右衛門督殿其余惣参、〔光愛〕 右大将殿 不参 伝奏衆参侍、

一來廿三日午刻諸司代依召参 内候旨、〔光成〕 伝奏廣橋殿被申

渡、

一中務卿官御参、

廿三日

一所司代酒井若狭守近衛少将推任叙之、御礼従車寄参

内御礼相济通于候所、更二亦依 召参上、此儀ハ今度

知恩院宮得度御入寺相济二付、拜領物 〔尊秀法親王〕 自讀歌十体和歌御

候所賜酒饌菓酒云々、〔色紙白紗線五卷〕



廿四日

一帥宮御參、

一就來月二日春日祭、從廿九日之晚到來月三日朝 御神

事之旨、議奏加勢右衛門督殿被申渡令壁書、

廿七日

議奏当番飛鳥井侍從宰相殿其外惣參、伝奏兩卿參侍、

宿加勢八條三位殿、

廿八日

一今度 和宮様御縁組被 仰出、且御祝儀御使被進ニ付、

右為御祝儀、攝家方其外堂上面々地下役人ニ至迄、一

同江御内々之思召ヲ以、金壹万五千兩被下候間、其段

御兩卿江御達シ可申旨、年寄共ヨリ申越候事、

二十九日

議奏久世三位殿・宿番加勢冷泉中納言殿其外惣參、伝

奏衆參侍、

二月一日

一明後三日已刻関東使由良播磨守・諸司代酒井若狹守同

伴參 内之旨、議加勢柳原殿被申渡、依之令壁書、

三日

一中務卿宮・内大臣殿等御參、

一関東使為年頭御祝儀、由良播磨守貞靖朝臣參 内也司所

代若狹少將處、期所勞不參、

先是献物伝奏衆雜掌諸大夫間江持參、番頭請取如左、

一大樹公ヨリ御太刀一腰 御馬代銀百枚一疋 蠟燭千挺

一水戸中納言慶篤ヨリ御太刀一腰 御馬代黃金十兩一疋

一尾張中納言茂徳ヨリ御太刀一腰 御馬代黃金十兩一疋

一紀伊中納言茂承ヨリ御太刀一腰 御馬代黃金十兩一疋

一由良播磨守貞靖朝臣ヨリ御太刀一腰 御馬一疋

右御拝道廊下江並之目錄上包台、等兼之如何例、伝奏衆有内覽此時大樹公太刀折紙六位被

之、任命三家太刀折紙・黄金附台等議奏衆前廊下江操

付、番頭議奏衆江申届、

大樹公白銀附台并蠟燭豎目錄白銀附台之上江載之

小御所東廟江操付、高家自分披露太刀折紙高廊階下以

金屏風之置、御对面之節出向之者高家江渡之但此日御、对面無之

一伝奏衆案内之上武士參着、於鶴間向役出會、昵近衆等

有程伝奏衆更出席誘引、先是御殿御構殿奉行衆沙汰也、

円座敷設如例、

一武士鶴間江帰座之後伝奏衆出座、於小御所給天盃頂戴

之御礼申述退出、此時伝奏衆直ニ依退出、右口上議奏

衆江可申入番頭江被命、

一 小御所献物議奏衆へ申入、東廊下江令運送、武士太刀折紙ハ議奏衆前廊下江操付置、此時献物四ツ折ニ書付、

議奏衆へ進之、番頭代へモ切紙遣之、但シ鑄形ノ内ニ有之、太刀折紙等議奏衆前廊下操之、但シ此儀無之、高家太

刀折紙奥廊江操付、

八日

一 右大臣殿両度中務卿宮・帥宮・内大臣殿等御参、

九日

一 上丁也、菅・清両流刻限参集、

十日

議奏当番久我右大将殿宿退出、番加勢其外惣参、伝奏

両卿参侍、

一 関白殿 中務卿宮等御参、

十一日

議奏当番正親町三條大納言殿宿退出、番加勢日野中納

言殿、其余惣参、伝奏両卿参侍、

一 知恩院宮自今八景間御通之旨、議奏正親町三條殿被申

渡畢、

三五七 年号勘文奏聞

十二日

議奏当番侍從宰相殿・宿番加勢〔子衛門晴雄〕陰陽頭殿其外惣参、伝奏衆参侍

一年号勘文清書奏聞也、伝奏奉行六位・侍中等参侍、朝

餉女房奏聞塞有之、同事ニ付南殿御後東西辛戸開、虎間

辺見繕之事兼日奉行職事被命、但刻限辰刻、且知恩院参内ニ付、虎間與風仕切ニテ過路相配之儀有命

一來十七日 内親王 宣下御延引被 仰出之旨、奉行野

宮被申渡令壁書畢、

十三日辛未 晴、入夜丑剋計地震一動

議奏加勢柳原右衛門督殿、伝奏両卿参侍、

十四日壬申 晴、申刻計地震一動

議奏当番加勢野宮宰相中将殿伝奏衆参侍、

十六日

一 中務卿宮御参、

十七日

一 内大臣殿 一條大納言殿御参、

三五八 年号改元文久元年

十九日

一 関白殿 〔九条尚忠〕 右大臣殿 〔有栖川宮德仁親王〕 帥宮 〔三条春敏〕 内大臣殿 〔実良〕 一條大納言殿

中納言中将殿 〔九条道老〕 左衛門督殿等御參、

一革命定陣之儀有猷已刻過被始、伝奏大炊御門大納言家信卿、奉行職事鷺尾頭中将隆賢朝臣・陣上卿二條内大臣齊敬公、其外參役衆刻限參集、奉行附良知重篤勤之、

一改元定陣被始 未刻 出御于朝餉間、有

奉聞、終 入御、其後詔書・吉書等 御覽也、

一南殿御後東西辛戸開、虎間辺見繕之事、兼日奉行職事有命、

一改元定萬延二年改可為文久元年之旨、以書附四ツ折奉行野宮殿被申渡令壁書、

一虎間格子上見繕之事、兼日奉行職事有命、

一依及入夜端番所前中金燭一基・手燭一基設之、虎間格子下江臨時行燈出之 但相濟之後火元点檢無異、議奏衆へ御届申入、

一同事二付、諸家參賀同列同之晚頭書付上之、但參役衆至六位恐悦以表使被申上、仍書付除之、

一同事二付、同列当番之輩御祝酒頂戴也、

一同事二付、僧尼重服之輩參 内可憚、兼日被申渡之、

廿二日

一水無瀬社御法築也、奉行柳原源右衛門督殿參侍、小御

所御構殿奉行衆沙汰也、

廿三日

一改元詔書復 奏也、陣上卿大炊御門大納言家信卿、伝奏同卿、奉行鷺尾頭左中将隆賢朝臣其參到六位藏人各參侍 但猷、陣被始午刻 出御于朝餉奏聞之儀迄テ入御、 〔御祝乙〕

一就來廿九日春日社仮殿遷宮、自來廿八日晚到三十日朝御神事之旨、議奏 〔金能〕 中山殿被申渡、

廿五日

一就來廿九日春日社仮殿遷宮、自廿八日晚至三十日朝御神事之旨、奉行野宮殿ヨリ申來、依之令壁書、

廿八日

一明後三十日午半刻

一壽萬宮御參 内被 仰出候、若降雨二候ハ、可為翌日之旨、議奏衆被申渡候、仍テ令壁書畢、

廿九日

一春日社仮殿遷宮也、奉行職事萬里小路博房參向也、 〔つこ〕

三月一日

一当日為御祝詞、左大臣殿・近衛大納言殿・左衛門督殿等御參、其余御不參有御使、

一壽萬宮此日御參 内也、

三日

一為上巳御祝詞、右大臣殿・中務卿宮、兵部卿宮・帥宮・  
内大臣殿・近衛大納言殿・一條大納言殿・左衛門督殿  
等御參、

三五九 和宮関東御下向御延期

五日

一左府公御參、  
〔二条忠香〕

一和宮御入城、当春御筥輿御内々御治定之処、依道中差  
支暫御延引之儀、自関東申上ルニ付、追テ御下向可被

仰出候事、

但旬何時被 仰出テモ、不都合無之様用意可有之事、  
右懸へ可申渡奉行野宮殿被命ニ付、御用懸リ第一松室  
重進へ申渡、猶已下へ可被伝申示之事、

六日

一有栖川宮〔親王〕  
中務卿宮御參、

十日

一忠能  
議奏当番中山大納言殿宿退出、番加勢土御門〔晴雄〕陰陽頭殿  
其〔元也〕余総參、伝奏廣橋一位殿參侍、

十一日

一〔京都府〕来十八日石清水臨時祭、從十六日晚至十九日午刻御神

事、来廿七日東照宮奉幣發遣、從廿六日晚至廿七日午刻  
御神事之旨、議奏加勢野宮宰相中將殿被申渡令壁書、  
〔定功〕  
〔十三日脱丸〕

十四日

一右大臣殿御參、

十五日

一左大臣忠香公極位奏慶也、総テ如例、

一内大臣殿・近衛大納言殿・左衛門督殿御參、

十七日

一左大臣殿御參、

十八日丙午 晴

一議奏当番中山大納言殿其外惣參〔宿番加勢〕  
〔石野三位〕

一右大臣殿御參、

一石清水臨時祭也、使三條西少將殿、奉行職業室頭弁長

順朝臣參、役公卿・殿上人・舞人加陪從、其外六位侍

中等刻限參仕、但昼御座格子布設有之ニヨリ不降、  
〔參力〕

十九日丁未 晴、入夜雨

一議奏当番加勢野宮宰相中將殿其外惣參〔正親町三〕  
〔条殿不參〕

二十日戊申 雨

当番議奏正親町三條中納言殿自余総参、当番卿宿退出、

番加勢堀川三位殿、(後實)伝奏坊城中納言殿参侍、

一就 加茂祭、自來三十日晚 御神事、自十三日到十五

日晚 御潔斎之旨、議奏卿被申渡令壁書、

廿一日己酉晴

当番議奏久世三位殿宿替、番加勢豊岡大藏卿殿其外惣

参、伝奏坊城中納言殿参侍、

一 中務卿宮御参、

廿三日

一 内大臣殿御参、

廿四日

一 関白殿 長吏宮等御参、

廿六日

一 從今晚御神事也、改火掛湯如例、

廿八日

一 中務卿宮御参、

廿九日丁巳晴

議奏当番飛鳥井侍從宰相殿其外惣参、(雅典)正親町三、条殿不参伝奏両卿

参侍、宿番加勢庭田宰相中将殿、(重胤)

四月一日己未 晴

当番議奏正親町三條大納言殿其他惣参、(飛鳥井、殿不参)宿番加勢

三室戸新三位殿、(雄光)伝奏衆不参、

一 為当日御祝詞、右大臣殿・兵部卿宮・帥宮・内大臣殿・

一條大納言殿・左衛門督殿等御参、其外御不参有御使、

三六〇 和宮内親王宣下

三日

一 來十九日巳刻、和宮内親王 宣下被仰出之旨、奉行

加勢豊岡殿被申渡令壁書、去二月八日被仰出之通令取

計訖、

七日

一 左大臣殿 中務卿宮 内大臣殿等御参、

九日

一 関白殿 御参、

十一日

一 神宮御法案也、奉行明日香井少将雅望朝臣参侍、

十三日

一 從今晚 御潔斎二付、改火掛湯等如例、

十五日

一 加茂祭也、於長橋被授 宣命、内藏使・近衛使滋野井

中將実在朝臣、舞人陪從使々卯剋參集、出御于昼御座、

近衛使參進、於長橋廊賜祿、於櫻間暫休息其後發遣、

於宜秋門被立行粧、伝奏正親町大納言實德卿、奉行葉室

頭弁長順朝臣參向、下上社婦參有言上、使同上酉二刻前、

十九日丁丑 晴、入夜雨

当番議奏侍從宰相殿、宿番加勢久我<sup>(通久)</sup>三位中將殿其外惣

參、伝奏衆參侍坊城殿不參、

一左大臣殿 内大臣殿 近衛大納言殿 中納言中將殿

左衛門督殿等御參、

一和宮親王 宣下也、辰半二刻過陣被始、上卿二條内大

臣齊敬公 勅別当中山大納言忠能卿 公卿 中山大納

言忠能卿 三條西中納言季知卿 橋本宰相中將實麗卿・

弁萬里小路弁博房・家司富小路中務大輔敬直朝臣・橋

本侍從實梁・小倉大夫長季・職事錦織大夫教久等參侍、

一親王 宣下二付、小四方御參賀或有御使、諸家參賀、

同列同之腕頭書付上之、此御所親王御方・和宮御方等

江上之<sup>小四方<sub>二</sub>此<sub>一</sub>御所計、</sup>

一重服之輩如天保十三年度參賀無之、当番之輩番代之方

也、  
二十四日

一和宮御方 石清水社御參詣、卯上刻御出興<sup>自桂</sup>、御列

於朔平門 觀覽、丑刻 還御未刻過御社參<sup>云々</sup>、

一泉涌寺遷座日時定陣儀被行、上卿坊城中納言俊克卿、

弁<sup>(左方)</sup>右中弁經之朝臣中御門、奉行經之朝臣兼任、自余所

役參仕、

二十五日

一就來月二日辰刻、伊勢公卿 勅使發遣日時定、從朔日

晚御神事從發遣前々夜到 勅使帰京、翌朝 御潔斎之

旨、議奏卿被申渡令壁書畢、

廿八日

一和宮近日下鴨御社參并二修學院御茶屋被為成砌、御用

有之間、御用掛輩四人共御茶屋江御先廻之儀廣橋殿ヨ

リ被申渡之由、此段豊後被申出也、

廿九日丁亥 晴

議奏当番久世三位殿、宿番加勢庭田宰相中將殿、伝奏

衆參侍、議奏衆惣參、

三六一 壽萬宮逝去

五月一日

一当日為御祝詞、兵部卿官 内大臣殿 近衛大納言殿

中納言中將殿 左衛門督殿等御參、其余御不參有御使、  
一壽萬宮御違例ニ付、今日申剋迄ニ伺

御機嫌堀川家可參議奏衆被申渡刻限無余刻ニ付、近辺  
計触遣候畢、

一壽萬宮今曉子半剋逝去ニ付、自今日三ケ日被止物音之  
処、自今晚御神事ニ付無其儀、

一同事ニ付 親王三ケ日御慎、和宮一ケ日御慎、右被  
仰出之旨議奏衆被申渡候畢但シ自今晚御神事ニ付触不違、

一自今晚 御神事入ニ付、改火掛湯等如例、  
二日

一伊勢公卿 勅使發遣日時定陣儀辰刻被始、上卿一條左  
大臣忠香公、奉行職事業室頭弁長順朝臣、弁清閑寺弁

豐房、文章博士桑原(順長)三位為政卿等剋限參侍、  
一就來九日辰刻伊勢公卿 勅使發遣、來十七日掃朝之旨

被 仰出、  
一伊勢公卿 勅使發遣來九日辰刻掃京、來十七日 御治

定、發遣日時御治定ニ付一兩日中、  
御所方參賀、於親王御方ハ來四日已後參賀、

一發遣当日御所方參賀、來十七日勅使掃京ニ付、当日參  
賀、但シ重輕服者不及參賀也、

右奉行野宮殿被申渡各令壁書、

一同事ニ付、南殿御後東西唐戸開虎間辺見繕、格子上置、  
一同列前番殘当番之輩卯半剋早參、御用見計追々令用捨、

三日庚寅 晴  
当番議奏柳原右衛門督殿其余惣參集、  
(光憲)

七日  
一関白殿御參、

一勢州公卿 勅使發遣ニ付、自來九日晚掃京前夜迄、連  
夜東庭 下御之旨、議奏卿被申渡令壁書、

八日  
一公卿 勅使發遣当日一ケ日被停音奏、警蹕以下之事自  
奉行衆以剪紙被触、

九日  
一関白殿(九条尚忠)左大臣殿(二条忠香) 内大臣殿(三条齊敏) 中納言中將殿(九条道孝也) 左衛門  
督殿等御參、  
(藤司輔啓)

一伊勢公卿 勅使發遣也、使廣幡大納言忠禮卿、王使神  
祇伯資訓王(今度依思) 中臣藤波三位教忠卿、奉行藏人

頭弁長順朝臣自余到六位藏人參仕、  
早日(卯刻)出御朝餉間、御服訖テ御手水供進、此時薦

杉戸番頭開之(繼子)、此後 宣命 奏聞之有之、入 御  
被渡

卯半一再出 御辰刻于昼御座、神宝神馬

刻覽了テ、被授 宸筆 宣命于勅使、

入 御辰刻過、次廢務等陣上卿左大臣忠香公・弁博房、次

行幸于小安殿、供奉公卿左府公以下大・中納言・參議・

少納言・左右次將・職事・六位藏人等巴過、行幸南以

殿被擬小安殿上卿問御幣物之具否・副使之參否等具之由、奏聞

之後有御拜之儀、訖テ 御幣物被授齋部・卜部等、事

訖テ 入御午刻、次発遣也今度神祇官代參向之儀無之、

一酉一刻過 出御于中殿、御手水之節蔦杉戸開、如今朝

下御於東庭、有 御拜訖テ 渡御于

内侍所、戌二刻過入御御塞解之後火之元点檢、如御

神樂可相廻議奏衆被命、仍無異之旨番頭申届、

十日

一 出御於中殿酉刻、御手水供進之節、蔦杉戸開之、藏人參

進之后直加錠如例、

下御于東庭、宸儀訖テ、渡 御内侍所戌二過前 入御御塞

被解之後、火之元点檢番頭見分如昨晚御講總テ為侍中之沙汰、

十一日 戌戌 晴

議奏当番加勢野宮宰相中将殿其余惣參、

一 神宮御法案也、於小御所被読上、御殿御構殿奉行衆之

沙汰也、

一下 御渡 御其余惣テ如連奉行附親真宗孫、夜脱九

十二日

一下 御申半刻于東庭、宸儀訖テ渡 御酉半一、刻前 入御

諸事如累日仍略之、奉行附重良寛役之点檢如連夜入御後火之元、

十三日 庚子 晴、夕景雷雨鳴

議奏当番柳原右衛門督殿其余惣參飛鳥井殿不參、

一下 御渡 御惣テ如連日、奉行附信度為鎮等勤之、

十四日

一下 御申半二刻過渡 御酉ノ刻、入御同刻總テ如連日、

奉行附祐順重和等勤仕、

十五日

一下 御申半刻前渡 御酉刻、惣テ如連日、奉行附經典俊

彦等勤仕、

一 石清水社御法案也、奉行・講師等參仕、

十六日

一下 御 渡御惣テ如連日、

奉行附信平光敬等勤仕、

一加茂下上社御法案也、奉行・講師等參仕、

十七日



一 右大臣殿 兵部卿宮 内大臣殿 近衛大納言殿 一條  
大納言殿 中納言中將殿 左衛門督殿等御參、自余有  
御使、

一 伊勢公卿 勅使源大納言忠禮卿歸朝、自建春門參入、  
酉刻 出御于清凉殿、於昼御座有 御対面 布役侍中、  
為沙汰  
于更於御學問 所脱也 御対面云々、於便所御祝酒被出、  
王使伯少將資訓王 中臣祭主三位教忠卿歸朝、召御學  
問所有 御対面云々、訖于於便所御祝酒被出、

廿八日

一來月一日依蝕被止參賀之旨、柳原殿被申渡令壁書、

廿九日丙辰 晴

有 御拜、當番議奏加勢野宮宰相中將殿、其外惣參集、  
伝奏兩卿參侍、

三十日

一 関白殿 御參、

三六二 日蝕參賀被停

六月一日戊午 晴、已刻日蝕也 三分從已刻  
至巳半刻終  
當番議奏加勢柳原右衛門督殿、光受 伝奏兩卿參侍、  
一 依蝕參賀被止、

一 暁天内侍所神饌早朝餉女房塞也 但シ依蝕也、  
一 六位侍中為御殿覆北小路差次藏人參侍、

十日丁卯 晴

當番議奏加勢柳原右衛門督殿、其餘總參集 久我殿、  
不參、伝奏  
兩卿參仕、

十一日

一 左大臣殿 右大臣殿 帥宮 内大臣殿 御參、

十二日

一 此度

和宮御方御入興之節、御用之輩可被召具二付、伺書一  
通被差出仍預置也、

十五日壬申 晴

當番議奏加勢柳原右衛門督殿其餘惣參集、伝奏坊城殿  
參仕 広福殿、  
不參、

一 左府公 大宰帥宮等御參、

一 石清水御法案、奏行侍從宰相也、殿脱也

十七日甲戌 晴

當番議奏加勢野宮宰相中將殿其餘總參集 久我殿、正親町、  
三条殿不參、  
伝奏坊城殿參仕 広福殿、  
不參、

一 長吏宮 近衛大納言殿 一條大納言殿 中納言中將殿

等御参、

二十二日己卯 晴

当番議奏加勢野宮宰相中将殿厥他総参、伝奏坊城中納

言殿参侍<sup>一位殿、</sup>不参、

七月一日丁亥 晴

当番議奏加勢野宮宰相中将殿其外総子参集、伝奏両卿

参侍、

一為當日御祝詞、関白殿 左大臣殿 内大臣殿 近衛大

納言殿 左衛門督殿等御参、其外御不参有御使、

七日

一當日為御祝詞、右大臣殿・帥官・近衛大納言殿・一條

大納言殿・中納言中将殿等御参、其余御不参有御使、

九日

一中務卿官御参、

十四日

一為當日御祝詞、兵部卿官 帥官 一条大納言殿 左衛

門督殿等御参、其外御不参有御使、

十五日

一為中元御祝儀、関白殿・中務卿官・左大臣殿・内大臣

殿・近衛大納言殿等御参、此外御不参有御使、

十七日癸卯 晴

当番議奏加勢野宮宰相中将殿其余総参<sup>久我殿正親町、三条殿不参、</sup>伝奏

両卿参侍、

十九日

一来十七日御有卦入舞楽、於御学問所東庭二御覽、同夜

御酒宴被仰出之旨、議奏加勢野宮殿被申渡令壁書、

二十日

一中務卿官御参、

廿一日

一桃園院百回聖忌於両寺御法会被行、

廿二日

一来十一日於學習院被行中丁祭祀之事、

一衣体狩衣之事、

一所望之輩可有献作事、

一刻限午之刻事、

右箇条、学頭為政卿被申渡令壁書、

廿七日

一内侍所御法楽也、奉行已下参仕、

廿八日

一中務卿官御参、

三十日丙辰 晴

議奏当番久世三位殿其余總參、伝奏兩卿參侍、宿番加勢豊岡大藏卿殿、

八月一日

一 当日為御祝詞、右大臣殿・帥宮・内大臣殿・近衛大納言殿・一條大納言殿・中納言中將殿・左衛門督殿等御參、其外御不參御使有之、

一 從閑東御太刀一腰・御馬大橋栗毛六歲一寸一匹進獻也、使參上已

前伝奏雜掌從内玄閑御馬毛附書差出番頭受取、其後御太刀目錄於諸大夫間受取、各伝奏衆江令附屬但目錄上包合等撤之、

右写取御詰江遣之議奏衆之無之、

一 使松平丹後守源信進附武士誘引各衣冠着于諸大夫間、池脇信進大番頭小島澤主

先是鶴間襖兩開金屏風以一双南方江立捨從北方往反、出居鶴間敷居之内西面二列座、御使參上之旨附武士進

出申述出居承之、伝奏衆申入、其後伝奏衆出會此時出居北方退去、

終于於車寄御馬内覽有之武伝雜掌重寄辺、馬寮牽廻御馬此已前以金屏風片車寄立捨相濟之後令撤、

一 諸大夫間南之方、西之間西之方、南之間等障子開垂簾之事、兼刻勘使へ命之、手水蜘蛛手修理職職椽廻掃除烏飼

惣于命之、兼日自伝奏衆有示命、

一 御使參上、直二伝奏雜掌姓名書内玄閑江持參、番頭受

取伝奏衆へ附進、写取御詰へ遣議奏衆之無之、

一 未半二刻前 出御于参台殿、御太刀折紙役送六位藏人

大江俊堅依入魂御太刀折紙同列長權迄持參 授于伝奏衆、直披露御馬 觀覽

之後入 御、先是近習兩番所等被詰、同列番頭其外兩

三輩相從、已前小兒円座議奏衆江相尋二枚、近習兩番

所六位等員數相尋修理職江相渡、

一 入御之後、武伝卿諸大夫間出座、 御返答被申渡使承

之退出、附武士誘引、南殿并御鳳輦等拜見自庭上相廻、

一 南殿東西唐戸開、南面中央格子一枚可揚、兼日鳥飼申

付、

一 御鳳輦飾立行事官相廻始末兩役衆江申届、

一 急雨有之節、馬寮已下傘御免之儀伝奏衆被申渡、雜掌

江申渡、

三日

一來十一日中丁祭二付、詩題 仁者樂山、

右四折一紙、学頭桑原殿被渡令壁書、

三六三 和宮閑東御下向御治定

五日

一 賀茂下・上社御法案也、

一 和宮御方来十月上中旬之内、関東御下向旬御治定被

仰出之旨、奉行野宮殿被申渡令壁書畢、

六日

一 (有栖川宮儀仁親王)  
中務卿宮御参、

七日

一 就来十五日石清水放生会、自十三日晚到十六日朝御神  
事之旨、議奏卿被申渡令壁書、

九日

一 明後十一日巳刻、関東使大澤右京大夫・酒井若狭守参  
内被 仰出之旨、議奏中山殿被申渡令壁書、当番辰半

刻早参触催了、

十日丙寅 晴

議奏当番飛鳥井侍(雅典)從宰相殿宿退出、番加勢正親町大納  
言殿・伝奏衆参侍、議奏衆惣参、

十一日

一 和宮内親王 宣下、為御礼関東使大澤右京大夫基暢・  
所司代酒井少将同伴参 内也、先是献物伝奏衆雜掌虎

間江持参、番頭請取如左、

一 (德川家茂)  
大樹公ヨリ御太刀一腰 御馬代白銀三百枚一匹、

一 和宮ヨリ白かね三百まい

(德川家定夫人)  
天璋院ヨリさあや五十まき

大澤右京大夫基暢 御太刀一腰 御馬一匹

右御拜道廊下江並之目録上包含、伝奏衆有内覽此時大樹公太刀折  
紙等六位被渡之  
等如何撤之

大樹公 和宮等白銀附台和宮豎目録附台之  
上江載、小御所東

廂江操付、高家自分披露太刀折紙高廊階下以金屏風阻  
之置、御対面之節出向者高家江渡之、

一出御未半一刻前入 御申一刻前、

一 伝奏衆案内之上両武士参着、於鶴間而役出会、昵近衆

等無程伝奏衆更面会誘引、先是御殿御構殿奉行衆沙汰

也、円座敷設如例、

一 武士鶴間江帰座之後伝奏出座、於小御所 御対面、

天盃頂戴等之御礼申述退出、此時伝奏衆直依退出、右

口上議奏衆江可申入番頭江被命、

一 御塞被解之後、進献之品議奏衆江申入、東廊下江令運

送、於太刀・折紙ハ議奏衆前廊下ニ置之、

一 於學習院被行丁祭、参席之堂上同列等午剋参上、今朝  
論議有之、御用掛同加勢之輩拜聴也、到刻限番頭・番

頭代・非番之輩参上衣休  
符衣於講堂

聖像拜礼也、先聴衆之堂上・同列共、次推参等各五人

宛參進、終テ口向之者共拜礼也、其後有講議退、供御菓子拜領如例令退席、

十五日

一放生會也、陣儀無獻陣被始<sup>御半一</sup>、上卿正親町三條大納言實愛卿・弁奉行等頭右大弁長順朝臣等卯剋參侍、依之同刻南殿御後東西辛戸開、虎間格子揚見繕如例年、一石清水社御法案御學問所奉行冷泉中納言為理卿講師、明日香井少將雅望朝臣等參侍、

十七日癸酉 雨

議奏当番加勢野宮宰相中將殿其他總參、<sup>(定切)</sup>伝奏坊城中納言殿參仕一位殿不參、

一知恩院宮御參、

一主上御有卦入也、於御學問所舞樂 觀覽、依雨儀於同殿南庭有此儀、未半一刻前 出御申半一刻過 入御、先是御殿御構殿奉行衆為沙汰<sup>前日</sup>、拜見所兩儀構方東廊下二枚戸以南到鷺杉戸之間、為公卿拜見所<sup>以北為上下四、方以獨立隔之</sup>、小御所北簀子自西妻戸東到北階際之間、為近習殿上人之所円座三拾枚自端布設、

十九日乙亥 晴

議奏当番正親町三條實愛卿其外總參、伝奏坊城殿參侍、

宿番加勢德大寺三位中將殿、<sup>(実則)</sup>

二十日

一 中務卿宮御參、

一 今日 和宮御入輿、御車建春門ヨリ引入、於虎間内々御覽、依之虎間格子上ケ、南面垂簾屏風圍等修理職奉行衆沙汰也、

廿三日己卯 晴

議奏当番久世三位殿宿退出、番加勢唐橋三位殿其外惣參、<sup>(通照)</sup>伝奏坊城中納言殿參侍、

一 兵部卿宮・帥宮等御參、<sup>(伏見官員教親王)有權川宮權仁親王</sup>

一 於小御所御筈始御伝授也、樂人辻左近將監候于打板、

未半刻 出御于御上段御座、相濟之後、於同殿管絃

聞食、出御于東廂御座、申半一刻前 入御、先見御殿御構殿奉行衆沙汰也但前日構也、御上段已下東面襖悉撤之垂簾也、而役衆・近習衆等下段江被詰、仍円座敷設之儀無之、御人数出座雲客員數四辻殿江番頭相尋、東簀子中段上之柱際ヨリ南江一行敷之、相濟之後撤却如例、一御同事二付、親王・相丞・近習一同參賀御人数衆中御祝被出云々、

廿五日

一就來月十一日例幣發遣、自來廿九日晚御神事、自九日晚到十三日朝 御潔斎之旨、議奏〔久我建通〕右大將殿被申渡令壁

書、

廿九日

一〔九條尚忠〕関白殿御參、

一自今晚 御神事入二付、改火掛湯如例、

九月一日

一當日為御祝詞、帥宮・近衛大納言殿・一條大納言殿・〔美良〕中納言中將等御參、其餘御不參有御使、

五日

一〔有橋川宮職仁親王〕中務卿宮御參、

七日

一〔二条齊敬〕中務卿宮・内大臣殿等御參、

三六四 和宮関東御下向御首途

八日

一和宮御東行來月二日卯刻御首途、祇園社同月二十日卯刻御發輿、右被 仰出、依之此 御所和宮〔桂御所〕等江參賀可有之、奉行野宮殿被申渡令壁書、一同へ触遣、

九日

一兵部卿宮・内大臣殿・近衛大納言殿・左衛門督等御參、  
自余御不參有御使、

十一日

一例幣發遣也、陣上卿弁・奉行職事、厥外至六位侍中參侍、

一神宮御法案、奉行・講師等參仕、

十二日

一賀茂下・上社御法案也、奉行・講師等參侍、小御所御構殿奉行衆沙汰也、

十三日

一中務卿宮御參、

十四日

一此日和宮修學院御茶屋江被成、自桂御所卯刻御出門、  
子二刻過還御、伝奏廣橋殿以下被行向、同列御用掛之輩御先廻云々、

十八日

一來月二日御首途之處、三日卯刻更被仰出之旨、議奏飛鳥井殿被申渡令壁書、

廿二日

一長吏宮御參、

廿三日

一和宮賀茂下上社・北野天満宮等へ御參詣也、

廿七日

一於内々方能 御覽、出御直被始、

左大臣殿 二三条忠香 右大臣殿 一花山院家厚 中務卿官 二有稻川宮頼仁親王 兵部卿官 一伏見宮貞教親王 知恩院官 一尊秀法親王

近衛大納言殿 二忠房 一條大納言殿 一実良 中納言中將殿等、御

參、

柳原右衛門督殿 一光茂

一依所勞、議奏加勢御断被聞食、

冷泉中納言殿 一為理

一議奏加勢被 仰出之旨、大藏卿殿被申渡、

廿九日甲寅 晴

一当番議奏加勢冷泉中納言殿其余総參、一正備光成 伝奏両卿參侍、

一就來月三日

一和宮御首途、二日・三日兩日之内、此 御所宮御方等

參賀、重服者可憚參賀事、

廿日

一御発興二付、十六日・十七日兩日之内參賀同上之事、

一右奉行野宮殿被申渡令壁書、一列触示畢、

十月一日

一当日為御祝儀、左大臣殿・右大臣殿・中納言中將殿・

左衛門督殿御參、其余王公有御使、

一和宮明後三日祇園社江御首途二付、王公諸家參賀、

同列同之晚頭書付上之、

二日

一和宮明三日御首途二付、王公諸家參賀、同列同之晚頭

書付上之、

一明三日関東使酒井若狭守參 内二付出向、交名如例書

付伝奏衆江附進、

一明三日御行粧拜見之儀議奏衆江相願込之処、可為勝手

之旨被申渡、

冷泉中納言 一殿脱力

一議奏加勢依所勞御理、

豊岡大藏卿殿

一右替被 仰出之旨、奉行野宮殿被申渡令壁書、

三日戊午 天晴

一当番議奏加勢豊岡大藏卿殿自余総參、伝奏両卿參侍、

一和宮御首途為恐悦、関東使諸司代酒井若狭守忠義朝臣

寅刻參 内、自大樹公御太刀一腰 御馬代黄金拾両一匹

進献也、參 内以前献物自諸大夫間番頭受取 一伝奏雜 伝

奏衆へ申入、内覽之後依命議奏衆前廊下江操置、議奏衆へ申入、所司代參着之後而役衆呢近衆出會、其後再伝奏衆出會、御返答訖テ若狭守退出、

獻物目錄写四折如例議奏衆江進御詰進、出向良祥光敬役之、

一内親王和宮御方御首途、卯刻祇園社御參社也、奉行職

事頭弁長順朝臣供奉、公卿中山大納言臨時・菊亭中納言實

言・橋本宰相中將臨時・八條三位・葉室頭弁、自余殿

上人地下先驅諸大夫滝口其余寅刻計參上、供奉之女房

宰相典侍乘糸毛車・女藏人能登乘車・武士關出雲守町奉

行・御先警固阿部越前守正外・禁裏禁裏、為御後警固自余御迎上

京之武士等隨從、宮御方從參台殿乘 御于糸毛車、吉

刻卯刻自宜秋門渡御堺町三条大和大路祇園社、列外廣橋一

位御先・坊城中納言・野宮宰相中將・非藏人松室重進

狩衣・松尾相永同・松尾相保同等御後隨從參向脚踏光長、

一主上於南門御行粧 御覽、出御卯上刻訖テ 入御、

議奏衆近習兩番所衆到非藏人、於西穴門外御列拜見、

時宜如南北祭之儀、鶴間入口自端護之、

一供奉衆休所被構于内々八景間、如南北祭之儀、

一參役衆・兩役衆・兩番所衆・近習衆到同列、當番之輩

江此御所 宮御方等ヨリ御祝酒被出吸物台者、

一還御催、御列到三條大路而註進之後、

御覽所更御塞被構申刻許出 御、宮還 御之後入 御、

一議奏衆以下還御御拜見如今朝、

一和宮御方自宜秋門還 御、酉上刻供奉衆奉行職歸參恐

悦被申上、退下、

五日

一内大臣殿御參、

三六五 皇女御降誕及參賀

八日

一今晚寅刻衛門掌侍局平座、

皇女御降誕之旨、野宮殿被申渡、

一皇女御降誕二付、禁中 親王 准后御方・御産所堀川

家殿下等有參賀一兩日中之旨、同卿被申渡右令壁書、

一列觸示、

十一日

一中務卿官御參、

一来十四日皇女御七夜被 仰出、依之此

御所 親王 准后御方 御産所堀川家殿下等江參賀可



有之旨、議奏加勢豊岡殿被申渡令壁書、同列江触遣、

十四日

一 姬宮就御七夜為恐悦、内大臣殿・近衛大納言殿御參、

其余御不參有御使、

一 姬宮御名字可奉称理宮多駄旨、以書取奉行野宮殿被申

渡令壁書、

一 来十七日巳刻、関東使酒井若狭守參内、之旨、議奏加

勢大藏卿殿被申渡、仍令壁書当番早參触催、

十五日

一 来二十日 和宮御發輿、御行莊(莊力)如御首途、同列一同拜

見場所被下之旨、野宮殿被申渡畢、

十七日

一 右大臣殿 近衛大納言殿御參、

一 和宮来廿日関東へ御發輿二付、昨今諸家參賀、同列同

之腕頭書付上之、

一 関東使酒井若狭守忠義朝臣參 内也、先是献物伝奏衆

雑掌諸大夫間へ持參、番頭受取如左、

純子 三十卷

御肴 三種

御樽 二荷

右大樹公

りんす 二十たん 御さかな 二しゆ

御たる 一荷

右天璋院御方

右御拜道廊下江並之目録上包  
台等撤之

所東廂江操付、臨期不被為有 御対面、賜 天盃於虎

間有拜領物、

一 天盃頂戴拜領物御礼、 和宮御首途・姬宮御降誕恐悦

等伝奏衆直ニ御退出ニ付、以上口状議奏衆江可申入番

頭江被命、

一 小御所御構殿奉行衆沙汰也、御塞被解之後献物議奏衆

江申入、東廊下江運送、献物書付四ツ折議奏衆へ進之、

番頭代切紙遣之、

十八日

一 中務卿宮御參、

一 和宮御發輿二付、從 宮御方同列当番之輩御用懸一同

等江賜御祝酒、於東間頂戴、

三六六 和宮関東御發輿

二十日

二十日

一 内親王和宮関東御發輿從桂御所御出門辰刻、奉行職事

葉室頭弁長順朝臣供奉、公卿中山大納言忠能卿・菊亭

中納言實順卿・八條三位隆聲卿、殿上人今城中將定國

朝臣・千種少將有文朝臣・岩倉少將具視朝臣・富小路

中務大輔敬直朝臣・橋本侍從實梁朝臣・小倉侍從長季・

北小路極鷹・大江俊堅、其余地下・滝口女房、宰相・

典侍・命婦能登・武士御先警固町奉行關出雲守、自余

御迎上京武士加納遠江守若年寄・老女已下隨從、御列外

廣橋一位光成卿・坊城中納言俊克卿・野宮宰相中將定

功卿、御用掛同列松室豊後重進・鴨脚加賀光長・松尾

但馬相永・松尾伯耆相保等下向也、午亥過御列相濟、

一御出門以前一番二番三番從彼御所有注進、猿筑地從穴

門御旅柱内々、御覽、議奏・近習兩番所衆同列參從、

但シ昇降十八間餘、  
下非常口ヨリ出

二十一日

一來月十九日就新嘗祭、從來廿九日晚御神事、自來月十

七日晚到廿一日朝御潔齋、到于廿一日朝重服者參 内

可憚之事、議奏衆被申渡令壁書、

廿七日壬午 晴

(実徳)

議奏当番加勢正親町大納言殿其余惣參、

一内大臣殿・近衛大納言殿・一條大納言殿等御參、其外

御不參有御使、

一新御茶口切也、召小四方 御對面無之、於小御所下段

御料理御茶賜之、

一兩役衆・同加勢・近習・小番御免、三卿衆・御獻奉行

衆等、如例八景繪間・林和靖間・錦鷄間等被構、御料

理・御茶等賜之、後段御酒宴被始、終、

十一月一日己酉 陰晴

當番議奏加勢豊岡大藏卿殿其余惣參、右大將殿不參、

四日

一内侍所御法案去月廿一日御延引分、奉行庭田重胤卿・講

師飛鳥井雅望朝臣參侍、

九日

(殿長)  
東坊城前大納言

一 右被 免永蟄居之旨、久世三位殿被申渡、

十一日

一來廿三日午刻

理宮御參 内始被 仰出之旨、議奏加勢豊岡殿被申渡、

但御近例之通可心得、此御所計參賀事、仍令壁書、

一來十九日依御潔齋中學習院御闕会之旨、学頭桑原殿被

申渡令壁書、

十二日

一 就来廿七日ヨリ内侍所三箇夜御神楽被 仰出、和琴御所作被為 在之旨、正親町大納言殿被申渡、享和元年辛酉之通可心得令壁書、

十六日

一 中務卿宮・左衛門督殿御參、

一 就 内侍所三箇夜臨時御神楽、從廿五日晚到来月一日

朝 御神事之旨、議奏加勢徳大寺殿被申渡、(実則)

一 来廿三日午刻、理宮御參 内之処、二十日巳刻御參

内被 仰出之旨、議奏加勢同卿被申渡、

十八日壬寅 陰晴、入夜雨

一 当番議奏加勢正親町大納言殿自余総參、

(實宗)  
日野中納言

一 議奏加勢被 仰出之旨、議奏卿被申渡令壁書、同事奉

行衆以剪紙被達、

三六七 新嘗祭

十九日

一 新嘗祭也、奉行職事右中弁豊房・小斎大斎・公卿諸役至六位侍中剋限參侍、

二十日

一 右大臣殿 中納言中将殿等御參、

一 豊明節会也、奉行職事權右中弁豊房朝臣・内弁右相國

公・外弁公卿已下諸役雲客至侍中惣參、陣被始直出

御、酉半一刻過入 御、亥一刻前宴会終、

一 理宮御參内始ニ付、諸家參賀同列亦同晚頭書附上之親

王御方御同様、

廿一日

一 依所勞議奏加勢御理 聞食之旨、豊岡殿被申渡令壁書、

日野中納言

廿二日

一 廣幡大納言

一 議奏加勢被 仰出之旨、徳大寺殿被申渡令壁書、同事

奉行以剪紙被触示、

廿四日

一 從關東進獻御茶御口切也、所司代酒井若狹守不參、

廿五日

(有酒川宮徳仁親王 純仁法親王)  
一 中務卿宮・仁和寺宮御參、

一 此夜 御神事改火盃滌如例、

廿七日

一内侍所三箇夜臨時御神樂初夜也、奉行職事頭弁豊房朝臣其外到六位侍中參侍、

廿八日

一内侍所三ヶ夜御神樂中夜也、奉行職事頭弁豊房朝臣其他到六位侍中參侍、

廿九日

一内侍所三箇夜御神樂竟夜也、奉行職事頭弁豊房朝臣其外到六位侍中參侍、(侍之)

十二月一日甲寅 晴

当番議奏加勢廣幡大納言殿自余惣參、(呈札)

一左大臣殿 大宰帥宮 内大臣殿 近衛大納言殿 左衛門督殿等御參、自余有御使晚頭書附上之、

二日

一関白殿御參、

三日 (十一日)

(此間三日から十一日まで二十行省略)

一関白殿・左衛門督殿御參、

十三日

一於南殿被行不動法、阿闍梨座主宮勤修如連日、

十四日

一於南殿被行不動法、阿闍梨座主宮勤修如連日、

十五日

一於南殿座主宮御勤修如連日、入夜御聽聞所 出御也、惣テ御詰之沙汰、議奏衆已下南殿御後江被詰也、

十六日

一就来廿七日 内侍所臨時御神樂、自廿五日晚到廿八日朝御神事之旨、議奏加勢源大納言殿被申渡令壁書、(正親町奏徳)

十七日

一不動法満座也、阿闍梨天台座主昌仁入道親王并結願之后、自御休所御參進于内々方、御服御衣御拝領云々、於休息所御祝酒御認被出、訖テ従高遣御退下、

十九日

一官位御沙汰也、勅問御人数関白殿・左大臣殿・内大臣殿・近衛大納言殿・一條大納言殿・中納言中将殿等御參、

廿二日

一関白殿御參、

廿四日丁丑 晴

一議奏当番加勢正親町大納言殿其外惣參、

一知恩院宮御參、

廿五日

一 中務卿宮御參、仁和寺宮御參、

一 和宮去々月関東御発輿、供奉御從之兩伝奏自余一兩人

御帰京也

一 帰京ニ付、於林和靖間兩役衆御祝被出、(禮脱之)

二十六日己卯 晴

議奏当番久世三位殿、宿加勢徳大寺三位中将殿、其外

總參、

一 和宮去々月関東御発輿、供奉中山大納言・野宮宰相中

將・富小路中務大輔等御帰京也、

一 帰京ニ付、於林和靖間中山大納言殿江御祝酒被出、

二十七日

一 内侍所臨時御神楽也、奉行職事頭右中弁殿其外六位侍

中剋限參仕、

一 関東ヨリ帰京届、先達申被越之处、道中ニテ滞留致有

之、今日着致候趣ニテ本人ヨリ着被出候文面如左、

御所

親王様

准后様

益御機嫌克可被為、在恐悦奉存候、抑去月廿五日登

城、御能拜見御饗応有之、十三日登城、帰洛御暇、

拜領物有之、明後十五日当地発足、道中無滞候者、

来廿六日帰京仕候旨申越候处、道中ニテ滞有之、今

日書状着致候旨本人申出候間、仍此段御届申上候、

以上、

十二月廿七日

番頭連名

右之通書改、後剋奉行三條西殿御參ニ付、滞留前後之

御届ニ相成候段、御断申入附進御落手也、

二十八日辛巳 晴

議奏当番加勢豊岡大藏卿殿、其外惣參、伝奏兩卿參侍、

一 関白殿 帥宮 内大臣殿 左衛門督殿等御參、

一二條齊敬公右大臣、久我右大将建通卿内大臣御内意ト

云々、

(非藏人日記抄(宮内庁書陵部所蔵)にて補註)

三六八 三條實萬公落飾ヲ請フ九條尚忠ニ勅書

安政六年己未正月十二日、三條内府ハ諸事不行届見込

違、深ク恐入ヲ以テトモニ落飾ヲ請ハセラル、是ニ於

テ聖上宸翰ヲ九條殿ニ賜フ、

蛮夷之義ニ付、去年十二月晦日心中氷解及返答候通

り、弥此上ハ関東ト合体ニテ、早ク夷狄ヲ遠ケ度念

願而已ニ候、然ルニ〔近衛忠熙・鷹司輔歷〕美万

年称所勞無出仕、左府ニハ何カ武辺差支之節有之カ、

右府ニハ自身所勞引籠、三條前内府モ同断、殊ニ遠

所へ退去候趣聞込候処、今度各辞官落飾願出候、右

ハ如何成事ニ哉、元来神州ノ瑕瑾ヲ深ク憂苦シテ、

夷族ヲ遠ケ度忠憤之志ヨリ、大臣ヲ初人々々辛苦致員

候訳ニテ、大樹へ対シ異心ヲ挟ミ候筋ニハ無之処、

道路遠隔之義、関東へハ如何相聞候ニ可有之、疑念

未散由ニ候へ共、去年晦日申出候通り、弥以関東ト

合体決定之上ハ、他事ハ打捨、於関東役々モ早ク疑

ヲ解キ、国内平穩之処置肝要ニハ無之哉、朝廷ニモ

大臣数輩永ク引籠候テハ、彼是公事等ノ差支候間、

速ニ出仕候様致度宜関白取計可被有之候事、

十二日又聖諭アリ、之ヲ所司代ニ達ス、

当官落飾御願ニ付、主上思召ニテハ、〔正駕、老中〕 亜夷一条ニ付

テ之事ニ候ハ、元来昨春堀田備中守上京之節、甚

不得其意申上方ニテ、外夷ト戦争致候ニハ、外夷之

軍法ヲ修練之上ナラデハ、軍ハ出来不申杯、總テ將

軍ノ本職トハ不覚、其上川路左衛門尉等猥ニ承久之

例杯申立、無道ノ振舞等申立ニ付、一統致心配候ヨ

リ事起リ候義ニテ、其儀ハ朕モ同様申聞候也、然ル

ニ間部〔隆勝、老中〕上京之上、初テ先役之処置ハ不宜、当時大老・

老中之所置ハ正道ニ有之旨、相分リ候様殿下迄へ被

仰出候、  
〔安政六年の文書九〕

三六九 三條實萬公落飾願ニ就テ間部答奏

鷹司〔致通〕大閤殿・近衛〔忠熙〕左大臣殿・鷹司〔輔歷〕右大臣殿・三條前内

大臣殿辞官落飾被相願候儀ニ付、宸翰之御写等拜見被

仰付、委細酒井〔忠義〕若狭守ヲ以被仰下候趣奉謹承候、先達

テ中ヨリ右之方々家来等及吟味、申口之趣別冊之通り

ニテ、諸藩浮浪之妄説ニ被惑、邪正不分明之次第篤ト

可被加勘弁処無其儀、猥ニ言上隱謀惡計ヲ被取持候筋

ニ相当リ、御心得違之事共等、先非後悔被致辞官落飾

被相願候段、御殊勝之御儀、右ニ付テハ夫々被相願候

通御聞届可為在候方可然奉存候事、  
〔安政六年の文書九〕

三七〇 松平大膳大夫家臣益田弾正へ与ル書

同六年正月、大膳大夫松平慶親將抵江戶、有諫幕府途經

伏見公聞之為書遣使敷、其老臣益田〔親應〕弾正使者不能達書

而帰、

一筆申入候、未夕面上致サス候へ共、以書中申入候、陽春吉慶不可尽期芽出度存候、然レハ此度ノ一件ニ付キ、関東へ諫言ニ被參候由、仄カニ伝聞イタシ、天下可平安ノ良策、誠ニ珍重ノ御儀衆望ノ所帰、於小子大慶無此上候、然ル所去ル大晦、間部（総勝）総州御暇參内イタシ候テ、御返答モ被為、在候、其御様子委敷御聞モ有之間敷ト存候、右ニ付テハ段々内外御模様被為、在候事ニ候間、是マテノ通り只々

叡慮御遵奉ト申

御趣意ニ以テ諫メ申サレテハ、行違ヒ申スヘキ事モ有之ヘキヤト存候、其子細ハ口達ナラテハ書取カタク候、右ニ付何卒御面会申度存候コトニ候、然ルニ長州ト小子ト御縁辺ハ無之、御不審ナルヘク候ヘトモ、小子モ從來憂苦イタシ候ニ付キ、先達テ周布政（兼）之助ニ内々面会ノコトモアリ、又近ク福原清助ニ申聞候事モアリ、御国方ノ義勇威心頼敷存候ニ付、貴国ノ儀不一方心頭ニカケ候間、ケ様申入候、何卒可相成御面談申シタク存候、即チ

神州ノ御為メ

禁中ノ御為メ 軍家モ無異、勿論長州ノ為メ方ニモ

有之候、ヨクヨク御察可被下候、クレクレレ是レマテノ御覚悟ニテ御諫言候ハ、大方行違不申候、左候へハ折角遠方ノ処御出被成候テ、不覚御取被成候テハ、実ニ無詮義残念至極、又々後時ノ障リニモ可相成ト深ク思慮イタシ候間、此段申入候、ヨクヨク御勤考有之、御面会被成ヘク候、小子義ハ御国ノ御為メニ候間、嫌疑等ノ儀聊モ頓着致サス、只々

叡慮ヲ奉助

皇国ノ御為メ一凶ニ奉存候テ、身モ家モ去五月ニ捨有之候故、聊厭ヒ申候存心無之候間、其辺御心配ハ決シテ御用候、（無脱力）

但直ニ其節相知レ候儀ハ、厭ヒ申候御都合ヲノミ存候テノ事ニ候間、何卒御面会被下候ハ、重畳ト存候、尤御承諾被下候ハ、何時カラニテモ參ルヘク候ヘトモ、相成ヘクハ家内ニ内々出門ノ事故都合モ有、日暮出門ニ相成候様、此人ヲ被下候ハ、宜候、勿論家来ハ不召連潛ニイタシ、直ニ伏見（行脱力）奉ノ耳ニサヘ入セネハヨロシク候、尤モ五六日過キ候ハ、露頭モ厭不申候、左様御承知可被下候

以下欠文、

〔安政六年の文書九〕

三七一 所司代酒井若狭守へ被仰出候御書取

窮民救助之事、多年ノ

思食別テ近年困窮ノ輩多、其上諸色沸騰、下々ノ者弥

難立行段被

聞食、民ハ国ノ本、下民ノ困究其罪皆在

朕ト、日夜 御痛心被為遊候、且今度

和宮御縁組御取結ノ儀モ、全天下泰平之

思召候、因之從

御手元黄金五十枚、究民之輩エ不洩様下賜度、(雖カ)隆為聊

可被配分、若不行届ノ分ハ武辺ニテ可加勸考、

(尤親カ)皇國中ノ儀ニ候得共、別テ山城国ハ御

膝元ノ儀、民ノ困究難被

聞食捨、差当山城国内早々可救遣様深

思食候、此旨人々エ可申聞事、

二月十日

三七二 久世大和守合衆国公使へ与ル書

三七二ノ一

萬延二辛酉年二月

臣墨利加合衆国ミニストル (Minister 公使)

エキセルレシント (excellence 閣下)

(Townsend Harris)  
トウンセント・ハルリス江

以書翰申合候、外国人市中其外ニ於テ不作法之所業有  
之候節、我等司人ノ直々召捕シ事ハ、先般英佛公使ヨ

リ被申立条モ有之候ニ付、尔後不都合ナカラン為、睨

ト規則書相添、此段及打合候、拜具謹言、(公周)

萬延二酉年二月一日

久世大和守花押 (信睦)  
安藤對馬守花押

三七二ノ二

別紙

外国人召捕方規則

一 日本役人エ対シ手向候者、

一 遊獵イタシ候モノ、

一 猥ニ発砲致シ候モノ、

一 市中其外人多キ所ニテ馬ヲ驅逐イタシ候者、

一 支那人ノ騎馬イタシ候者、

一 醉狂ノ上乱妨イタシ候者、

一 或ハ乱妨ヲ企候モノ、

諸外国人、右ノケ条ヲ犯候者、日本司人見掛次第捕押

置、其ノマ、其外屬シ各コンシユルエ引渡スヲ、日本ノ外国事

務執政某ト外国人ノ諸名代人即某ト合儀決定ニ候、



二月

三七三 孝明天皇御製

一文久元年辛酉

内侍所御法案被

御製

すまし江の水と我が身はしつむとも

にこりはせしな四方の民草

夏草

草なきの剣もかなとおもふまで

道もハかたす茂る夏草

三七四 麾下士へ貸与金達書

二月廿七日大和守殿御渡、翌日触

大目付

御目付

此節物価格外高直ニ相成、小給之者共ハ別テ難儀之趣

被為及

聞召候ニ付、莫大御物入打続候折柄ニハ候得共、格別

之以

思召、部屋住勤之外三百石以下御旗本之面々、并ニ御家人へ拜借金被

仰付、百俵以下之モノハ、夫々御金被下候旨被

仰出候、右ハ厚

御主意ヲ以被

仰出候事ニ付、一際質素儉約相用候様可致候、万一心

得違之モノモ有之ニライテハ、急度

御沙汰之品モ可有之候条、其旨被相心得候、

右之通向々へ可被相触候、尤西丸御目付へモ可有通達

候、

三七四ノ二  
同断

御目付へ

今度被 仰出候拜借金割合、左之通被 仰付候、請取

方等御勘定奉行可被談候、

一 三百石 金貳拾五兩

一 貳百石 金貳拾兩

一 一百石 金拾五兩

一 御役料ハ相除候事、

一 平常之心掛ニテ拜借ニ不及モノハ、勝手次第之事、

一返納之儀ハ来々〔文久三〕亥年ヨリ拾ヶ年賦タルヘキ事、

右之通可被心得候、

二月

三七四ノ三  
同断

御目付へ

今度被 仰出候百俵以下之モノ被下金割合左之通、請  
取方等御勘定奉行可被談候、

一 百俵ヨリ 金拾両

一 八十俵迄 金八両

一 七十俵ヨリ 金七両

一 四拾俵迄 金六両

一 二拾俵ヨリ 金六両

一 拾五俵迄 金六両

二月

三七四ノ四  
同断

御目付へ

此度拜借被 仰付候面々、且拜借并御金被下候モノ頭  
々御礼トシテ、老中〔マツ〕水野出羽守・若年寄中へ可相廻候、

但頭支配有之分ハ、其頭支配へ為御礼相越候様可被  
致候、

右之通可被相達候、尤西丸御目付へモ可有通達候、

二月

三七四ノ五  
二月十八日

前文略ス、〔幕府法親王〕青蓮院宮ヲ謹慎セシム、宮嘗テ朝議ニ參シ、

処士ト交通計画スル所アルヲ以テ、関東之ヲ忌ムコト

甚シク、其家臣山田伊丹ヲ捕ヘテ之ヲ糺問、辞連ル所

アリ、間部・酒井等謀リテ九條殿下ニ白シ之ヲ幽ス、

間部又請フテ、水戸ニ下ス所ノ 勅書ヲ收還センコト

ヲ請フ、殿下之ヲ許シ、伝奏ノ書ヲ以テ之ヲ所司代ニ

下ス、之ヲ上奏セザリシト云、 〔安政六年二月のもの也〕

三七五 和宮御東下御道替達書

三月十五日御同人御渡、翌日触 〔天和寺〕

大目付へ

和宮様当春中 御下向タルベキ旨、先達テ被

仰出候処、東海道筋荒所等モ多ク、御通行御差支ニ付、

中山道へ御道替被

仰出候、御下向之儀暫御差延被

仰出候、猶御頃合之儀ハ、追テ可被

仰出候、

右之趣向々へ可被達候、

三月

三七六 氏名不詳ノ書

上文欠失 文久元辛酉年三月十九日、此度奥取次役被申付、主人当御役中勤筋御用取扱ヲモ被申付、依之新知百石賜り、外ニ貳拾石足高、都合百貳拾石高ニ成シ賜ル、

一 同年六月七日、此度 和宮様御縁組御用向御多端ニ付、為御用弁桂御所并橋本家等へ、何時ニ不寄 御沙汰次第罷出候様、廣橋一位殿〔光成〕ヨリ御達シ有之ニ付、御沙汰次第罷出可申旨被申付、

一 同年十月六日、桂御所ニテ御能有之ニ付、七月八日勝手次第 御用ニ付、御同所へ相詰候者拜見可被仰付旨、關出雲守殿〔行篤、京都町奉行〕ヨリ御達之趣、加納繁三郎氏ヨリ申来ル、全八日御同所へ相詰御拜見御料理頂戴之、

一 同月十七日、来ル廿日 和宮様御発興ニ付、為御見送

罷出候様、 伝奏様ヨリ御達之趣重役ヨリ被談、

一 同月廿日、 和宮様御発興ニ付、為御見送桂御所へ罷出、夫ヨリ學習所前ニテ御見送り相済、為御届伝奏代正親町三條殿飛鳥井殿へ罷出ル、

一 同月廿二日、此度 和宮様御下向ニ付、 御所向御内用筋有之、并御老中方ヨリモ罷下り候様被仰越ニ付、立歸出府被申付、

一 同年十一月二日、京地出立、同十四日着府、御老中久世大和守殿〔佐周〕へ為御届罷出ル、

一 同月十七日、關出雲守殿御宅へ御呼出、桂御所へ罷出和宮様御下向御用筋取扱候儀ニ付、為御用弁当分之内当地ニ罷在、右筋之御取扱、清水御屋敷并堂上方御旅館へモ罷出候様、久世大和守殿御達之趣被申渡、右ニ付 清水御屋敷并久世大和守殿へ御礼ニ罷出ル、

一 同年十二月十一日、 和宮様御入 城ニ付、為御見送罷出候様、久世大和守殿御達之趣、關出雲守殿被仰渡、清水御屋敷へ罷出、御門前ニテ御見送り奉申上候、同日、明十二日四ツ時 御城へ可指出旨、内藤紀伊守〔信親、老中〕殿ヨリ御達有之候間罷出候、重役ヨリ被申談、

一 同月十二日、 御城へ罷出候処、御用筋入精取扱、今

般 和宮様御下向御用ニ付テ、遠路被 召下候ニ付、  
別段之訳ヲ以、御序之節 御目見可被 仰付旨、於躑  
躑間久世大和守殿被 仰渡、

一 全日、右ニ付御老若様御側御用人様へ廻動ス、  
一 同月十四日、明十五日 御目見被 仰付候間、五ツ時  
御城へ可差出旨、助御用番松平豊前守殿〔信義老中〕ヨリ御達有之  
候間、罷出候様重役ヨリ被申談、

一 同月十五日、御城へ罷出候処、於納戸構 御目見被  
仰付、御扇子一箱献上、

一 同日、右ニ付御老若様方・御側御用人様、御披露之御  
奏者有馬左兵衛督殿へ御礼廻動ス、

一 同月廿三日、今度被 召下御用筋彼是骨折候ニ付、御  
手当旁御銀三十枚被下之旨、久世大和守殿ヨリ御達有  
之候間、頂戴可仕候様重役ヨリ被申談、

一 右ニ付、同日久世大和守殿・酒井右京亮殿〔忠職若年寄〕へ御病氣ニ  
付名代ヲ以テ廻動ス、

一 同月廿九日、今般 御目見被仰付候ニ付、為冥加年朔・  
八朔・五節旬月次御礼 御城へ罷出候様仕度奉願候処、  
願之通り罷出候様、内藤紀伊守殿ヨリ御附札并御書取  
ヲ以、御差図有之候旨重役ヨリ被申談、

一 同月晦日、右ニ付内藤紀伊守殿へ御礼罷出ル、  
三七七 和宮関東御下向御延期

和宮様御下向御頃合儀、兼テ当春中 御下向可被成旨  
御内定被 仰出候ニ付、関東ヨリ御迎ノ者共モ既ニ被  
差登候処、当春ハ氣候モ相進ミ候故ニ候ヤ、東海道筋  
山々雪解等ニテ川々出水仕、別テ大井川等満水ノ節ハ  
飯橋掛渡等モ難相成、御旅行御六ヶ敷候旨、追々見分  
ノ者モ申聞、一体最初ノ見込トハ御時節モ違候事故、

此節ニテハ、中山道御旅行ノ方御安全ノ旨、於関東一  
同評義モ仕候処、最早追々御時節モ差競候儀ニ付、唯  
今ヨリ見分差遣シ、御道替ノ儀御治定相成候上、御旅館  
御取建物其外道造等、逆モ春中出来候様ニハ難相成候  
旨、且又此節水戸表ニオイテ浪人共不法ノ所業相働、  
近郷民家エ立入、押借狼藉等致シ候ニ付難捨置、於水戸  
家嚴重ニ被召捕候旨被相達候ニ付、於関東モ夫々御手  
当向被 仰付候間、自ラ人心モ不穩折柄ニ付、旁 大  
樹公ニモ御不本意ニハ候ヘトモ、当春 御下向ノ義ハ  
暫ク御見合セニ相成候様被成度旨、尤中山道筋見分ノ  
者共ハ、早速被差遣、御道筋差支モ無之候ハ、御旅館

御建物并道造等モ、其内ニハ夫々出来可仕、并水戸表浪人共モ追々召捕ニ相成、平穩ニ相静リ候上ハ、從関東最早御下向ニ相成候テモ、御差支無之旨可申上候間、其節ハ速ニ御下向ニ相成候様イタシ度奉存候、尤右ノ通当春 御下向ノ儀ハ、実ニ無御扼暫御延期ノ儀御願ニ相成候義ニ候得ハ、関東御都合附キ次第、早速其段可申上候間、何卒其節ニハ少シモ御手間取不被為在、神速ニ 御発輿被為在候様、私ヨリモ呉々深奉願上置候事、

三月

此一儀ハ、伝奏へ所司代直書封印付ニテ到来ノ由、

### 三七八 文武教育訓示

三月廿四日大和守殿御渡、廿六日触〔久世法周老中〕

大目付へ

文武御教育筋之儀ニ付テハ、是迄度々厚キ被仰出之趣モ有之、殊ニ近来格別ニ御世話有之、講武所、御軍艦操練所・蕃書調所等御取建、夫々修行被仰付候儀ニ候得共、方今之時勢弥以文武御隆盛無之テハ難相成場合ニ付、既ニ

御直ニモ夫々

御世話被為在候程之儀ニ付、銘々無懈怠相励、

御趣意行届候様厚ク心掛可申候、尤人材御引立御武備

御職務之御主意ニ候得ハ、文学之儀ハ〔文弱ニ流レス、武術ノ儀ハ脱カ〕粗暴ニ片寄ラス、

忠誠ヲ主トイタシ、真実ニ修行ヲ遂ケ、文武並ヒ行ハ

レ、御趣意ニ不違様精々可被心掛候、

右之趣、組支配末々ニ至迄急度可被申渡候、

三月

右之通、諸番頭・諸物頭・諸役人へ可被相触候、

〔幕府沙汰書にて補註〕

### 三七九 大橋順藏妻奈嘉子カ詠

姫宮の此大城のもとにくたらせ玉ふをいたみ

奉る題並にみしかうた

かけまくもかしこかれともやすマしし、我 大君のたかひかる、そのひめ御子のいかさまに、おもほしめせる九重の、都をおきてひなさかる、あつまの国をとこ宮と、さためまつらすあらましを、さくそうれたき御門出を、おもへはゆゝしぬは玉の、夜のまの夢かうつゆふの、うつゝにはあらしさりとともと、うらたのみてしかひもなく、きのふにけふにもろ人の、よにいたり

へきいひつくを、きくはまことかもろこしに、かゝり  
のかけをうらみつゝ、ふるき都をたち出けむ、其いに  
しへも今さらに、おもひうそやれしかはあれと、それ  
はこと国かしこくも、このやす国はずへらきの、しら  
す御かたとに神代より、かゝるためしはなよ竹の、よハ  
末なれやまかつひの、かみのしわざかおよつれの、ま  
かことともむらきもの、心をいたみよるひるに、時も  
さためす久かたの、あまつミ空を打あふき、なげくお  
きそのさきかさへ、ミつか折しもミもる日の影、

かしこしな雲をよそに立出て

きそのあら山越まさんとは

数ならぬたひしかはらの身にも尚

あめのなけきと聞はかなしむ

かしこくもけふ九重のミかと出を

なげかざらめやよもの民草

奈嘉子

大橋順蔵ノ妻ナカトイフ

三八〇 和宮関東御下向御発輿二條城へ御立寄協

議

和宮様

御発輿之節、嚴儀御行粧供奉ニテ

二條城江被為

入御、同所ヨリ御旅装ニ相成、差支有之間敷哉之旨、

伝奏衆内談之趣各被申候処、右ハ御場所柄之議容易

差支之有無、当地限難差極得共、其筋へ相達為取調

候処、御城御殿向所々破損モ不少候間、御修復ヲ始メ、

御同勢屯所等新規所補理不申候テハ、御差支相成可申、

殊ニ御開城之上ハ、夫々御規定御警衛向等モ相立候半

テハ相成不申、品々差支モ有之候間、右之趣伝奏衆江

可被及挨拶候、右候外テハ

御発輿之砌、御道筋モ蹴揚建場之方

御順路之外同所辺ニテ御場狭候ハ、如何様共御所方

御都合次第、仮建物取補理候方御弁理ニモ可相成候間、

町奉行江打合候迄、

右之趣伝奏衆江可被候事、

三八一 和宮内親王宣下御待遇向照会

此度、

和宮様内親王

宣下被為濟候上ハ、

御所々江從闕東御会積之儀、

御台様 御簾中様方、御叙位之節之御准例ニテ、御差

支無御座候哉、右ニ付

和宮様江從闕東御祝物為御取替之儀モ、前条之節之通

ニテ御差支無御座候哉、右ニ付 闕白殿其外共闕東ヨ

リ御会積有無之儀、

右之条々相伺度候事、

二月廿一日

### 三八二 和宮闕東御下向御道筋交換

和宮様当春中御下向タルヘキ旨、先達テ被 仰出処、

東海道筋荒所等モ多ク、御通行御差支ニ付、中山道江

御道替被 仰出旨、去ル十五日被 仰出候段、年寄共

ヨリ申越候間、此段申進候、以上、

### 三八三 朝廷窮民救助之令旨

窮民御救助之儀ニ付、

御趣意書之通宜取計候様、闕白殿被命候段、先達ニテ被仰

聞、則闕東江相達候処、窮民御救助之事多年之 思召、

別テ近年困窮之輩多、其上諸色沸騰下々之者弥難立行

段被聞食ハ、困之本下民之困窮日夜被為惱 叡慮、且

今度 和宮様御縁組御取結之儀モ全天下泰平之 思召

候、ヨツテ從 御手元黄金五十枚窮民之輩不漏様下賜

度、右可致分配、若不行届ハ、武刃ニテ可加勘考、尤

皇国中之儀ニ候得共、別テ山城国ハ殊ニ御膝元之儀、

民之困窮難被遊

御聞捨、差当リ山城国内早々可救遣様深思食候トノ御

趣意、誠以難有 思召、<sup>(斯力)</sup>期迄ニ被為惱 叡慮候段、奉

恐入候儀ニ有之候、窮民御救助之儀ニ付テハ、既闕東

ニテモ格別ニ御配慮被為在、近年次第ニ物価高直ニ相

成、世上一統困窮致シ候趣被為及聞召、去申五月中右

御救助筋ハ勿論、諸品潤沢物物価平準ニ相成候様ニト

ノ厚キ 御趣意有之、御国益御王法被 仰出候義ニテ、

右御救助筋等當時專取調罷在、其上窮民御救助之儀ニ

付テハ、度々 御沙汰之趣モ有之候付、猶厚ク相心得、

普ク天下ニ行步候様之仕法專取調罷在、当地之儀モ饑

寡孤独、困貧之者救助之儀、私ヨリ町奉行江申達、当

時取調中ニ有之、且諸国共窮民救方、兼テ夫々法則モ

有之儀ニ付、及飢渴餓死致シ候様之儀ハ無之筈ニ付、

何卒被為安

叡慮候様致シ度、就テハ格別之

叡慮ヲ以折角被 仰出候儀ニハ候得共、御下金等有之

候テハ、深ク恐入心配致シ候次第ニ候間、イツレニモ

関東江御住被為置、被為安

叡慮候様、宜関白殿下江可被仰上旨、御両卿程能及御

内談候様年寄共ヨリ申越候事、

四月

三八四 將軍家紅葉山靈屋參詣達書

五月十六日

一明十七日紅葉山

御宮井四ヶ所 御靈屋且

孝恭院様 御靈前へ

御參詣ニ付、御供揃五時ト被 仰出之、

御持之頭通人

御持之頭格  
講武所炮術師範役

下曾根金三郎

御先手

御先手格  
講武所劍術師範役

男谷精一郎

両番上席

御小姓組  
村松備中守組

両番上席  
講武所劍術師範役並

戸田八郎左衛門

両番上席

御書院番

戸田隼人正組

両番上席  
講武所弓術師範役

小笠原鐘次郎

同

同

徳永伊豫守組

両番上席  
講武所槍術師範役並

高橋鎌三郎

同

新御番

松平織部組

加藤平九郎

御書院番

戸田隼人正組

鈴木清兵衛

新御番

新庄美作守組

両番格  
講武所柔術師範役

同断



新御番格  
講武所建術師範役

同

安藤惣兵衛

新御番格  
講武所柔術師範役

鈴木四郎左衛門組

片山彌次郎

富士見番  
御宝藏

馬嶋喜平

富士見御宝藏番格  
講武所柔術師範役

右之通、向後御役名相唱、下曾根金三郎・男谷精一郎  
是迄之通若年寄支配、其外ハ講武所奉行支配タルヘキ  
事、

御先手  
御鉄炮方兼帯

田付主計

御鉄炮方

田付四郎兵衛

井上佐太夫

兩番次席

御代官

御鉄炮方兼帯

江川太郎左衛門

右向後講武所炮術師範役兼帯卜御役名相唱候事、  
右之趣、向々へ大和守・遠藤但馬守書付相渡之、  
(久世正周、老中) (龜統、若年寄)

三八五 東禅寺暴徒懷中書

同志ノ者連名有賀半彌懷中ニ致所持居候、常州浪人  
有賀半彌・木村新八郎(幸之介)・百川主馬之助(吉川忠興)・小堀定吉此  
五人東禅寺ニテ被討留候、神鏡三郎同所ニテ手負被  
負捕候、大井金四郎(石井信忠)・山崎信之助此三本ノ、脱字アルヘシ  
早川虎雲自殺、岡邊留次郎(岡員経成)・新八郎・木村半藏・  
重澤金之助・渡邊剛藏・黒澤五郎此六人逃去行衛不  
相知、  
(保西)

私共儀不肖ノ身ニ御座候得共、神州夷狄ノ為ニ被相潰  
候ヲ傍觀致ニ不忍、此度 尊攘ノ大義ニ基キ決心仕候  
事ニ御座候、匹夫ノ身本ヨリ国威ヲ海外ニ輝候程ノ儀  
ハ出来兼候事ニ御座候得共、唯々区々微見ノマ、威武  
相立、国恩ノ万一奉報度心得迄ニ御座候、追々夷狄御  
退攘候基ニモ相成、為

皇国万分之一

叡慮奉安候、軍人ノ身分ニ候得共、誠以無此上難有仕  
合奉存候間、抛身命ヲ決心仕候也、  
(ハ、脱力) (不肖ガ)

五月廿八日夜

右東禅寺ニ討合候者共懷中イタシ居候由、

三八六 堀織部正建言

奉安藤對州閣下書

〔水戸藩史料下編・維新史料綱要にて補註〕

外國尹、堀織部正、謹白、語云、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善、臣知之矣、嚮不願微軀、激論妄答、不服於閣下之高義、其罪當三万死、乃碎肝腦、紋腸血、聊述鄙言、以奉閣下、閣下請少容焉、抑外虜、航海尔来、公議百万不決戰守、而決和信、是時務之變、誰不可防也、只切齒腕而已矣、臣深憂之、嘗奉縷々之鄙言、頗有所容、而東馳西奔、預其事、固臣之職、不可竭也、然均、是人也、豈無慷慨義烈之志哉、是時務之變、誰不可止也、彼溺於公義之海、恣意、妄行、無顧忌、犯大義者、不可算也、就中墨夷都督朱理督留窃微行於貴邸、專論我政務、閣下、共被同餐、尊之如師父、遂許刑典數部、是可怪一也、彼閣下、結伯仲之義、贈衣帛珠玉巨万、閣下酬之以慶長正保金一万鎰、是可怪二也、彼醉例之際、戲於閣下之侍妾某、閣下許与之、是可怪三也、彼唱請築居館于御殿山、一月以八百鎰贖之、閣下終許之、是可怪四也、

此四事既犯大義者、無甚於是矣、然天意未可知也、尚密聞、彼專論廢帝之事、閣下慈憐、使國学人、探索我旧無私議其事、豈謂之何哉、血淚如雨、鉄腸如裂、誰無哭慟仆地者、実天下之賊、天誅固不容也、其願未已於彦根老閣下、而可見矣、是臣深為閣下所以患也、然道路之流言、雖有所不信、天以人拳知其罪、則果明矣、是臣誓所以不服於閣下之高議也、閣下若以不妄我邦之大義、則奉忠於天朝、致軀於幕府、施仁政於民、是臣伏所祈也、臣今屠死、其言也必善、閣下請少容焉、臨表、不堪泣涕、

三八七 清国攘乱ノ概略 (長崎報)

去年來唐國賊徒相起り、諸事取騷候根元ハ、唐國西省潯州府高平縣ニハ、富豪ノ者朱天徳ト申石炭商人有之処、近年石炭崩、右商業等相止メ迄ニハ不出候得共、別テ小分ノ商買相成、就テハ附屬ノ仲間凡千人ノ程モ、端適難洩致シ候故、其訳ヲ以テ、兼テ貯置候処ノ金錢ヲ夫々配当イタシ、家業ニ相付候、然ル処此事山賊等聞及、同人ハ近辺有徳ノ者ト相見得候故、却掠致ベシ

ト賊徒イタシ候ヲ、朱天徳早ヤ此儀ヲ伝聞、酒食ヲ調  
ヘ山ヨリ来ルヲ相伝候処、夜分二三輩来リ、天徳ノ仲  
間多人數ヘ、金錢配当イタシ候義ヲ威賞ノ附トハ、近  
年自分共難渋致シ候由ヲ申、金錢少々借リ度旨申出候  
処、朱天徳貯ノ金銀モ仲間多人數ヘ配当イタシ、錢ハ  
自分商業元年ニモト相掛候事故余賊無之、先酒食ヲ出  
シ饗応シ、其上ニテ尚難渋ノ趣モ難忍故、入用分丈勝  
手ニ金錢持歸リ候様申聞、且石炭山崩レノ次第・仲間  
配当ノ仕儀、其内共ニ打明理解説候処、二三輩ノ者共  
望止、其徳ニ感シ歸リ候、後追々此説山中ニ聞ヘ、皆  
々其徳ヲ感シ、往々往来不止候処、此事官府ヘ早ク聞  
ヘ、朱天徳ヲ呼出シ吟味拷問ニ及候得共、一円山中者  
ト音信通シ候ニハ無之趣、只彼方ヨリ而已来ル由申開  
トイヘトモ、終ニ獄屋ニ繋置弥厳制申付候ニ付、以前  
附屬シ仲間預恩候者共申合、官府ヘ群參シ無美ノ罪ヲ  
申披トイヘトモ、許容一円無之処、此説山中ノ者共聞  
付、嚴獄ノ起リトハ、山中ヨリ往来致シ候ヨリ起リ、  
外ニ見非儀ト一同山ノ者共、知縣ヘ押掛獄ヲ破リ、知  
縣ヲ殺害シ朱天徳ヲ助出シ、山中ヘ連歸リ候ヨリ、此  
節ノ義相發リ候ト申事ノ由御座候、賊塞ハ廣西省ノ内

郎山ト申凡千里四方有之処楯籠リ、此山峻嶮ニシテ要  
害宜敷道路不分、賊ノ進退出没早ク、且ツ前二大川ヲ  
帯ヒ、討手ノ官軍其川ヲ隔テ征伐モ難相成故、弓鉄砲相  
用候処、賊首ノ内女性並ニ沙門式人罷在、妖術ヲ行ヒ  
弓鉄砲ノ能ヲ滅シ、筒音迄相廢シ用達不致候由、廣西  
省ハ賊徒ニ從ヒ降服、土地ノ仕置ハ至テ溫柔ニシテ制  
度半減ニ相改、万事手輕ニ有之候ニ付、降服ノ者共日  
ニ増シ多、軍勢ノ程モ多分不相分、百官朝廷同様ニ建、  
衣冠容貌前代ノ式ニ相改、昨年ヲ天徳二年ト相定、自  
分天徳王ト称シ候由、且民財ヲ取候節ハ決テ手荒ク致  
シカタコレナク、門戸ニ張シ置分限ノ凡ニ歩通ヲ可遣  
趣張置、自身ニ持出サセ請用致シ候、尤府庫ニハ自身  
罷出受用致シ候由、賊徒ニ從ヒ候土地蝗虫生シ、穀物  
ヲ傷ヒ候、田畑ニハ天徳ト認メ札ヲ立、又咸豊ト記シ  
候札ヲ立候処、天徳ノ札立候方ハ、自然ト一夜ノ内ニ  
蝗虫消去シ候様、風説申触候由、当今英明ノ立ニ候得  
共、右等ノ賊徒ニモ不遠征伐太平相成可申ト申事ノ由、

三月

三八八 魯国軍艦ノ事実宗對馬守具申

先達<sup>(番)</sup>テ御案内申上置候魯西亜之義、船修理小屋掛場所  
 之義、渠ヨリ相望候処<sup>(於脫)</sup>ハ、此方防禦之差障、此方差支無  
 之場所ハ、於渠不<sup>(於脫)</sup>使用之趣申聞、其外食物類ニ至迄<sup>(行)</sup>、  
 望之通多分不相与ヲ内心ニ憤リ候哉、去二日何トナク  
 致船仕舞<sup>(舞)</sup>、尾崎浦出帆、次第二内海へ乗入、小船越村  
 西之漕手ト申所へ致繫船候ニ付、警衛之人数同所最寄  
 之場所へ立越相固候処、異船之様子は迄ト違、番船等  
 本船近ク不寄附候テ、端船ニ水鉄炮様ノ物ヲ仕掛、番  
 船へ汐ヲ突懸ケ、御通商<sup>(行)</sup> 御免国柄ニ付テハ、此方ヨリ  
 決テ兵端不開事ト見侮リ御振合ニ被相考、甚敷ハ人数  
 七十人程揚陸、松杉等十四本勝手ニ伐本船へ積入、同  
 四日卯之刻過同所出帆、午之刻頃具鮎之内玉造ト申所  
 へ繫船、無程益ケ浦五丁崎内古里浦ト申所へ碇泊、異  
 人共揚陸、早速四間ニ二間計之至テ手輕小屋掛出来居  
 候段、役人共ヨリ相届候ニ付、同所警衛之役々本船へ  
 罷越候処、船主面談不相届段申聞一向不取敢、同六日  
 郷士・百姓等拾四五人小船壹艘ニ乗組、木船ヨリ一二  
 之処<sup>(町)</sup>通船仕候処、俄ニ端船三艘早急ニ乘来、左右ヲ取  
 卷本船へ漕付候ニ付、乗組之内郷士本船へ<sup>(五人)</sup>乗移、応対  
 二及居候内、船中ニ有合候鎧老領・鎧九筋・鉄炮九

挺・刀壹本・脇差五本本船へ積入候ニ付、郷士ヨリ死  
 ヲ極候テ差返方敵敷申達候処、<sup>(重)</sup>問情之役人対面之上可  
 相返旨申聞、不相返候ニ付、郷士老人相残根強相懸合、  
 其余之者ハ漕戻其段遂注進候ニ付、役々右場所へ立越  
 敵重相懸合候筈之処、右役々不立越以前、翌早朝端船  
 ヲ以郷士・武器共無異儀差返、尤於船中色々致響応、  
 日本通用之金三両式分<sup>(子)</sup>其紙・砂糖等相与候ニ付、何分  
 及断候得共、強テ申聞候間無是非請取候ニ付、右ハ長  
 崎奉行へ申達得差函候筈ニ御座候、  
 一去八日、城下ヨリ役々問情使差下、右様自依之振舞ニ  
 至候段ヲ相尋候処、魯西亜国ニ於テ示談事延引、三十  
 日ヲ越候得ハ及破談候国風ニ付、右様取計伐木等之代  
 銀可相払段、如何ニモ用捨難相成振合ニ候得共、前書  
 之通御通商御免之国柄ニ付、其場可相成丈相忍、至極  
 穩順之所置ヲ以、願望之通大工木材等相当之代価ヲ以  
 可売渡、且又魚菜等欠乏之少々相与へ、且又小屋建場  
 所桁門十二丈入三丈二尺貸渡候段、及約定候処、漸々  
 落着候振合ニテ申達候通、可相心得候間、番船等不相  
 附様相願候ニ付、渠等端船場広不乘廻様申付候処、其  
 通可相心得段申聞、右之通ニ付、又々警衛人数手当罷<sup>(相増)</sup>

兩人差下、警衛向無慮脱<sup>カ</sup>在候、猶此後之動靜追々御案内可申上候、以上、

三月十三日御在所付

宗 對馬守

(統通信全覽魯艦對馬島二停泊一件(外務省外交史料館所蔵)にて補註)

### 三八九 魯国軍艦処分伺書

私領分對州淺海浦二碇泊罷在候魯西亞人、追々不法ノ

及所業候二付、先日御届申上取計方奉伺候処、可成丈

兵端ヲ開キ不申狼藉ノ心懸警衛可致旨、御書付ヲ以テ

御沙汰候二付、其旨尚又因許ニ罷在家来末々ノ者へ嚴

重ニ申渡置候処、五月四日魯西亞船拾二艘俄ニ近寄大

砲ヲ打發<sup>カ</sup>亂敵敷、居城之裏手箱崎ト申所へ到着、相代大手門番六

人即死仕、怪我人抔モ有之、同所南箱崎濱ノ台場ヲ相

潰シ、警衛ノ士拾二人、足輕百七拾人・小者八拾人・

百姓四人相擗、渠ハ大船へ乘、台場へ登リ、鉄砲大筒

七挺・中筒百挺・小筒七拾挺被奪取、渠ハ船中ニ宜ヒ

戰用ニイタシ候、右ノ次第二付不得止事、家来多人數

城郭相固メ、外輪ヨリ四方へ大筒放候処、弥相進ミ、

大砲ヲ打發シ候處、先手亦相進、四日曉ヨリ六日夜迄打合及戰事候、此方三百

四日曉ヨリ六日夜迄打合為軍戰、此方三百四拾三人

旁<sup>カ</sup>四拾五人即死仕候、先方トモ死亡多分有之故ト奉存候<sup>カ</sup>且又海岸筋

ニテ、右長濱村・山崎村等渠ノ工夫ヲ以テ焼払、死人

多分有之候由ニ御座候得共、未暇ト相分不申候、其外

関所等へ至迄差置候武員類奪取候處、同夜九ツ時比魯

西亞船大洋へ帰帆仕、是迄存定ノ程難計甚、心配仕候、

尤無油断固メ、人数出兵昼夜心ヲ付申候、此段御届申

上候也、

西五月七日

宗 對馬守

(統通信全覽魯艦對馬島二停泊一件(外務省外交史料館所蔵)にて補註)

### 三九〇 魯人對州占拠ノ形勢具申

私領ヨリ對州淺深浦碇泊ノ魯西亞船、修理ノ事寄セ

急ニ退帆ノ勢ニ無之、当夏中滞留ノ由申聞居、開港ニ

存念ト相見得、殊更近々不法ノ挙動有之候得ハ、兼テ

被 仰出候御旨モ有之、何篇穩順ニ取扱罷在候處、此

方ヨリ兵端ヲ不開事ト見侮、去ル十二日異人共多人数

端舟ヨリ乘組、大船越瀬戸開所前兼テ差塞置力セ、砲不

尽ニ押破候付、堅メノ御士兩人相制候處、多人數ニテ

渠ヲ船中ニ擗捕漕掃掛ニ付、小者安五郎ト申者古在ノ

薪ヲ投掛候處、異人共鉄砲ニテ胸板ヲ打貫キ及即死、

其俣本船へ罷帰候、是迄

公儀御通商ノ因柄ニ付、恥辱ヲ為忍兵法ヲ不開様候テ、

折角相制罷在候處、最早右之忽渠へ事ヲ破候テハ、家

中ノ奪激不一形、是非討取不申候テハ國中怒氣解論ノ

筋更ニ無之、<sup>(筋カ)</sup>第一<sup>(本ノマ、取リカ)</sup>武道ニ故恥辱ノ限リ御座候、依之如<sup>(筋カ)</sup>  
<sup>(大脱カ)</sup>何ニモ奉恐儀ナカラ、全一己ノ儀カモ無之、本朝ノ御  
<sup>(撥兵カ)</sup>瑕瑾ニモ相成事候処、兵食不足ニ身代四方大洋ノ国柄、  
権助ノ願モ無之、始終ノ勝算千万無覚束奉存候得共、

眼前足長ニ罷在候異賊其忒難<sup>(免候ニ付カ)</sup>閑御座候付、不顧後患討  
<sup>(乱防カ)</sup>取可申、州中一同決心仕罷在候得ハ、右ハ重大ノ事柄  
ニ付、無理ニ暫取抑置候テ一応奉経御伺候間、何レモ<sup>(ノカ)</sup>

道速ニ人心一定ノ御指揮偏奉仰候、尤前章之通渠ヨリ  
好テ事ヲ発候機会ニ御座候事故、何時可及戦争モ難量<sup>(下脱カ)</sup>  
ニ付、其節ニ至リ時機不得止事、時情御憐察被成候様

深ク奉願候、以上、  
辛酉四月十六日<sup>(三九)</sup>

宗 對馬守<sup>(嘉永明治年間録下巻にて補註)</sup>

三九一 東ナル小梅ノ里ニ住ムモノ、言葉ノ花

九州 乱ノ萌アツテ乱ノ形ナシ、正ニ乱レントシテ  
殺氣盛ンナリ、

四国 九州ニ類スル、

中国 無事、

東国 交易ヲ喜フ諸侯多シ、  
北国 慷慨ノ氣聊カ含ム、

肥前 只一家ノ利潤ヲ動ルヲ旨トスト云、  
久留米 質朴ニシテ武事盛ンナリ、

柳川 君臣ヨシ、困窮ニシテ政事ノ沙汰アリ、  
肥後 当君英雄、藩士ニ文アレトモ人ヲ侮ノ氣有テ  
事ヲ不成、慷慨ノ士仍テ起ル、  
上一統宜并魁主ヲ謀ル、但

薩摩 朝廷尊奉氣有、豪傑ノ士集ル、  
筑前 奸臣三四人何レ共上下大ニヨロシク、国忠ノ  
氣有、

都 世評ニ復古ノ端アリ、文国ト云口伝欺、  
小倉 文武トモ世話出来テ併文弱シ、

因州 君臣大ニ宜、家中一同ニヨシ、  
備前 因州ノ真似ヲスル計、政事ハヨロシカラス、  
廣島 怠惰、但有志臣可有哉、

土州 武事盛ナリ、但倉稽ノ深慮可有之哉、  
雲州 当君・藩士トモ文モセス武モセス、只茶事ノ  
ミヲ愛ス、

長州 君臣誠忠雖厚、是ヲ用ル吏ナシ、終ニ  
朝廷尊奉之深志可有之哉、

宇和嶋 君公大ニヨシ、上下合体ス、

松山 君臣質朴ナリ、

高松 当藩中都テ情弱ナリ、

會津 文武トモ盛ナリ、

佐竹 能士ナシ、但慷慨ノ有ナリ、

水府 文有テ武ナキモノナシ、郷士五千余人余是又同、

仙臺 君臣英主、藩士情弱ニシテ、君ヲ助ケ能勤ムル士ナシ、

米澤 君公上手モノ、家臣皆慷慨、

庄内 一藩中水戸信仰、

松代 武備盛ンノヨシ、

川越 君臣ノ間大ニヨシ、政事大ニヨシ、

土浦 水戸信仰、

加賀 可モナク不可モナシトイフ、

越前 文武トモ全備スト云、

津輕 君公大二宜、

尾張 当君奢モノ、家中怠弱ニシテ遊興ニフケル、

紀州 藩威ヲフカフ、用人金取入ル事ヲ務ト云、

津 君公ヲ狂トイフ、藩中ノ士皆々利ヲ事ト云、

阿州 君臣和ス、併君公少々奢ヲ好ム、藩士一同慷慨ス、粗有志ヲ含氣有、

彦根 当藩中文武トモナシ、茶事・猿樂ヲヨクス、但シ利ヲ好ム、